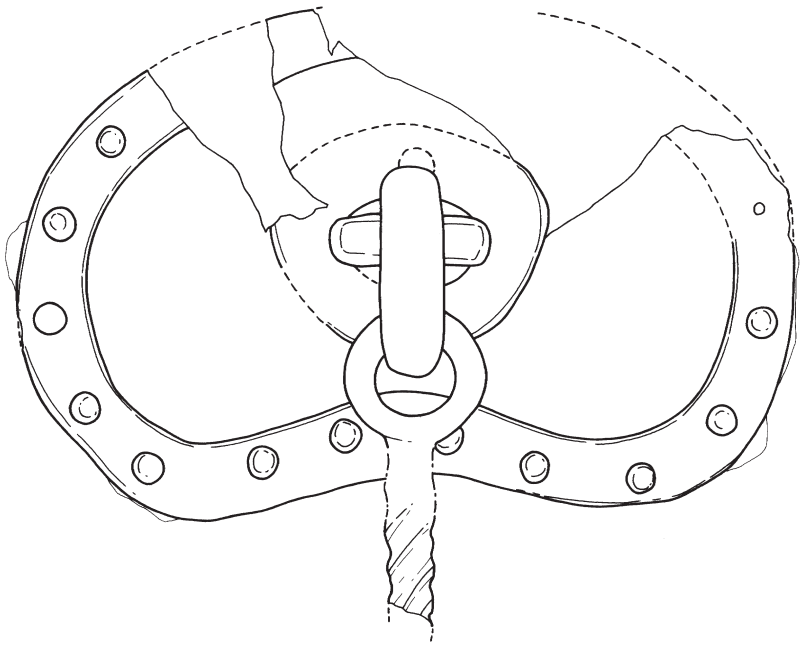
熊本県文化財調査報告　第240集

城ヶ辻古墳群

――一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴う埋蔵文化財調査――



2007.3

熊本県教育委員会

城ヶ辻古墳群遠景

６・７号墳全景

7号墳石室全景

7号墳石室遺物出土状況

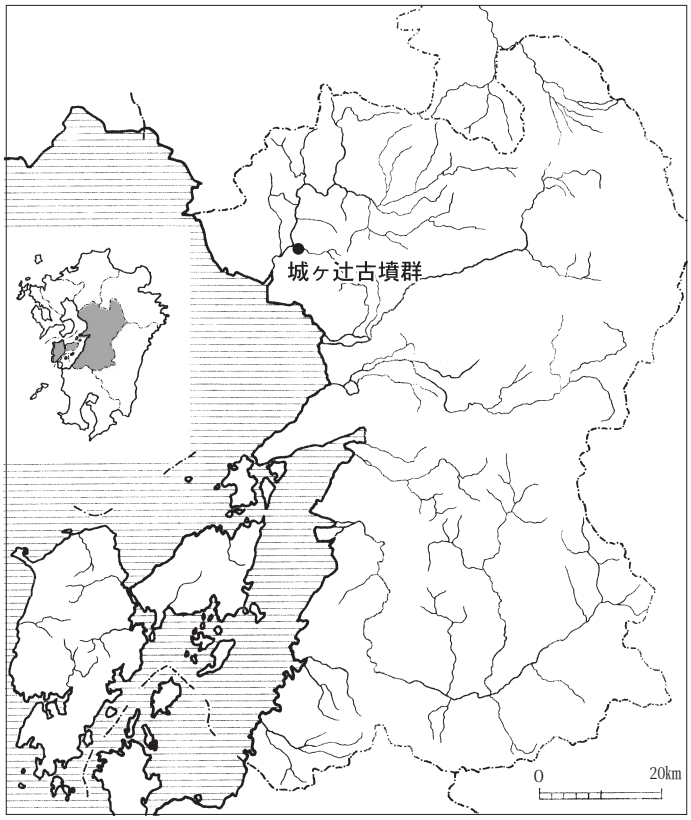
31ＳＸ遺物出土状況

２・６・７号墳出土土器集合

熊本県文化財調査報告　第240集

城ヶ辻古墳群

――玉名市寺田字城ヶ辻所在の遺跡――



2007.3

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会は、一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴い、平成14・15年度の２次にわたり、熊本県玉名市寺田に所在する城ヶ辻古墳群跡の発掘調査を実施しました。

今回の発掘調査では、古墳時代の墓地群を発見しました。

特に古墳時代中期から後期の横穴式石室を主体部とする墳丘をもつ６・７号墳は特徴的なものと判明しました。

とりわけ７号墳は「竪穴系横口式石室」といって狭小な幅の竪穴式石室の系統を引くものだと考えられます。

また、隣接して検出された６号墳は撹乱されているものの、肥後地域に特徴的な石室で垂飾付耳飾の一部とも考えられる金環や古式の馬具のセットが出土しました。

本報告書が、広く県民の皆様の文化財に対する認識と理解の深まりに貢献し、地元玉名市をはじめとする地域の歴史、社会教育、学術研究の進展に寄与することが適うならば、望外の喜びです。

末尾となりましたが、発掘調査を実施するにあたり文化財保護の観点から多大な協力をいただいた国土交通省熊本河川国道事務所、玉名市教育委員会をはじめとする地元関係者の方々及び御指導を賜りました諸先生方に深甚より感謝申し上げます。

平成19年３月31日

熊本県教育長　柿塚　純男

例　　言

1　本書は、熊本県玉名市寺田に所在する城ヶ辻古墳群の報告書である。

2　発掘調査は、一般国道208号玉名バイパス改築事業に伴い、国土交通省の依頼を受け、熊本県教育委員会が実施した。調査費については、全額国土交通省が負担した。

3　遺物の整理は、熊本県教育庁文化課文化財資料室で実施した。

4　遺跡の発掘調査は平成14～15年度に実施し、整理作業を平成17～18年度まで実施した。

5　本書で用いる地形図は、玉名市都市計画課及び玉名市教育委員会社会教育課から提供された図幅、並びに国土地理院発行の２万５千分の１、及び５万分の１地形図をもとに作成した。

また今回、地元地権者の方々に御協力を頂き、測量調査は株式会社九州文化財研究所に一部委託して実施した。

6　現地での写真撮影は出田久斉、長谷部善一、米村　大、洲崎明子、亀田　学が行った。遺構実測は前記５人の他、原田英佳、田畑良勝、飯塚千恵美、西嶋ヨシエ、福田ツヨ子、権藤　功、高津千尋、吉田ムツ子、吉川ゆかり、道口真由美、堀田祐子、田上俊子、渕上久史、梅村　稔が行った。航空写真撮影は、株式会社九州航空に委託した。

7　遺物の実測は、土器を平川早苗、園田智子、鉄器を平川、園田（智)、渕上、土田みどり、吉見さつき、園田恭子、伊藤友美子、坂井田端次郎、亀田、玉類を園田（智）が行った。

製図は、遺構を主に吉川、道口、権藤、渕上、原田、土器・鉄器を平川、園田（智)、土田、吉見、渕上、伊藤、園田（恭)、玉類を園田（智）が行った。

遺物の写真撮影は、村田百合子、亀田、園田（恭)、伊藤が行い、これを手嶋裕子、平川、渕上、土田、吉見が補助した。

鉄器の保存処理は谷川亜紀子が行い、大塚トシ子、平川がこれを補助した。

8　本書の執筆は、６号墳を主に洲崎、亀田、伊藤、園田（恭）が、７号墳を主に米村、亀田、伊藤、園田（恭）が行い、その他を亀田、伊藤、園田（恭)、洲崎、米村が共同で執筆した。

9　整理後の保管は熊本県文化財資料室で行っている。

10　本書の編集は、熊本県教育庁文化課が行い、伊藤、園田（恭）の援助を得て亀田が担当した。

凡　　例

1　**方位**　国土座標第Ⅱ系を基準とし、方位もそれに準じた。

2　**遺跡地区名**　遺跡全体の地区（図４）の通りである。調査区により地区名の表記が異なっていたが、それを踏襲した。

3　**遺構名略号**　次の通りである。SD；溝、SK；土坑、SF；墓道、SX；その他（土壙墓・不明土坑など)。

4　**遺構番号**　遺構番号は、調査区ごとに遺構確認段階で検出した順に付し、その後に遺構名略号を付した。

5　**遺構図版　標高**　標高は、東京湾平均海水面（Tokyo Peil［T.P.]）に基づく。

6　**遺構図版　縮尺**　遺構図版は、各ブロックごとに掲載し、土坑および石室の縮尺は1/40、遺物出土状況は1/20である。またこれに該当しないものについては、その縮尺を図版中に示した。

7　**遺構図版　線種**　遺構平面図は原則として確定ラインは実線で掲載し、遺構上・下端の推定線は破線で示した。また撹乱および調査区範囲については一点破線で示し、見通しラインは一点破線および二点破線で示した。

8　**遺構図版　スクリーントーン**　地山は灰色の網掛け、断面については斜線で示している。また、これに該当しないものは各図面上で凡例を示した。

9　**遺構図版　ポイント**　各遺構の平面及び断面図では一ラインの内側をポイントとしている。

10　**遺物図版　縮尺**　遺物実測は原則として土器は1/3、鉄器は2/3で掲載した。またこれに該当しないものは、その縮尺を図中に示した。

11　**遺物図版　線種**　外形線、中心線及び区画線は実線、稜線は一点破線または二点破線、推定線は破線で示した。また、須恵器については、断面を塗りつぶし、回転ヘラ削りを実線で示したのち、以下底部まで砂粒の動きを示している。顔料については、網掛けで指示している。

12　**遺物図版　スクリーントーン**　顔料・緑青は網掛け、鉄器の断面は斜線で示している。

13　**遺物観察表**　すべての実測個体について、遺物観察表を掲載した。その凡例は、各観察表の欄に別記した。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 3

第Ⅲ章　調査の成果 …… 5
第１節　基本土層 …… 5
第２節　古墳 …… 5
１．１号墳…… 5
２．２号墳…… 5
⑴　立地・墳形
⑵　周溝…… 6
⑶　周溝内の遺構
・不整形土坑
（今回調査成果からみた不整形土の問題と評価）
・17SX …… 7
（既往の調査からみた評価）
⑷　遺物…… 8
第38図
第39図…… 9
・小結
３．３号墳…… 9
立地・墳形
４．４号墳……10
⑴　立地・墳形
⑵　主体部
５．５号墳……10
⑴　立地・墳形
⑵　主体部
６．６号墳……10
⑴　外部施設……10
①周溝と墳丘規模……10
②周溝内遺物……11
・遺物出土状況
・遺物
第41図
第49図
第50・51図……12
・小結……13
⑵　内部施設……13
①石室撹乱状況
②石室残存状況
③小結……14
⑶　玄室……14
①石室を構成する石材
（石室内及び上部・周辺から出土した石材による
石室を構成する石材の復元）
②床面……15
③遺物出土状況
④遺物……16
土器
馬具
刀類……19
鉄鏃
玉類
⑤その他……20
⑷　羨道及び墓道（04SK） ……20
①構造
②遺物……21
土器
小結
⑸　まとめ……21
７．７号墳……22
⑴　墳丘……22
⑵　石室構造……23
①玄室
②横口（玄門）部
③前庭部
④その他……24
⑶　遺物……24
①墳丘崖下
出土状況
遺物
②石室内
出土状況
遺物……25
馬具

刀類……26
鉄鏃
（第55～57図）
（７号墳出土長頸鏃の法量分類）……27
（７号墳出土長頸鏃の一般的な法量比較）…28
（７号墳長頸鏃出土本数推定算出）……29
（小結）……30
玉類
③小結……31
⑷　７号墳墳丘上石材･土器集中地点(31SX)
⑸　まとめ……32
第３節　箱式石棺墓……33
１．32SX……33
⑴　立地・構造
⑵　小結
２．33SX……33
⑴　立地・構造
⑵　小結……34
第４節　土壙墓……34
１．27SX……34
⑴　立地・構造
⑵　小結
２．41SX……34
⑴　立地・構造
⑵　小結
３．29SX……34
⑴　立地・構造
⑵　小結
第５節　墓道……35
１．25・26SF……35
⑴　立地・構造
⑵　遺物
小結
⑶　小結
２．30SF……35
⑴　立地・構造
⑵　遺物出土状況……36
⑶　遺物
⑷　小結
３．35SF……36
⑴　立地・構造
⑵　小結
４．43SF……36
⑴　立地・構造
⑵　小結
第６節　その他の遺構……37
１．28SD……37
⑴　立地・構造
⑵　小結
２．40SX……37
⑴　立地・構造
⑵　小結
３．42SX……37
⑴　立地・構造
⑵　小結

第Ⅳ章　考古学的分析……38
第１節　城ヶ辻古墳群の変遷……38
１．立地
２．前後関係
３．その他
第２節　２号墳の位置づけ……38
１．墳丘
２．周溝内祭祀……38
３．築造時期……39
第３節　６号墳の位置づけ……39
第４節　７号墳の位置づけ……40
１．石室の分類……40
２．築造時期……41
３．小結
第５節　石材と顔料……41
第６節　土壙墓の性格……41

（参考）山鹿市朱塚古墳と城ヶ辻７号墳……42

第Ⅴ章　自然科学的分析……43
熊本県玉名市城ヶ辻古墳群出土の人骨
松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

第Ⅵ章　まとめ……46
調査成果
課題

図面図版・表・写真図版　目次

遺構図面

第１図　周辺遺跡分布図（古墳時代）(1/25000)
第２図　城ヶ辻古墳群周辺古地図（1/10000)
第３図　城ヶ辻古墳群測量平面図（1/1500)
第４図　玉名バイパス計画路線内遺跡位置図（菊池川左岸）(1/5000)
第５図　城ヶ辻古墳群測量平面図・調査区位置図(1/500)
第６図　調査区グリッド平面図（1/400)
第７図　調査区遺構配置図（1/200)
第８図　調査区南斜面土層断面図（1/160)
第９図　２号墳・３号墳現況及び周溝検出平面図(1/200)
第10図　昭和54年度確認調査トレンチ平面・断面図(1/80)
第11図　２号墳周溝（09SD)・６号墳周溝（03SD)・７号墳周溝（08SD）断面図（1/80)
第12図　６号墳平面図（1/160)
第13図　６号墳調査区平面図（1/80)
第14図　６号墳撹乱坑平面・断面図（1/60)
第15図　６号墳石室平面・立面・断面図（1/40)
第16図　６号墳石室内遺物出土状況平面図（1/20)
第17図　６号墳排水溝 (04SK）平面・断面図 (1/40)
第18図　７号墳平面・見通し土層断面図（1/80)
第19図　７号墳石室・墳丘断面図（1/40)
箱式石棺墓（32SX）平面（1/20)・断面図(1/40)
第20図　７号墳石室内埋土断面図（1/40)
第21図　７号墳石室内平面・立面図（1/40)
第22図　７号墳基底石等掘り方平面図（1/20)
第23図　７号墳閉塞状況断面・立面図（1/40)
第24図　７号墳前庭部平面・立面図１（墓道軸線を基準）(1/40)
第25図　７号墳前庭部平面・立面図２（石室軸線を基準）(1/40)
第26図　７号墳石室内遺物出土状況平面・立面図（Ｖ層）(1/20)
第27図　７号墳石室内遺物出土状況平面・立面図（VI-1層）(1/20)
第28図　７号墳石室内遺物出土状況平面・立面図（VI-2層）(1/20)
第29図　７号墳出土遺物（器種別）分布図（Ｖ層）(1/10)
第30図　７号墳出土遺物（器種別）分布図（VI-1層）(1/10)
第31図　７号墳出土遺物（器種別）分布図（VI-2層）(1/10)
第32図　７号墳石室内遺物接合状況平面図（1/20)
第33図　31SX平面・立面図（1/20)
第34図　墓道（30・35SF)・28SD断面図
第35図　６号墳周溝・墓道（25・26・43SF）平面・断面図（1/40)
第36図　土壙墓（17・27SX）平面・断面図（1/40)
第37図　土壙墓（41・29SX)(1/40)・石棺墓(33SX)(1/20)・土坑（40・42SX）(1/40）平面・断面図

遺物図面

第38図　２号墳周溝(09SD）出土土器実測図１(1/3)
第39図　２号墳周溝(09SD）出土土器実測図２(1/3)
第40図　６号墳撹乱坑(11SX)・排水溝(04SK)出土土器実測図（1/3)
第41図　６号墳周溝（03SD）出土土器実測図（1/3)
第42図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（馬具類１)(2/3)
第43図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（馬具類２)(2/3)
第44図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（馬具類３)(2/3)
第45図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（刀子・刀類他）(2/3)
第46図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図(鉄鏃)(2/3)
第47図　６号墳撹乱坑内出土耳環・玉類実測図(1/1)
第48図　鉄鏃実測図（複数遺構接合分）(2/3)
第49図　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器実測図１（1/3)
第50図　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器実測図２（1/3)
第51図　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器実測図３（1/3)

第52図　７号墳墳丘北西崖下出土土器実測図（1/6）
第53図　７号墳石室内及び関連遺構出土鉄器実測図(馬具類)（1/3・2/3）
第54図　７号墳石室内及び関連遺構出土鉄器実測図(刀子・刀類他)（1/3・2/3）
第55図　７号墳石室内出土鉄器実測図(大形鏃)(2/3)
第56図　７号墳石室内出土鉄器実測図（中・小形鏃）(2/3)
第57図　７号墳石室内出土鉄器実測図（鉄鏃）(2/3)
第58図　７号墳石室内出土釧・耳環・玉類実測図(1/1・2/3)
第59図　７号墳墳丘上石材・土器集中地点（31SX）出土土器実測図（1/3）
第60図　６・７号墳墓道（25・26SF）出土土器実測図（1/3）
第61図　遺跡の位置（1/25000）

表

表１　城ヶ辻古墳群周辺遺跡名一覧（古墳時代）
表２　６号墳出土壁面材法量
表３　７号墳出土長頸鏃法量
表４　出土遺物観察表
　１．出土土器観察表
　２．６号墳出土鉄器観察表
　３．７号墳出土鉄器観察表
　４．その他遺構出土鉄器観察表
　５．出土耳環・玉類観察表
表５　出土石材観察表
　１．６号墳石材観察表
　２．７号墳石材観察表
表６　出土人骨一覧

写真図版

図版１　城ヶ辻古墳群遠景・全景
　１　城ヶ辻古墳群遠景
　２　城ヶ辻古墳群全景
図版２　城ヶ辻古墳群調査区遠景
　３　城ヶ辻古墳群調査区遠景（南東より）
　４　城ヶ辻古墳群調査区遠景（対岸より）
　５　城ヶ辻古墳群調査区遠景（南より）
図版３　城ヶ辻６・７号墳
　６　城ヶ辻古墳群調査区全景
　７　６号墳・７号墳（南より）
図版４　昭和54年度試掘調査　１・２・３・４・５号墳
　８　１号墳鉄塔下消滅部分
　９　２号墳墳丘（北より）
　10　３号墳墳丘（西より）
　11　４号墳墳丘（北より）
　12　５号墳墳丘（北より）
　13　１号墳石棺復元状況（玉名高校）
　14　１号墳石棺復元状況（玉名高校）
図版５　昭和54年度試掘調査　２号墳
　15　２号墳1Tr．西側を見る（墳頂より）
　16　２号墳1Tr．東端西壁土層（東より）
　17　２号墳1Tr．西端西壁土層（東より）
　18　２号墳1Tr．中央東壁土層（西より）
　19　２号墳1Tr．東端北壁土層（南より）
　20　２号墳1-2Tr．（６号墳周溝部）西側を見る(東より)
図版６　昭和54年度試掘調査　２号墳
　21　２号墳1Tr．集石出土状況（東より）
　22　２号墳1-2Tr．（６号墳周溝部）北壁土層（南より）
　23　２号墳2Tr．西側を見る（東より）
　24　２号墳2Tr．南側を見る（墳頂より）
　25　２号墳3Tr．北側を見る（南東より）
　26　２号墳3Tr．中央凹部（北東より）
図版７　昭和54年度試掘調査　２号墳
　27　２号墳4Tr．南西側を見る（墳頂より）
　28　２号墳4Tr．甕出土状況（北西より）
　29　２号墳4Tr．甕出土状況（北西より）
図版８　昭和54年度試掘調査　２号墳
　30　２号墳5Tr．西側を見る（墳頂より）
　31　２号墳5Tr．集石出土状況（北東より）
　32　２号墳5Tr．高坏脚部出土状況（北より）
　33　２号墳5Tr．甕出土状況
　34　２号墳5Tr．石棺材出土状況（北東より）
　35　２号墳5Tr．ベンガラ入甕出土状況
　36　２号墳5Tr．ベンガラ入甕出土土坑完掘状況(北東より)
図版９　昭和54年度試掘調査　２号墳
　37　２号墳6-1Tr．西壁土層（北東より）
　38　２号墳6-2Tr．北壁土層（南東より）
　39　２号墳7Tr．南壁土層（北より）
　40　２号墳7Tr．東側を見る（墳端より）
　41　２号墳9Tr．東側を見る（西より）

42　２号墳9Tr．東壁土層（北より）
図版10　昭和54年度試掘調査　２・３号墳
43　２号墳10Tr．北壁土層（南より）
44　２号墳盗掘坑
45　３号墳8Tr．北西壁土層（南東より）
46　３号墳8Tr．墳丘を見る（南西より）
47　３号墳8Tr．南西側を見る（墳頂より）
図版11　平成14・15年度発掘調査　２号墳
48　09SD検出状況（南より）
49　09SD土層断面（北西より）
50　09SD遺物出土状況（南より）
51　09SD完掘状況（北西より）
図版12　平成14・15年度発掘調査　６号墳
52　10SX・11SX検出状況（南より）
53　６号墳石材出土状況（南より）
54　６号墳石室全景（南西より）
図版13　平成14・15年度発掘調査　６号墳
55　６号墳石室全景（南西より）
56　６号墳石室奥壁（南西より）
57　６号墳左側壁（西より）
図版14　平成14・15年度発掘調査　６号墳
58　６号墳人骨出土状況（西より）
59　６号墳人骨出土状況（西より）
60　６号墳銀製耳環出土状況（西より）
61　６号墳金製耳環出土状況（南より）
図版15　平成14・15年度発掘調査　６号墳
62　６号墳石室奥壁掘り方検出状況（西より）
63　６号墳右側壁石障掘り方検出状況（南より）
64　６号墳石室石障前壁掘り方検出状況（北より）
65　６号墳羨門部袖石掘り方検出状況（北より）
66　６号墳石障掘り方検出状況（北より）
67　６号墳左側壁石障掘り方及び石棺掘り方検出状況（西より）
68　６号墳右側壁石棺（石室）掘り方検出状況（西より）
図版16　平成14・15年度発掘調査　６号墳
69　６号墳墳丘盛土土層断面（西より）
70　６号墳04SK遺物出土状況（南より）
71　６号墳04SK石材検出状況（南西より）
図版17　平成14・15年度発掘調査　７号墳
72　７号墳表土剥ぎ状況（東より）
73　７号墳石室検出状況（北東より）
74　７号墳天井石検出状況（南西より）
75　７号墳全景（北東より）
図版18　平成14・15年度発掘調査　７号墳
76　７号墳石室全景（南西より）
77　７号墳石室全景（南西より）
78　７号墳石室閉塞状況（南西より）
79　７号墳石室閉塞状況（北東より）
図版19　平成14・15年度発掘調査　７号墳
80　７号墳石室内遺物出土状況（南西より）
81　７号墳石室内遺物出土状況（南西より）
82　７号墳石室内遺物出土状況（南西より）
83　７号墳石室内遺物出土状況（北東より）
図版20　平成14・15年度発掘調査　７号墳
84　７号墳前庭部右側壁（南より）
85　７号墳閉塞石右側（南西より）
86　７号墳前庭部左側壁（西より）
図版21　平成14・15年度発掘調査　７号墳
87　７号墳前庭部（南西より）
88　７号墳前庭部半裁状況（南西より）
89　７号墳石室閉塞状況（南西より）
90　７号墳閉塞石除去状況（南西より）
図版22　平成14・15年度発掘調査　７号墳
91　７号墳左側壁（部分）（北西より）
92　７号墳左側壁（部分）（北西より）
93　７号墳右側壁（南東より）
94　７号墳右側壁（南東より）
95　７号墳右側壁（東より）
96　７号墳右側壁腰石掘り方確認トレンチ（東より）
97　７号墳墳丘西側トレンチ（32SX）（南より）
図版23　平成14・15年度発掘調査　７号墳
98　７号墳石室閉塞状況（玄室より望む）
99　７号墳前庭部左側トレンチ（東より）
100　７号墳奥壁右隅（南より）
101　７号墳墳丘南東側横断トレンチ（北西より）
図版24　平成14・15年度発掘調査　７号墳
102　７号墳墓壙掘り方検出状況（南西より）
103　７号墳墓壙掘り方土層断面（南西より）
104　７号墳墳丘北西側横断トレンチ（北より）
105　７号墳墳丘北西側トレンチ（南西より）
106　７号墳墳丘北東側縦断トレンチ（南東より）
107　７号墳墳丘北東側縦断トレンチ（北西より）
図版25　平成14・15年度発掘調査　７号墳（31SX）
108　31SX検出状況（南東より）
109　31SX検出状況（西より）
110　31SX遺物出土状況（西より）

111　31SX高坏脚部出土状況（西より）
図版26　平成14・15年度発掘調査　墓道
112　26SF検出状況（東より）
113　25SF遺物出土状況（南西より）
114　30SF検出状況（東より）
115　30SF土層断面（北西より）
図版27　平成14・15年度発掘調査
116　28SD検出状況（南より）
117　28SD完掘状況（南東より）
118　09SD検出状況（南より）
図版28　平成14・15年度発掘調査　墓道（35SF）
119　35SF土層断面西端（南西より）
120　35SF土層断面（南西より）
121　35SF土層断面東端（南西より）
図版29　平成14・15年度発掘調査　土壙墓
122　27SX土層断面（南東より）
123　27SX完掘状況（南東より）
124　29SX完掘状況（西より）
125　29SX完掘状況（東より）
図版30　平成14・15年度発掘調査　土壙墓・石棺墓
126　17SX検出状況（北より）
127　17SX床面（ベンガラ）検出状況（西より）
128　17SX完掘状況（西より）
129　32SX完掘状況（北西より）
図版31　平成14・15年度発掘調査　石棺墓・土壙墓
130　33SX検出状況（南東より）
131　41SX完掘状況（北西より）
図版32　平成14・15年度発掘調査　土坑
132　40SX土層断面（北より）
133　42SX半裁状況（北西より）
図版33　2号墳周溝（09SD）出土土器
134　土師器甕
135　土師器甕
136　土師器壺
137　土師器壺
138　土師器壺（外面）
139　土師器壺（内面）
140　土師器甕
図版34　２号墳周溝（09SD）・６号墳出土土器
141　甕（外面）
142　甕（内面）
143　土師器高坏
144　土師器高坏
145　土師器壺
146　09SD・03SD出土土師器
147　03SD出土土師器壺
148　04SK出土須恵器短頸壺
149　04SK出土須恵器坏身
150　11SX出土土師器坏
151　04SK出土土師器甕
図版35　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器
152　須恵器坏蓋
153　須恵器坏蓋
154　須恵器坏身
155　須恵器坏身
156　須恵器坏蓋
157　須恵器坏蓋
158　須恵器坏身
159　須恵器坏身
160　須恵器甕（外面）
161　須恵器甕（内面）
図版36　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器
162　須恵器高坏
163　須恵器高坏・瓿
164　土師器高坏
165　土師器
166　須恵器甕
図版37　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器
167　須恵器甕（外面）
168　須恵器甕（内面）
図版38　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器
169　須恵器甕（外面）
170　須恵器甕（内面）
図版39　７号墳墳丘北西崖下出土土器
171　須恵器甕（外面）
172　須恵器甕（内面）
図版40　７号墳墳丘上石材・土器集中地点（31SX）出土土器
173　土師器高坏
174　土師器高坏
175　土師器高坏
176　土師器高坏
177　土師器高坏
178　土師器坏

179　須恵器有蓋脚付短頸壺（蓋）
180　須恵器有蓋脚付短頸壺
181　土師器壺
図版41　25SF出土土器、６・７号墳出土土器集合
182　25SF出土須恵器坏蓋
183　25SF出土土師器坏
184　25SF出土須恵器坏
185　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器集合
186　７号墳墳丘上石材・土器集中地点（31SX）出土土器集合
図版42　６号墳出土鉄器
187　轡
図版43　６号墳出土鉄器
188　飾金具
189　飾金具
190　飾金具
191　飾金具・責金具
図版44　６号墳出土鉄器
192　轡（表面）
193　轡（裏面）
194　飾金具
195　鉸具
図版45　６号墳出土鉄器
196　刀子・刀　他
197　鏃
198　鏃
199　鏃
図版46　７号墳出土鉄器
200　轡（表面）
201　轡（裏面）
図版47　７号墳出土鉄器
202　雲珠
203　鉸具
204　刀子
図版48　７号墳出土鉄器
205　刀
206　刀・剣
図版49　７号墳出土鉄器
207　鏃（大形）
208　鏃（大形）
209　鏃（中形）
210　鏃（小形）
図版50　７号墳出土鉄器
211　鏃
212　鏃
213　鏃（複数遺構接合分）
図版51　６号墳出土玉類
214　ガラス玉
215　耳環・ガラス玉
図版52　７号墳出土鉄器・玉類　６・７号墳出土ガラス玉集合
216　鉄釧
217　耳環・ガラス玉
218　管玉
219　貝・石英
220　６・７号墳出土ガラス玉集合
図版53　６号墳出土石材（両面ベンガラ付着）
221　石障系石材（両面ベンガラ付着）表
222　石障系石材（両面ベンガラ付着）裏
図版54　６号墳出土石材（片面ベンガラ付着）
223　石障系石材（片面ベンガラ付着）
224　石障系石材（片面ベンガラ付着）
図版55　６号墳出土石材（片面ベンガラ付着）
225　石障系石材（片面ベンガラ付着）
226　石障系石材（片面ベンガラ付着）
227　石障系石材（片面ベンガラ付着）
図版56　６号墳出土壁面材（ベンガラ付着）
228　ベンガラ付着壁面材（大形）
229　ベンガラ付着壁面材（中形）
230　ベンガラ付着壁面材（中形）
図版57　６号墳出土壁面材（ベンガラ付着）
231　ベンガラ付着壁面材（小形）
232　ベンガラ付着壁面材（小形）
233　ベンガラ付着壁面材（小形）
図版58　６号墳出土人骨
脛骨片（左）城ヶ辻６号墳人骨（男性）

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経緯と経過

建設省九州地方建設局熊本工事事務所から、一般国道208号玉名バイパスの建設計画のもと、埋蔵文化財の確認調査の依頼が1979（昭和54）年になされた。

それを受けて県教育庁文化課は1979年３月29日に現地踏査を行い、14箇所の遺跡を確認した。

建設計画においては城ヶ辻２号墳の墳丘西半分が削平される可能性が高いため、路線の計画変更等を要望する資料を作成することを目的に、1979年７月から同年10月まで県が確認調査を実施した。

その結果は『下山西遺跡』熊本県文化財調査報告第88集（1987年３月）に詳しい。

同報告では２号墳の範囲確認を主な目的としており、平面・断面図を作成して協議を実施している。

その後、国道208号の路線の一部が変更され建設計画の具体化が進むに及んで、平成11年１月11日から14日までの第２次確認調査を経て一部調査範囲を確定した。調査の結果は平成11年１月21日教文1619号で通知している。また、協議のうえ、平成14年７月から城ヶ辻古墳群・城ヶ辻城跡として本調査を実施した。城ヶ辻城跡については、平成11年には実施できなかった箇所の確認調査も併せて行った。

発掘通知（文化財保護法第57－3）は平成14年５月９日国九整熊工事第14号で実施され、平成14年５月21日玉市教社第135－1号で進達された後、平成14年５月23日に教文466号で発掘調査を実施する旨を回答している。その際「調査の結果、重要な遺構等が発見された場合はその保存等について別途協議しますので、御協力ください。」と明記している。

発掘調査の通知（文化財保護法58－2）は平成14年７月５日付教文881号、平成15年５月26日付教文第599号で通知している。

第２節　調査の組織

現地調査

【平成14年度】

調査主体者	田中　力男（熊本県教育長）
調査責任者	成瀬　烈大（文化課長）
調査総括	高木　正文［課長補佐（文化財調査第１係担当）］
調査事務	欄杭　正義（主幹兼総務係長）
	天野　寿久（主任主事）
	杉村　輝彦（主事）
現地調査担当者	出田　久斉（文化財保護主事）
	米村　　大（嘱託）
	洲崎　明子（嘱託）
専門調査員	高木　恭二（宇土市教育委員会）
	杉井　　健（熊本大学助教授）

【平成15年度】

調査主体者	田中　力男	(熊本県教育長)
調査責任者	成瀬　烈大	(文化課長)
調査総括	高木　正文	[課長補佐（文化財調査第１係担当)]
調査事務	欄杭　正義	(主幹兼総務係長)
	天野　寿久	(主任主事)
	杉村　輝彦	(主事)
現地調査担当者	亀田　　学	(主任学芸員)
	米村　　大	(嘱託)
	洲崎　明子	(嘱託)
専門調査員	甲元　真之	(熊本大学教授；熊本県文化財保護審議員)
	木下　尚子	(熊本大学教授；熊本県文化財保護審議員)
	朽津　信明	(独立行政法人東京文化財研究所)

整理・報告書作成

【平成17年度】

整理主体者	柿塚　純男	(熊本県教育長)
整理責任者	梶野　英二	(文化課長)
整理総括	高木　正文	[課長補佐（文化財調査第１係担当)]
整理事務	四元　正明	(主幹兼総務係長)
	塚原　健一	(参事)
	小谷　仁志	(主任主事)
整理担当者	亀田　　学	(主任学芸員)
	伊藤友美子	(嘱託)
	水上　　悌	(嘱託)
	園田　恭子	(嘱託)

【平成18年度】

整理主体者	柿塚　純男	(熊本県教育長)
整理責任者	梶野　英二	(文化課長)
整理総括	江本　　直	(課長補佐)
	高木　正文	[課長補佐（文化財調査第１係担当)]
整理事務	高宮　優美	(主幹兼総務係長)
	塚原　健一	(参事)
	小谷　仁志	(主任主事)
整理担当者	亀田　　学	(主任学芸員)
	伊藤友美子	(嘱託)
	園田　恭子	(嘱託)

第Ⅱ章　遺跡の環境

城ヶ辻古墳群は、熊本県玉名市寺田字城ヶ辻に所在する古墳時代前期から後期にかけての古墳群である。植木台地を東西に越え、田原坂を左手に見ながら国道208号線を通ると、玉名中心部に行き着くまでに現在の株式会社浦島海苔や、同トッパン・ホームズ等が所在する八嘉台地（通称寺田台地）に到達する。その台地からは八つ手状に伸びる尾根群が存在する。その尾根のうち木葉川にむけて伸びるひとつの尾根線上の突端に城ヶ辻古墳群は位置する。

地質学的には菊池川下流域左岸の凝灰角礫岩（註１）による帯状の丘陵地末端部上に位置することになるが、八嘉台地中央部から南側にかけては、金峰山から伸びる安山岩層が基盤になっており、ちょうど城ヶ辻６・７号墳一帯は、そこから北側に向かって基盤層が安山岩層から凝灰角礫岩層へ変化する地点でもある。

城ヶ辻古墳群の位置する標高34mの丘陵頂部からは、菊池川と広大な氾濫源を眺めることができ、また玉名平野中心部に位置する繁根木の伝佐山古墳や、玉名平野を代表する前期古墳の稲荷山古墳を見渡すことができる。現在は木が生い茂って北東側の景観は望めないが、古墳群築造当時は元玉名横穴群や大坊古墳、永安寺東・西古墳も見渡すことができたであろう。

また古い地図（第２図参照）によると、かつてはこの尾根上に古墳状の隆起が７つ知られていたが、平成14年度の調査開始時には一部削平を受けており、４基の墳丘しか確認できなかった。

城ヶ辻古墳群のある尾根は、古墳時代以降も開発を受けており、「城ヶ辻」という字名や堀切と思われる箇所（谷地形）等の周辺地形から、尾根上に中世城が存在したと推定されている（註２）。しかしながら既往の確認調査や平成14・15年度の調査では、中世城に伴う遺構を確認していない。ただ、古墳が位置する南斜面から中世の土師器等が出土している。

現在までの調査結果から推測すると、中世の時期に関しては古墳群の位置する部分の周辺は削平されているものの、古墳群の墳丘が残存することから頂部には郭等はなく、その立地から、見張り台程度の遺構が存在した可能性は高いと推定できる。

古墳時代に関しては、これまでの確認調査（註３）や玉名高等学校の調査等から、菊池川に向かう丘陵末端部の尾根の頂上部に５基の墳丘を持つ古墳を確認していた。

現状において古墳群で最大の規模を誇るのが２号墳で、現況の墳丘は直径約18mである。北側には石棺を主体部とする１号墳があったが、昭和45年の九州電力の鉄塔工事に伴い、玉名高等学校が調査をした後削平されており現存しない。

また丘陵一帯には戦中の開墾によって段々畑が造られており、古墳が立地する頂上付近も削平されている。現在、尾根頂部に位置する２号墳から５号墳までは、約100mにわたり尾根上に沿って１列に並んでいるのが確認できる。３・４・５号墳は墳丘裾部にかけて削平を受けているが、現況の墳丘は３号墳が直径約10m、４号墳が直径約９m、５号墳が直径約11mを測る。

平成14年度の調査では新たに２基の古墳（６・７号墳）と、２号墳の周溝と考えられる09SD、そして古墳の周囲より土壙墓３基、石棺墓２基を検出した。その結果、墳丘を持つ古墳群の総数は７基以上となった。先に述べた古地図においても７基の古墳状隆起が確認されていたが、若干位置的にずれていることや、現１号墳と考えられる墳丘の北西側に１基確認できること、更に階段状に削平された２号墳より西側の地形の一部に墳丘状の地形や石材が見受けられることなどから、さらに多くの古墳が存在した可能性が高い。

台地上には、他にも八つ手状に伸びる尾根群が存在する。八嘉台地には、西側の桃田運動公園に位置する桃田古墳の他、城ヶ辻の丘陵の東側に伸びる樋元の丘陵の突端に、寺田古墳群が４基位置する。１号墳は円墳と考えられ、径約５m、高さ1.2mで周囲の封土は削り取られている。約50m南側には墳丘径約５mの２号

墳が残存しているが半月形に削平されている。かつては約20mの円墳だったと考えられており、東南部に舟形石棺（凝灰岩製）が露出しているとされている。さらに南側100m付近の納骨堂南側には径約16mの円墳があり、ほぼ中央に赤彩された組み合わせの箱式石棺とみられる板材が露出している。この石材は安山岩製と考えられ、厚さ約３㎝を測る。さらに南側150mには南北25m、東西16m、高さ1.2mの墳丘が存在する。また、寺田古墳群の東側に伸びる上津留の台地には高さ５m、東西27m、南北13mの封土が遺存する上津留古墳がある。北側はかなりの部分削られているが、南側の傾斜面の部分は原型をとどめている可能性がある。頂上付近には「南無阿弥陀佛」と刻銘された石碑がある。

また、城ヶ辻古墳群西側の向津留台地の東側突端には飯塚古墳がある。昭和20年代には既に周囲は削られており、当時では東西30m、南北20m、高さ５mの墳丘が確認できたようであるが、現状では東西17m、南北９m、高さ５mの墳丘が確認できるにすぎない。

これら玉名地域の古墳群を造墓した集団について、特定の古墳群と明確な関連を示す集落等は未だ確認されていないが、これまでの調査における古墳時代の集落遺跡を幾例かあげることができる。

古墳時代前期の集落としては、玉名市河崎から両迫間にかけての柳町遺跡、玉名平野条里跡が挙げられる。これらは古墳時代前期前半から中頃を中心とした集落である。また東南大門遺跡においては集落を画すると考えられる溝から土器群が出土しており、弥生時代終末から古墳時代にかけての時期があてられる。城ヶ辻古墳群を築造した集団の拠点集落との関連性は確認されていないが、これらの集落遺跡は城ヶ辻２号墳と併行する時期と推定され、菊池川を挟んで城ヶ辻古墳群の対岸に位置しており、丘陵谷部及び現在の木葉川や菊池川の氾濫源が作る微高地に営まれた集落の立地は、同時期における城ヶ辻造墓集団の集落像を示唆するものとも考えられる。

また、菊池川の左岸では城ヶ辻古墳群から北方３㎞程に位置する小田宮の前遺跡で、古墳時代前期の竪穴住居や流路と考えられる遺構が検出されている。流路の肩部には古墳時代の祭祀遺物が出土しており興味深く、今後の調査により城ヶ辻２号墳等との関連が明らかにされる可能性がある。

さらに古墳時代の後期の集落としては、玉名平野を台地にあがった蓮華遺跡等の集落遺跡が挙げられるが、これは５世紀末から６世紀後半にかけての集落であり、城ヶ辻６・７号墳と併行する時期の遺跡である。蓮華遺跡も菊池川対岸の遺跡であり、城ヶ辻古墳群を造墓した直接的集団とは考えられないが、その立地を参考にすれば、城ヶ辻６・７号墳を造墓した集団も、尾根がつくる谷の奥の比較的高い部分に拠点集落を営んでいた可能性を考えることができる。

先に述べた小田宮の前遺跡でも流路内に古墳時代の後期の須恵器等が流れ込んでおり、また７世紀代の竪穴住居も検出されていることから、周辺に古墳時代後期の集落が存在したと推定される。

（註１）『玉名市史』　資料篇３　「自然・民俗」　玉名市史編集委員会　1993

（註２）桑原憲彰・大田幸博他　『熊本県の中世城跡』　熊本県教育委員会　1978

（註３）高谷和生　『下山西遺跡』　熊本県教育委員会　1987

第Ⅲ章 調査の成果

第１節　基本土層

基本層位が調査区壁面土層で図示できると良いが、西側が35SF（墓道北側）断面となっているため調査区全体の基本土層を体系的に図示することができない。そこで、ここでは各遺構のトレンチ、ベルト等で確認したものを基本土層として示す。

Ⅰ層は表土、Ⅱ層は褐色土で、部分的にⅢ層の暗褐色土が見られる部分がある。Ⅳ層は黄褐色粘質土（ローム層)、Ⅴ層は凝灰岩の風化土で部分的に軽石も含まれる（第10・11・34図参照)。

古墳時代の遺構はⅣ層上面で検出しているが、６号墳・７号墳をはじめ、大部分は削平されている。そのためⅡ層下位あたりが本来の検出面であった可能性は高い。削平された土は、淡黄褐色土（粘質土）や淡灰褐色粘質土として段々畑の斜面や平坦部分に堆積している。西側斜面や南側斜面でみられる階段状の地形がその最たるものであり、戦時中の開墾や古墳の撹乱の際の土砂の堆積と考えられる。(第８図参照)

第２節　古墳

１．１号墳（第５・９図）（写真図版４）

昭和45年９月７・８日、九州電力の送電線用支柱建設中に安山岩製の箱式石棺が発見された。側壁が破壊され、人骨が露出したため、玉名市教育委員会に届出があった。

現地は小高い丘の頂上付近に当たり、石棺は九州電力高圧送電線用鉄塔の基礎工事の際に設定された２m四方の穴の１つに当たっていた。そのため石棺が取り除かれることになり、緊急発掘実測調査を玉名市教育委員会が主体となって実施した。実測は玉名高校考古学部が依頼され、調査を行っている。石棺の規模は全長1.7m、幅0.6mを測る。棺内から人骨（頭蓋骨）１、鉄製ヤリガンナ１、石鏃１が出土した。小規模な墳丘があったと言われているが、詳細は正式な報告がなされていないために不明である。

人骨は熊本大学医学部第二解剖教室の北條助教授に鑑定を依頼したとの記録があり、現在、熊本大学医学部に保管されている。また石棺は玉名高校駐車場横の敷地に保存・復元されている（写真図版４－13・14)。

（参考資料）第４回玉名市文化財保護委員会記録（昭和45年10月24日14時から 於 玉名市教育長室)

２．２号墳（第５～７・９～11・38・39図）（写真図版４～11・27・33・34)

昭和54年、熊本県教育委員会による確認調査が行われ、墳丘盛土、周溝、周溝内の土坑、土壙墓（17SX）が検出されており（註１)、また土坑内からはベンガラ（分析の結果）を納める甕が出土している（註２)。

（註１）高谷和生　『下山西遺跡』　熊本県教育委員会　1987

（註２）応用地質株式会社　「城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定及び赤色顔料分析報告書」　2003．３

⑴　立地・墳形

２号墳は菊池川を見下ろす丘陵先端に立地する。本古墳群の中では最大規模の古墳である（第５図)。現況では短軸方向（南西から北東方向）の直径約17m、北西から南東方向の直径約21mの楕円形を呈する。墳丘北側は幅６m、奥行き2.5mの撹乱（鉄塔建設時のものか）がある（第９図)。墳丘裾部は幅1.5～２m程の範囲で斜度が高くなっており、削平を大きく受けていることが伺える。等高線を追ってみると、特に墳丘南東側・南西側の削平が顕著である。現況の墳丘高は約2.5mである。

平成14年度の調査では幅3.6m以上の周溝（09SD）を検出した。墳丘の裾部にかけて削平を受けていることが判明したが、検出した周溝の位置から推測して直径21m以上（21～25m)、高さ３m以上の墳丘を持つ古墳であったと推定できる。また墳頂部は径1.5m、深さ約２mの撹乱を受けており石材などは確認できていない。

⑵　周溝

今回、検出したのは幅約3.6mの09SDである。09SDは昭和54年度の調査で検出された２号墳の周溝と考えられた部分で、トレンチ内のみでの確認であったものを、今回面的に検出したものである。

(既往の調査成果との整合)

昭和54年の確認調査で２号墳の周溝（第10図５号試掘トレンチ３～７層）と考えられていた部分（09SD)が、今回の調査で６号墳の周溝（03SD）と重複している箇所もあると判明した（同トレンチ３～５層)。

そうした視点で見ると、第10図掲載の５号試掘トレンチ７層は２号墳の周溝（09SD)、第１・５・７号試掘トレンチの３～５層は６号墳周溝（03SD）の埋土と考えられる。また今回、平成14年度の調査で検出した09SDの底面は、昭和54年度調査において底面（５号試掘トレンチ６層下）とされたラインから、さらに30～40㎝深いレベルで一様に確認されている。即ち１・５・７号試掘トレンチの６層は、09SDの埋土である可能性も考えられ、５号試掘トレンチ７層以下についても昭和54年度の時点で、09SDの埋土としてさらに掘削できた可能性が指摘できる。なお５号試掘トレンチについては、09SDの検出状況から03SDの立ち上がり線を推定しており、それによりさらに09SDの立ち上がりを推定して、ラインを補足している（７層破線部)。

また同様の状況から鑑みると、今回面的に検出された09SDの上場と下場の高低差は、一様に10㎝ほどで比較的浅いものであったが、昭和54年度調査の土層図を参考にして、５号試掘トレンチの７層から埋土とし、また今回の調査での調査区壁面土層図（第11図）８層からの埋土を考慮すれば、平均して50㎝の深さはあったと考えられる。即ち、09SDは本来の深さが50㎝で、幅は削平された上場を想定すると、検出した3.6m以上であった可能性が極めて高い。

現状では以上の考察にとどまらざるを得ず、今後は昭和54年度の確認トレンチ断面の再調査、また09SDが２号墳の周溝であるかの確認も含め、さらに面的な確認調査が必要であろう。

また、墳形も現状では円墳と推定でき、南斜面を中心に確認調査が実施されているが、周溝の削平も大きいことから、墳形の詳細な確認のためのさらなるトレンチ設定が必要とされる。

⑶　周溝内の遺構

・不整形土坑

昭和54年の確認調査の際に、５号トレンチの周溝内最下面で長軸約45㎝、短軸約35㎝、深さ約24㎝の不整形土坑を検出している（第10図５号試掘トレンチ)。その土坑内からは容量の2/3以上の赤色顔料（ベンガラ）を納める甕（第38図３）(写真図版８－35・36、33－134）が出土しており、また別個体の甕の胴部の一部を蓋（第38図２）にしている（写真図版33－135)。

(今回調査成果からみた不整形土坑の問題と評価)

昭和54年度の確認調査の結果によれば、「土壙の埋土は周溝最下層（６層）の埋土(註1)と酷似し」ており、さらに甕の蓋が周溝の底面地山よりも約10㎝上のレベルで撹乱を受けずに検出されているという判断から、当土坑を２号墳の時期判定に用いて、「５世紀前半時期」と推定している。昭和54年度の調査段階では、この不整形土坑に関する詳細な土層図などは記載されていないため、土坑の上場ラインや09SDの底面レベル

など、切り合い関係を厳密に断定することは難しく、土坑が09SDに前出するか、併存もしくは後出するかの判断は困難であった。

しかし平成14年度の調査では、昭和54年度のトレンチ調査において設定された５号試掘トレンチの南半分が調査区の範囲内であったため、09SDを改めて面的に調査することができ、この不整形土坑と09SDの時期的関係を確認することができた（第36図17SX土層図）。⑵の項目でも述べたように、今回09SDの底面は、昭和54年度調査において、土層中で検出されたライン（第10図５号試掘トレンチ６層下）からさらに30～40㎝深いレベルで一様に検出された。この底面レベルは、甕を埋納した不整形土坑の下場よりわずかに深い。よって、撹乱を受けずに検出された当土坑は09SDより新しいということになり、09SDが２号墳周溝であるとすれば２号墳の築造時期は、少なくとも甕によって導き出される年代より下らないことになる。この不整形土坑が09SD設定の後、どの段階で掘り込まれたかは判断し難いが、昭和54年度当時の土坑埋土の記載より、09SD最下層、即ち今回の調査によって09SD埋土の上～中層と確認された土層と酷似していたという事実から、09SDがある程度埋まった後の掘り込みである可能性が指摘でき、周溝とほぼ同時期に掘り込まれた周溝内祭祀としての機能よりも、埋没後の墓前祭祀的機能の可能性がより感じられる。

これらの考察は09SDが２号墳の周溝であることを前提としているが、溝の一部を検出したのみであるため、今後は２号墳周溝についてのより広範囲にわたる確認調査が必要不可欠である。ただし今回は当時の調査を踏襲して、ベンガラを納めた甕を２号墳時期判定の参考資料としたい。なお、当土坑の性格に関する詳細は次の17SXの項目においても合わせて述べたい。

・17SX

６号墳の墳丘下、２号墳の西側周溝内で検出した二段墓壙である（第36図）（写真図版30－126～128）。掘り方は長軸約2.1m、短軸約0.7m、埋葬される部分は長さ1.65m、幅0.36～0.45mを測る長方形のプランを呈する。２号墳周溝（09SD）より0.8mも深い位置から底面が検出されている。また、底面にはベンガラが塗布され、壁面にも一部付着が認められる。東部にも顕著にベンガラが残存する。土層の堆積状況（註２）から、蓋の腐食のため土が流入した（第36図３・４・６層）と考えられ、木蓋土壙墓の可能性が高い。

（既往の調査から見た評価）

注目されるのは、昭和54年度の際発掘されたベンガラ埋納甕と、そこから90㎝離れた地点で検出された高坏とを結ぶ直線軸が、17SXの長軸とほぼ重なる点である。17SXの西端上場は、ベンガラ埋納甕を納めた不整形土坑の直下20㎝から検出され、下場までの深さは約60㎝である（第36図土層図）。不整形土坑と17SXの切り合い関係は、09SD完掘の際撹乱したため定かでなく、一概に模式図に示したように17SXが09SDと不整形土坑以前に存在したということはできない。

17SXが09SDの埋没した以降に掘り込まれた可能性としては、まず前述したように、甕と高坏を結ぶ軸と17SXの軸が重なること。次に17SX東端上場のレベルが西端上場のレベルと比較して、約25㎝高いことから、17SXの本来の上場はさらに高い地点であった可能性が考えられ、そうした場合、不整形土坑の掘り方を含むことの二点から考えられる。

17SXが09SD以前から存在した可能性としては、土層図（第36図）において17SXの埋土と考えられていた１層が、09SDの埋土も含むと考えられることから指摘できる。平成14年度当初は、１層は17SXの埋土と認識されていた。しかし今回面的に検出された09SDの掘り方ラインを模式的に追加したところ、１層と09SDの底面ラインは10㎝というわずかなレベル差であることがわかり、さらに１層の土質は、09SD下層の土と酷似することが判明した（第36図１層、第11図13・14層）。このことから、17SX1層の上部は09SD最下層の埋土である可能性が考えられ、そうした場合、17SXの上層は09SDによって切られていることになり、17SX

が09SD以前に存在したことを示す根拠となる。

17SXが不整形土坑と09SD以前に存在したとすれば古墳初頭以前の土壙墓、以降に存在したとすれば、周溝が埋まった後に掘り込まれた古墳時代以降の周辺埋葬という性格が想定される。

前者の場合においては、不整形土坑は17SXと関連をもたない遺構であり、古墳時代に入ってからの周溝内祭祀もしくは周溝埋没後一定期間をおいてからの祭祀遺構として意義づけられ、後者の場合においては、墳丘の周辺埋葬として土壙墓（17SX）に葬られた被葬者に向けての供献、もしくは祭祀行為にともなう遺構と意義づけることができる。

17SX・不整形土坑の位置づけを明確にすることは現状では困難であるが、２号墳に伴う他の周辺埋葬の存在の有無や、２号墳周溝の土層堆積状況等のさらなる検討により、２つの可能性のうちより高い方の可能性を指摘できる余地はある。そのためには、２号墳周溝の広範囲にわたる確認調査が必要である。

（註１）高谷和生　『下山西遺跡』　熊本県教育委員会　1987。土坑は「１号土壙」とされている。引用文中「６層」は、本報告書第10図６層にあたる。

（註２）17SXの土層ラインは破線で示されるが、これはトレンチ及びサブトレンチ壁面に一部残った土層や、ベルトによって確認できる土層を見通しでつなぎ合わせたものである。

⑷　遺物

第38図

第38図掲載の遺物は、平成14年度調査の際に出土した資料４を除いて、他は全て昭和54年度調査において出土した資料である。09SDより甕形土器４個体以上（第38図１～５）が出土している。１（写真図版34－141・142）は甕の胴部で、やや器壁が厚い。詳しく観察したところ、焼成は良好であるが、他の出土土師器と比較しても調整や胎土の様子から、弥生土器である可能性が高い。また外面に煤の付着はみられないものの（黒斑は有り）剥離欠損が多く、二次的焼成を受けた可能性も考えられ、生活土器としての利用が推測される。生活土器の埋葬への転用例も考慮すれば、その可能性も否定できないが、いずれにしても本資料は２号墳に伴うものではなく、造墳時の掘削による撹乱を受けた流れ込みと考えられる。３（写真図版33－134）はベンガラを納めた甕で、２（写真図版33－135）はその蓋として出土した資料である。２の外面調整は磨滅によって観察できないが、最大胴部の位置や底部の様子、また出土状況を鑑みても、二資料はほぼ同一の時期と考えられる。３を詳しくみると、器壁は薄く、口縁の端部はつまみ上げており、顕著には内傾していない。底部は丸底やや尖底であるが、内面に指頭痕が認められ、若干丸みを帯びる。また外面には煤が付着しており、生活土器の転用と考えられる。４は平成14年度調査で出土した、09SD出土の土師器口縁部（写真図版33－136）である。３と比較して口縁端部はほとんど内傾せず、端部処理も稜の立つ形状で、口縁部については横方向により外反していることから、３よりもやや古相を呈する。５は昭和54年度の調査で出土した甕の胴部であるが（写真図版33－138・139）、焼成や、胎土の特徴が４と酷似している。

その他に短頸壺（第38図６）、二重口縁の広口壺（第38図７）、高坏口縁部（第38図８）、高坏脚部（第38図９）が出土している。６の短頸壺（写真図版33－137）は器壁が厚く、口縁部は丸みを持ってやや内曲する。類例が少なくやや在地的な遺物とも考えられる。８は高坏の坏部（写真図版34－143）で、立ち上がりはやや短い。９は高坏脚部（写真図版34－144）で、５号試掘トレンチから出土している。脚部端部の尖った処理や、屈曲部からの開きはやや浅く短い。なお今回掲載していないが、昭和54年度において５号試掘トレンチからは他にも高坏が出土している。前項でも既に述べたが、この高坏はベンガラを納めた甕より90㎝離れて出土している。完形ではないが、脚部底径は12.2㎝を測り、坏部との接合部の形状から、小型坩とセットをなすタイプの器台である可能性も高い。７は二重口縁壺の口縁部である（写真図版34－145）。口縁部立

ち上がりに屈曲の見られる同類の壺形土器は、弥生終末から古墳時代前期にかけて北部九州から出土する一部の小型坩に見られるが、大きさや屈曲部の位置からやや系譜の異なる二重口縁壺と判断できる。埴輪の可能性も指摘できるが、断定はできない。

第39図

第39図記載の土器も、昭和54年度調査の際出土した遺物である。１は土師器甕（写真図版34－146左）の口縁部であるが、頸部の屈曲が明瞭で、口縁端部も同様に稜の立つ形状である。さらに口縁部は外反しつつも上方向に立ち上がり、器壁も肥厚している。２は土師器甕（写真図版33－140）の胴部から底部であるが、器壁は薄く、典型的な丸底である。

・小結

09SD出土の遺物は第38図２や３から推定される時期、即ち野田拓治編年古閑～山下併行期（註１）、石橋新次編年Ⅰb～Ⅱa期（註２）、北部九州で言えば、柳田康雄編年北部九州土師器編年Ⅱa期（註３）、武末純一編年宮前B期（註４）に併行する特徴を有しており、布留式古段階に位置付けられるものが多く、４・５や９も同様である。第38図６や８はそれよりやや古い可能性もあるが、比較する資料数が少ないため断定できない。また第39図１・２の特徴は、それのみに注目すると第38図の出土遺物と比較して新相を呈し、５世紀末～６世紀またはそれ以降の可能性も指摘できるが、後世の流れ込みである可能性も高く、また土師器による時期決定は困難でありそれぞれの特徴は古相の土器群にも散見できるため、判定しがたい。

出土遺物を個別にみれば、布留式古段階以前にも比定できるような古相を呈するものも確認でき、新しいものでは６世紀に比定できるような資料もわずかに見受けられるが、全体的な時期としては古墳時代前期に位置づけられよう。いずれにせよ09SDから検出された遺物は、それぞれの詳細な出土状況が確認できず、また周溝上部が削平されており、ベンガラを埋納していた土器（第38図３）（写真図版8－35・36）以外は周溝に流入、もしくは遺存していたものが撹乱された可能性が高い。よってこれらを09SDの時期判断に用いることは好ましくない。

また不整形土坑から出土した甕も、土器の制作時期と埋納時期の問題を鑑みる必要があり、土器から推定できる時期を即、土坑の時期とするにはやや難がある。ただし、09SD出土の遺物が特定時期に偏在することは興味深い結果であり、09SDが２号墳の周溝であるかの実証も含めて、今後の更なる調査が待たれる。

（註１）野田拓治　「古式土師器の成立と展開」　『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』　1982

（註２）石橋新次　「中九州における古式土師器」　『古文化論叢』第12集　1983

（註３）柳田康雄　『古墳時代の研究』６　1998

（註４）武末純一　『土器からみた日韓交渉』　1991

３．３号墳（第５・９図）（写真図版４・10）

３号墳については、国道用地外であったため、今回は本調査を実施していない。昭和54年の確認調査に加えて２号墳から５号墳を含めた測量調査を実施した。その成果をあわせて報告する。

⑴　立地・墳形

現状の墳丘裾は２号墳とほぼ同一標高34.5mで、形状は段々畑状に開墾された地形に沿っており、隅丸台形とでも言うような形状を呈する。２号墳側７m、４号墳側５mを測り、長軸の長さは約9.5m、短軸の直径は約７mである。現状の墳頂は２号墳側に偏在しており、本来の墳丘規模・墳形を留めていないと考えられる。現況の高さは約1.3mである。

昭和54年に南西側に幅約２m、長さ６mの確認トレンチを入れているが、地表から約30㎝で地山を確認しているのみで周溝等は確認していない。

現状では２号墳墳頂部から３号墳墳頂部までの距離は約25mで、２号墳の現況の墳丘裾までは15mである。３号墳の墳形・規模について推定するにはさらなる確認調査が不可欠である。

４．４号墳（第５図）（写真図版４）

⑴　立地・墳形

２・３号墳の丘陵に続く位置に立地するものであるが、現況の墳丘裾の標高は約34mで２・３号墳より約50㎝低い。南東側は段々畑の開墾時の段と一体化しており、墳丘は大きく削平されていると考えられる。

４号墳墳頂部から３号墳墳頂部までの距離は20mである。現況の墳丘の高さは南東方向から見ると1.8m以上突出するが、段々畑造成によるものと考えられ、墳丘は突出部上部の約0.8mが遺存していると考えられる。

現況では短軸方向（南西から北東方向）の長さ約７m、北西から南東方向の長さ約11mの楕円形を呈する。墳丘の確認には北西方向にトレンチを設定する等して今後の確認調査に期待したい。

⑵　主体部

確認調査、本調査ともに実施しておらず詳細は不明であるが、４・５号墳周辺で凝灰岩を１点表採していることから、主体部は石棺である可能性が考えられる。

５．５号墳（第５図）（写真図版４）

⑴　立地・墳形

２・３・４号墳の丘陵に続く位置に立地するものであるが、現況の墳丘裾の標高は約32.5mで４号墳より約1.5m低い。南東側は段々畑の開墾時の段と一体化しており、大きく墳丘は削平されていると考えられる。現況の墳丘の高さは南東方向から見ると２m以上であるが、段々畑造成によるものと考えられ、墳丘は突出部上部の約１mが遺存していると考えられる。

現況では緩やかな五角形状を呈している。南西から北東方向の長さ約10.5m、北西から南東方向の長さ約10mである。４号墳と同様に墳丘の確認には北西方向にトレンチを設定する等、今後の確認調査を期待したい。

⑵　主体部

確認調査も本調査も実施しておらず詳細は不明であるが、４・５号墳周辺で凝灰岩を表採していることから主体部が石棺の可能性がある。

６．６号墳（第７・11～17・40～47・49～52図）（写真図版３・12～16・34～38・42～45・51・53～58）

⑴　外部施設

丘陵自体が後世（戦中・戦後）の開墾を受けて段々畑に改変されており、６号墳の頂部や南側の墳丘も削平されている。よって古墳時代の地形はほとんど姿をとどめておらず、６号墳の墳丘は南側一部にしか残存しない。そのわずかに確認できる墳丘は、一部で盛土を検出したことから地山整形の際に周溝を掘削した土等で盛土を施したものと推定される。しかし、そうした施工が南側一部であったのか、墳丘全体であったのかは、現状において把握することができない。

①周溝と墳丘規模

上記のように６号墳は後世の地形改変が著しく、特に西側は７号墳と重複しており、墳丘端部は明瞭でない。しかし墳丘規模は残存する周溝から推定できる。周溝（03SD）は墳丘東側部分に幅約３～４m、深さ

約0.5mを測り、また南東側と南西側にも６号墳の周溝の一部と考えられる溝状遺構の痕跡が確認されている（第７・10～13・34・35図)。したがって墳丘直径は周溝を除いても13～14mと推定できる。

７号墳との切り合い関係は不明瞭であるが、主体部の位置、７号墳の東側周溝の位置などから６号墳が前出する可能性も考えられ、そうした場合、今後の調査で７号墳盛土下に６号墳周溝が確認されることも想定される。

②周溝内遺物

・遺物出土状況

平成14年度の調査において検出された６号墳周溝（03SD）から２点の土器が出土している（第41図)。またこの他、７号墳墳丘南東部から墳丘裾部にかけて、須恵器坏身・坏蓋・甕・提瓶・甑・無蓋高坏、土師器高坏などが出土している（第35・49～51図)。

平成14年度調査時は樹痕の撹乱を受けていて移動しているものの、これらの土器群は７号墳の墓前祭祀に伴う可能性が強いと推定されていた。ところが、平成15年度の調査の際に７号墳の南東の墳丘裾で６号墳の周溝と推定できる溝を確認した（第35図)。既に７号墳の墳丘裾の土器群は取り上げられていたため、確認は不可能であったが、平面図上において出土状況や周溝の輪郭、25・26SFより古い時期の溝の一部（６号墳等の墓道の一部とも考えられる43SF）等を検討した結果、かつて７号墳に係ると考えられた土器群の出土地点は、平面上はほぼ６号墳の周溝および墓道（43SF）と重なっていることが判明した（第13・35図)。さらに７号墳と６号墳の境界付近は、７号墳の墳丘築造後もさらに後世に削平されている部分で、かつ樹痕による撹乱等も記録されているため、本来６号墳の墓道や周溝が検出されてもおかしくない部分であると考えられる。土層による確認が困難であったため、これらの遺物がどちらに係るものか断定はできないが、７号墳南東斜面として取り上げられた土器群は、６号墳周溝内及び墓道出土の土器群である可能性も考えられる。

・遺物

第41図

第41図１・２は当初より03SD出土と認識された遺物である。

１（写真図版34－147）は頸部の最もくびれた位置に格子文様を施した二重口縁である。同様の文様は、弥生終末から古墳時代の土器に多く見受けられ、甕や壺の胴部や肩部に付された帯状突帯上に施される例が多いが、本資料は施文位置や帯状突帯を有しない点などやや特異である。また断定はできないが、埴輪の可能性も考えられる。２は土師器甕の口縁部（写真図版34－146右）である。端部の形状や立ち上がりの角度から、やや古い形態の土器と考えられる。第41図掲載の土器は出土層位が不明であるが、いずれも６号墳の東側で検出された03SD内より出土しており、09SDを切っていたため、２号墳に伴う遺物であった可能性も考えられる。

第49図

第49図掲載の遺物（写真図版35・36）は７号墳に伴う遺物として記録されているが、既に述べたような状況から、６号墳に係る遺物である可能性も高いため、先に６号墳の項目で紹介する。出土場所は25・26SF周辺で、６号墳と７号墳からほぼ等距離にある。須恵器は坏蓋４個体以上、坏身４個体以上で少なくとも４セット以上出土している。

１～４は坏蓋である。いずれも蓋口縁端部の段はわずかに遺存し、また稜も突出から沈線への移行期もしくは沈線の残る形態である。また４の外面天井部はカキ目によって調整され、その上にヘラ記号とも考えられる工具痕が観察されるが、極めて浅い沈線のため定かでない。５～８は坏身である。坏身は坏蓋に比べ口

径にばらつきが見られるが、立ち上がりと受部の比率や立ち上がり端部の形態などから、全体的に坏蓋とほぼ同時期があてられる。なお１の外面天井部にはヘラ記号と考えられる工具痕が観察される。

９は甕（写真図版36－163右）の口縁部である。焼成段階で熱によって変形しているが、外面屈曲部の稜線下に櫛描波状文が見られる。また、口縁端部から屈曲部の間には刺突列点文を施した痕跡が見られるが、ナデ消されている。縁端部内側には段を有し、屈曲部下の傾きや断面角度などからみても、１～８の坏身坏蓋と同時期が考えられる。

10・11は須恵器高坏の坏部である。10（写真図版36－162）は脚部が欠損しているが、わずかに残存する脚部の付け根に三方の方形透かしが確認できる。また、口縁端部から脚部の付け根までほぼ等間隔に二条の沈線が、さらにその二条の沈線の間に櫛描刺突文が、少なくとも三段階に分けて施されている。櫛描刺突文から脚部付け根まではカキ目が確認できる。坏部は口径10㎝に対して深さ約３㎝とやや深く、口縁端部もやや外反している。11（写真図版36－163左）は二条の沈線の下に櫛描刺突列点文がみられる。

12～16（写真図版36－164・165）は土師器高坏である。12は内面が丹塗りで、盤状と呼ばれる高坏の坏部と考えられる。残存率が低く、径の復元は行わなかったが、約30㎝前後の大形に部類される高坏と考えられる。13は椀形で、31SXから出土した高坏（第59図４～７）と同系統の高坏坏部と考えられる。13も同じく径の復元は行わなかったが小型で、法量もさほど31SX出土のものと変わらないと推定される。14（写真図版36－164）はやや特異な形態の高坏で時期判断がしにくい。15は高坏脚部である。端部は内湾し、やや稜の立つ処理で、器台端部の可能性もある。16も同じく高坏脚部であるが、本例のように脚部の接合部から端部に向かって直線的に開くタイプの高坏は、坏部が椀形、盤状のいずれにも見受けられる。12～16の資料は、小型の精製土器群と位置づけられ、14の資料をみる限り生活土器としての機能は考え難い。

17（写真図版35－160・161左４点）は須恵器壺である。口縁部、頸部、胴部はそれぞれ接点が無いが、内外面の調整やタタキ、焼成、胎土からみて同一個体の可能性が高い。特に頸部から胴部にかけては内面のタタキ痕が丁寧にナデ消されており、ごくわずかに同心円状タタキの痕跡がうかがえる。外面は上半が縦方向のタタキ、下半は横方向のタタキが見受けられ、格子状でない。

第50・51図

第50・51図掲載の須恵器も、第49図掲載の土器群と出土地点は同じである。１（写真図版35－160・161右２点）は甕もしくは壺の胴部である。内面は同心円のタタキがみられるが、上半分は横方向にナデており、下半分に比べ同心円のタタキ目がやや不明瞭である。外面もタタキが全体的に施されているが、上半分はカキ目調整によって消されており、タタキの痕跡が一部にうかがえる程度である。接点は無く残存率が良好でなかったため図化しなかったが、他にも同一個体と考えられる接合資料があり、２点を総合的にみて、最大胴部径は30㎝前後と推定される。２は須恵器壺である。１と同様に残存率が低く径の復元は行わなかったが、最大胴部径は50㎝前後と考えられる。２と同一個体と考えられる接合資料は、他にも４点あり（写真図版36－166）、いずれも濃緑色の自然釉が外面全体と内面上部の一部にかかっている。また頸部には一カ所、小指大の粘土塊が見られるが、やや粗雑で、意図的に付けられた浮文であるか、偶発的に融着した粘土塊であるかの区別はつかない。

第51図１（写真図版37）は須恵器甕の口縁部から肩部、２（写真図版38）は須恵器胴部から底部である。１と２の接点は無いが、同一個体である可能性が高い。いずれも全体の三分の一は残存しており、同一個体として復元すれば器高はおよそ55㎝で、最大胴部径からみても中形の甕となる。頸部内面の稜はやや不明瞭で、内・外面のタタキ目が残り、また口縁端部は帯状の粘土帯を貼付けた形状で、断面は台形に近い。

・小結

６・７号墳周辺から出土した遺物のうち、時期的な判断基準となるものは、第49図掲載の遺物である。１～４の坏蓋はⅡ型式１～２段階前後、MT15型式新段階～TK10型式古段階併行期があてられる。５～８の坏身もほぼ同時期でⅡ型式1段階前後、MT15～TK10型式古段階併行期と考えられ、10の高坏も坏部の深さや外反する口縁部などから、坏身と同様の時期が推定される。また第49図17は内面調整や口縁端部の特徴から、MT15型式併行期以前の可能性も考えられる。

やや古相の遺物では、第49図13の高坏など、31SX出土の高坏を参考にすれば、５世紀末頃の古い様相を呈する形態とも考えることができる。また第49図15・16のような形態の脚部は、小型精製土器群が普遍化するにつれて多様化する器台や高坏、即ち小型坩や椀形土器の高坏化に伴う脚部とも考えられ、器台であるか高坏であるかの判断は困難である。

このように時期について考察できる遺物を概観すると、須恵器については、MT15型式新段階～TK10型式古段階のおよそ６世紀前葉～中葉に偏在することがわかる。

また、これらが６号墳もしくは７号墳主体部が撹乱された際の流れ込みという可能性も否定できないが、６号墳の墓道ないし周溝と考えられる地点からまとまって出土しているため、周溝内祭祀もしくは墓前祭祀に伴う遺物である可能性が高い。そうした場合、６・７号墳の築造時期そのものは、少なくとも遺物より導き出される時期と同じかもしくはそれより遡ることも考えられ興味深い。土師器については、須恵器よりやや古い要素も見受けられるが、相対的に器形変化が乏しく、破片が多いため時期的な考察に用いることは避けたい。しかし祭祀的要素が強いため、広義の意味で６・７号墳に伴う補足的資料と考えることはできる。

また、６号墳周溝出土とした掲載資料の中で、２号墳周溝に伴う遺物の可能性があるものは、第41図の遺物である。特に１は特異で、類例は福岡県那珂遺跡第62次調査、方形周溝墓SX208の周溝より出土した二重口縁壺形土器のほか、同じく福岡県戸原大塚古墳の第７トレンチより出土した二重口縁の壺形土器などがあげられ、相対的に出土数は少ないようである。なおかつこれらの土器がいずれも墳墓に伴い、共伴の土器から古墳時代前期に位置づけられることは興味深い。

⑵　内部施設

①石室撹乱状況

石室は少なくとも３回の撹乱を受けており（01SX、10SX、11SX）、特に一番古い撹乱（11SX）は石室全体を破壊している（第14図）。石室内はわずかに奥壁と左側壁に板石が原位置で２枚遺存しており、それぞれ奥壁の石材が現状の床面より高さ約30㎝、幅約80㎝、厚さ約６㎝、左側壁の石材が現状の床面より高さ約25㎝、幅約70㎝、厚さ約6㎝を測る。その他にも石材が数点残っているが、周囲の埋土が乱れていることから、多少動いていると考えられる。いずれにせよ撹乱によって石室内部は破壊されており、細部構造は不明である。

②石室残存状況

遺存している部分から推定すると、石室は板石を立て、その後ろに裏込めの土を詰め、板石の上縁より石材を積む方法で構築されている（第15図）。床面は奥壁の板石に一定のレベル以上で赤色顔料が塗布されており、このレベルが築造時の床面と推定される。また、想定される床面のレベルより10㎝下からは、石室内の周壁部分と考えられる石材の掘り方が四壁を巡るように検出された。

その他にも、現状の床面で硬くしまった暗褐色の埋土を帯状に検出した。長軸方向に半裁して埋土を掘削したところ、一部で拳大の石が並ぶように出土した。これは立てた石材の安定をはかるための根固めと考えられる。この帯状の埋土は両側壁のさらに内側で確認されている。右側壁の前にはL字に根固めを検出して

いるが、石障が二重になっていたか、石屋形等の石棺が存在したかは確定できない。

また、撹乱の埋土からは赤色顔料を塗った石材片が多数出土しており、遺存している板石にも赤色顔料が残存している。赤色顔料は分析の結果、ベンガラであることがわかった。また、石材はすべて玄武岩質安山岩で、金峰山山麓で採れる安山岩に類似している。

③小結

石室内周壁の掘り方の検出状況や板石から、６号墳は玄室の幅約２m、長さ２～2.2mの石障系石室と考えられる。また羨道部途中の石の抜き取り痕跡を重視すると、複室構造を持つ可能性も考えられる。

石室の構造は、残存している石材と抜き取り痕から、まず東側（山側）の地山は二段掘りして墓壙を造り、四方に板石を巡らしていたと推定できる。そしてその板石の裏側には裏込めの土を詰め、板石の上縁より大きなもので60～80㎝の転石（自然石）を石室内面に向け、その背面に裏込めの土を置きながら石材を積む構造であったと考えられる。また、前障と推定される部分は他の所よりも深く撹乱を受けており（深さ約60㎝)、石材の抜き取り痕と考えられる。その最下面で硬くしまった部分があり、これは玄門部の袖石の根固め痕とも考えられるが、石障の割石の掘り込みの深さを考えると、撹乱の際の痕跡と考える方が無難である。

⑶　玄室

①石室を構成する石材

奥壁に想定される板石及び左側壁の板石が一部原位置を保っており、それらの石材と石の抜き取り痕から、後室の法量は主軸、幅ともに約2.2mでほぼ正方形を呈する（第15・16図)。

奥壁の板石は床面より高さ約20㎝、幅80㎝、厚さ約５㎝を測り、左側壁の板石は床面より高さ約25㎝、幅約70㎝、厚さ約10㎝を測る。

また奥壁の板石の上縁に、小口面厚さ20～30㎝、長さ30～40㎝、奥行30～50㎝の石材が数点残存している。これらは現存する石障の高さまでは、外側に裏込めの石材が残存している形跡がないため、その可能性は否定できないものの、石障上部の壁面を構成する石材である可能性の方が高い。

以上の石材の他にも散在した状態で石材が出土していることから、石室は撹乱の際に破壊されたと考えられ、細部構造は不明である。

(石室内及び上部・周辺から出土した石材による石室を構成する石材の復元)

散在した石材の中には、他にも石室上部の壁面に用いられていた石材が存在すると考えられたため、詳しく観察したところ、確実な資料を抽出することができた。先にも述べたように、６号墳は撹乱が著しく、特に上部側壁の状態は殆ど確認することはできないが、残された石材から壁面に関する情報を提示したい。

まず、赤色顔料が付着しているものの中に、破壊された石障の可能性がある石材が認められた（写真図版53～55)。これらの石材は、片側全面に赤色顔料のあるもの（写真図版54・55）と、両側（内・外面）全面に赤色顔料のあるもの（写真図版53）の２種類に分けられる。前者は、片面のみに顔料がみられることから、側壁もしくは奥壁の最下部に用いられた板石である可能性がある。後者は両面に顔料がみられることから、玄室の死床を仕切る石障であった可能性が考えられる。

次に側壁に小口積みされたと考えられる壁面材を確認した。壁面材の定義としては、①小口面全面に赤色顔料が塗布されていること。②小口面を中心とした四方の側面１～２㎝に赤色顔料が塗布されていること。のいずれの条件も満たすことを前提としている。該当する石材は46点確認され、それぞれ小口面の長さと厚さを計測した（表２)。さらに石材の法量に関して、特定の大きさに偏りがないかを観察するため、表を分布図にしたところ次のようなことが判明した。

まず壁面材と特定できたものは全て板状の割石であった。採取した石材は扁平な割石に限らず、人頭大の

自然石なども数多く見られた中で、壁面材と特定できたものが殆ど扁平な割石であったことは興味深い。要因として考えられることは、一つに大形の自然石等は後世の石材として抜き取られたために遺存しなかった可能性があること。二つに赤色顔料の剥落によって、自然石の壁面材が十分に抽出できなかったことがあげられる。事実、前述したように、奥壁石障上部の石材は大形の自然石であり、こうした石材も壁面に使用された可能性は極めて高いことを示している。その中で、抽出した壁面材のほぼ全てが扁平な割石であったことは、石障上部の大形壁面材よりさらに上部では、ほぼ割石のみで壁面を構成していた可能性を示しているとも考えられる。

次に、壁面材として使用された割石は、大きく３つのサイズに分けられることが指摘できる。大形の自然石については割愛することとして、まず、大形の割石（写真図版56－228）は長さ15㎝以上～30㎝の間、中形の割石（写真図版56－229・230）は長さ８㎝～15㎝未満、小形の割石（写真図版57）は長さ８㎝以下に分けられよう。それぞれのまとまりにはやや明確性を欠き、大形のものが厚い傾向にあることを除いて、大小に関わらずばらつきがあり、さほど長辺と厚みとの関連性が見受けられない。資料数が少なく、大・中・小の法量の平均については憶測の域を出ない。この他にも、壁面石材であるもの、またその可能性が高い資料は数多く存在した。中でも拳大の自然石に赤色顔料の付着したものが確認でき、レベル調整のための小形の壁面材とも考えられたが、根拠に乏しく積極的には評価できない。

この赤色顔料と奥壁及び左側壁の腰石、壁面石材に付着していた赤色顔料は、分析の結果いずれもベンガラと判明した(註)。石材はすべて玄武岩質安山岩である。

また、それぞれの石材の大きさによる数量比に関しては、壁面の構成比率において一般に小形のものが数量的に多い傾向にあること、大形のものは損傷を受けやすい為に、完残する資料が少ない傾向にあること、採取した石材は破損しているものが圧倒的に多く、良好な資料が得にくい等の制約から、現状において特記することは望ましくないと考える。しかし今後、採取した石材を更に詳しく調査すれば６号墳の石室構造についての新たなデータを得る可能性は指摘できる。

玄門部分については撹乱のため、板石の存在した痕跡は確認できなかった。しかし玄門の袖石の抜き取り痕と考えられる痕跡は確認された。

（註）応用地質株式会社 「城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定および赤色顔料分析報告書」 2003

②床面

床面は奥壁の板石に一定のレベルで赤色顔料が塗布されており、このレベルが築造時の床面と推定される。しかし、床面と想定される下位からも遺物や石材が散在した状態で出土しており、盗掘の際に床面は破壊されている可能性が高い（第14図)。

③遺物出土状況

原位置をやや移動していると推定されるが、人骨の一部（大臼歯、下顎骨、四肢骨の一部）が奥壁部分の石材に押しつぶされて出土している。損傷が激しいため性別は不明である（第16図)。

その他に、一部床面に近い層から鉄製品や須恵器の破片が出土している。須恵器は細片のため、多くが器形などは不明であるが甕もしくは壺と考えられる口縁部片（第40図９）が出土している。なお撹乱坑（11SX）からは土師器の坏（第40図８）が出土しており完形に近い。また他に土師器の破片が出土しているが、小片であるため実測に耐えない。

鉄製品としては、刀（第45図１・２)、鉄鏃（第46図)、鉄釘（第45図６）の他、馬具類（第42～44図）が出土している。全体として鏡板や引手・銜の一部等、轡類と馬具の金具等が20点以上、装飾品ではガラス小玉の他、垂飾付耳飾の一部と考えられる金環や銀環も出土している（第47図)。しかし、ほとんどが石材の抜き取り等の撹乱坑（01SX、10SX、11SX）から出土しており、また石室の床面までも撹乱を受けている部

分が多く、出土遺物は原位置を留めていない。

④遺物

・土器（第40図２）

第40図８・９は11SXより出土した。８は土師器坏（写真図版34－150）である。完形に近いが撹乱坑内より出土したため、どの時期の遺構に伴う遺物であるか定かでない。また９は須恵器の口縁部であるが、器種は定かでない。６号墳に伴う遺物としては、他に04SK出土の遺物があるため、11SX出土の遺物も合わせて後に考察したい。なお、６号墳石室内からは他に土器片が数点出土しているが、撹乱を受け実測に耐えない小片がほとんどである。

・馬具（第42～44図）

（轡）（第42図）

散逸しているものの轡が出土している（写真図版42－187）。１個体かは不明であるが、形式がわかるものとしては楕円形鏡板付轡のものである。１～４がそれで、同一個体と推定できる。実測図は合成して作成している。銜や引手と見られる鉄器の直線部分に捻りが見られる。

1は立聞部で面繋に連結していると推定される。３の一部と錆で癒着している。立聞は欠損部の形状から頭部は丸みを帯びる形式と推定できる。頭部径約４㎜、芯径約1.5㎜の鋲４つで面繋の革帯部に接合していたと推定できる。立聞には幅６㎜、厚さ1.5㎜の釣金具が付属しており、鏡板と接合していたと推定できるが、接合部の鏡板の形状が不明である。２は鏡板である。上部が欠損している。楕円形の鉄板１枚と幅約１㎝の縁金を、頭部径４㎜の鋲をもちいて鋲芯間約15㎜間隔で接合している。引手を通す中心部の孔径は長径23㎜、短径13㎜である。幅約10㎜の縁金は上下の金具で固定されている。他の縁金を固定する鋲は不明である。３は引手部分であり、４と連結する可能性がある。引手部分の径は約６～８㎜で、右手を手前、左手を奥にひねった捻りが環以外の部分に施されている。環はやや歪んでいるが、環幅約８㎜で外径25㎜を測る。直線部分が環部から約９㎜のところで徐々に曲線を描いている。このことから、環部は直線的に製作された後に90°近くに折り曲げられていると推定できる。４は引手と銜の接合部で、遊環と銜及び引手の環部が錆に癒着した状況で出土している。引手及び銜の環は環幅約8㎜で外径約20～23㎜である。捻りのある方を引手として復元した。遊環は環幅約8㎜、外径の長径約30㎜、短径約20㎜である。

同一の轡と推定できるものに７がある（写真図版44－192・193）。４点を合成して図示した。幅約10㎜の縁金を鋲芯間距離11～15㎜間隔で鋲により接合している。裏側の鉄板の孔の大きさは1.5～２㎜である。鋲芯径は約1.5㎜であろう。

また、６は縁金具の形態（屈曲度等）及び縁金の鋲芯間距離が10～11㎜と上記１～４・７とは異なる。楕円形杏葉の一部と推定して良いであろう。裏側の鉄板の孔の大きさは1.5～２㎜である。鋲芯径は約1.5㎜であろう（写真図版44－192・193）。

他にも、５などの鏡板と考えられる破片が数点出土しているが、接点が不明のため復元できなかった。

（飾金具）

飾金具／半円形金具（第43・44図）

辻金具や雲珠等の脚（座金具）もしくは革帯金具等と考えられる金具類が出土している。半円形（一方の端部をU字状にした）のものが３種類、同種が２～４点ずつ出土している。

１種類目は、第43図４で径10㎜の頭部の鋲を持つもので、芯径が約３～４㎜のものである（写真図版43－188）。鋲の横断面はやや頭部が尖っている。表面には緑青があり、銅を含むメッキを施していたことが伺える。平面形は長辺33㎜、短辺の最大幅23㎜で半円形である。第43図４と類似しているものに５がある（写真

図版43－188)。鋲の法量はほぼ同じで、同じく緑青がみられる。一方の端部が欠損していて不明であるが、第43図４の形態から第43図５の短辺の幅は24㎜と推定できる。ただ端部がタガネで切断したように直線的で斜辺10㎜、頂部幅８㎜を測る。

次の種類は、第43図１で長辺27㎜、短辺21㎜で半円形である（写真図版43－188)。鉄板の厚さは1.5㎜以下である。径５㎜の頭部の鋲を持つ。鋲芯径は1.5～２㎜である。第43図２及び３（写真図版43－188）も鋲の頭部や芯部の大きさ及び半円形という点で共通する。

第43図８は短辺14㎜、長辺23㎜のもので短辺の直線部に被覆するように鉄板が付着している（写真図版43－189)。短辺の片方は緩やかなU字状を呈すると考えられる。鋲は３本確認でき、頭部径約５㎜、芯部径２㎜と推定できる。鋲の部分には緑青が確認でき、また鋲の配置から長軸方向に対称でないことを特徴とする。欠損部が多く詳細な形式は不明であるが、同形式と推定できるものは、第43図10である（写真図版43－189)。第43図９・11も同様なものと考えられるが、鋲を通す孔等の観察が肉眼では困難である（写真図版43－189)。第43図９は孔が１つ観察できるが、位置が軸線上にあり第43図８とはやや違った形状をしている可能性がある。９は短辺18㎜、第43図11は短辺15㎜である。同図12はU字でない方の端部にハの字の屈曲がみられ、雲珠や辻金具である可能性が高い。また鋲を通すためと考えられる孔が一箇所観察される。他にも同様の孔がある可能性が高いが、錆の癒着によって肉眼では確認できない。短辺17㎜である。

第44図４～６は短辺（幅）14～19㎜で３本の鋲が残存する（写真図版44－194)。頭部径約５㎜、芯部径２㎜と推定できる。なお４には責金具が癒着している。５は一方の端部が欠損していて全体の形状は不明であるが、方形金具になる可能性もある。

なお、第43図23は、同じく雲珠もしくは辻金具の脚と考えられるが、半円形ではなく、一方の端部が尖る形状で、本資料１点のみ確認できた。短辺は残存部で最大16㎜を測る。また、鋲は一箇所観察され頭部径約５㎜、芯部径１㎜である（写真図版43－189)。

飾金具／方形金具（第43・44図)

辻金具や雲珠等の脚（座金具）もしくは革帯金具等になる金具類が出土している。方形のものが３種類程度出土しており、同種が２～４点出土している。方形の金具は大きく分けて２種類ある。

１種類は５本の鋲を持つもので一辺26～27㎜、径５㎜の頭部の鋲を持ち、芯径も約２㎜で鉄板の厚さが1.5～２㎜のものである。第43図13～15が該当する（写真図版43－190)。第43図13の一側面はやや緩やかな曲線を描く。第43図16（写真図版43－190）は鋲の頭部径が３㎜とやや小さいが、残存長等から第43図13～15までのグループに属すると推定できる。

もう１種類は長辺23㎜、短辺21㎜、厚さ1.5㎜のもので鋲は４本、鋲頭部径５㎜、鋲芯径1.5㎜のものである（写真図版43－191)。第43図17・18がそれに相当する。第43図19は側辺の残存状況が良好ではないが、同様の形態のものと推定できる。第43図20も同様であるが、左片は同一個体ではなく、５本鋲か４本鋲かの区別はつかない。

この形式でやや大形のものが第44図１～３である（写真図版44－194)。鋲は４本、鋲径５㎜、鋲芯径1.5～２㎜のもので上記のものと共通するが、長辺24～26㎜、短辺22㎜である。これらに共通するものは幅３㎜の責金具等の帯状の痕跡が認められることである。第44図1は方形金具に外側に責金具が癒着している可能性がある。第44図３は方形金具の内部に責金具が癒着している状況である。

他に、明瞭な長方形を呈する第43図６・７の種類がある（写真図版43－188)。６は３つの鋲が確認できるが、配置から5本の鋲をもつ可能性もある。７は４つの鋲が確認でき、短辺は22㎜である。第43図18や第44図２と同種の可能性も考えられるが、長辺は26㎜以上で、鋲間を考慮しても明瞭な長方形となる。ただし、雲珠もしくは辻金具の脚と考えた場合、長辺に関しては一様でない例も多いため、７の資料に関しては、第

43図17～20や、第44図１～３と同一個体であった可能性も否定できない。

また第43図21・22（写真図版43－190）はいずれも同一個体ではなく、鋲数や一辺の長さ等は不明である。

（鉸具）（第44図）（写真図版44－195）

形式が確定できるものは７のみである。断面隅丸で一辺４㎜の棒を馬蹄形状に曲げたものに横棒（環）を刺した形状を呈する。横棒の長さは26㎜である。一辺４×３㎜の刺（指）金の一方の端部は曲げられ、横棒（輪金）に装着している。刺金の端部は欠損している。８は断面５㎜四方の方形の棒を曲げたものである。形状から７や10、12と比較するとやや大形と推定できる。９は断面７×５㎜の方形の棒を、やや丸みをもって90°近く曲げたものである。10・13は一辺４㎜の隅丸方形の棒を曲げたもの、11・12は一辺５㎜の隅丸方形の棒を曲げたもので形式や法量等の詳細は不明である。破片では、７の横棒を差し込む形式のものが１点（錆膨れで形状が変形）と、他にも刺金の折り返し部分が７と同等なものが３個体以上出土している。他に断面形状が隅丸の一辺３㎜の折り返した形状のものがあり、これを刺金の折り返し部分と考えれば、他の形式の小形の鉸具の存在も想定できる。

（責金具）（第43図）（写真図版43－191）

全体の形式が判明するものは確認できない。24は幅３㎜、厚さ１㎜、25は幅2.5㎜、厚さ１㎜の扁平な棒を折り曲げた形状である。楕円形にめぐると推定でき、その場合の内側の厚みは24が４㎜、25が３㎜である。辻金具や雲珠等に用いられた責金具の可能性がある。

また図化しなかったが、幅5.5㎜、厚さ1.5㎜の扁平な棒を折り曲げた形状のものも存在する。楕円形にめぐると推定でき、その場合の内側の厚みは９㎜である。刀子等に使用される責金具の可能性がある。

（その他）（第42図８）（写真図版44－192・193）

厚さ４㎜、幅13㎜以上の帯状の鉄板を曲げたものである。鋲芯径２㎜程度の鋲が１本確認できる。

・小結

轡については第42図６の縁金が第42図１～４・７の鏡板の縁金と異なることから、２セットの楕円形鏡板を持つ轡が存在していた可能性が考えられる。

半円形金具については、大きく３形式に分けられる。一つは第43図４に見られる様に、鋲が２本、鋲頭部の径が10㎜、長辺が33㎜の大形のもので、第43図５が同形式のものである。緑青が見られることから金銅装と推定できる。辻金具の脚部の可能性もある。二つ目は第43図１に見られるように、鋲頭部の径が５㎜で長辺27㎜、短辺21㎜のものである。第43図２・３も同形式と推定できる。三つ目は第44図４・６は短辺（幅）14～16㎜で３本の鋲を持つものである。雲珠の脚部の可能性がある。第43図8～10・11も小形のものに含まれよう。

方形金具は、大きく分けて５本の鋲を持つものと４本の鋲を持つものの２形式ある。前者は一辺26～27㎜、径５㎜の頭部の鋲を持ち、且つ鋲が５本残存するもので、第43図13～15が該当する。第43図16も大きさからこの形式に属する可能性がある。後者は第43図18に代表されるもので、長辺23㎜、短辺21㎜である。第44図１～３のものはやや第43図18より大きいが、金具の大きさ等が類似する。責金具等が残存しているため、雲珠か辻金具の脚としての用途を果たしていたと見られ、後者の４本鋲を持つ形式は雲珠に用いられた可能性もある。

また、その他の項で触れた第42図８は形状から壺鐙の縁金具の可能性も指摘できる。

以上のことから、轡が２セット、円形金具３形式、方形金具２形式が見られる。革帯の飾金具として用いられた金具の可能性も指摘できるが、方形金具、円形金具とも責金具を癒着しているものがあることから、セット関係はともかく、轡、辻金具、雲珠を持ち、壺鐙を持つ１セットと、轡、辻金具、雲珠を持つもう１セットの計２セットの馬具が存在していた可能性も考えられる。

・刀類

（刀子）（第45図３・４）（写真図版45－196）

３は両関中細の頸部を持つ形式で関部分の幅は1.3㎝である。刃部幅は刃部を欠損しており不明であるが、断面形状から刃部の研ぎが顕著であると推定できる。４は刀身の残存する部分の幅が0.9㎝である。

（鉄刀）（第45図１・２）（写真図版45－196）

１は幅約2.5㎝で先端部付近が約16㎝残存している。厚みは0.9～1.3㎝である。木質と鉄錆が癒着して必ずしも明瞭ではなく、ほぼ鋒部分まで残存するが、やや欠損していると推定できる。鞘部分の木質は刃部長の方向に併行して木目が残存する。刃部・背部もほぼ直線の直刀である。茎部まで残存しておらず、関部等は不明である。２は背部が残存するが、銹化のため刃部が剥離していて不明である。１と同一個体の可能性もあるが木質も遺存していない。

（鉄鏃）（第46図）（写真図版45－197～199）

６号墳出土の鉄鏃については、長頸鏃で片刃のもの（１～４・14・15）、長頸鏃で両刃のもの（16・17）、腸抉三角形鏃（19）、圭頭鏃（20）、の計４種類に分けられる。１・４は鏃身部が有関（角関）、２・３は無関のものである。５～７は頸部で台形関を呈する。８～13は茎部で９には木質部が遺存し、また11には樹皮巻痕、13にはわずかに樹皮のようなものが確認できる。14・15は片刃の鏃身部で刃部の形式は３と同形と考えられる。16は鏃身部。三角形で撫角、片丸造のものである。18は鏃身部と考えられるが、外形は三角形の様相を示すものの、断面は片刃造で厚みも他の片刃の鏃に比べて非常に薄い。そのため、鏃以外の可能性も指摘できる。19は小形の腸抉三角形鏃である。20は鏃身上部が欠損しているが、圭頭斧箭鏃と考えられる。小形で両角関を呈し、茎部には樹皮巻痕が残る。出土した長頸鏃のうち有関のものについては、すべて台形関を呈する。

出土した鏃のほとんどが破片であるため明確な形態を捉えることは難しいが、型式分類に有効なものから判断すると、６号墳に埋葬された鏃群についてはおおよそ５世紀後半～６世紀前半の時期を考えることができる。これは６・７号墳周辺出土の須恵器に比べてやや古い時期のものとなり、埋葬された鏃と周辺の須恵器にはやや時期差が生じる。鉄鏃の制作時期と副葬時期との差によるとも考えられるが、定かでない。

またこの時期は、長頸鏃が普及し長頸鏃＋広根鏃のセット、もしくは長頸鏃のみの副葬形態を有する時期であり、６号墳出土の鏃群もこの副葬形態にあたると考えられる。さらに鏃身部の形態がわかるものについて見ると、片刃のものが多く、後述する７号墳との鏃の副葬形態の違いを伺うことができる。いずれにせよ、６号墳築造の詳細な時期判定については総合的な評価を下す必要があるため、ここでの言明は避けたい。

・その他（第45図５・６）（写真図版45－196）

５（写真図版45－196）は袋部を持つもので両端が欠損しており形状は不明であるが、袋部と反対側は扁平に薄くなる形状から鉄斧もしくは鑿の可能性がある。６は錆化もひどく、先端部が欠損しているので詳細は不明であるが、鉄釘や鏨の可能性がある。断面隅丸方形で一辺約1.5㎝である。

他にも、鋲を持つと推定できる厚さ1.5㎜の半円形もしくは方形金具の破片も出土している。本来は６号墳石室内に存在していたものと推定できる。

・玉類（第47図）

（耳環）（写真図版51－215）

１は径約25㎜の細型で断面は楕円形を呈する耳環である。表面は黒く銹化しており銀製と思われるが、肉眼でも表面に細かい皺のようなものが観察でき、所々剥がれているようにも見えることから、芯材を金もし

くは銀で被覆した可能性も考えられる。しかし、細かい分析を行っていないため明確な判断に欠ける。２は径12㎜を測る金環であるが、非常に細環と言える。

一般的な耳環の大きさを径20㎜前後とすると（註１）、これに比べて２はやや小さい印象を受ける。この点を考えると、垂飾付耳飾の遊環部分としての機能も考えられるが、決定的な証拠に欠けており、あくまで可能性を示唆するにとどめておきたい。

（註１）辻村純代　「耳環考」　『古文化談叢』　第39集　九州古文化研究会（1997）

（ガラス小玉）（第47図３～24）（写真図版51－214・215）

径2.6～3.2㎜のものが５点、3.5～4.4㎜のものが12点、5.3～6.5㎜のものが５点出土している。色調は紺色、青色、水色、濃緑色、薄茶色があるが、紺色のものが最も多く、全体的にみて青色系統のものが多く出土している。出土状況に関して言えば、現場にて直接出土したものと、埋土洗浄によって確認したものがある。整理段階での埋土の洗浄では出土していない。紺色のものについてふれておくと、11・15・17の３点は質もよく丁寧なつくりと言える。これ以外のものは同じ材質で成形されていると考えられるが、表面に凹凸が見られたり気泡が風化して空洞化していることから、良質とは言い難い。形状については小口面の調整の違いでいくつかに分けられ、①孔まわりを磨いており顕著な平坦面を有するもの（７・15・19・20・22・23）、②孔まわりを磨いているもの（３・５・６・11・12・17・18・21・24）、③孔まわりを磨いていないが平坦面を有するもの（４・8～10・13・14・16）の３つに大別できる。

これら玉類の成形技法についての詳細は不明だが、孔に平行する気泡の列や筋・長くのびた気泡などを確認できるものが多く、引き延ばし技法による成形の可能性が最も考えやすいと思われる。また、第47図３は09SD（２号墳周溝）からの出土であるが、６号墳が激しい撹乱を受けていることと09SDと６号墳の位置関係からみて、６号墳が撹乱を受けた際に流れ込んだものではないかと考える。

⑤その他（第15図）

石障の前壁から羨道に向かって約1.3mの所に左側幅約0.9m、長さ約0.2m、右側幅約0.8m、長さ約0.6mの石材等の抜き取り痕跡を検出した。複室構造の石室の袖石とも考えられるが、前室の法量は主軸の長さが約1.4m、幅約1.3mと小規模で、他の側壁の石材の抜き取り痕跡は検出していないことから断定はできない。

⑷　羨道及び墓道（04SK）（第17図）（写真図版16・34）

①構造

天井部の構造や側壁の抜き取り痕等が確認できなかったため、羨道と墓道の明確な判断はできない。また、南西側は開墾により段落ちしている（第13・15・17図）。

掘り方は羨門部から幅約１m、長さ0.5m程直線的に伸びるがその後ハの字に開き、南西方向に開口している（第17図）。また、安山岩の板石や塊石が積み重なった状態で出土し、閉塞石が壊れて流れ込んでいると考えられる。周囲には後世の削平を受け、石材片が散乱していた。遺構の性格としては、検出時に石材が散乱していたことと、６号墳を切るように検出されたことから、当初は羨道部の撹乱であると考えられていた。しかし、石材の積み重なり方や下場の様子をみると、１・２層と３層では違いがある。１・２層は暗褐色で類似した埋土であるが、３層は褐色の埋土でまったく違う。また石材は１・２層では崩れたように出土しているが、３層の石材は羨門から南西方向に並んで出土している。掘り方の下場も３層の石材に沿っていることから、04SKの下場と考えられる。以上のことより、撹乱を受けているのは１・２層のみで、３層から下については６号墳の排水溝（暗渠）が遺存している可能性がある（04SK）。また04SKの入り口から石室内へは、床面が緩やかに上がっており、１・２層より構成されるこれらの面が、排水溝の埋没したのちの羨道および墓道である可能性も考えられる。

②遺物（第40図）（写真図版34）

・土器

第40図１～７は04SK出土の土器群である。１は土師器甕（写真図版34－151）である。頸部の屈曲や口縁端部の稜は明瞭で、立ち上がりの角度は開かず、器壁はやや肥厚する。

またこの他に、須恵器短頸壺と須恵器坏身の完形（第40図４・７）が崩れて積み重なった塊石の最下層直上（転石と転石の間）で出土した。04SK上面と推定される。４の短頸壺（写真図版34－148）は、肩部がほぼ水平に横に張り出し胴部は扁平で、口縁部は内傾しながらも膨らまずに直線的に立ち上がる。また口縁部立ち上がりの外面には、横方向の手撫で調整後に、同方向の一条の工具痕、さらにその上の口縁端部から肩部にかけて、二条の松葉状の工具痕が認められ、ヘラ記号の可能性が考えられる。他に、肩部には蓋を被せた状態で焼いた痕跡が認められ、それより蓋の径は約8.8㎝と推定されるが、実際にそれと認められる遺物は出土していない。７の坏身（写真図版34－149）は口径11㎝、最大径13.2㎝を測る。立ち上がり端部内面に沈線を有せず、立ち上がりは短い。底部から受部への形態は直線的で、回転篦削りの範囲が狭いことなどが特徴づけられる。また立ち上がり部の外面には、ヘラによる鋸歯状の圧痕が三カ所認められる。規格性がなく文様とは異なり、制作段階についた偶発的な工具痕と考えられる。その他、底部にも二カ所の工具痕が認められるが、このうち一カ所は、底部の回転篦削りを終えた後に、伏せた状態で受部から底面、さらに受部へとU字に施されており意図性が高い。このことから、ヘラ記号の可能性が考えられる。もう一カ所は非常に線が浅いため意図性が低く、偶発的についた工具痕である可能性が高いので、ヘラ記号とは考えにくい。６は同じく須恵器の坏身であるが、残存状況が良好でなく断面のみの掲載に留めた。立ち上がりが欠損しており、極めて判断し難いが７よりは古い様相を呈する可能性が高い。５は高坏の脚部で、透かしが一カ所観察される。小型で端部の稜はさほど明確でない。３は小型土師器坏か甕の底部である。非常に小型で、祭祀的機能が考えられる。２は土師器坏もしくは高坏の坏部と考えられる。31SX出土の土師器高坏に類似するが、端部の内湾は比較的緩やかである。他にも04SKからは土師器片が多数出土しており、小片で実測には耐えないが、後世の流れ込みも含めて器種は多様である。

・小結

１の土師器甕は形態的特徴から、およそ５世紀以降の可能性も考えられるが、この一資料のみで他時期との明瞭な区別は付け難い。また、４の様な特徴をもつ短頸壺は、他の出土例をみても須恵器坏身、坏蓋に比べ相対的に出土数が少ないが、６世紀後半を中心とした前後の時期の須恵器群に伴う例が多い。７についてもその特徴から、中村編年のⅡ形式５段階古～新層、田辺編年のTK209型式に比定できる。しかし６の須恵器坏身は７より古相を呈し、興味深い。

出土遺物全体から判断すると、04SKの埋没する時期はおよそ６世紀末前後の可能性が考えられるが、資料数が少なく、また６号墳主体部と04SKの時期差や、04SK設置から埋没までの時間も鑑みて、あくまで参考に留めたい。また04SK出土の遺物は、器種が多様であるが、時期的な幅もやや広く、新相のものは04SKに係る遺物かもしくはそれ以降の流れ込み、古相のものは６号墳主体部からの流れ込みとも考えられるためセットとは考えにくく、参考資料にとどめたい。遺構の性格として６号墳の羨道及び墓道と推定していることから、原位置にあれば墓前祭祀の可能性が指摘できる。ただし６号墳主体部そのものの時期を考えるうえでは、鉄鏃、２の土師器坏、６の須恵器坏身、11SX出土の９の須恵器口縁端部も考慮すべき資料と考える。鉄鏃や２・６・９が主体部からの流れ込みとすれば、６号墳の時期を考えるうえで示唆的である。

⑸　まとめ

①　６号墳は撹乱を受けてほぼ破壊されており、古墳のまわりにも石材が散乱していた。しかし、６号墳を

構築していたほどの石材はなく、盗掘目的の撹乱というよりも、石材を抜きとる目的で受けた撹乱と考える方がよい。時期は、浅い撹乱坑（01SX）では近世の陶磁器が出土しており確定できるが、その他の撹乱坑がどの時代まで遡るかは確定できない。

② ６号墳と７号墳の切り合い関係は不明瞭であるが、７号墳が丘陵端部の狭小な地形に構築されていること、また７号墳の東側トレンチの断面に６号墳の周溝の可能性がある溝（第19図47～52層）が検出されていることから、６号墳が７号墳に先行する可能性が指摘できる。しかしながら、７号墳出土鉄鏃や須恵器等の様相、７号墳の周溝が２号墳周溝（09SD）と重複しない等の点から、6号墳が後出するとの見解も考えられ、今後のさらなる確認調査が必要である。

③ 石室構造としては、石障系の石室で奥壁に石棺等があった可能性がある。断定するには根拠に乏しいが、複室構造の石室の可能性も考えられる。

④ ６号墳の墓道ないし羨道部についても、石材が積み重なった状態で出土しているので、当初は撹乱によって閉塞部分が破壊され崩れたと考えていたが、埋土の状況と石材の出土状況からみると、上部のみが撹乱によって破壊されており、下部は当時の状態を留めていたと考えたほうが自然である。３層目（04SK）の石材の出土状況をみると断定はできないが、排水溝の可能性が考えられる。

⑤ 出土馬具のうち、轡は鉄製楕円形鏡板を持つ古式馬具のセットの次段階型式と考えられるため、TK23型式～TK10型式段階頃までの時期が想定できる。また鏃類からもほぼ同時期があてられ、６号墳主体部の時期を考えるうえで重要である。

⑥ ７号墳墳丘南東裾で取り上げられた土器群を周溝上層の出土遺物と考えるならば、土器から見て６号墳の築造時期の下限はMT15～TK10型式併行期と考えられる。

⑦ 羨道部もしくは墓道出土遺物の年代は、坏がTK43～209型式併行期と考えられるので、その時期まで追葬もしくは葬送儀礼が行われていた可能性がある。

⑧ 出土した金環は、金製で且つ小形であることから、垂飾付耳飾の一部である可能性も考えられる。

７．７号墳（第７・18～32・52～58図）（写真図版17～24・39・46～50・52）

⑴ 墳丘

尾根部を切断する幅約３mの周溝が東側に見られることと、墳丘南西部の縦断トレンチの盛土層からみて、墳丘の規模は直径約９mで且つ円墳であると推測される。

６号墳が築造された立地は旧地形からみると、尾根部一支脈の先端にあったと推測される。７号墳は造墓の空間が制約されたことから、丘陵突端に６号墳墳丘を一部壊すかたちで墳丘を築いた可能性が考えられる。また７号墳が６号墳の後に築かれたことは、７号墳周溝位置を６号墳墳丘推定範囲より内側で検出していることと、７号墳周溝の下場が７号墳側より６号墳墳丘側の方が狭く急になっていることからも推測できる。

一方、６号墳の周溝が２号墳周溝を共有するもしくは一部改変する等、地形的に制約されている面もあり、丘陵突端に７号墳が存在すること等を重視すれば、６号墳より先行する考え方もできる。

６号墳と７号墳の周溝や墳丘は重複する位置関係ではあるが、残念ながら切り合いは確認できていない。古墳群の変遷を考えるうえで今後の詳細な確認調査が必要である。

墳丘の構築方法は、尾根の先端の部分に盛土を行っており、石室の底面から盛土による墳丘構築である。厚さ15～20㎝の単位で盛土しているが、７号墳築造以前にも箱式石棺（32SX）等を構築する際の盛土による整地が見られる。大きな作業単位は、地山を掘削して斜面に盛土をする平坦面形成が第１段階で、これは32SX（箱式石棺）を構築する際の基盤層となる（第19図）。第２段階は、同図第48・49層の溝を掘削する面である。第48・49層を６号墳周溝と考えるなら６号墳築造時の盛土、７号墳墳丘内暗渠と考えるなら７号墳

築造の第１段階となる。その後は墳丘を平坦にしながら積んでいる様子が伺え、少なくとも２段階以上にわたって平坦形成を行っていると考えられる。

⑵　石室構造

現状の墳丘上面に掘り方を検出したことから、尾根上の斜面地を盛土しながら整地し、現状の墳丘状に盛土した後、石室の掘り方を掘削していると見られる。その後は石材を積み上げ、土を裏込めする作業を少なくとも３段階以上に分けながら行っている状況が土層より観察できる（第19～21図）（写真図版22～24）。

①玄室

・構造

玄室の法量は主軸の長さが2.2m、玄門側の幅0.6m、奥壁側の幅0.75mを測る狭長な石室である。高さは残存状況が最も良い箇所で1.1mを測る。石室の構築方法は基底石に腰石を用い、上部は割石小口積みによるもので、わずかに持ち送り構造を呈している（第20図）。石材は玄武岩質安山岩である。

腰石の大きさは高さ約40㎝（床面より20㎝程度）、幅約80㎝である。また割石は厚さ約５～15㎝、奥行き約10～50㎝、小口面の幅10～25㎝程度のものがあり、板石状の石材は厚さ約５～10㎝、幅約５～65㎝が確認できた。床面の左側壁はほぼ直角を呈するが、腰石の上位よりコーナーを作り出して（穹窿状に持ち送り技法を用）いる。奥壁の腰石に直結する左側壁は板石に近い石で厚みがあまりない。

この板石とみられる石材はベンガラの残りが最も良く、周囲の石材の一部にも確認できた。玄室内壁は一面にベンガラが塗布されていたと推定できる。

石室は長年の土圧により北西側に傾き、腰石は僅かに内側へ倒れこんでいる。袖部は土圧により一見、片袖の形状を呈しているが、袖部に相当する部分に玄門立柱石があることから、両袖式の石室であると考えられる（第21図）。

②横口（玄門）部

横口部の高さは右側の立柱石が約55㎝、左側の立柱石が約70㎝を測り、上部に割石が積まれる。残存する玄門部の高さは左側袖部が約80㎝、右側袖部が約70㎝を測り、ほぼ閉塞石の高さまで遺存する。玄門上部の幅は34㎝、下部の幅は58㎝と狭い。また横口（玄門）部で確認できる框石は長さ約50㎝、幅約20㎝を測り、床面を掘りこんで据えている（第20～23図）。

・構築方法

第22図を見ると、奥壁右側から手前前庭（横口）部の方に向かって構築していったと考えられる。

③前庭部

・構造

玄門（横口）部には、長さ約0.8mの前庭部が連設する。玄門部において高さ約85㎝、幅約60㎝、厚さ4㎝の板石により閉塞され、約20～30㎝の転石が積まれて補填されている（第21・23～25図）。

天井部の構造は、玄室部において残存する最上位の高さを築造当初の天井高と想定すると、閉塞石の高さと残存する袖部の上位の高さは、玄室高に比べて一段低いことから、楣石が構架されていたとも考えられる。また前庭側壁は、左側壁下部の幅約45㎝、高さ20㎝の転石と、サブトレンチにかかっている転石等を基底石に据えて、やや丸みを帯びた転石を積み、その上部は割石積みになっている。サブトレンチには裏込めの石材等が確認できず、玄室の側壁に比べるとやや粗雑な積み方と言える。右側壁も同様に高さ15㎝の基底石を据えて中間に割石を挟み、転石を上部に積んでいる。左側壁とは若干積み方が異なっており、前庭右側壁も玄室側壁に比べやや粗雑な造りである。さらに、左側壁には高さ約80㎝、幅35㎝、厚さ10～15㎝、右側壁には高さ約60㎝、幅約40㎝、厚さ約20㎝の縦長の板石材を立てている。立石を取り除いた後の石材の有無に着

目すると、左側壁の立石は前庭側壁に組み込まれているのに対し、右側壁の立石は側壁との間に土があり、前庭側壁に完全には組み込まれていない。

また前庭部の上、ちょうど閉塞石の上には幅30㎝、厚さ15㎝、長さ1.4mの石材が出土している（第20図赤色ライン）(写真図版17－74)。天井石の可能性があるが、前庭側壁には接さず、いくらか移動しているものと思われる。

④その他

前庭部に天井石が構架されていたかどうかが問題である。閉塞石の状況や前庭側壁の内側に立石があることから見ると、天井石が高架されていた可能性も考えられるが、左側壁の石材の積み方で天井石を支えられたかは疑問である。

また、前庭部側壁の立石が右側壁の内側にあることも注目すべき点である。前庭側壁が造り替えられているとすれば、追葬等の可能性も考えられる。

前庭部の開口方向は南西方向であり、墓道はやや右側に曲がりほぼ南側に伸びている。現状では前庭部から玄室にかけて床面が緩やかに上がり、前庭部の横断面はU字形を呈する。ところが、前庭側壁の基底石のレベルを見ると、基底石より前庭部床面が25㎝以上下がっている。このことから前庭側壁の基底石を据える段階では、前庭部の床面は基底石の底部よりやや上部にあったとも考えられ、床面は前庭部から玄室まで平坦であった可能性が指摘できる。

⑶　遺物

①墳丘崖下

・出土状況

７号墳は主体部から土器は出土していない。墳丘南西側の斜面からは土師器片、須恵器片が合わせてビニール２袋分ほど出土しているが、小片で実測に耐えない。他に墳丘北西部側の崖下から須恵器大甕が１点出土しており、第52図１に掲載した。

・遺物

甕（第52図１）(写真図版39）の最大径は残存部でも約80㎝を測り、本来の最大胴部は１mを超えたと考えられる。外面のタタキは丁寧で、底部はやや窪んだ平底である。器壁も胴部から底部までほぼ一定の厚さで比較的薄く、技術的水準は比較的高い。後世の墳丘削平時、もしくは斜面の土砂崩れにともなって崖下に落下したものと考えられ、時期的な判断は付け難いが、７号墳の墳丘に伴っていた可能性は高い。

②石室内

・出土状況

石室内取り上げの土層を見ると、埋土はⅤ（第26・29図)・Ⅵ－１（第27・30図)・Ⅵ－２（第28・31図）層に分けられ、大多数の遺物はⅤ層から出土している。鉄刀より奥壁側に碧玉製管玉９点、ガラス小玉３点、耳環１点、釧１点、刀１点、刀子４点以上、長頸鏃25点以上、馬具〈環状鏡板付轡（二連式の銜、引手付)〉１点、環状雲珠１点が出土した。

まずは、Ⅴ層の遺物の分布を見てみる（第26・29図)。刀子は右側壁の奥壁から65㎝程の地点より２点、玉類は奥壁から10㎝の所より管玉２点、同じく奥壁から65㎝程の地点（中軸付近）よりその他の管玉、ガラス小玉類が集中して出土している。馬具類は右側壁から10～20㎝、奥から85㎝離れた付近を中心に分布している。耳環、釧類も馬具類とほぼ同位置で出土している。

鉄鏃の出土状況を見てみると、第32図から見て長頸鏃は出土方向が一定でない。また、最大約70㎝離れて接合しているものもあることから、広範囲に撹乱を受けているように見える。ただしⅤ層の鉄鏃の出土状況

からは、分布の集中地点が大きく分けて２箇所に集中している傾向も伺える。１つの分布の中心は奥壁から30～50㎝で中軸よりやや右側壁寄り、もう１つの中心は奥壁から60～90㎝の左側壁付近の部分である。こうしてみると、鉄鏃刃部の不定方向の出土や接合状況から撹乱されて原位置を留めていないのは明らかであるが、遺物の種類によって偏在していることがわかり、各々の本来の埋設位置を端的に示している可能性も考えられる。

次にⅥ－１層の出土状況を見てみる（第27・30図）。まず、閉塞石より奥壁側に向かい、約1.45mの位置において、主軸に直交するかたちで鉄刀が検出されている。当初の床面をⅥ－２層とすると、鉄刀は床面から少し浮いて検出されたことになる。埋葬を前提にすると奥壁から85㎝、框石まで1.3mのところに直交しており、当初の埋葬の原位置は保っていないと考えられる。追葬に関しては、土層堆積状況からの判断はできない。ただし、鉄刀が層位を変えて２振出土している。

・遺物

・馬具（第53図）

（轡）（写真図版46）

１は環状鏡板付轡である。完存している鏡板の形状は、外縁の長径8.9㎝、短径7.1㎝の偏円である。欠損している鏡板の外縁の現存長径は7.9㎝で、やや正円に近い。銜の断面は隅丸方形で径１㎝である。環状鏡板に兵庫鎖をつなぐ形式の立聞部を持つ。鏡板の一方で断面径0.45㎝の隅丸方形の兵庫鎖が確認できるが、一部欠損しており単連か複連かは不明である。環が完存している方の鏡板では、兵庫鎖が完全に欠損していると考えられる。銜の環は外縁径約2.1㎝の隅丸板状で、長さは一連が10.2㎝である。また完存する鏡板には、別造り壺付引手が連なる。長さ14㎝の両端に外縁径2.1㎝の環を持ち、さらに断面0.9㎝の隅丸方形を呈する壺状の環があり、その上部には外縁径2.6㎝の環を持つ。小環銜の二連銜で小遊環等を持たず、引手・銜を別に連結している。

（雲珠）（写真図版47－202）

６は環状雲珠である。平面形は円形に近いが、三方が長さ3.1～3.7㎝くらいで緩やかな面を持つ。他の面も緩やかな面を持つようにも観察できるが明瞭でない。断面形は厚さ0.5㎝、幅1.1㎝の板状である。３～５は雲珠の金具である。詳細は以下に述べる。

（半円形及び方形金具）（写真図版47－202）

雲珠等の脚（座金具）等になる金具類が３点出土している。

３は径５㎜の頭部の鋲を持つもので芯径は約２㎜である。平面形は長辺15㎜、短辺の最大幅14㎜の半円形（一方の端部がU字状）である。幅３㎜の責金具が癒着している。５もほぼ同形式のもので、径６㎜の頭部の鋲を持ち、芯径は約２㎜である。平面形は側辺部がやや欠損しているが、長辺16㎜、短辺の最大幅14㎜のやや半円形（一方の端部がU字状）を呈するものである。３よりも端部が緩やかな曲線である。幅３㎜の責金具を装着していたと見られる痕跡が観察できる。４は方形に近い形状で長辺15㎜、短辺の最大幅14㎜である。径７㎜の頭部の鋲を持つもので芯径は約２㎜である。

以上３点は責金具の痕跡や法量等から第53図６の環状雲珠の脚部（座金具）と推定できる。

（鉸具）（写真図版47－203）

７は径６㎜のやや隅丸円形の鉄棒をU字状に折り曲げたもので、鉸具の一部と推定できる。さらに径５㎜の棒が２㎝程の長さで緩やかに曲がった状態で癒着している。いずれも鉸具の一部と推定できる。錆で癒着した状態で実測図を提示したが、本来の位置関係を保っていないと考えられる。

９は鉸具の輪金との接合部と推定できる。輪金は径２㎜の円形で、接合しているもう一方の径は３㎜である。また断面の径からみて、６号墳から出土している第44図７の鉸具等よりも小形の鉸具と推定できる。

（その他）（写真図版47－203）

２は７号墳石室周辺で検出した不明鉄片である。やや湾曲しており、全体の形状は不明瞭であるが、一部確認できる端部から杏葉等の可能性も考えられる。

・刀類（第54図）

（直刀）（写真図版48－205・206）

１は全長61.3㎝以上を測る（写真図版48－205）。刀身部54㎝以上、茎部7.3㎝以上である。刀身部の最大厚は先端部で0.6㎝、茎部付近で1.1㎝ある。刀身部幅は、先端部付近の顕著に屈曲している部分直前の幅が2.4㎝、刀身基部付近が2.8㎝ある。刀身及び茎部表面に、部分的に刃部長方向に平行に鞘の木質が残存する。関部の形状は明瞭ではないが、残存状況からは片関で斜角であると考えられる。茎部は中細である。径0.3～0.4㎝の目釘穴が１つ残存する。目釘穴の位置から茎尻の形状は欠損していると推定できるが、若干観察できるので栗尻（端部が曲線）の可能性が高い。２は刀身部で全長14.9㎝以上である（写真図版48－206）。刀身部の最大厚は先端に近く断面を計測できる箇所で0.9㎝、茎部側で1.2㎝ある。刀身部幅は先端部付近の顕著に屈曲している部分直前の幅が2.35㎝、刀身基部付近が2.6㎝である。刀身部表面に部分的に刃部長方向に鞘の木質が残存する。

残存状況から１・２は別個体で直刀（大刀）は２振副葬されていたと推定できる。

（刀子）（写真図版47－204）

４は茎部と刀身部の一部である。茎部は刃部長の方向に沿って木質が残存する。長さは3.5㎝である。刃部は片方の関が不明瞭であることから見て、ある程度使いこまれていると推測できる。茎部が細くなっており、栗尻である。５は完形である。刃部長6.5㎝、茎部長4.4㎝である。刃部の厚さは茎部付近で0.5㎝、幅1.3㎝を測る。両関であるが、刃部は使いこまれている。茎部の最大厚は0.4㎝で茎尻は0.2㎝まで薄くなる。茎部には刃部幅方向に木質部が残存するが、一面の刃部側1.5㎝程に刃部長と平行に木質が残存する。柄の部分が一部補修されたことも推定できる。

６・７は環頭刀子である。いずれも先端部付近が欠損している。６は刃部長８㎝以上、刃部基部付近の厚みは0.5㎝で幅1.5㎝を測る。環頭部の厚みも0.5㎝である。環頭部は欠損していて詳細は不明であるが緩やかに屈曲する。７は刃部基部付近の厚みが0.5㎝で幅1.6㎝を測る。環頭部の幅も0.5㎝であるが、厚みが欠損部分で0.7㎝とやや厚みを増す。環頭部は欠損していて詳細は不明であるが屈曲具合は６よりも急である。しかし若干の差はあるものの６・７は同一形式と推定できる。

・鉄鏃（第55～57・48図・表2）

（第55～57図）

７号墳からは確実に認められるもので25本の鉄鏃が出土しており、すべて長頸鏃である。鏃の大きさについては、現存する頸部の長さが９～10㎝のものを大形、８～９㎝のものを中形、６～７㎝のものを小形として３つに分けることができ、鏃身部の形態（外形・関部・断面形）によってさらに細かく分けることができる。第55図１～12は大形（写真図版49－207・208）、第56図１～８は中形（写真図版49－209）、第56図10～14は小形（写真図版49－210）である。第56図９及び第57図１～14については、破片のため大きさの判別は難しい（写真図版50－211・212）。

第55図１・５は鏃身部が欠損しており詳しい形態は不明だが、５は両角関を呈する。第55図２～４は鏃身部が三角形で両角関、両丸造である。第55図６～８、12は鏃身部が長三角形で両角関、片丸造である。第55図９は鏃身部が長三角形で斜め角、片丸造である。第55図10・11は鏃身部が長三角形で撫角、片丸造である。

第56図１・６は鏃身部が三角形で両角関、両丸造である。第56図２は両角関で両丸造のものであり、三角形か長三角形を呈すると思われる。第56図７・８・10は鏃身部が三角形で両角関、片丸造である。第56図３

は鏃身部が長三角形、第56図13は幅広の三角形で撫角、片丸造である。第56図11は鏃身部が三角形で両角関、片丸造である。第56図12は鏃身部が三角形で斜め関、片丸造である。第56図14は鏃身部が三角形で関部がなく、片丸造のものである。第56図４・５・９は頸部で詳細は不明であるが、第56図４・５については茎部の残存部分の法量からみて、大形鏃になり得る可能性も考えられる。

第57図１・４・５は鏃身部が三角形で両角関、両丸造である。第57図２は鏃身部が三角形で両角関、片丸造である。第57図３は鏃身部が三角形で両角関を呈する。第57図６は鏃身部が三角形で、他の鏃と比べて特異な形態を示す。第57図７は鏃身部で断面は両丸造だが、その他の形態は不明である。第57図８は鏃身部と考えられ、断面は片丸造を呈する。第57図９は頸部、第57図10～14は茎部である。第57図13はわずかに木質部が残る。また、７号墳出土鏃のうち有関のものについては、すべて台形関を呈する。

（第48図）

７号墳と他の遺構からの出土とで接合し同一個体となった鏃であるが、５点すべてが長頸鏃である（写真図版50－213）。１・２は鏃身部が三角形で両角関を呈し、１は片丸造、２は両丸造である。３は先端が欠損しているが、鏃身部が長三角形で有片逆刺のものと考えられ、刃部から続いて片逆刺状のものをつくる。鏃身関は角関を呈する。４は頸部である。５は鏃身部であるが、刃部が先端に僅かしか認められない特異な形態を示す。

第48図掲載の鏃が、それぞれいずれの遺構に係るものかは断定し難いが、どの資料も一部が７号墳床面に近い鉄片と接合していることから、撹乱の影響を考慮しても、元は７号墳に係る遺物であった可能性が高い。

（７号墳出土長頸鏃の法量分類）

７号墳から出土した長頸鏃は、刃部から茎部まで残存するものを概観した場合、大形、中形、小形のおよそ3つのタイプに分けることができると考えられる。そこでこれら３つのタイプの明確な基準を導き出すために、残存率の高い鏃を抽出し、比較可能な部位に限って、それぞれの法量比率をグラフ化した。つまり第55～57図掲載の鉄鏃は、いずれも刃部の長さ・厚さ、頸部の長さ・厚さ、頸部と茎部の境（関部）の厚さ、茎部の長さを計測し、一覧表にしているが（表３）、その中で上記の手順に則り、残存率の高い頸部の長さ、頸部の厚さ、関部の厚さに限ってそれぞれの固体別比率をグラフ化したものである。抽出した鏃は第55図掲載の鏃及び第56図掲載の１～３、７、８、10～13である。第56図４～６、９、14は数値計測の不能な箇所があるため省いている（註１）。

グラフから、頸部の長さと、頸部の厚さ及び関部の厚さは、比例して数値が大きくなることが分かる。また厚さにおける区分は明瞭でないが、頸部の長さからはその区分が試みられよう。

まず、小形と考えられる鏃のグループである。第56図10～13に掲載したこれらの鏃は、頸部の長さが６～７㎝、頸部厚2.5～４㎝、関部厚３～4.5㎝と比較的まとまりのあるグループである。この点のみに着目すると小形に関しては、法量におおよそ一定の基準が存在する可能性も指摘できるが、刃部の形状や頸部の幅等にばらつきがみられることから、大形や中形からの造り替えが含まれる可能性も考えられる。

中形と考えられる鏃は、第56図７、８掲載の資料があげられる。また第56図１～３は大形との区別がつけ難く、第55図12も中形の可能性が指摘できるが、刃部の長さや頸部の幅ならびに厚さなどを加味して、それぞれ中形、大形に区分した。グラフが煩雑になるため省略したが、これら刃部の長さや頸部の幅といった要素も、小形から大形までの法量と相関関係にあると考えられ、判断基準に補足的に用いることができる。また別の観点から、第56図７、８を小形Ⅰ、もとの小形鏃を小形Ⅱとして区分し、第55図12と第56図１～３を大形Ⅱ、もとの大形鏃を大形Ⅰとすることで中形の部類を省略することもできるが、今回は細部の特徴を考慮して中形鏃の部類を設けることとする。

大形と考えられる鏃は、関部の厚さにばらつきが見られるものの、頸部の長さはおよそ10㎝弱、厚さ４～

５㎝に集中し、グループ化が可能である。

以上の考察から、頸部の長さを基準として、大形鏃９㎝前後～10㎝前後（第55図)、中形鏃８㎝以上～９㎝前後（第56図１～８)、小形鏃６～８㎝未満（第56図９～14）の三つに分けて掲載している。中形鏃に関しては既に述べたようなことから、例外もやや見受けられるが、総合的判断から区分している。

（註１）第55、56図掲載の鏃は、法量の比率から導き出された基準に従って分類し掲載している。第56図４、５、６、９、14は欠損部が多く分類しづらいが、残存部から最低で考えられる部類に分けている。

（７号墳出土長頸鏃の一般的な法量比較）

城ヶ辻７号墳から出土した長頸鏃について、今回、個々の法量をもとにして任意に大形、中形、小形の三区分を設定したが、これらの鏃群が一般的に体系化されている長頸鏃類の中で、どのような位置づけにあるかを概観してみたい。ただし体系化されている長頸鏃群は、鏃身や関の形態など、様々な要素も含み多様であるため、形態によって個々に細分された中での大きさによる細かな区分はみられても、大枠での大、中、小といった区分は設けられていない。よって今回城ヶ辻古墳群で区分した大形、中形、小形の鏃群が、一般的に大枠でいずれの大きさにあてはまるかという検証は困難であることを断っておきたい。

また、重量に関しては樹脂含浸の有無や、鉄器の酸化の度合いによる樹脂浸透の比率、処理の程度によって差異が生じるため、一概に本遺跡出土の鏃類を他の出土鉄器と比較するのは好ましくないが、現段階の結果として、これまで先学において調査された鏃類の成果と照らし合わせた見解を記したい（註１)。

まず７号墳から出土した長頸鏃で最も特徴的であるのは、大半を占める大形鏃の存在で、一般的に体系化された長頸鏃類の中で比較しても、頸部が厚く、鏃長・鏃身長・幅も長い部類に入るという特徴がある。

長頸鏃類に分類される鉄鏃で大形のものの法量（註２）は、頸部が８～10㎝、重量は20～25g、台形関を呈する三角および長三角形鏃群である。これらの鏃は、長頸鏃が出現すると考えられる５世紀前半から、長頸鏃が最も普及する５世紀後半の時期の中でも、５世紀半ばの比較的早い段階に見られるやや重厚な造りの鏃群である。これらと比較すると、城ヶ辻７号墳の大形鏃は頸部が９～10㎝、重量が平均22.5gで、すべて台形関を呈し、三角ないし長三角形の鏃身である。刃部と頸部の幅比率や厚さ、また全て長頸鏃で構成される点、５世紀後半代の長頸鏃類と比較しても重厚である点等、特徴を詳しく観察してもこれらの鏃群は先に述べたような鏃類の時期に比定できる可能性が考えられる。時期的にみても、７号墳墳丘上で検出された31SX出土の土師器群から導き出される時期とほぼ同じか、やや古い時期があてられよう。しかし詳細は６号墳等との兼ね合いもあり、またこれほど重厚な造りの鏃群は県下でもほとんど類例がなく判断が難しいためここでの断定は避け後に述べることとして、大形長頸鏃の形状のみでの考察は上記のとおりである。

次に城ヶ辻7号墳出土の中形鏃であるが、頸部長は８～９㎝前後、重量は平均15.775g。頸部はやや薄く、台形関が大半を占め、鏃身部は大形鏃に比べて短く、三角形のものが多い。これらの形態の長頸鏃は、一般に三角長頸鏃類に分類されるものの中でも、頸部長が８～10㎝、重量が10～20g前後のものに比定でき、さらに大半が台形関を呈するという特徴も同じである。しかし、長頸鏃全体の中で、これらが中形という明確な区分はなく、むしろ長頸鏃の中では、一般的な法量であるとも言える。出土する時期も、長頸鏃が最も普及する５世紀半ば前半から長頸鏃と広根鏃がセットをなす６世紀後半まで継続して見られ、大半は重厚な造りの大形鏃が軽量化する時期のものである可能性が考えられる。

城ヶ辻７号墳出土の小形鏃は、頸部長が６～８㎝、重量が平均9.26gで、頸部厚は一様でなく、鏃身部も三角と長三角のものがあり、押しなべて比較しがたい。一般的には頸部長が５～７㎝の長頸鏃に近いが、これらの出土時期は５世紀前半から６世紀後半と長期にわたって継続的であり、初期のものは“祖形”、後出のものは“軽量化”として表現され、小形としての明確な区分はない。また重量についても15～20gのものが多く、体系的な枠にあてはめるのが困難である。ただし“祖形”の一つとされる長頸鏃は、鏃身部幅が頸

部幅に対して広く、頸部幅そのものも８㎜前後と広い傾向にあり、第56図10～14に掲載した城ヶ辻７号墳出土の小形鏃はその可能性が考えられる。

（註１）樹脂含浸や錆化度による重量変化に関しては、保存科学の分野から今後の成果に随して、ご教示を賜りたい。

（註２）長頸鏃で最も大形のものでは、逆刺のある長頸鏃に重量が30g前後で、鏃長も最も長い部類に分けられるものがある。

（７号墳長頸鏃出土本数推定算出）

７号墳からは残存率の良いもので少なくとも25本相当の鏃が出土しており（第56図９を除く）、大きく大形、中形、小形の３つに分類できる。中形と小形の区別については曖昧で正確さに欠けるが、頸部の長さをもとに10～９㎝のものを大形、９～８㎝のものを中形、８～６㎝のものを小形とした。今回これ以外に出土した鏃片などもふまえ、７号墳に埋葬された鏃の推定本数の算出を試みた。算出方法は以下の通りで、①から④の手順で行った。

①基準となる重量×出土本数＝平均総重量

②総重量－平均総重量＝不足重量

③図化した鏃片の重量（55.3g）＋図化していない鏃片の重量（50.3g）＝鏃片の総重量

④鏃片の総重量－大・中・小の不足重量の合計＝残量

	基　準（g）	出土数(本)	平均総重量(g)	総重量(g)	不足重量(g)
大形	22.5　（註５）	14	315.0	244.1	70.9
中形	15.775（註１）	6	94.65	69.7	24.95
小形	9.26　（註２）	5	46.3	46.3	0

大形鏃の出土数については第55図のものに加え、中形鏃として掲載している第56図の４・５についても、今回の算出に関しては大形鏃として扱っている（註３）。また③の図化した鏃片とは第56図９、第57図のものを対象としている。なお、基準となる鏃の重量は大、中、小形のそれぞれにおいて完形を用いている。詳しくは脚注を参照されたい。

上記の方法にそれぞれ数値をあてはめた結果、最終的な残量9.75gが算出できた。この数値から小形鏃１本分の重量を見出すことができ、この結果から少なくとも７号墳全体で計26本以上の鏃が埋葬された可能性を推測することができる。

（註１）中形鏃を更に大小に分類し、大の基準として13.7gと12.6gのものを使用した。しかしこれらも茎部が欠損しており、破片から最低でも茎部のみで4.0gを測ることが可能と推測したため前述の数値にそれぞれ＋4.0gし、２つの平均を17.15gとした。更に小については14.4gのものを基準とした。この２種類の数値から中形鏃の基準を15.775gとした。

（註２）小形鏃と考える完形品（第56図10）の重量は9.2gであるが、欠損している鏃でもこれより重量の重いものがあるため、これを基準にはせず算出した平均を基準としたうえで、小形鏃に関しては不足重量を０と考えた。

（註３）欠損しているため中形か大形か明確には判別できないが、少なくとも中形以上の鏃であると判断した上で図版および法量分類においては中形とし、今回の出土本数推定算出に関しては大形とすることであくまで最低ラインでの評価に留めることとした。

（註４）各鏃の重量については観察表を参照。

（註５）大形鏃の基準は第55図６である。

・小結

７号墳出土の鏃群については、形態的特徴に着目するとやや時期幅があるように思われる。大形鏃の中でも特に20gを超える重量の重いものは５世紀半ば、小形鏃に関して言えば、５世紀前半に盛行するものと考えられ、これはいわゆる典型的長頸鏃が中心の組成になる時期に相当する。

また、その他の出土鏃については５世紀中頃後半～６世紀前半にかけてのものと考えられ、長頸鏃が鉄鏃組成の主体をなす時期のものと言える。つまり７号墳において形態による分類を行えば、６号墳出土の鏃群を挟んでその前後の時期のものが出土していることになる。

これをそのまま古墳の築造時期におきかえた場合、７号墳の築造の後６号墳の築造、さらに７号墳の追葬という推測ができる。しかしこの見解は、立地や周溝の切り合いから考えられる６、７号墳の前後関係とは矛盾しており、時期差というよりもセット関係である可能性が指摘できる。また鉄鏃の使用期間を重視すれば制作時期と副葬時期の差を十分に考慮する必要があり、いずれにせよ現段階において鏃類から導かれる時期を７号墳の築造時期に置き換えることは好ましくない。

また７号墳出土鏃のこうした状況から、仮に追葬等の可能性が考えられるとしても、同じ形式によって出土位置に偏りがあるといった様相は見られず、鏃形式の時期差に関する見解を出土状況から見出すことは難しい。また出土比率を計算した場合、第55図の大形長頸鏃群を完形と推定すると、20gを超えるものが大半であり、また形態的な特徴からもこれらを古相と考えることができ、前記のとおり第56図10～14の小形鏃も古相に含めると、古相の鏃は推定算出本数26本のうち17本、比率では約７割を占める。これ以外の３割が追葬による新相の鏃群か、古相の鏃とセットをなす同一時期のものかについては比率からも考察し難い。

７号墳は撹乱を受けているものの、長頸鏃の出土量としてはまとまった量である。特に大形鏃に関しては長頸鏃の初期的特徴がうかがえ、全体の約半数を占める。このような重厚な造りの長頸鏃は県下でも出土例が極めて少なく、形態的特徴のみでの考察であるため客観的判断が困難であるが、長頸鏃の体系的編年研究において非常に貴重な資料と考えられる。今後は資料数の増加を待って長頸鏃の考察を深めたい。

・玉類

（釧）（第58図１）（写真図版52－216）

径5.2㎝で、幅0.45㎝、厚さ0.3㎝の鉄板を環状にした、断面が長方形を呈する釧の可能性が考えられる。奥壁から約65㎝、右側壁から約20㎝の地点で出土し、付近では刀子も出土している。土圧による歪みが生じ先端も欠損していることから、本来の径はこれよりも若干広がると推測されるが、こういった点を考慮しても、一般的なものが径７㎝前後とすると（註１）今回出土したものは小型といえる。

（註１）東中川忠美　『久保泉丸山遺跡』（上巻）　佐賀県教育委員会　1986

（耳環）（第58図２）（写真図版52－217）

径約1.3㎝の銀製の耳環で細型のものである。表面は銹化が進んで一部黒くなっているが、光沢がある。６号墳出土の耳環同様に表面が剥がれ落ちているが、６号墳のものに比べてその度合いがひどい印象を受ける。表面を金もしくは銀で被覆したものとも考えられるが、細かい分析を行っていないため判断に欠ける。奥壁から約80㎝、右側壁から約15㎝付近で出土している。

片面には所々にベンガラが付着しているのが確認でき、これは遺体の骨化が進んで耳環が落下した際に付いたものという可能性が考えられる。しかし出土位置から埋葬位置を推定することはできない。

（ガラス小玉）（第58図３～５）（写真図版52－217）

径8.8・7.4・4.1㎜のものが計３点出土している。色調は紺色、水色を呈しすべてⅤ層からの出土である。現場にて直接出土したものと、埋土洗浄による出土がある。しかし、整理段階における埋土洗浄では確認で

きていない。３点ともに平坦面が顕著で、丁寧なつくりのものと言える。

６号墳に比べて７号墳からのガラス小玉の出土数ははるかに少ないが、これが果たして６号墳との装飾品副葬形態の違いによるものか、単に盗掘による消失であるのかは明確ではない。

（管玉）（第58図６～14）（写真図版52－218）

径6.1㎜のものが１点、6.9～8.2㎜のものが９点出土している。色調は深緑色、緑色、薄緑色を呈し、材質は第58図９が緑色凝灰岩で、その他はすべて碧玉製のものである。出土状況については、第58図10・13がそれぞれⅥ－１、Ⅵ－２層からの出土である他は、すべてⅤ層から出土している。隣り合わせで出土するものも見られるが、全体の状況から判断して出土状況は散在していると言える。ほとんどが丁寧に研磨され擦痕の残るものもあるが、擦痕の方向については、縁側から孔のほうへ一方向からの痕が残るもの（10・13・14）と、縁側から孔のほうへ多方向からの痕が残るもの（８）がある。また、細形のものや丸みを呈するものなど形状はさまざまである。さらに11からは成形過程を垣間みることができる。丸みを呈するが、研磨段階以前の状態が丸みを帯びた状態で、これを研磨によって調整するという過程を物語る資料である。しかし側面に稜線が見られ、端面もいびつな形状を呈することから、研磨が完全なものではないことがわかる。穿孔方法はすべての出土品が片面穿孔と考えられる。

（その他）

玉類の他に貝殻片２点と、3.8～4.6㎜を測る比較的大きめの石英が南西トレンチから２点、南西斜面から２点、さらに31SX周辺から１点出土している（写真図版52－219）。南西斜面出土のものに関しては、６号墳周溝内からの出土の可能性を指摘できる。貝の種類は不明である。石英は法量を見ると一般に埋土中に含まれているものよりも大きく、何らかの用途を窺うことができる。しかし明瞭な加工痕などは確認できず、今回図化はしていない。詳細は不明であるが、これらは７号墳周辺からのみの出土であることから一連のものと推測でき、玉などの装飾品との関連が窺える。

③小結

出土状況としては、調査段階では“鉄刀が追葬面に置かれていたとすれば、これを境にして奥壁側に遺物が集中する出土状況から、追葬時の片付け、ないし副葬品を納める空間と屍床を仕切る役目を果たしていた可能性がある。”と想定されたが、玄室部の幅、鉄刀等の位置、鉄鏃などの接合状況から考えて、追葬の有無を別にしてもこうした可能性は実証し難い。

また仮に鉄鏃の年代観を評価すると、最も古くて７号墳の築造時期はおよそ５世紀中頃の可能性を考えることができ、これを６号墳と照らし合わせれば、前後関係から６号墳はそれ以前か、少なくともほぼ同時期を考えることもできる。また、馬具は「素環の轡」の環状鏡板付轡が出土しており、別造りの引手壺や連結式立聞等を持ち、この形式の轡では最古相ではあるが、現在までの出土例からするとMT15～TK10型式併行期、即ち６世紀前半と推定できるため、鉄鏃の年代観とは差が生じることから伝世や追葬の可能性を考える必要がある。しかし詳細な時期判定については、総合的な評価を下す必要があるため、ここでの言明は避けたい。７号墳は主体部から須恵器などの遺物が共伴しなかったため、鉄器から考察される年代観が重要な要素となってくる。加えて７号墳の時期は６号墳の時期決定にも大きく影響するため、前後関係等、今後更なる確認調査が必要である。

⑷　７号墳墳丘上石材・土器集中地点（31SX）

・遺物出土状況

７号墳墳丘平坦面の北西端部で石材が集中する地点が検出された（第18図）。当初、土坑状のラインを検出したため、31SXと略号を付した。掘削時に埋土が明確でなく、石室の石材も撹乱されていると考えられ

たため、これを徐々に掘削し石材を取り上げたところ、土器群を検出した（第33・59図）（写真図版25）。南側から遺物出土状態を順にみていくと、石材（№１）の下に接して、土圧・石圧等で割れていたものの、高坏（土師器）が4つ並んだ状態で検出された。また、石材（№３）の直下からも土師器坏が出土し、その横から長頸壺（土師器）が板石に胴部を接し、斜行した状態で出土した。さらに全体を下げると、それより石室側に須恵器脚付短頸壺、その上に須恵器坏蓋さらに土師器高坏が被さる状態で出土した。また、それらの須恵器より約30㎝北側に土師器甕胴部下半が出土している。

・遺物

第59図１は長頸の土師器広口壺（写真図版40－181）である。頸部から口縁部に向かって直線的に開き、丸底の底部には黒斑がみられる。２は土師器坏（写真図版40－178）である。坏の形状は、４～７の高坏坏部と類似している。３は小型の土師器高坏（写真図版40－177）である。坏部は口縁径に対して深く、口縁、脚部端部ともに屈曲部から端部までが短く開く。４つ並んで出土した高坏（第59図４～７、写真図版40－173～176）は、坏部が内湾する口縁部を呈する。２の坏に脚部がついた形態の高坏と考えてよい。脚端部は稜が顕著で面を持つ。４点とも作りは丁寧であるが、特に第59図４（写真図版40－173）の状態は良好で、外面は口縁から脚端部まで丁寧なミガキ調整が施され、坏部には内外面ともに漆が塗られた痕跡がみられる。また他３点と比較して、脚部には明瞭な屈曲がみられ、坏部の形状が均一であることや口縁端部の高さが一定であるなど、技術的に高い特徴がうかがえる。他のものも坏部は横方向に丁寧なミガキが施されているが、器面の状態が良好でなく、漆の塗られた痕跡を確認することはできない。

９の須恵器有蓋脚付短頸壺（写真図版40－179・180）は短脚、三方透かしで横方向のカキ目を施す丁寧な作りである。口縁径に対して容量は深い。８の坏蓋（写真図版40－179）は端部内側の段が遺存している。内面の一部にはごくわずかに赤色顔料を塗布している痕跡が伺える。

・小結

31SXの時期は、遺物の出土状況や土器群の形態特徴から総合的にみて、中村編年Ⅰ型式４～５段階、田辺編年TK23～TK47型式併行期と考えられる。時期的には７号墳主体部出土の長頸鏃群から導き出される年代観に併行するかやや後出する形で、立地や切り合い関係とも符号する。31SXからは土器群を良好な状態で検出しているため資料的価値が高く、城ヶ辻古墳群の全体的な時期について一指標になると考えられ、31SXの時期を基準として７号墳をそれ以前か、もしくは31SXを墳丘上祭祀と考えた場合はほぼ同時期があてられ、６号墳に関しては現段階の切り合い関係からさらにより古い時期を考えることができる。そうした点から、31SXの時期判断については慎重な検討を要する。また、６号墳と７号墳の切り合いについても、今後の調査による再確認が必要である。

・遺構の復元

石材・土器出土状況から推定すると、土器の出土地点は単に墳丘盛土中に土器を埋設する祭祀行為と言うより、中に土器を埋納し、上に蓋石を被せた土坑を推定するのが妥当だと考えられる。平面図の土坑ライン（破線）は検出状況写真、土器出土状況等から推定している。長軸方向はほぼ南北である。蓋石については石材№２・３等、若干動いていると推定される。

⑸　まとめ

①　周溝等から径約９mの、主として盛土で構築している円墳と推定できる。

②　築造以前の箱式石棺等の整地土もしくは盛土の上に築造していると考えられる。

③　墳丘築造時に６号墳墳丘の一部を削平している可能性が高い。

④　７号墳は玄室主軸の長さが2.2m、玄門側の幅0.6m・奥壁側の幅0.75mを測る狭長な石室である。

⑤　石室の構築方法は基底石に腰石を用い、上部は割石小口積みによるものであり、僅かに持ち送りである。
⑥　横口（玄門）部には框石を置き、袖部は立石を配している。
⑦　玄門（横口）部には、長さ約0.8mの前庭部が連設する。前庭側壁の内側に立石を持つ。
⑧　石室北側の墳丘上には土器を埋納した蓋石を持つ土坑状の遺構（31SX）があったと考えられる。
⑨　石室内から刀子４点、大刀２点、玉類の他馬具を検出した。轡は型式的には６号墳より新しいものと考えられる。また雲珠が出土しており、他にも金具類が存在したと思われるが、床面付近には出土していない。ガラス小玉類も実際は検出した以上に存在したと思われ、鉄鏃の出土・接合状況から見て床面は荒らされていると考えられる。
⑩　石室の上部が削平されていると考えられる為断定はできないが、前庭部上部に天井石を支え受けるような石材があることや、閉塞石の高さからみて前庭部まで天井石が構架されていた可能性も否定できない。
⑪　７号墳の墳丘上に構築されたと考えられる31SXが存在するため、出土の土器群は７号墳築造時期を推定する基準資料になる。よって31SXの出土土器から導き出される時期を基準として、７号墳は同時もしくはそれ以前の造墓と考えられる。
⑫　墳丘の立地等から、６号墳の後に７号墳が後出する可能性が考えられるが、出土遺物から推定できる様相はやや不明瞭であるため、６・７号墳の前後関係についても今後の確認調査が必要である。

第３節　箱式石棺墓

１．32SX（第19図）（写真図版22－97、30－129）

⑴　立地・構造

７号墳墳丘北西側の横断トレンチで検出した。７号墳墳丘盛土の最下層下位において検出しており、７号墳築造以前のものと推定される。

底石は存在せず、床面には赤色顔料〈ベンガラ（註）〉が一面に塗付されていた。非常に鮮やかな赤色の濃い部分と薄い部分とが確認された。

石材は安山岩の板石（長さ約20㎝・厚さ約５㎝）が一枚直立して出土しているが、それ以外の箱式石棺を構成していたと考えられる石材は検出されていない。７号墳を築造する際に抜き取られた可能性がある。掘り方の痕跡から幅は60～65㎝と推定でき、また土層から32SXの上場は削平を免れ、その深さは約40㎝であると考えられる。トレンチ確認によって一部を検出した状態であるため、全体像は不明である。

⑵　小結

石棺内から遺物は出土していないため時期の詳細は不明である。７号墳築造以前のものであるが、石材を抜き取っていること等からどの段階の時期のものかは注目する点である。石材は７号墳の石室の石材に転用した可能性が考えられる。

（註）応用地質株式会社 「城ヶ辻城跡発掘調査に伴う石質同定および赤色顔料分析報告書」 2003

２．33SX（第７・12・37図）（写真図版31－130）

⑴　立地・構造

検出面は標高約33.5mで、６号墳の玄室中央から南東方向約15mの場所に位置する。

遺構の大部分は後世の削平を受け、安山岩の板石を直立状態で１点検出したのみで、その他の石材は検出していない。しかし、わずかに石の掘り方の痕跡を検出した。その痕跡から復元すると、石材は長側辺両側

３枚、短側辺両側２枚ずつ存在したと考えられる。北西側は短辺を長辺の石材が挟む構造と考えられるが、南東側は判断が困難である。長軸方向1.8～1.9m、短軸方向0.8～0.9mの方形の石棺であったと推定できる。

⑵　**小結**

石棺の石材下に接して鉄器１点が出土した。器種は不明である。鉄鏃もしくは釘等と思われる。移動していると考えられるため、33SXに伴うものであるかは判断できない。また、主軸も北西から南東方向で、６・７号墳との時期関係は明らかでない。

第４節　土壙墓

１．27SX（第７・13・36図）（写真図版29－122・123）

⑴　**立地・構造**

６号墳石室の南東側およそ６mの位置、６号墳周溝の延長上に土壙墓を検出した。

墓壙は二段掘りを施している。掘り方は隅丸方形で、東側はやや丸みを帯びると推定される。短軸は約1.5mで、長軸は撹乱があり推定であるが、約2.1mと考えられる。埋葬部分（下段）の形状も隅丸方形で、東側はやや丸みを帯びる。長さが1.7m、幅は0.65～0.85mである。木棺の痕跡等は検出されていない。

⑵　**小結**

掘り方や断面の形状から土壙墓と考えられる。出土遺物は見られない。切り合いから６号墳周溝ののちに構築されたと考えられるが、７号墳との時期関係は定かでない。

２．41SX（第７・13・37図）（写真図版31－131）

⑴　**立地・構造**

６号墳の墓道の延長上約５m南に立地し、標高約31.7mで検出した。段々畑によって削平された部分である。後世の削平が顕著で特に南西側は著しく、詳細は不明である。北東側幅0.9m、長さ1.3m以上を測る。断面にて確認できる埋葬部の幅は約0.6m、長さ1.2m以上と推定できる。残存の深さは10～15㎝と浅い。

⑵　**小結**

埋土や形状から土壙墓と推定できる。遺物が出土しておらず時期の詳細は不明であるが、主軸の方向や立地から６号墳の周辺埋葬等の性格が推定できる。

３．29SX（第７・37図）（写真図版29－124・125）

⑴　**立地・構造**

６号墳西側墳丘上において、７号墳東側を掘削後に検出したものである。西側は７号墳周溝掘削時に削平を受けていると考えられるため詳細は不明であるが、形状は楕円形を呈すると考えられ、長軸１m以上、短軸約0.6mと推定できる。南側で２段掘りの痕跡がわずかに残存する。残存高は約20㎝である。

⑵　**小結**

６号墳西側は削平を受け、地山が露出しているため、29SXが６号墳以前のものであるか、併存もしくは後出するものであるかの確定はできない。

４．17SX（第９・10・36図）（写真図版30－126～128）

Ｐ.７～８を参照。

第５節　墓道

１．25・26SF（第７・35・60図）（写真図版26－112・113、41－182～184）

⑴　立地・構造

６号墳と７号墳の南側約３mのところを、石室の軸線にほぼ直交するかたちで伸びる。上部は削平を受けており、両墳丘の間にのみ検出することができた。25・26SFは重複している。

26SFは幅約0.9mを測り、検出長は約７mである。検出した深さは約10㎝と浅く、大部分が削平されている。25SFはセクションベルトの観察により検出されたもので、平面形態は不明である。幅は約2.4mである。断面観察によると25SFの方が新しく、検出状況からも同一遺構の上層（25SF）・下層（26SF）と見られる。

⑵　遺物

25SFからは土師器坏と須恵器の坏身・坏蓋が底面より浮いた状況で出土している。さらに上面で20～25㎝大の石材が出土している。第60図１は土師器坏（写真図版41－183）で、口縁下に屈曲の見られる形態である。須恵器坏蓋を模した形態とも考えられる。同様の形態の土師器坏はもう一点出土しているが、小片で図化しなかった。２は甕と考えられる土師器の底部である。小型で薄いつくりであるが、やや粗雑である。３は須恵器坏蓋（写真図版41－182）である。浅く、外面の段は消失し、明瞭な沈線を有する。端部は一部にごく僅かな段が見られるが、ほとんど消失する形態である。４は須恵器坏身（写真図版41－184）である。立ち上がりはやや内傾し、短い。この他にも25・26SFからは土師器片が多数出土しており、高坏脚部と考えられるものや、壺と考えられるものなど器種的には多様であるが、細片であるため実測に耐えない。

・小結

25SFと認識される土器群は全体的にみて、Ⅱ型式４～５段階古相、TK43～209型式併行期と考えられる。出土遺物がそれぞれ25SF（新）に係るものか、26SF（古）に係るものかの個別的な判断は付け難く、また先に述べた６号墳墓道と考えられる遺物（第49～51図）も、25SFと重複する位置からの出土であり、且つ層位の確認が困難であったため同様の状況であるが、第49図掲載の須恵器群と第60図掲載の須恵器には時期幅がみられるため、墓道として機能した期間についてはある程度の時期幅（６世紀前半～６世紀末頃）が推定できる。また25・26SF出土の遺物は、第49図掲載の遺物も合わせて器種的に多様であるが、墓道ないし周溝内の祭祀と考えればその器種構成は妥当である。

⑶　小結

平面位置から考えて26SFは30SFへ続くと推定でき、機能としては６・７号墳への墓道の可能性が考えられる。また切り合いから、26SFは６号墳の墓道、25SF・30SFは７号墳の墓道として延長かつ継続したとも考えられ、土層の観察からも25SFと26SFが明確な区分をもたないことは、墓道としてそれぞれが６・７号墳に独立して付属したものでなく、継続的に利用されていたことの結果であるとも考えられる。

２．30SF（第７・34・53・54図）（写真図版26－114・115、47－203、48－206）

⑴　立地・構造

７号墳の主軸とほぼ直交し、７号墳の前庭部から墓道に向かって伸びる。標高28.2～26.8mで検出した。

幅約1.6mで断面は緩やかなU字状を呈する。約９mの長さが残存し、埋土は３層に分けられる。

⑵　遺物出土状況

埋土からは鉄剣（第54図３）が一振と、鉸具と推定できる金具（第53図８）が出土している。また、周辺から袋状鉄斧（第54図８）が１点出土している。

⑶　遺物

・**鉄剣**（写真図版48－206）

第54図３は全長25.2㎝以上のもので茎部は9.7㎝である。刃部の中央部分が若干欠損していて、刀身の長さは不明である。刃部の幅は2.5㎝で断面は菱形を呈し、刃部基部には繊維が錆とともに部分的に残存する。布で巻かれていたと推定できる。斜角の関で栗尻（端部が曲線）である。茎部は関部分から徐々に細くなり、幅１㎝になっている。茎部断面は厚さ0.3㎝の長方形である。短剣で細長茎式のものと推定できる。目釘穴の有無は不明である。

・**鉸具**（写真図版47－203）

第53図８はほぼ直角にL字状に曲がる形式のもので刺金を受ける部分の幅が最大の部分で11㎜、残存最小幅は欠損部で９㎜である。刺金を受ける部分の形状が対称であれば幅42㎜以上の鉸具と考えられる。

・**鉄斧**（写真図版48－206）

第54図８は袋状鉄斧の袋部の片側部分である。鉄板の厚みは2.5㎜程度と推定できる。残存する袋部の外形は直線的で、刃部に向かいやや外方に広がりつつある形状である。現存する最大厚は12㎜である。

⑷　小結

時期決定が難しいが、先述したように位置的に25・26SFの延長と推定でき、埋土からも鉄剣、鉸具、袋状鉄斧等が出土していることから羨道部や前庭部等からの流れ込みと考えられ、６・７号墳への墓道の可能性がある。

３．35SF（第７・34図）（写真図版28－119～121）

⑴　立地・構造

調査区の北端にて検出した。ちょうど段々畑で改変されている部分に立地する。

判明している幅は1.4～1.9mで、埋土は２層に分けられる。標高27.6m～31.6m付近まで平面プラン14.5m以上を検出した。標高31.6m付近では６号墳の周溝に切られている状況であるが、標高から考えて２号墳の方に向かっていると推定できる。

⑵　小結

標高37.6mから下は詳細が不明であるが、30SFから分岐していると推定できる。方向や切り合い等から２号墳への墓道と推定できよう。

４．43SF（第13・35図）

⑴　立地・構造

標高約31.3mにて検出しており、検出の平面プランの半分が26SFと重複する。

幅約0.7m、長さ約2.3mを測る細長い形状の遺構である。深さは約10㎝と浅く、26SFの深さとほぼ変わら

ない。土層の断面観察から、26SFよりも古い時期のものであると考えられる。

⑵　**小結**

遺物は出土していない。溝状の形態や検出位置などから考えると、６号墳の墓道の一部である可能性も推測できる。26SFとほぼ同レベルで検出できるが、軸がややずれている。仮に墓道であったとすれば、本来は43SFが６号墳の墓道として機能し、後に26SFへその機能が移行したとも推測できる。現状ではトレンチで構造を確認しているが、他の部分は検出状況であり、必要に応じて部分的に解明する必要があろう。

第６節　その他の遺構

１．28SD（第７・34図）（写真図版27－116・117）

⑴　**立地・構造**

削平されている等高線に沿う形で、標高約26.3～26.5mにて検出した。丘陵を切断する形である。幅約0.8～1.3mで長さ約６ｍを検出した。北側及び南側は段々畑の造成により削平されている。

⑵　**小結**

遺物から年代を推定できるものはない。30・35SFの様に等高線に斜交もしくは直交するのではなく、丘陵を切断していることから、削平された古墳の周溝や、中世城郭の縄張りとしての堀等の機能も考えられる。

２．40SX（第７・37図）（写真図版32－132）

⑴　**立地・構造**

29SXの西側に位置する。標高約32.8mの７号墳周溝（08SD）内にて検出した。

幅約70㎝、長さ約80㎝を測る深さ15～20㎝の不整形土坑である。埋土は３層に分かれ、第１層上面・下面と第２層下面にてベンガラが確認された。土坑内に顕著な赤色部分は面的には広がっておらず、部分的に分布する状態であった。

⑵　**小結**

遺物の出土はない。ベンガラについては埋土の層下面において確認されたものであり、土坑の底面では確認されなかった。ベンガラを一部貯蔵していた可能性や、７号墳の祭祀に伴うものの可能性も考えられる。

３．42SX（第７・37図）（写真図版32－133）

⑴　**立地・構造**

40SXの南東約0.3mの地点に位置し、標高約32.6mの08SD底面にて検出した。

幅約12㎝、長さ約20㎝のやや楕円形を呈するピットで、深さは約14㎝である。埋土は３層に分かれる。

⑵　**小結**

遺物の出土はない。検出レベルからみて40SXと同時期のものと考えられるが、遺構の性格については不明である。

第Ⅳ章　考古学的分析

第１節　城ヶ辻古墳群の変遷

１．立地

古墳群の中では最大規模を誇る２号墳が、初期に丘陵尾根部の先端に築造されたと考えられる。その築造時期は、２号墳周溝と推定の出土遺物より、４世紀以前に遡る可能性も考えられる。

２．前後関係

２号墳と６号墳の時期差や尾根頂上部の立地等から考えると、２号墳に続いて１・３～５号墳が造営され、少なくとも５世紀後半～６世紀初頭には６・７号墳が築造されたと推定される。

昭和54年の確認調査では５号試掘トレンチにおいて２号墳周溝（09SD）と６号墳周溝の切り合い関係が認められ、平成14年度の調査を合わせると、６号墳が09SDより新しいことが判明している。２号墳の土層堆積状況から、６号墳が造営される段階では09SDは埋没していたと考えられ、埋没後に墳丘が築造されたと推測される。隣接する７号墳は６号墳とほぼ変わらない時期に築造されたと考えられる。６号墳と７号墳の新旧関係は６号墳が立地する旧地形や７号墳周溝の形状などからみて、６号墳より７号墳が新しいという考え方と、７号墳が丘陵突端に位置することや出土須恵器・鉄鏃の様相から７号墳の築造時期を６号墳より古く見て追葬等を考える見方が想定できる。

更に今回測量調査を実施したところ、６・７号墳の方に伸びる尾根の他、１・２号墳の北から北西方向に伸びる尾根があることが判明した。段々畑の造成で明確ではないが、一部墳丘が削平されたような地形や石材の分布が見られる。１・２号墳以前から、もしくは７号墳以降にも古墳が連綿と続く可能性を指摘したい。

３．その他

３～５号墳付近で凝灰岩片を表採していることから、石棺材や石室材と推測できるが、その材質から舟形石棺や家形石棺等の主体部を持つ古墳が存在していた可能性も考えられる。

第２節　２号墳の位置づけ

１．墳丘

２号墳の墳丘は現存する部分で、全長約20～25mと推定された。しかしながら２号墳をはじめ、３～５号墳も墳丘削平が著しく、それぞれの墳丘規模もさることながら、そもそも各々が単一の独立墳丘であるかの実証も含めて、さらなる墳形確認調査が必要である。

２．周溝内祭祀（昭和54年度調査）

ベンガラを納めた甕が、周溝内検出の土坑から出土したことにより、祭祀を周溝内で行ったか、もしくは17SXを含む周辺埋葬を行った可能性が考えられる。土坑内のベンガラを納めた甕の蓋として出土した甕胴部片の高さが、周溝下面より上位である点、また、周溝埋土最下層と土坑内埋土が酷似していたことから、この土坑が２号墳周溝と同時期か、または周溝がある程度埋没した後の時期と推定された。

さらに、周溝内からは甕の他にも二重口縁の土師器片、高坏、短頸壺等が出土しており、周溝内及び墳丘上の祭祀の一種とも考えられる。

３．築造時期

２号墳の築造時期は、周溝内出土土器等（昭和54年度調査）から、最も古い時期として布留式古段階、もしくはそれ以降の可能性も考えられるため、２号墳周溝（09SD）の面的な確認も合わせて今後のさらなる調査が必要であるとともに、今後の当地域の土器編年も注目される。

第３節　６号墳の位置づけ

６号墳（註１）は奥壁と左側壁に板材が残存しているが、右側壁にも板材を据えていた痕跡が残存する。前壁部分は石材の抜き取り痕跡が大きく詳細は不明であるが、同様に板材の掘り方の痕跡が存在し、玄室を仕切るかたちで四方を巡ると考えて良い。このことから、先述したように６号墳は石障系石室と推定でき、また断定はできないが、玄門部の前に基底石の痕跡があることから、複室構造をもつ石室の可能性も考えられる。

さらに根固めや石材の掘り方に着目すると、左側壁の石障の内側に二重の掘り方の痕跡があり、外側の痕跡は、伝佐山（繁根木）古墳の右石障の玄門側に二重になっているのと同様で、石材等の調整のためと推定できる。内側の痕跡は、右側に石材を置く根固めの痕跡を『L』字状に検出していることや、石棺材の可能性が高い石材が出土していることから、石棺等が存在した可能性が考えられる。また採取した石材を詳しく確認した結果、今回その痕跡を確認することはできなかったが、時期的にみて石屋形が存在した可能性も考えられる。棺を奥壁に沿って配置した後埋葬する場合には、法量から考えて死床は平行配置になるであろう。

そうした観点から６号墳を位置づける上で重要な古墳は、玉名市繁根木北の伝佐山古墳（註２）と玉名郡和水町（旧菊水町）瀬川清水原の塚坊主古墳（註３）である。前者は石障系石室で複室構造の初現と考えられており、後者は前室が確立した石屋形を有する横穴式石室である。６号墳が複室構造であるとすると、塚坊主古墳や伝佐山古墳に比べて平面的にやや広いが、ほぼ類似する規模といえる。石障を持つとすると伝佐山古墳に類似し、棺体配置を考えると塚坊主古墳をやや小規模にした古墳であると位置づけられよう。伝佐山古墳は玄室幅が約1.6mと狭いことから縦列埋葬の可能性も考えられ、やや古い様相を持つことも考えられる。

以上のことから、石室構造については伝佐山古墳と塚坊主古墳の間に位置づけられる古墳と考えられる。

７号墳墳丘南西部から裾部にかけて出土した須恵器群は６号墳の周溝内遺物とも考えられ、それらは、陶邑田辺編年のTK10型式併行期（註４）と推定できる。やや古い様相を持つものがあることや周溝最下層出土遺物ではないことからも、石室構造の年代観と同様の時期と考えて良い。

石室内出土遺物から見ると、６号墳は鉄製楕円鏡板付轡を持つ。塚坊主古墳はｆ字鏡板付轡を持つことから系譜が異なる。楕円形杏葉は、下益城郡城南町塚原丸山26号墳（径12mの円墳・主体部：土壙）で出土しているが、内湾していない。６号墳出土の楕円形鏡板は鉄製ながらも縁金具もあり、縦横比率が１：1.6程度と推定できることなどから、韓半島の影響を持つ可能性が考えられる。韓半島の類例としては、玉田Ｍ３号墳、咸安道項里54号墳等が挙げられ、国内の類例としては大阪府藤井寺市長持山古墳、長野県久保田１号墳等の例がある。（註５）

また金環も垂飾付耳飾の一部である可能性が考えられる。この地域の古墳では江田船山古墳、伝佐山古墳、大坊古墳と３古墳から出土しているが、熊本県で垂飾付耳飾を出土しているその他の古墳は物見櫓古墳のみで、これらにおいても朝鮮半島の影響を考えることができる。さらに羨道部（04SK）から出土した遺物の年代はTK43型式～TK209併行期にあたり、追葬または墓前祭祀等が６世紀後半～末まで行われていた可能性が考えられる。

古墳の分布から見ると、菊池川中・下流右岸の立願寺地域の伝佐山古墳、永安寺・大坊地域の大坊古墳、菊池川中・下流域左岸清原台地の塚坊主古墳に対して、南南東4.5㎞の寺田の丘陵上に城ヶ辻６号墳は位置

する。古墳の規模からすると伝佐山古墳が円墳で約30m、大坊古墳が全長約54mの前方後円墳、塚坊主古墳が全長35mの前方後円墳で、６号墳は円墳で径13～14mと小さい。しかしながら石室の規模を比較すると、伝佐山古墳とほぼ同規模である。墳丘は規制されていても、副葬品・石室規模・構造等は匹敵するものと考えられ、当該地域の首長の奥津城と推定できる。６号墳の残存率は悪いが、石障系石室の終焉、石屋形の出現や複室構造の確立を考える上で非常に重要な古墳である。

（註１）後室主軸2.1m・幅2.0m　前室主軸約1.3m以下・幅約1.4m以下

（註２）後室主軸1.9m・幅1.6m　前室主軸約1.1m・幅約0.8m

（註３）後室主軸2.7m・幅2.6m　前室主軸約1.1m・幅約0.8m

（註４）田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981

（註５）福岡大学　桃崎祐輔氏の御教示による

第４節　７号墳の位置づけ

１．石室の分類

割石小口積みの狭長な玄室は、竪穴系横口式石室（註１）との関連性が伺える。

初期の九州系横穴式石室の段（框）構造を持つ横穴式石室は、北部九州の接点とも言える荒尾地域の別当塚東古墳や山鹿市銭亀塚古墳、宇土市城２号墳に見られる。いずれも石室幅２m以上のもので、大型の九州系横穴式石室の祖形と言えるものである。初期横穴式石室から分化し、箱式石棺の影響を受ける割石小口積みの狭長な玄室は北部九州地域に発展し、６世紀代と推定される石室まで見られるが、７号墳はそうしたいわゆる「竪穴系横口式石室」との関連性が伺える。こうした石室は幅1.4～1.5m未満の主軸平行葬のものと推定できる。

このように、北部九州に特有な発達をみせる「竪穴系横口式石室」との類似性が認められる石室構造が明らかになった調査としては、今回が初めてといえよう（註２）。７号墳の石室構造は検出状況では段構造を有さないが、割石小口積みの狭長な石室は、竪穴系横口式石室の強い影響のもと構築された横穴式石室であると考えられる（註３）。

（註１）蒲原宏行氏の竪穴系横口式石室の定義は「主軸平行葬で前壁・楣石を有さない。」とし、それを受ける形で森下浩一氏は「楣構造がみられない点、段構造をもつことが２大要素。」と定義付けする。両氏の定義が最も妥当と思われる。単体埋葬を前提とする竪穴系埋葬施設を基本的に踏襲する形態、つまり竪穴式石室に横口部を付加する点は絶対条件である。また同様に段構造は竪穴式石室の性格を引き継ぐ形態という点が重視されると考えられる。

（註２）他に割石小口積みの狭長な石室で、発達した竪穴系横口式石室の可能性があるものに朱塚古墳（菊鹿町下内田）があるが、未調査である。玄室の主軸の長さは1.9m、幅1.25m、高さ0.85mを測る。羨道部は崩落により段構造については不明である。袖部は割石小口積みで片袖とみられる。楣石は認められない。(『菊鹿町史』)

（註３）７号墳は腰石の採用、玄門立柱石が認められる。羨道部の有無は明確でないが、これらの要素に加えて楣石が存在するものを蒲原氏は「竪穴系横口式石室に後続する石室」として分類し、森下氏は「北部九州B型を竪穴系横口式石室とその連続として捉えられ、『竪穴系横口式石室』系横穴式石室である」等の考え方がある。

７号墳に、横口部から前庭部にかけての天井石等の高架による前壁・楣構造が存在したかは、墳丘の削平により明確ではなく議論を呼ぶところである。

２．築造時期

墳丘築造途中もしくは７号墳の残存する墳丘から掘り込まれたと推定できる31SXから出土した遺物群については、須恵器有蓋脚付短頸壺や土師器高坏等があげられるが、これらは６号墳周溝内出土と推定できる遺物群とほぼ変わらないか、やや古い様相を呈する（註１）。轡・雲珠等の馬具から見てもほぼ同一の時期と考えて良い。また長頸鏃群から推定される時期を評価すれば、土器類の時期を含め、更に遡る可能性も指摘できる。

石室の形態からみると玄室部は筑後地域の福岡県八女市立山山23号墳に類似するが、前庭部等の構造が城ヶ辻７号墳の方が発達していると考えられ、やや後出すると推定できる。従って遺物はやや古相を示すものも存在するが、鉄器類や土器でも特定の器種が古相を示すことや６号墳の石室形態及び新旧関係から考えて、築造時期は５世紀後半から６世紀前半と位置付けたい。

（註１）田辺昭三　『須恵器大成』　角川書店　1981

３．小結

７号墳の石室構造については、発達した竪穴系横口式石室の多くが分布する佐賀・福岡との関係が考えられる。しかし同時に、周溝位置等から肥後型横穴式石室の範疇に入る６号墳に前後する墳墓でもある。よって７号墳は竪穴系横口式石室の影響を強く受けた石室と考えられ、６・７号墳の先後関係は判然としないが、県下では特異な石室構造といえ、流入経緯及び時期は大変重要である。

従来、６世紀初頭～前半にかけて菊池川流域から北部九州に装飾古墳や石屋形が伝わることは解明されていたが、７号墳の石室形態はそうした派生が一方的ではないことを示す貴重な事例である。７号墳は当時の政治的動向や造墓集団の移動、被葬者像などに迫ることのできる数少ない古墳であり、また墳丘に見られる土器群は、古墳築造過程の一端を伺い知る重要な事例であり、それに伴う遺物は祭祀行為におけるセットの土器群として、編年の基準資料ともなりうると考えられる。

第５節　石材と顔料

６・７号墳の石室構造は互いに異質ではあるが、石室開口方向は南西方向で、石材が玄武岩質安山岩という共通性をもつ。分析の結果、石材は金峰山山麓で採れる安山岩に類似することがわかった。現地周辺の地質・岩盤層の詳細は明らかではないが、１㎞北側周辺の基盤層は安山岩であり、必ずしも良質なものではないにせよ、周辺から調達された石材である可能性は高いと考えられる。

赤色顔料は、全てベンガラであることが判明した。木蓋土壙墓・箱式石棺の床面に塗布された赤色顔料についてもベンガラであるが、ベンガラの組織構造はパイプ状ではないと分析された（註）。

（註）独立行政法人 東京文化財研究所 朽津信明氏教示

第６節　土壙墓の性格

周辺埋葬の可能性がある土壙墓・箱式石棺墓（32SX）については、どの古墳に伴うものかは遺物が出土していないため、想定が難しい。ただ出土の位置関係や主軸方向から、関係を考慮する意義はあろう。

まず、６・７号墳と主軸方向が共通するのは32SX（箱式石棺墓）、41SX（土壙墓；木棺墓）、主軸と直交するものは33SX（箱式石棺墓）である。また主軸と斜交するものに17SX（土壙墓；木棺墓）、27SX（土壙

墓；木棺墓)、29SX（土壙墓）がある。さらに位置関係を見ると、周溝内で検出されたものも多い。

17SXに関しては、検出場所が２号墳の周溝部分から６号墳の削平された墳丘裾部にかかるため、その位置関係から築造以前か、築造当初もしくはある程度経てからの埋葬かの判断は困難であるものの、２号墳の周辺埋葬である可能性は高いといえる。また33SXも、２号墳の墳形は別にして２号墳周溝位置に近いと考えられ、２号墳の周辺埋葬とも考えられる。同様に位置関係から32SXも６号墳の周辺埋葬である可能性が考えられる。

墓壙それぞれの主軸方向については、墳丘中心部に直交あるいは平行したり、石室方向を向けたりして関係性や時期差を示唆しているとも考えられる。

（参考）山鹿市朱塚古墳と城ヶ辻７号墳

朱塚古墳は、山鹿市津袋古墳群を構成する古墳のひとつで、古墳群中最大の規模である大塚古墳や頂塚古墳から北北東に位置する。

朱塚古墳は、確認した周溝から15～20mの円墳と推定されている。現存する墳丘は７m程度で、南側及び西側の削平が大きい。現状では段地形の耕作地になっており、石室床面から高さ１m以上の封土が残存するが、南側の天井石は露出している。段状の耕作地の高い部分では約1.5mの封土が確認できる。

石室は南東方向に開口しており、西側玄室の奥の部分は、奥壁よりの左側壁が削平されたまま倒れ込んでいて、奥壁部分は消失している。また石室は左片袖の石室と考えられ、規模は全長2.7m以上（ただし、石材が原位置を保っている長さは1.5m)、幅約0.75m、高さ0.9m以上と推定できる。

石室開口部については、埋没しており開口部（前庭部）の構造が明確でないが、袖部の開口部側よりに幅40㎝、厚さ10㎝、高さ40㎝以上の扁平な立石があり、閉塞石の一部の可能性がある。さらに開口部と推定される位置において塊状の石材が１つ露出している。板石閉塞の前面の塊石による閉塞石の一部である可能性が考えられる。石室の構造は開口部が埋没しているため不明であるが、現状から考えると竪穴系横口式石室の可能性も推定できる。

石室を構成する石材は、長さ15～55㎝の安山岩の割石で、厚みは４～７㎝程度である。左側壁は13段以上積んでいる様子が確認できる。その下に腰石があるかは断定できないが、崩れた石室の断面等を見る限り存在しない可能性が高い。控え積みの石材を含めて、約60～80㎝の石材の幅で石室を構成している。

天井石は残存する側壁の部分と袖部の２点が見られる。幅120㎝以上、長さ約140㎝、厚さ約20㎝の扁平な石材が石室の上に、また幅約120㎝、長さ約45㎝、厚さ約20㎝の扁平な石材は、石室内と袖部に重なるように構架されている。奥壁側にはもう一つ天井石が構架されていたと推定できる。

城ヶ辻７号墳との類似点を考えると、尾根の張り出した先端に位置する可能性があること、玄室の幅、高さ、長さが類似することが挙げられる。相違点は、朱塚古墳の方が墳丘規模がやや大きく、石室長もやや長い可能性があること、玄室平面プランが城ヶ辻７号墳程顕著に羽子板状を呈していないこと、腰石が現状では存在しない可能性が高いことが挙げられる。墳丘規模による差や時期差も考慮に入れる必要がある。

朱塚古墳の石室の床面と、開口部と推定される部分は埋没しており、時期及び詳細は不明であるが、今後の調査によっては、城ヶ辻古墳群との相違点も明らかになり、朱塚古墳だけではなく城ヶ辻７号墳についても歴史的な意義づけが可能になるであろう。

第Ⅴ章　自然科学的分析

熊本県玉名市城ヶ辻古墳群出土の人骨

＊松下孝幸

【キーワード】：熊本県、古墳人骨、保存不良

はじめに

熊本県玉名市寺田字城ヶ辻に所在する城ヶ辻古墳の発掘調査が玉名バイパス工事に伴って、2002年（平成14年）におこなわれ、６号墳の石室から人骨が検出された。６号墳が造られている丘陵末端には古墳時代前期から後期にかけての古墳４基が確認されていた。１号墳は現存していないが、今回の調査で新たに２基（６、７号墳）の古墳が確認され、調査がおこなわれた。６号墳は肥後地域の代表的な埋葬施設である「石障」を持つ横穴式石室であるのに対し、７号墳は北部九州にみられる竪穴系横口式石室に類似していたことから、被葬者の形質が気になるところである。残念ながら人骨の保存状態が悪く、また７号墳からは人骨が検出されなかったので、両古墳の被葬者間の関係を明らかにすることはできなかった。

筆者が調査に携わったり報告書を書いた熊本県内の古墳時代人骨については、益城町の福原横穴墓群（松下・他、1985a)、玉名市小路石棺（松下、1985b)、熊本市古城横穴墓群（松下・他、1985c)、山鹿市鹿本町津袋大塚東側１号石棺（松下・他、1986a)、山鹿市湯の口横穴群（松下・他、1986b、1988）と舞野遺跡(松下・他、1989c)、菊池市七城町瀬戸口横穴墓（松下・他、1989a)、美里町四十八塚５号墳（松下・他、1989b)、宇土市西潤野２号墳（松下・他、1992)、熊本市五丁中原遺跡群（松下、1997)、山鹿市鹿央町広諏訪原遺跡（松下、2004b)、益城町城の本２号墳、合志市豊岡宮本横穴群（松下、2006）があるが、横穴墓は盗掘を受けているものが多く、人骨の保存状態はあまりよくなかった。この中で保存状態が比較的よかったのは、津袋大塚東側１号石棺、美里町四十八塚５号墳、西潤野２号墳、豊岡宮本横穴群から出土した人骨である。このほかに、八代市清水１号古墳（内藤・他、1980)、城南町丸尾５号墳（内藤、1975）からも古墳人骨が出土しているが、保存状態はよくない（第61図)。

今回本古墳から出土した古墳人骨は保存状態が悪く、また残存量も少なかったが、できる限り詳細に観察をおこなったので、その結果を報告しておきたい。

資料および所見

城ヶ辻６号墳の石室から検出された古墳人骨は、石室の奥付近に散乱状態で出土しており、埋葬状態を保った骨はなかったようである。人骨は表１のように番号を付けて取り上げられていた。人骨の所見が記載できる程度残存している骨については、取り上げ番号ごとに所見を記載する（表６)。

なお、この人骨は、古墳時代に属する人骨である。また、この古墳には金製耳飾、銀製耳飾、ガラス小玉、鉄鏃、馬具などが副葬されていた。

＊ Takayuki　MATSUSHITA
The Doigahama Site Anthropological Museum　[土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム]

№１：3.5㎝×３㎝大の骨片である。大腿骨体の一部であろう。左右の判別はできない。

№２（大腿骨、FE－1)：右側大腿骨体近位部の後面である。大腿骨体の大きさは不明である。

№10：下顎右側の第二大臼歯である。咬耗度はBrocaの１度（咬耗がエナメル質のみ）である。

№11：下顎左側の第一大臼歯である。咬耗度はBrocaの１度（咬耗がエナメル質のみ）である。

№13（脛骨、TI－1）（写真図版58）：左側と思われる脛骨体の前縁が残存していた。前縁は鋭く、緻密質はかなり厚い。残存部分から推測すれば、径はやや大きかったようである。骨体の径が大きかったことが予測されることから、男性脛骨と推定した。なお、実測図をみると№12と№13は連続しているようにみえる。№12も脛骨の一部だったのかもしれないが、取り上げられた人骨片では確認できない。

取り上げられていた人骨片と歯は重複する部分がみられないので、１体分と考えられる。しかし、筆者は現地で人骨の出土状況を観察していないので、正確なことはわからない。保存状態が悪く、取り上げれば原形が壊れてしまう骨であっても、現場で観察すれば、骨種や大きさなどを推測することが可能な場合がある。今回取り上げられていた骨片のみから推測すれば、１体分しか確認できないということになる。

要　約

熊本県玉名市寺田字城ヶ辻に所在する城ヶ辻古墳の発掘調査が2002年（平成14年）におこなわれ、石室から人骨が検出された。人骨の保存状態は著しく悪く、また残存量も少なかったが、解剖学的に精査するとともに、人類学的観察をおこない、以下の結果を得た。

１．人骨は６号墳の石室奥から散乱状態で検出された。

２．本人骨は、考古学的所見から、古墳時代に属する人骨である（６世紀初頭から前半以前）。

３．人骨は14ヶ所に分けて取り上げられていたが、ほとんどが骨片状態の骨である。その中に、大腿骨体片、脛骨体片、歯２本（大臼歯）を確認することができた。また脛骨はおそらく男性脛骨であろう。

４．取り上げられていた人骨を解剖学的に精査したが、重複する部分がないので、今回検出された人骨は１体分と推測した。性別は、脛骨から男性と思われる。

５．本古墳群には石室の様式に違いがみられることから、被葬者間の形質が気になるところであるが、人骨の保存状態が悪く、特徴を明らかにするには至らなかった。

謝辞

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた熊本県教育委員会文化課の皆様に感謝致します。》

《参考文献》

１．松下孝幸・他、1985a：熊本県益城町福原横穴墓群出土の古墳時代人骨。福原横穴墓群（熊本県文化財調査報告第77集）：29－42.

２．松下孝幸、1985b：玉名市小路石棺出土の古墳時代人骨。滑石小路箱式石棺・本堂山遺跡（玉名市文化財調査報告第６集）：32－48,57－61.

３．松下孝幸・他、1985c：熊本市古城横穴墓群出土の古墳時代人骨。古城横穴墓群（熊本県文化財調査報告第74集）：129－146.

４．松下孝幸・他、1986a：熊本県鹿本町津袋大塚東側１号石棺出土の古墳時代人骨。津袋大塚東側１号石棺出土人骨研究報告書（鹿本町文化財調査研究報告第２集）：５－33.

５．松下孝幸・他、1986b：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書⑴（山鹿市立博物館調査報告書第５集）：111－122.

６．松下孝幸・他、1988：熊本県山鹿市湯の口横穴群出土の古墳時代人骨。湯の口横穴群（Ⅱ）菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書⑶（山鹿市立博物館調査報告書第８集）：53－63.

７．松下孝幸・他、1989a：熊本県七城町瀬戸口横穴墓出土の古墳時代人骨。北上原古墳・瀬戸口横穴墓群（熊本県文化財調査報告第104集）：97－107.
８．松下孝幸・他、1989b：熊本県下益城郡中央町四十八塚５号墳出土の古墳時代人骨。堅志他城跡・四十八塚古墳（熊本県下益城郡中央町文化財調査報告第１集）：77－114.
９．松下孝幸・他、1989c：熊本県山鹿市舞野遺跡出土の古墳時代人骨。錢亀塚古墳ほか（菊池川中流域古墳・横穴群総合調査報告書⑷）（山鹿市立博物館調査報告書第９集）：71－82.
10．松下孝幸・他、1992：熊本県宇土市西潤野２号墳出土の古墳時代人骨。立岡古墳群（宇土市埋蔵文化財調査報告書第19集）：71－84.
11．松下孝幸、1997：熊本市五丁中原遺跡群第１次調査区３号墳周溝内墓壙出土の古墳時代人骨。五丁中原遺跡（五丁中原遺跡第１次調査区発掘調査概要報告書）：25－26.
12．松下孝幸、2004a：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444－454. 朝倉書店
13．松下孝幸、2004b：熊本県鹿央町広諏訪原遺跡出土の古墳人骨。鹿央町文化財報告書広諏訪原遺跡（町民テニスコート新設工事及び農村総合整備事業農道７号工事に伴う埋蔵文化財調査報告書）：27－34.
14．松下孝幸、2006：熊本県合志町豊岡宮本横穴群出土の古墳人骨。豊岡宮本横穴群（熊本県合志町文化財調査報告第２集）：57－84.
15．松下孝幸、熊本県益城町城の本２号墳出土の古墳人骨。
16．内藤芳篤、1975：塚原中世墳墓・丸尾５号墳出土の人骨について。塚原（熊本県文化財調査報告第16集）：317－322.
17．内藤芳篤・他、1980：清水１号古墳出土の人骨。清水古墳・野寺遺跡・林源衛門墓（熊本県文化財調査報告書第41集）：22－28.
18．分部哲秋・他、1991：熊本県菊鹿町灰塚古墳出土の人骨。灰塚古墳（県営畑地帯総合土地改良事業に伴う埋蔵文化財調査）（熊本県文化財調査報告第114集）：49－59.

第Ⅵ章　まとめ

調査成果

昭和54年度確認調査及び平成14・15年度の本調査で判明した重要な点を列記し、以下まとめにかえる。

1．６号墳は周溝を除いて13～14mの円墳で、主体部は石材痕跡等から玄室幅約２m、長さ２～2.2mの石障系石室と推定できる。石材を据えたであろう根固めの土の痕跡が見られることから、石室内には石屋形等の組み合わせ式の石棺が安置されていた可能性が高い。

2．６号墳石室内出土の土器類は少ないが、７号墳南東斜面の土器として取り上げられた遺物は６号墳周溝の推定位置からの出土と考えられ、６号墳の周溝内祭祀土器であった可能性がある。

　また、石室内の撹乱坑から鉄刀・鉄鏃・馬具類・装飾品類が豊富に出土しており、特に馬具・装飾品類が特徴を持つ。馬具の轡は遊環を持ち、銜や引手にねじりが施され、内湾楕円形鏡板を持つ珍しいものである。馬具の飾金具（革帯金具）の出土量は多く、中には鋲に金銅のメッキが施されているものもあり、装飾性の高い馬具一式が副葬されていたと推定できる。装飾品としてはガラス小玉の他、垂飾付耳飾の一部の可能性が考えられる金環が出土しており、韓半島との関係も注目される。

3．７号墳は周溝を除いて約９mの円墳であり、北部九州（筑後地域）の影響を受けた竪穴系横口式系統の石室である。主体部の石室は主軸長2.2m、玄門側の幅0.6m、奥壁側の幅0.75mを測る狭長なものである。

4．７号墳は北部九州（筑後地域）の影響を受けた竪穴系横口式系統の石室、６号墳は肥後型の石障系石室であり、系統の異なる石室が並存する。肥後型の石室は熊本を中心に筑後地域や肥前地域に多く分布しており、その状況からこれまで古墳時代中期中頃から後期にかけては、肥後地域から筑後地域等に一方的に影響を与えたと考えられていた。しかし今回、７号墳の石室が筑後地域の影響を受けたと考えると、筑後地域・肥後地域の双方向から墓制という保守的な習俗に影響を及ぼし合っていた可能性を指摘できる。

5．７号墳の墳丘上または内部で出土した土器・石材群と呼んでいる遺構（31SX）が、墳丘上部に配列されていたとすれば、墓上祭祀と考えられ、横穴式石室を主体部とする古墳では極めて珍しい例となる。この遺構からは、壺・高坏・有蓋脚付短頸壺等、祭祀色の強い特殊な器種が一括して出土しており、これらは古墳時代中期から後期古墳築造時の儀礼行為を表すと考えられる。

6．７号墳石室内からは多数の馬具を含めた武器類が出土している。攻撃用武器としては鉄刀２振りの他、推定で25本以上の鉄鏃が出土している。

　馬具としては環状雲珠や実用的な古式の素環の轡等を持つのが特徴である。工具である刀子が４点出土しており特徴的である。装飾品は管玉を中心に出土している。

7．６・７号墳南側に丘陵下部からの墓道が検出されており、また北側では2号墳南側の墓道と推定できる遺構の一部（35SF）も検出された。古墳群の墓道を復元できるものとしては、横穴等の事例が多いものの、墳丘墓の事例については熊本では稀少であり、全国的にも遺構として検出されるのは珍しい。

8．７号墳の墳丘及び周溝は、６号墳の墳丘を共有もしくは一方が一部を削平する形で造成されている。

9．２号墳周溝から出土した遺物が複合口縁壺等であることから、２号墳そのものが古墳時代前期の古墳である可能性が指摘できる。

10．２号墳が古墳時代前期に遡る可能性と、６世紀前後と推定できる６・７号墳の検出とを併せると、城ヶ辻古墳群は同一地点において古墳時代前期から後期の時期に累々と営まれた古墳群である可能性が高まった。

11．２号墳周溝、６号墳周溝および古墳周辺で箱式石棺墓・土壙墓を検出した。位置から推定して周辺埋葬の可能性が高い。

課題

１．６・７号墳の築造時期及び前後関係の解明

７号墳の石室形態が当地域に入ってきた背景や、磐井の乱等との関係を明確にするために、６号墳と７号墳の前後関係や築造時期を解明する必要がある。その方法として７号墳盛土と６号墳周溝の切り合い関係、６・７号墳周溝埋土、それぞれの石室掘り方等の確認調査を実施することが考えられる。

２．６号墳石室構造の解明

６号墳石室の築造過程のさらなる解明も不可欠であり、それによって初期の複室構造を有する可能性を考えることができよう。石障系石室はその終焉期にあたり、石屋形の石室構造とすれば、初現期の可能性が考えられる石室でもある。現状では推定の部分が多いが、今後は周辺の石材や石室掘り方、科学的探査等で復元する材料を見つけることが必要である。

３．対外交渉についての解明

古墳時代後期の６世紀には、国造磐井の乱等に影響を与えた勢力が肥後地域を中心に有明海沿岸に独自の文化を築いていただけではなく、肥後地域が朝鮮半島南部（全南地方）にも影響を与えていたと考えられる。５世紀後半以降、日本文化が朝鮮半島南部に伝わる現象が顕著に見られる。前方後円墳や埴輪等だけではなく、横穴式石室についても九州型の石室が栄山江流域等に影響を受けたと考えられている。それらは、北部九州の初期横穴式石室の他、肥後型石室の影響を受けた石室が栄山江流域に数例見られる等、肥後地域と朝鮮半島の文化の伝来もしくは人の移動を示すものといえる。(参考文献25)

有明海沿岸には江田船山古墳等、新羅・百済の影響が見られる副葬品を持つ古墳が少なくない。５世紀から６世紀前葉・中葉まで大坊古墳や伝佐山古墳等、垂飾付耳飾の集中する地域でもある。６・７号墳はそうした時期に有明海沿岸に造営された古墳であり、また朝鮮半島を中心とした対外交渉が盛んな時期のものでもあるため、当古墳の被葬者がそうした対外交渉に関わった可能性が考えられる。

今回判明した石室形態や馬具、装飾付耳飾の型式や出土遺物の材質に関する科学的データ等の増加を待って、韓半島出土の遺構・遺物との比較も必要である。

４．２号墳の墳丘規模・墳丘形式の解明

今回２号墳の周溝と推定した遺構と、昭和54年度の２号墳周溝と推定した遺構の埋土の整合性も含めて、２号墳の周溝位置をさらに広範囲に確認することが必要である。また昭和54年度では６号墳の周溝を２号墳周溝と推定した部分もあり、東側にかけての周溝の範囲確認と詳細な時期決定が不可欠である。

また、同時期の古墳としてあげられる、玉名平野の山下古墳・院塚古墳等は２号墳との前後関係及び系譜関係が注目される。２号墳は菊池川左岸において、古墳時代中期の和水町江田船山古墳（国指定史跡）等につながる勢力が存在した可能性を示唆するものであり、今後の確認調査による墳丘形式及び規模の解明が重要である。

５．城ヶ辻古墳群の範囲確認及び概要解明

城ヶ辻古墳群は古墳時代前期から中・後期にいたる墓が同一地点に分布する点で重要であるが、詳細が明らかでない２、３、４号墳を確認調査することにより、当地域の首長の系譜関係や古墳文化の継続性がどこまで言えるかを今後明らかにすることができよう。

６．類似石室の構造解明

筑後地域から肥後地域に影響を与えた現象を証明し得る石室で、７号墳に類似する可能性があるものとしては山鹿市菊鹿町朱塚古墳が挙げられるが、詳細は不明な部分が多い。今後、その石室の測量調査や確認調査等を実施することにより石室形式及び時期が解明されれば、城ヶ辻７号墳の位置づけや年代が明ら

かになる可能性が高い。

７．周辺埋葬の実態の解明

周溝内で土壙墓や石棺墓が出土しているが、周溝埋土や墳丘土層との対応関係が明確ではなく、周辺埋葬かどうか不明な点も多い。

城ヶ辻古墳群における各古墳の周辺埋葬のあり方を、今後の確認調査の際に周溝や墳丘等との関係で検討する必要がある。

(参考文献)

１．蒲原宏行　「竪穴系横口式石室考」　『古墳文化の新視角』　1983

２．第２回九州前方後円墳研究会資料　『九州における横穴式石室の導入と展開』　1999

３．森下浩行　「九州型横穴式石室考―畿内型出現前・横穴式石室の様相―」　1987

４．高木恭二　「石障系横穴式石室の成立と変遷」　『宮嶋クリエイト』　第６号　宮嶋利治学術財団

５．松本健郎　「複室墳の諸問題―熊本県菊池川流域―」　『熊本史学』　第37号　1970

６．古城史雄　「九州における横穴式石室の様相―石屋形を中心として」　1995

７．蔵富士寛　「石屋形考」　『先史学・考古学論集』Ⅱ　竜田考古学会　1997

８．「朱塚古墳」　『菊鹿町史』

９．玉名高校考古学部　「伝左山古墳測量調査」　玉高考古学部部報30　1973

10．玉名市教育委員会・保存科学研究会　『史跡大坊古墳保存工事報告書』　1969

11．高木正文　『熊本県装飾古墳総合調査報告書』　熊本県教育委員会　1984

12．田添夏喜　『熊本県玉名郡大坊古墳調査報告』　熊本史学32号

13．城２号墳発掘調査団　『城２号墳』　宇土市教育委員会　1981

14．中村幸史郎　『銭亀塚古墳』　山鹿市教育委員会　1989

15．勢田廣行　『別当塚古墳群』　荒尾市教育委員会　1992

16．山城敏昭・本山千絵　『塚坊主古墳』　熊本県教育委員会　1997

17．小玉真一　『若宮工業団地関係埋蔵文化財調査報告第3集』　福岡県教育委員会　1980

18．木許　守　「巨勢山75号墳出土の馬具」『大和を掘る　XⅣ (1993年度発掘調査速報展)』　奈良県立考古学研究所付属博物館　1994

19．木下亘　『春季特別展　葛城氏の実像―葛城の首長とその集落―』　奈良県立考古学研究所付属博物館　2006

20．岡本敏行ほか　『平成15年度春季特別展　黄泉のアクセサリー　古墳時代の装身具』　大阪府立近つ飛鳥博物館　2003

21．杉山秀宏　「古墳時代の鉄鏃について」　『橿原考古学研究所論集第八』　1988

22．千賀久・村上恭通編　『考古資料大観第７巻　弥生古墳時代　鉄・金銅製品』　2003

23．北野耕平　『河内野中古墳の研究』　大阪大学文学部国史研究室研究報告第二冊　1976

24．群馬県埋蔵文化財調査事業団　『綿貫観音山古墳Ⅱ―石室・遺物編―』　群馬県教育委員会　1999

25．柳沢一男ほか　『朝鮮学報』第179号　朝鮮学会　2001

26．高橋克壽ほか　『王者の武装―５世紀の金工技術―』　京都大学総合博物館　1997

27．大谷晃二　『96　特別展　黄金に魅せられた倭人たち』　島根県立八雲立風土記の丘　1996

28．岡安光彦ほか　『日本古代文化研究』創刊号　1984

図　面　図　版

第１図　周辺遺跡分布図（古墳時代）（１／25000）

表１　城ヶ辻古墳群周辺遺跡名一覧（古墳時代）

番号	番号(県)	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
1	246	城ヶ辻古墳群（１～７号）	寺田　城ヶ辻	古墳	古墳	１号箱式石棺・２号円墳、完形遺存・５号丘陵先端
2	248	寺田古墳群（１～４号）	寺田　宇土	古墳	古墳	１号台地北端・２号舟形・３号箱式石棺・４号処女墳
3	439	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
4	256	上津留古墳	津留　小部田	古墳	古墳	円墳、高台北端に位置、径25mの封土遺存
5	252	久保地下式横穴	寺田　久保	古墳	古墳	国道208号線の北大穴窟、出土品なし
6	250	ナカント塚古墳	寺田　吉丸	古墳	古墳	部落西南畑中、封土あり、内部不明
7	433	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
8	278	中神久	安楽寺　中神久	古代・中世	包蔵地	古代、中世遺物散布
9	264	田崎横穴群	田崎　楢山	古墳	古墳	国道208号沿い、３基と造りかけ
10	201	繁根木遺跡群	繁根木	弥生	包蔵地	稲荷山古墳の最下層、弥生土器群あり
11	196	伝左山古墳	繁根木　北	古墳	古墳	国道208号沿線径37mの円墳、出土品多量
12	197	繁根木地下式横穴群（４基）	繁根木　馬場	古墳	古墳	国道208号沿線、出土品なし
13	200	稲荷山古墳（他４石碑）	繁根木　馬場	古墳	古墳	八幡宮裏、前方後円墳の封土、朝顔埴輪
14	203	繁根木箱式石棺（繁根木古墳）	繁根木　馬場	古墳	埋葬	八幡宮東、大正初期、方格規矩文鏡を出す
15	226	松林寺山古墳	向津留　下	古墳	古墳	大型舟形石棺露出、棺蓋不明
16	242	飯塚古墳	向津留　飯塚	古墳	古墳	円墳、保存度良し
17	243	亀頭迫	大倉　亀頭迫など	弥生～中世	包蔵地	土師器、弥生後期
18	227	桃田貝塚	大倉　桃田原	縄文	貝塚	ＪＲ線北２箇所、阿高式～土師器・須恵器
19	228	桃田古墳	大倉　桃田原	古墳	古墳	伝箱式棺出土
20	339	中北アカハゲ古墳	伊倉北方（通称赤禿）	古墳	古墳	高田古墳下に一封土あり、古墳と思われる
21	229	高田古墳	大倉　高田	古墳	古墳	台地頂上、円墳内部不明
22	296	中北古墳	伊倉北方　五社	古墳	古墳	県道に面する南小突端に箱式石棺をもつ
23	461	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
24	338	岩井口横穴	伊倉北方　岩井口	古墳	古墳	伊倉台西端崖面、かなり崩壊
25	337	垣塚古墳	伊倉北方　東垣塚	古墳	古墳	くり抜き石棺形式出土、封土不明
26	340	伊倉犬塚古墳	伊倉北方　鳥越	古墳	古墳	現在封土を失う
27		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
28	351	青野原	青野　原・北原	弥生・古墳	包蔵地	
29	352	合田	青野　合田	弥生・古墳	包蔵地	
30	354	青野本村曲畑	青野　本村・田の尻	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳土器多量包含
31	356	青野古墳	青野　本村	古墳	古墳	
32	453	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
33	357	青野地下式横穴	青野　田の尻	古墳	古墳	現在埋没する
34	358	青野天神原古墳	青野　天神原	古墳	古墳	現在天神石祠建つ
35	359	青野天神原	青野　天神原	弥生・古墳	包蔵地	弥生～古墳期土器包含
36	369	青野本村堂の久保	青野　本村堂の久保	弥生・古墳	包蔵地	
37	343	鍛冶屋町製鉄跡	伊倉南方　東屋敷	古墳	生産	土師器・須恵器、伊倉刀を打つ
38	325	印鑰神社古墳	宮原　土井内	古墳	古墳	円筒埴輪・須恵器・土師器出土
39	327	禮社	宮原　禮社	弥生	包蔵地	弥生土器散布
40	28	上栗山	石貫　上栗山	古墳	包蔵地	土師器・須恵器多数及び石器
41	106	岩原	富尾　岩原	古墳	包蔵地	富尾の北、完形須恵器・土師器多数出土
42		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
43	105	富尾浦谷横穴群	富尾　辻・浦谷	古墳	古墳	Ａ群２基、Ｂ群東裾に10数基、完形が多い
44	104	富尾原横穴群Ａ	富尾　原	古墳	古墳	Ａ群富尾天満南裾13基、装飾２基、Ｂ群10数基
45	113	富尾中尾横穴群	富尾　中尾	古墳	古墳	
46	99	富尾いたび横穴群	富尾　居柊	古墳	古墳	13基崖下に北面する
47		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
48	100	大塚・惣萩	立願寺　大塚など	弥生・古墳	包蔵地	弥生、土師器・須恵器片散布する
49	101	冷水横穴群	富尾　冷水	古墳	古墳	冷水台地の北、17基か不明
50	96	小塚古墳	立願寺　大塚	古墳	古墳	大円墳、保存良好
51	102	冷水塚古墳	富尾　冷水	古墳	古墳	円墳、冷水台地上、舟形石棺をも現在なし
52	225	池田地下式横穴	岩崎　池田	古墳	古墳	
53	223	岩崎古墳	岩崎　池田	古墳	古墳	菅原神社神体とする、箱棺か
54	224	岩崎古墳参考地	岩崎　池田	古墳	古墳	部落東端、円墳形、天満宮を祀る
55	394	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
56	395	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
57	125	元玉名横穴群	玉名　実極田	古墳	古墳	風化、２基
58	123	絵下経塚古墳	玉名　絵下	古墳	古墳	玉名大神宮裏山にあり、封土・周溝あり
59	122	小路古墳	玉名　小路	古墳	古墳	27mの山上にあった。他へ復元。出土品市指定
60		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
61		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
62		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
63	121	馬出古墳（１～２号）	玉名　馬出	古墳	古墳	円墳、横穴式、舟形・箱式石棺、出土品市指定
64	396	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
65	397	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
66		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
67	118	永安寺東古墳	玉名（通称永安寺）	古墳	古墳	横穴複式、円・三角・舟・馬を描く
68	117	永安寺西古墳	玉名（通称永安寺）	古墳	古墳	横穴単式、円文線刻
69	116	岡箱式石棺群	玉名　上原	弥生	埋葬	妙修寺の基地内３基・２基保存
70	398	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
71	109	大坊古墳	玉名　出口	古墳	古墳	横穴２室、三角連続彩色あり
72	108	西原古墳参考地	玉名　西原	古墳	古墳	玉名山西端部、楕円状の封土
73		名称不明				玉名市遺跡地図にあり
74	390	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
75	391	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
76	50	上小田宮の前	上小田　宮の前など	弥生	包蔵地	弥生土器・石斧・土師器・須恵器
77	139	徳丸古墳群	上小田　下徳丸など	古墳	古墳	前方後円墳３基並列、舟形石棺1
78	393	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
79	126	上小田古屋敷	上小田　古屋敷	縄文～中世	包蔵地	土師器・須恵器片散布
80	127	下小田西丸塚	下小田　陣の浦	古墳	古墳	五輪塔部分あり、中世墳墓か
81	138	両迫間日渡（玉名平野条里）	両迫間　日渡	弥生・古墳	包蔵地	弥生土器・土師器・須恵器包含、水田中
82	133	山下古墳・山下古墳碑	山部田　山下	古墳	古墳	前方後円墳３基並列、舟形石棺１
83	134	高城	下　高城	古墳	包蔵地	土師器・須恵器・青磁片少量散布
84	419	名称不明				玉名市遺跡地図にあり
85	482	柳町	川崎　フケ・田中・尾畑	縄文～平安	集落	県調査、文字資料

＊ここで使用したデータは『熊本県遺跡地図』1994と『玉名市歴史資料集成第八集　菊池川下流域遺跡詳細分布図　玉名市　図１・２』1991をもとに作成している。

第２図　城ヶ辻古墳群周辺古地図（１／10000）

引用文献『玉名市史　資料篇１　絵図・地図』玉名市史編集委員会　玉名市　95頁抜粋

四　玉名郡村図

18～66　玉名郡村図（玉名市関係旧村図）

玉名郡村図

明治十二（一八七九）年から明治十五年（一八八二）年

熊本県立図書館

二-５-〇二九五、以下（各旧村の目録番号は解説の文中に別表とする）

高瀬町図、以下（玉名市旧村図）

三二×四七㎝、以下（各旧村図の法量は解説の文中に別表とする）

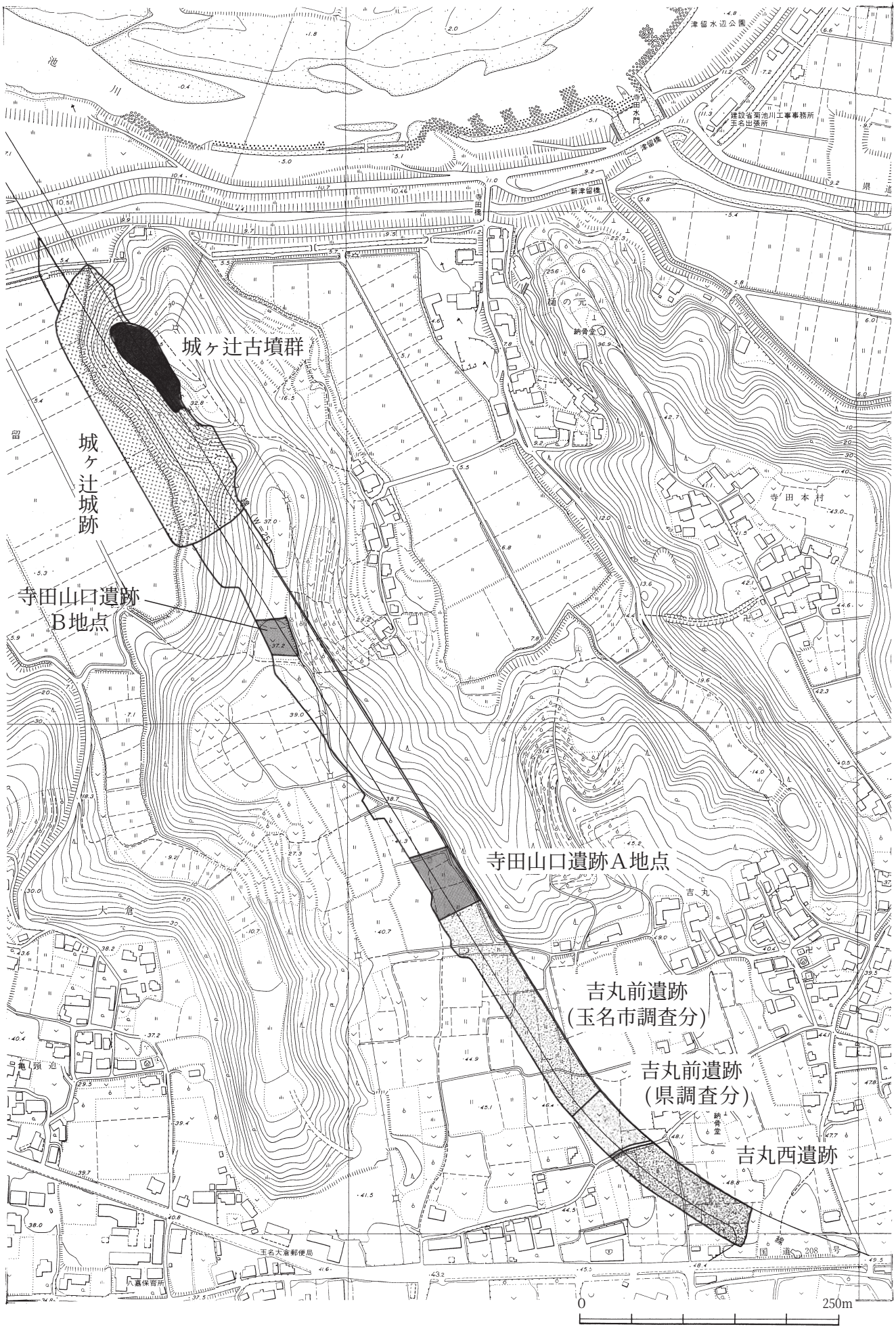
「郡村図」は、『熊本県古地図目録』（『熊本県史料集成』所収）の解題、森下功「明治前期地図について」によると、明治初年に編纂された郡村地誌の附図である。地誌の編纂は明治五（一八七二）年の太政官布告によって着手され、ついで明治七年十一月には「村図ハ例則中掲載セスト雖モ便宜ノタメ可成ハ製図致シ、一町六分ノ割ヲ以取調、字地・元標・社寺等記載スヘシ」として、村図と名勝真景図の提出を希望している。次いで編集の業は同八年九月には太政官から修史局の所管に移され、翌年には内務省地理局に移管されて村図の作成が行われた。地図は地誌編集とともに庶務課地誌調掛で測量作成されたが、調掛に熟練者がなく支障が多いため、同十四（一八八一）年には土木課に依頼して作成された。「玉名郡村図」についても、玉名郡図とともに各村図が右のような過程を経て作成されたであろうが、「玉名郡誌」の起稿が明治十二年四月であり、また「玉名郡村誌稿本」の起稿が明治十二（一八七九）年から始まり、明治十五年に定稿が作成された。さらに明治十六年七月の熊本県知事富岡敬明から地理局長宛の進達書案（熊本県立図書館蔵）に「一玉名郡誌一冊、一同郡全図壱葉、一同郡村誌五冊、一同郡村図百七拾弐葉、一同郡古城跡略図並真景図共拾五葉、右調整候ニ付、本日通達便より則差出候也」とあって、郡村誌と共に郡図（一枚）、郡村図（一七二葉）を調整して地理局に提出したのである。これらのことから、掲載の「玉名郡村図」は明治十二年から作成に着手し、明治十五年に完成させた図であるといえよう。しかし今日では「玉名郡図」一葉は残存しておらず、「玉名郡村図」一七二葉のすべてが熊本県立図書館に所蔵されている。玉名市史の関係図の目録番号と法量は、次表の通りである。（表略）

製図の方法については、「玉名郡村誌」の凡例に、「村図ハ例ニヨリ一町六分ノ割ヲ以テ調整スト雖モ、土地広濶ノ小天村外二一か村ハ一町三分ノ割ヲ以テ、尤分割ハ該村図ニ記載ス」とあるので、一町を六分の縮尺、即ち六千分一に、広い村二一か村は一町を三分の縮尺、即ち一万二千分一の縮小をもって、一間を六尺と表し（玉名市域では山田村・石貫村・三津川村）、タテ三二×四七㎝の用紙を多く使用して描図した。そしてその村図内に、字名と字境、社地、寺地、宅地、墓地、耕地、山林・原野、堤塘、道路、河溝、水路、堀を彩色して区分（河溝、水路、堀は水として同一色）し、また×をもって村の元標の位置を示すようにして作図されているので、明治初期の当時の村の姿の概観を知ることが出来る。それらの各村々の項目内容については、『郡村誌』（『玉名市史　資料篇２　地誌』所収）に記載されているので、両者を併用すると、なおさら明確に村の姿が判明する。なお本『玉名市史　資料篇１　絵図・地図』には、玉名市関係の旧村図を掲載するとともに、その村図のトレース版をも掲載した。トレース版の図版の作成方法は各村図の凡例を参照していただきたい。また下村、三津川村、石貫村、築地村の四か村については、小字名を明確にする意味で部分的に拡大した図版とした。

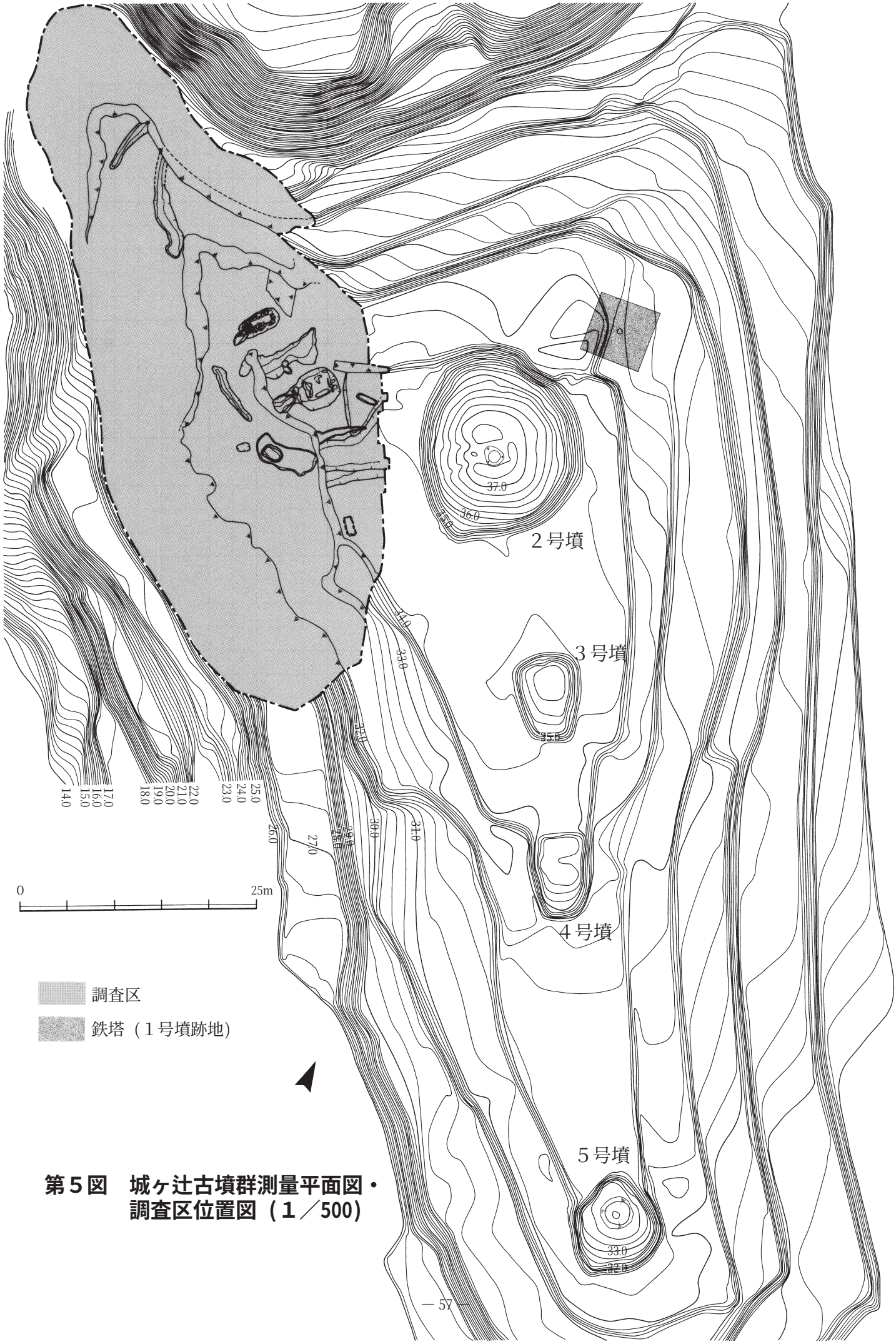
（森山恒雄）

引用文献『玉名市史　資料篇１　絵図・地図』
玉名市史編集委員会　玉名市
２０３・２０４頁　抜粋

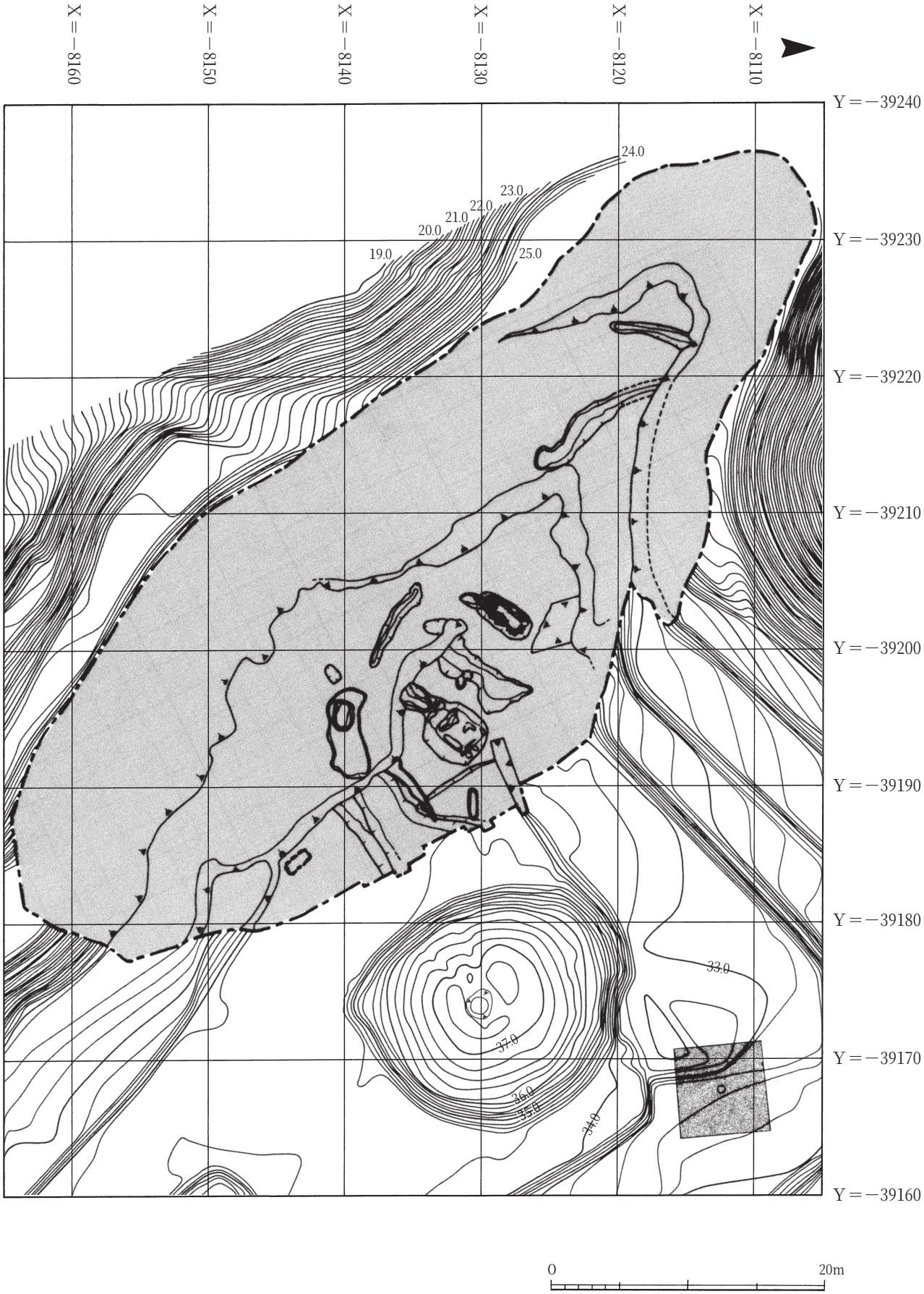
第３図　城ヶ辻古墳群測量平面図（１／1500）



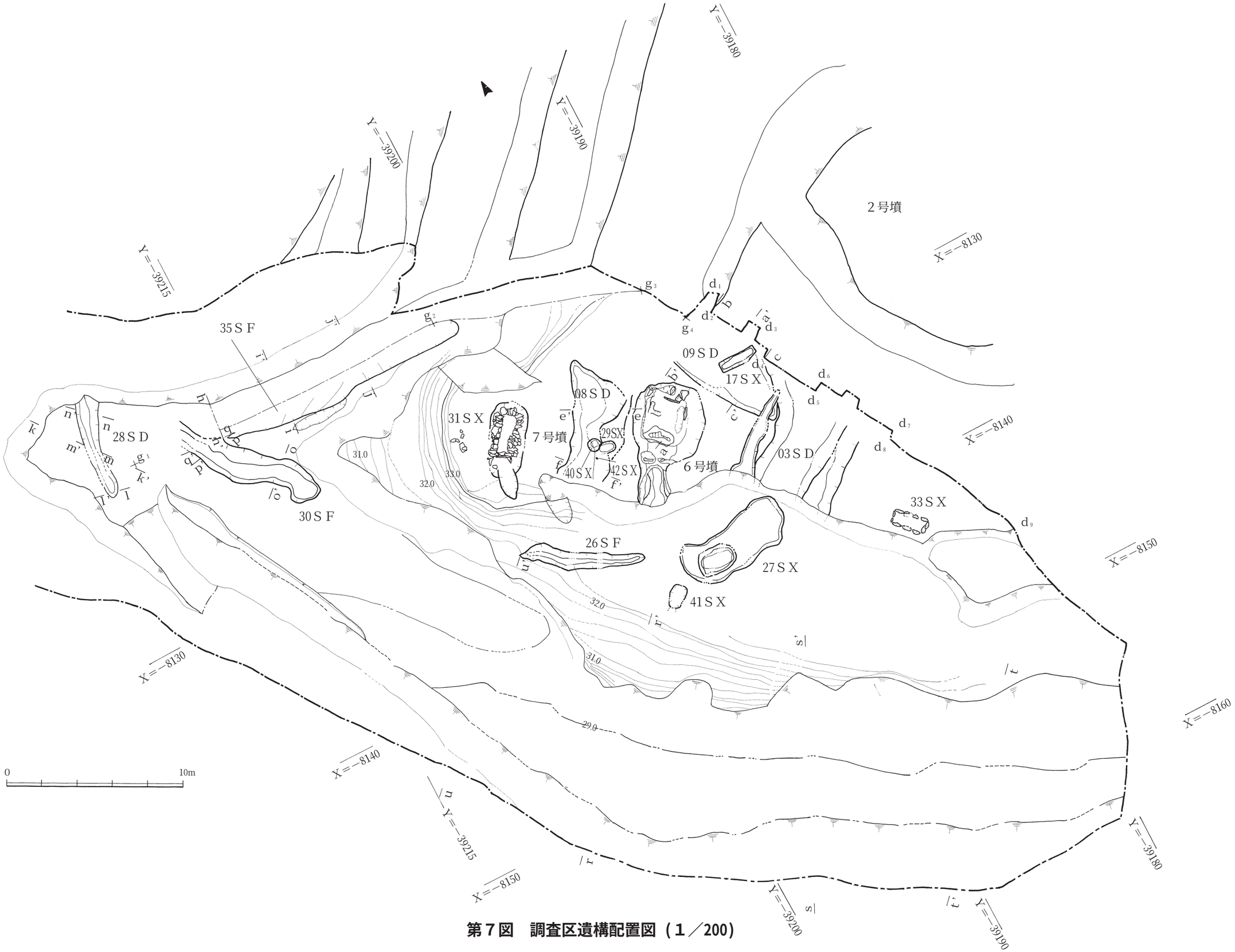
第４図　玉名バイパス計画路線内遺跡位置図（菊池川左岸）（１／5000）



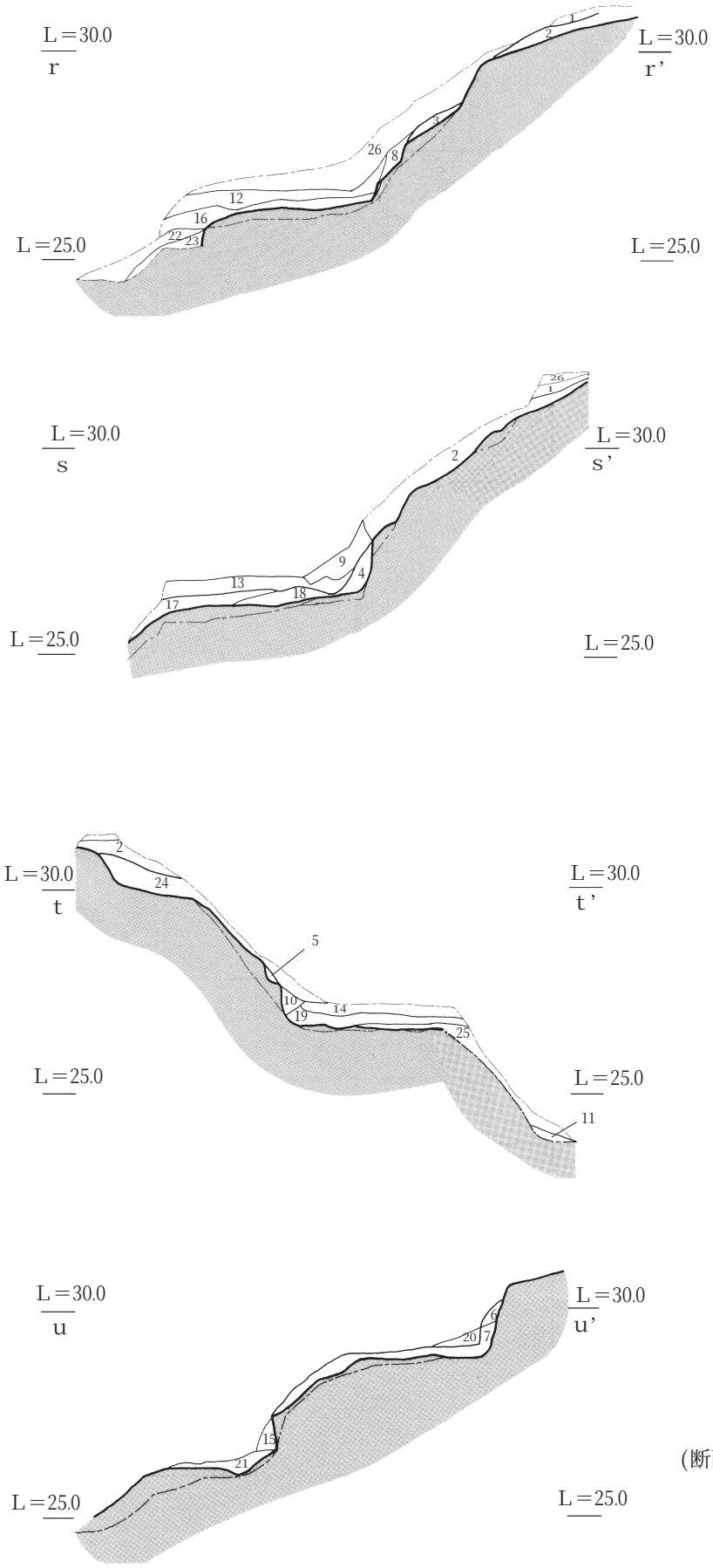
第5図　城ヶ辻古墳群測量平面図・調査区位置図（1／500）



第６図　調査区グリッド平面図（１／400）



第７図　調査区遺構配置図（１／200）

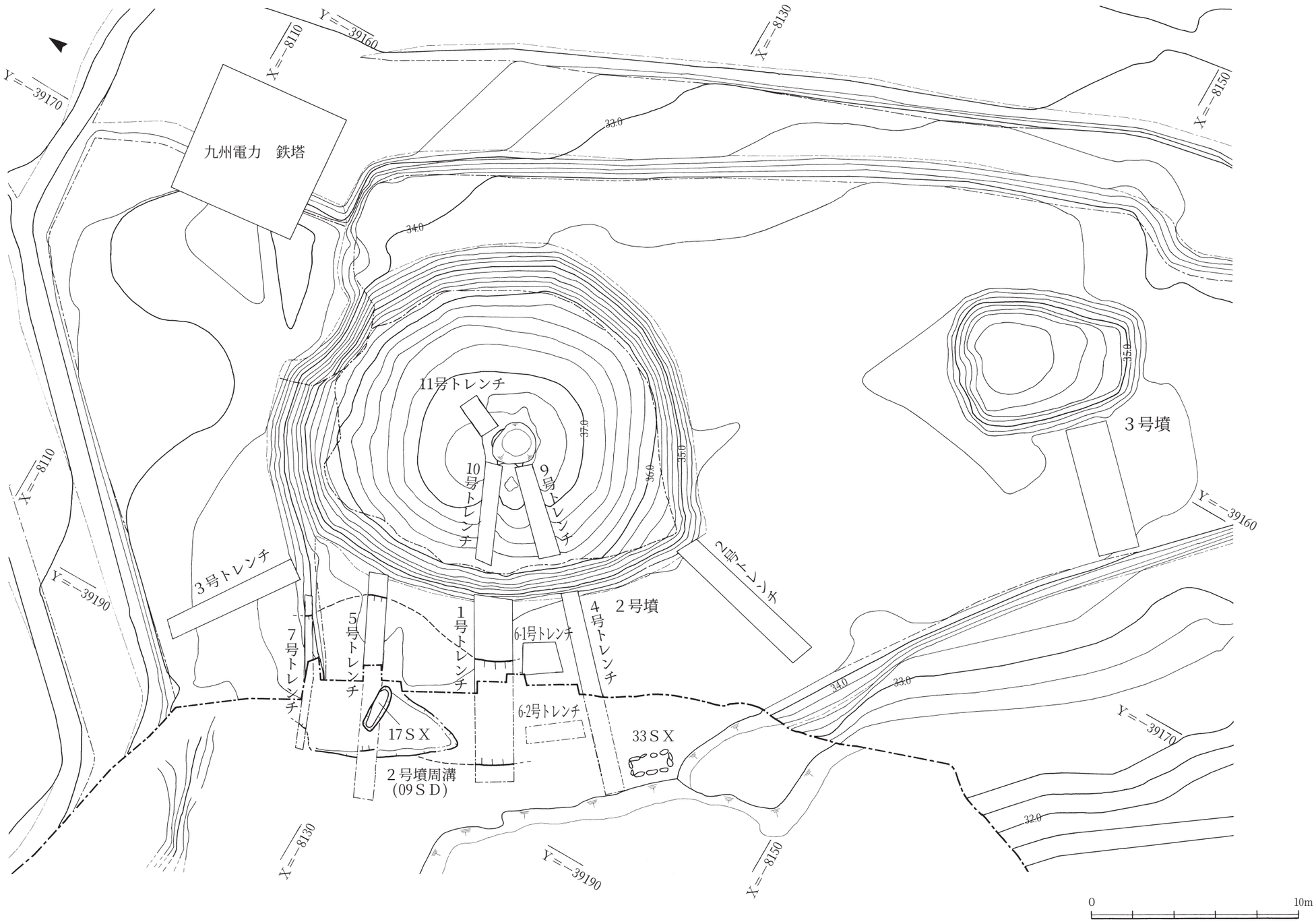


（土層）
1層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。
７号墳流入土。
(S-25)の２次堆積層か。
2層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
中世遺物包含。
3層（Hue7.5YR6/4）淡橙色粘質土。
4層（Hue10YR5/2）灰黄褐色粘質土。
軽石堆積層。
5層（Hue10YR5/3）淡黄褐色土。
6層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。
7層（Hue10YR4/3）灰黄褐色粘質土。
※３～７層は同一系統の土層。
8層（Hue10YR5/6）黄褐色土。
9層（Hue10YR5/6）黄褐色土。軽石包含。
10層（Hue10YR5/2）灰黄褐色土。灰土包含。
11層（Hue10YR6/1）褐灰色土。軽石包含。
※８～11層は同一系統の土層。
12層（Hue10YR5/4）淡黄褐色土。
13層（Hue10YR5/3）淡黄褐色土。軽石包含。
14層（Hue10YR5/4）淡黄褐色土。小レキ包含。
15層（Hue10YR5/2）灰黄褐色土。
※12～15層は同一系統の土層。
16層（Hue10YR5/3）淡黄褐色土。客土による耕作土。
17層（Hue10YR4/3）淡黄褐色土。軽石包含。耕作土。
18層（Hue10YR4/2）灰黄褐色土。軽石包含。耕作土。
19層（Hue10YR4/4）褐色土。小レキ包含。耕作土。
20層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
21層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。凝灰岩包含。耕作土。
※16～21層は同一系統の土層（耕作土）。
22層（Hue10YR4/4）褐色土。
23層（Hue10YR4/1）褐灰色土。
24層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
25層（Hue10YR6/2）灰黄褐色土。軽石片包含。

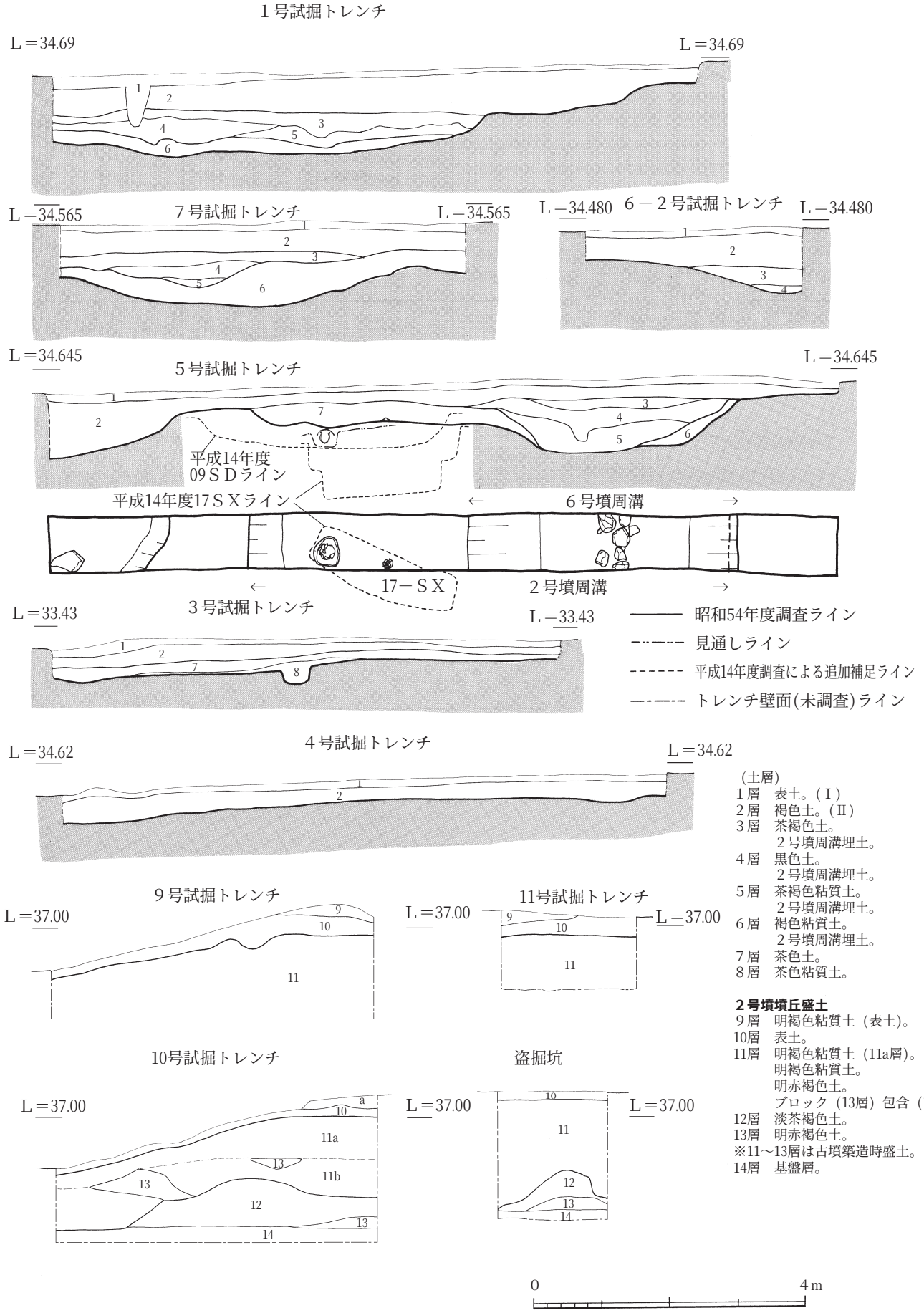
(断面ポイントは第７図中に記載。)

0　8ｍ

第８図　調査区南斜面土層断面図（１／160）



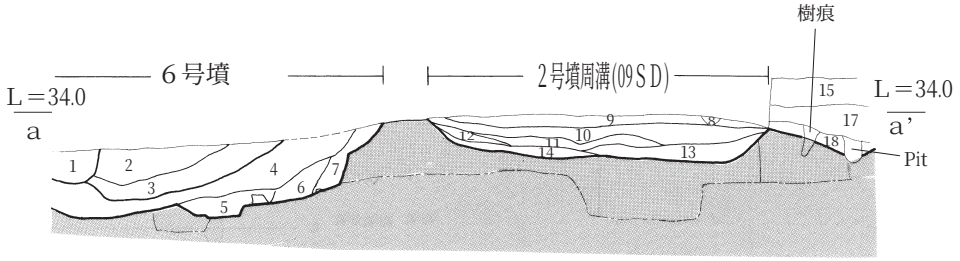
第９図　２号墳・３号墳現況及び周溝検出平面図（１／200）



（土層）
１層　表土。（Ⅰ）
２層　褐色土。（Ⅱ）
３層　茶褐色土。
　　２号墳周溝埋土。
４層　黒色土。
　　２号墳周溝埋土。
５層　茶褐色粘質土。
　　２号墳周溝埋土。
６層　褐色粘質土。
　　２号墳周溝埋土。
７層　茶色土。
８層　茶色粘質土。

２号墳墳丘盛土
９層　明褐色粘質土（表土）。
10層　表土。
11層　明褐色粘質土（11a層）。
　　明褐色粘質土。
　　明赤褐色土。
　　ブロック（13層）包含（11b層）。
12層　淡茶褐色土。
13層　明赤褐色土。
※11～13層は古墳築造時盛土。
14層　基盤層。

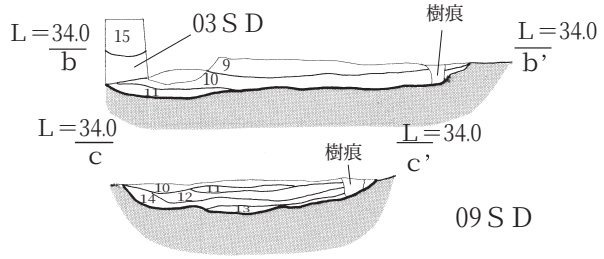
第10図　昭和54年度確認調査トレンチ平面・断面図（１／80）

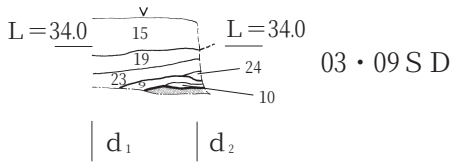


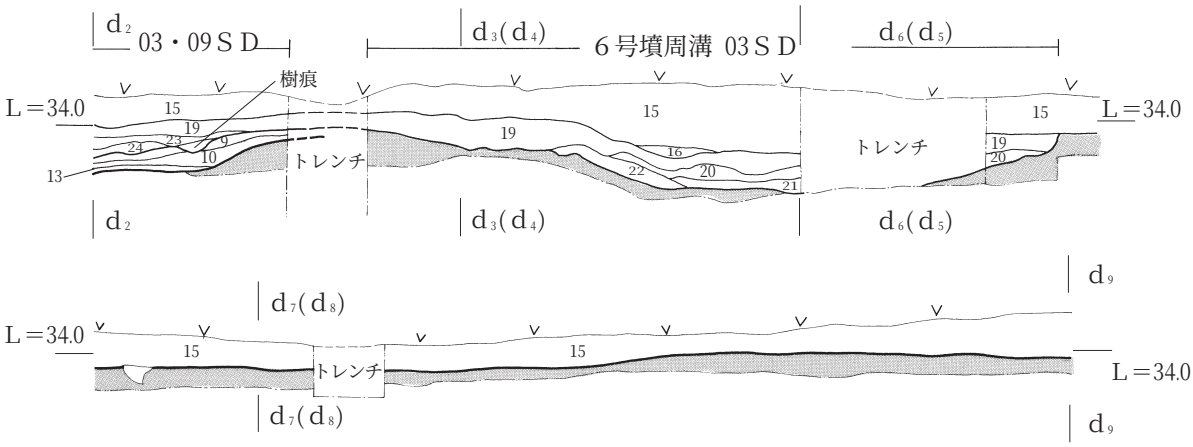
（土層）

01ＳＸ：１層　カクラン土層。
10ＳＸ：２層（Hue7.5YR4/3）褐色粘質土。赤褐色粘土ブロック・石材片包含。
　　３層（Hue7.5YR4/4）褐色土。小レキ・土器粒・石材片包含。
11ＳＸ：４層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。赤褐色土・灰色土ブロック・小レキ・土器粒子包含。
　　５層（Hue10YR4/4）褐色土。石材片・炭化物粒子・白灰色・赤褐色土小ブロック包含。
　　６層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。白灰色粘土ブロック・マンガン粒子包含。
　　７層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。白灰色土ブロック包含。
09ＳＤ：８層（Hue10YR3/2）黒褐色粘質土。
　　９層（Hue7.5YR4/3）褐色粘質土。小レキ・炭化物・焼土粒子包含。
　　10層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。小レキ・炭化物・土器粒子包含。
　　11層（Hue10YR5/4）淡黄褐色土。鉄分・白灰色土ブロック・マンガン・炭化物粒子包含。
　　12層（Hue7.5YR4/6）褐色粘質土。土器・炭化物粒子包含。
　　13層（Hue7.5YR5/4）淡褐色土。土器・炭化物粒子・赤褐色土・黒色土小ブロック包含。
　　14層（Hue7.5YR4/3）褐色土。炭化物・マンガン・鉄分粒子包含。
※　15層　表土（耕作土）
　　16層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。
03ＳＤ：17層：19～24層に対応か。
　　18層：19～24層に対応か。
　　19層：03ＳＤ上層埋土。
　　20層：23層と同一層。
　　21層：24層と同一層。
　　22層：03ＳＤ埋土か。
　　23層（Hue7.5YR4/6）暗褐色粘質土。
　　24層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。
08ＳＤ：25層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。石灰岩風化土ブロック包含。
　　26層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。石灰岩風化土小ブロック包含。
　　27層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。
　　28層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。石灰岩風化土包含。28'は暗褐色粘質土ブロック。
　　29層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。
　　30層（Hue10YR6/3）淡黄橙色粘質土。
　　31層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
　　32層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。石灰岩風化土包含。
　　33層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
　　34層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。29層と同一か。

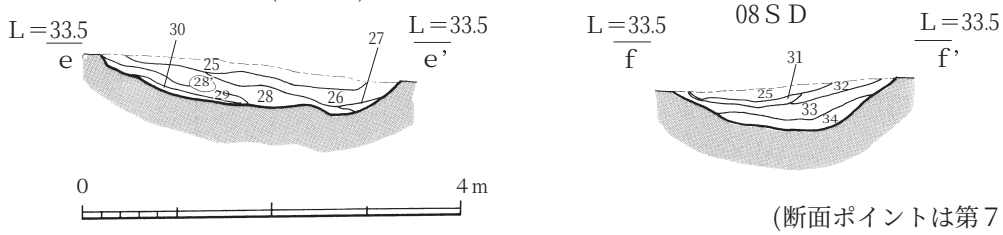
６号墳周溝（03ＳＤ）・２号墳周溝（09ＳＤ）







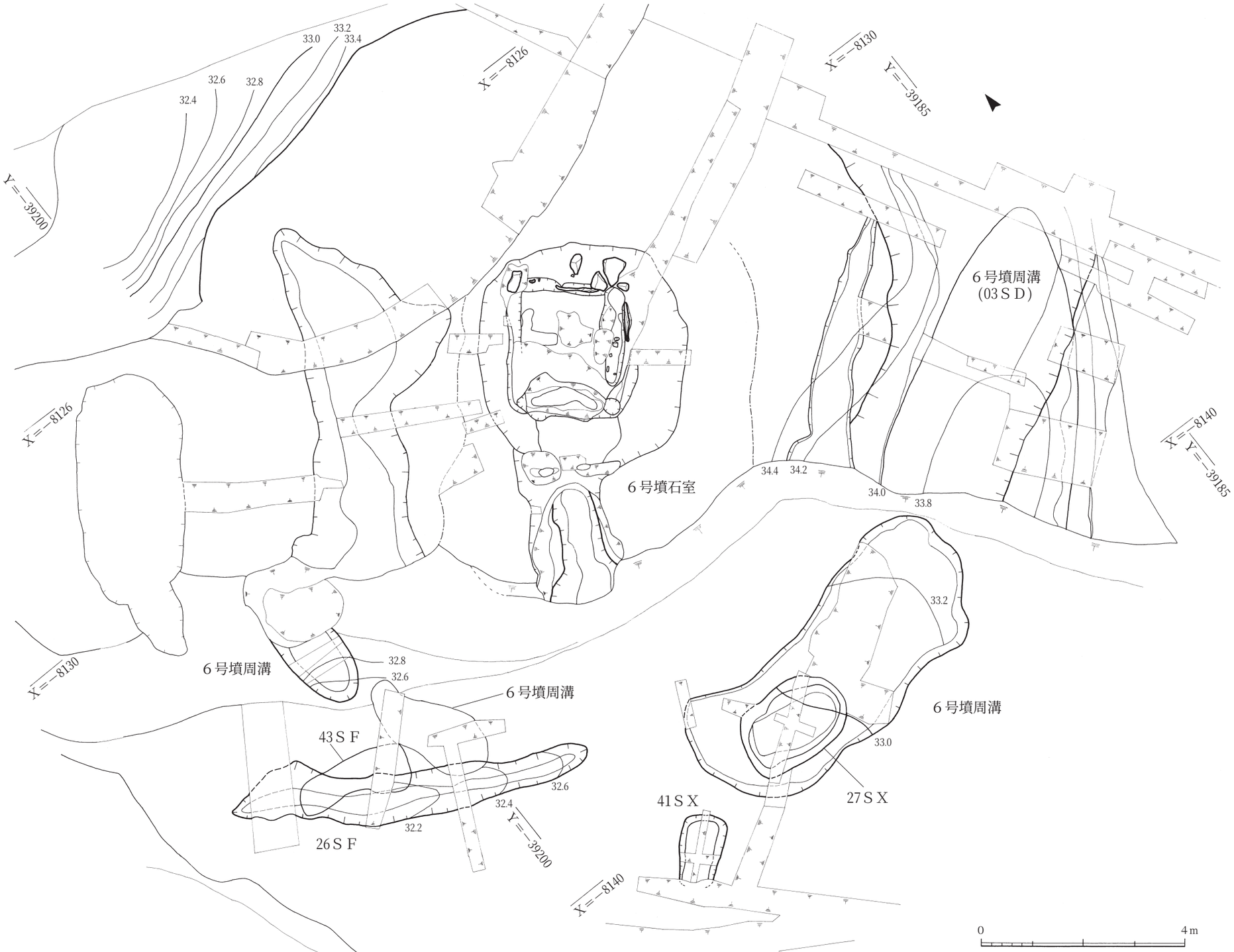
７号墳周溝（08ＳＤ）



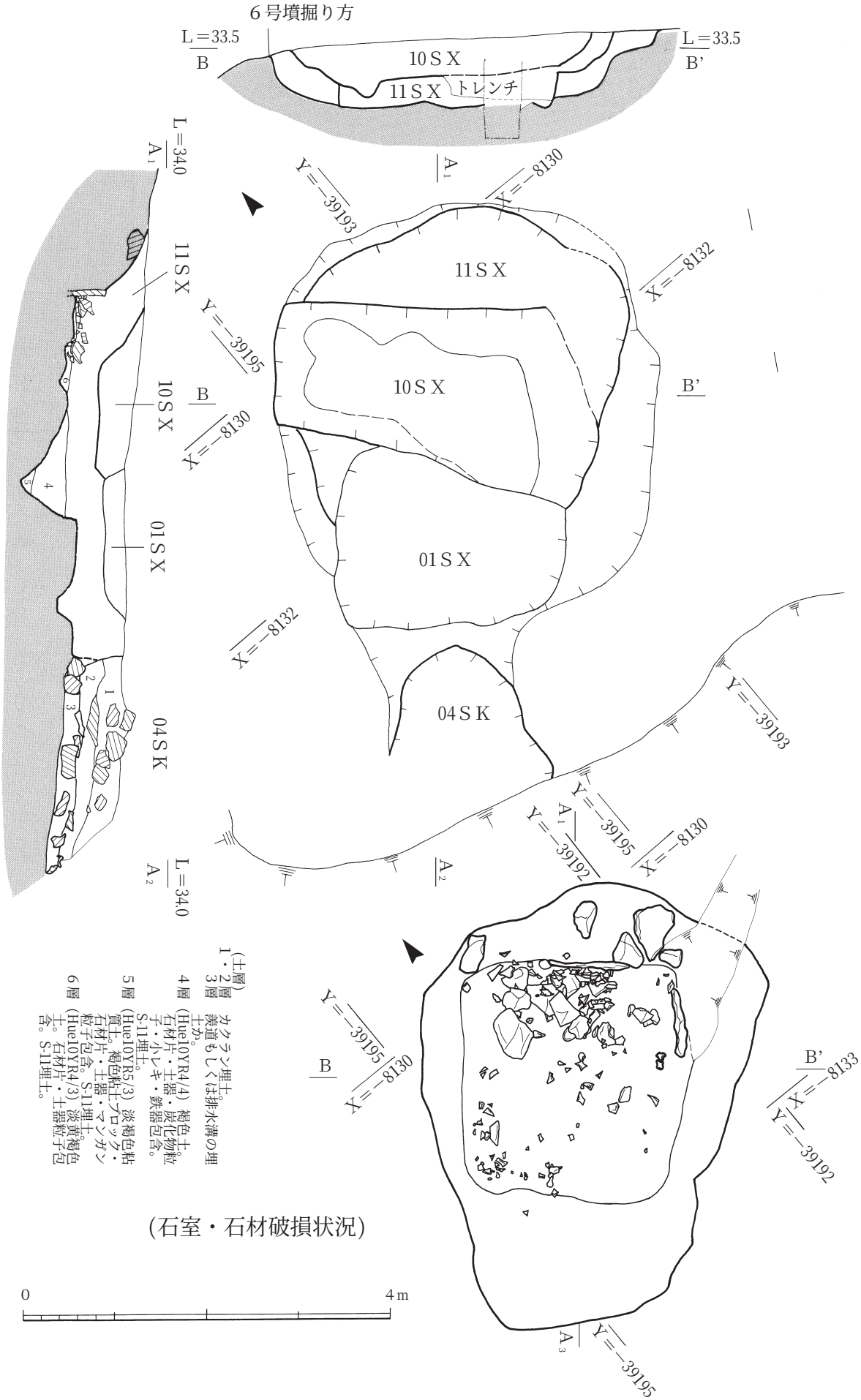
（断面ポイントは第７図中に記載。）

第11図　２号墳周溝（09ＳＤ）・６号墳周溝（03ＳＤ）・７号墳周溝（08ＳＤ）断面図（１／80）

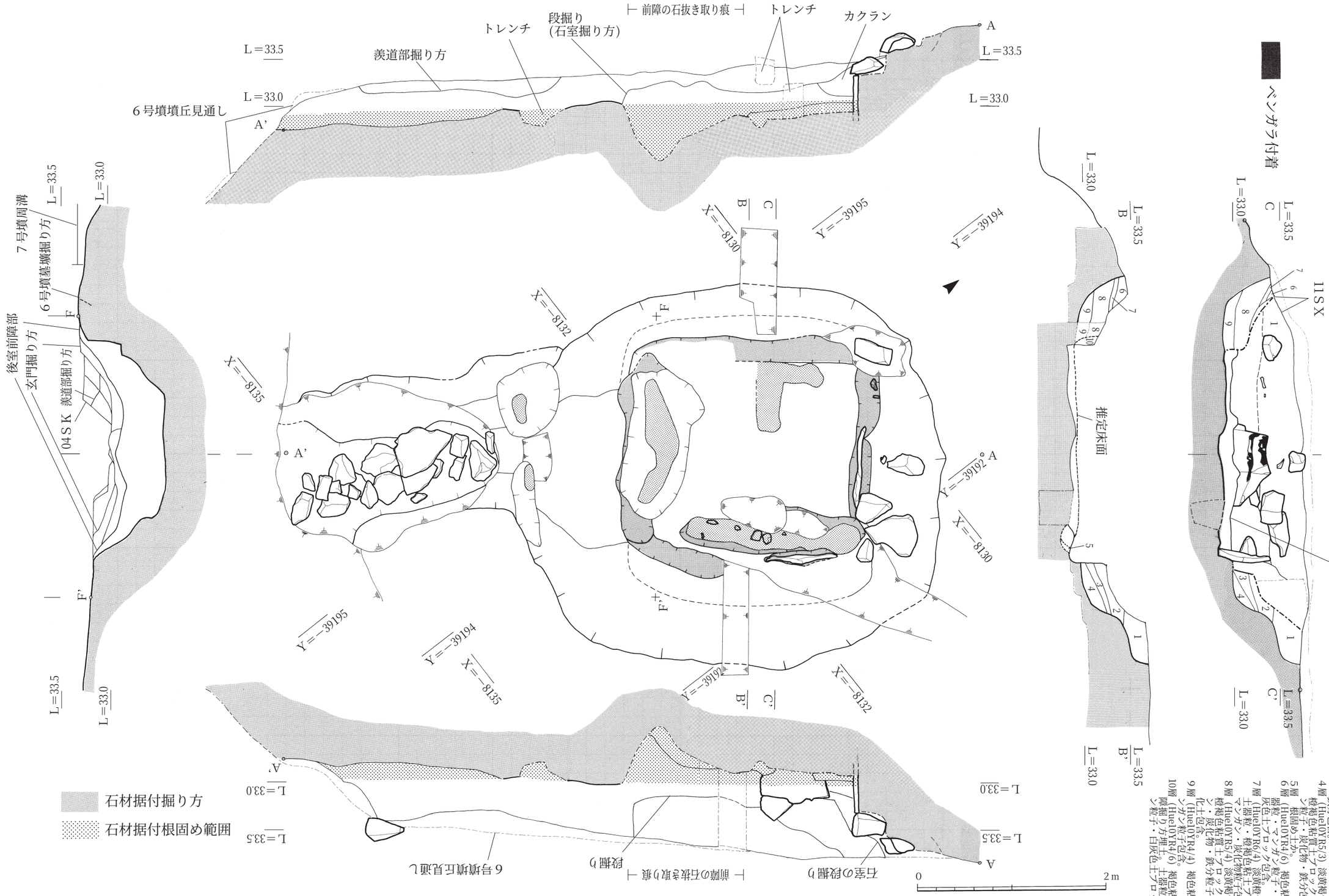
第12図　6号墳平面図（1／160）



第13図　6号墳調査区平面図（1／80）

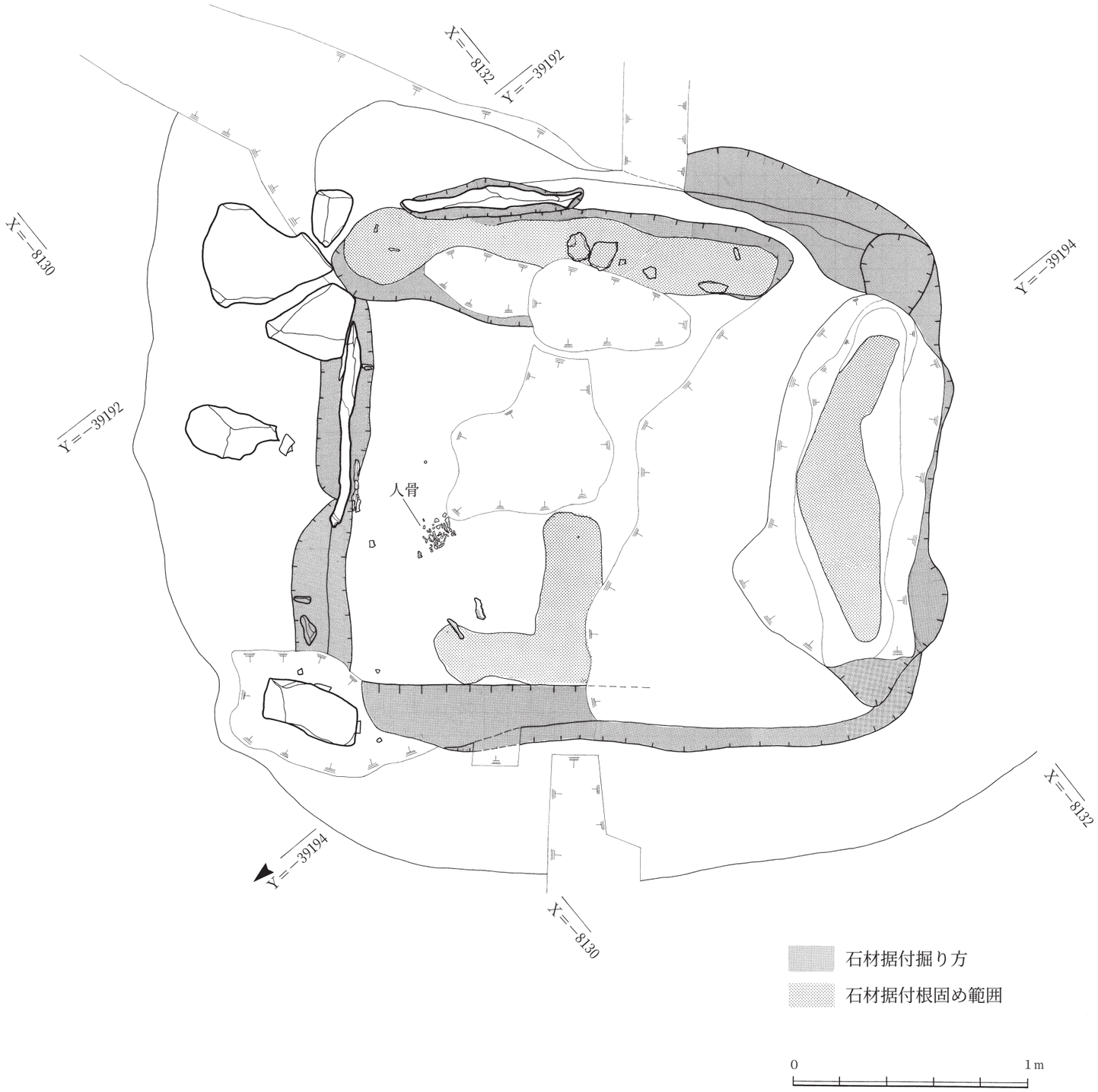


第14図　6号墳撹乱坑平面・断面図（1／60）

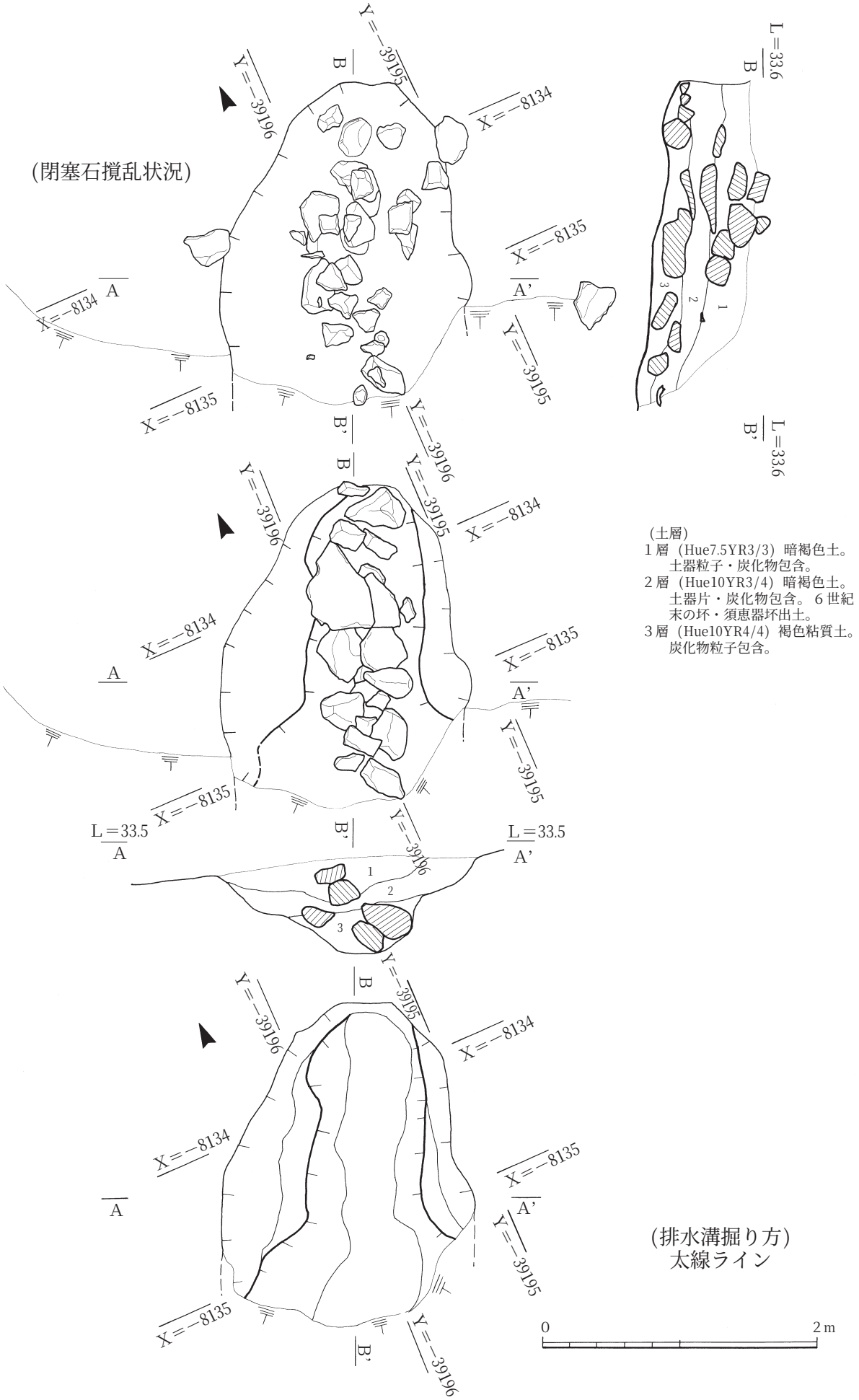


(土層)
1層 (hue7.5YR5/4) 淡褐色粘質土。白灰色土ブロック・鉄分・マンガン粒子包含。
2層 (hue10YR5/4) 淡黄褐色粘質土。白灰色土ブロック・炭化物・マンガン粒子・鉄分包含。
3層 (hue10YR4/4) 褐色粘質土。白灰色土ブロック・マンガン粒子・鉄分包含。
4層 (hue10YR5/3) 淡黄褐色粘質土。橙褐色粘質土ブロック・マンガン粒子・炭化物・鉄分包含。
5層 (hue10YR4/6) 褐色粘質土。土器・マンガン粒子・鉄分・白灰色土ブロック包含。
6層 (hue10YR6/4) 淡黄橙色粘質土。土器粒・橙褐色粘土ブロック・マンガン・炭化物粒子包含。
7層 (hue10YR5/4) 淡黄褐色粘質土。橙褐色粘質土ブロック・マンガン・炭化物・鉄分粒子・軽石風化土包含。
8層 (hue10YR4/4) 褐色粘質土。マンガン粒子包含。
9層 (hue10YR4/6) 褐色粘質土。褐色粘質土ブロック・土器粒・マンガン粒子・白灰色土ブロック包含。
10層 (hue10YR4/6) 土器粒・石障掘り方埋土。

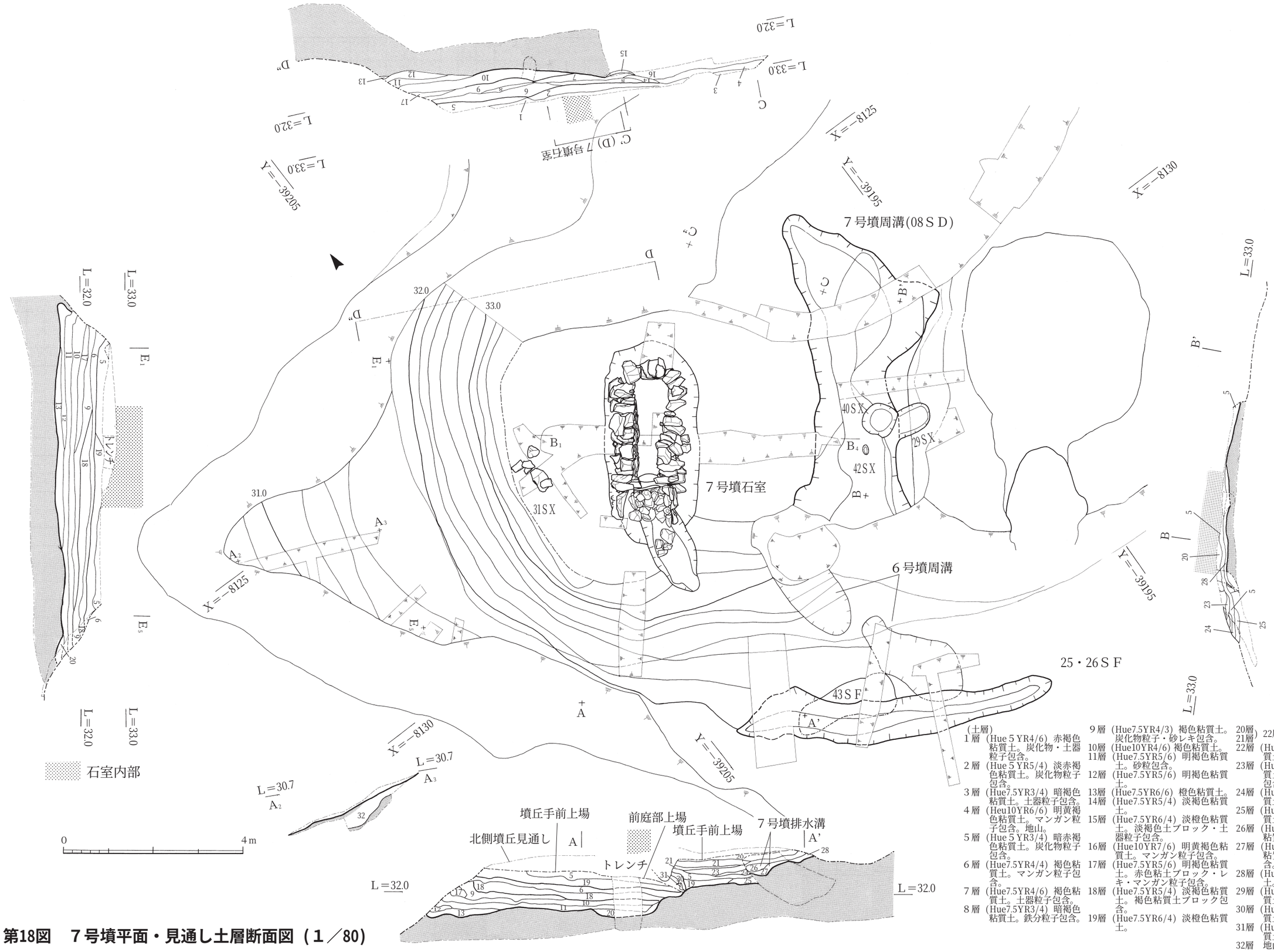
第15図　６号墳石室平面・立面・断面図（１／40）



第16図　６号墳石室内遺物出土状況平面図（１／20）

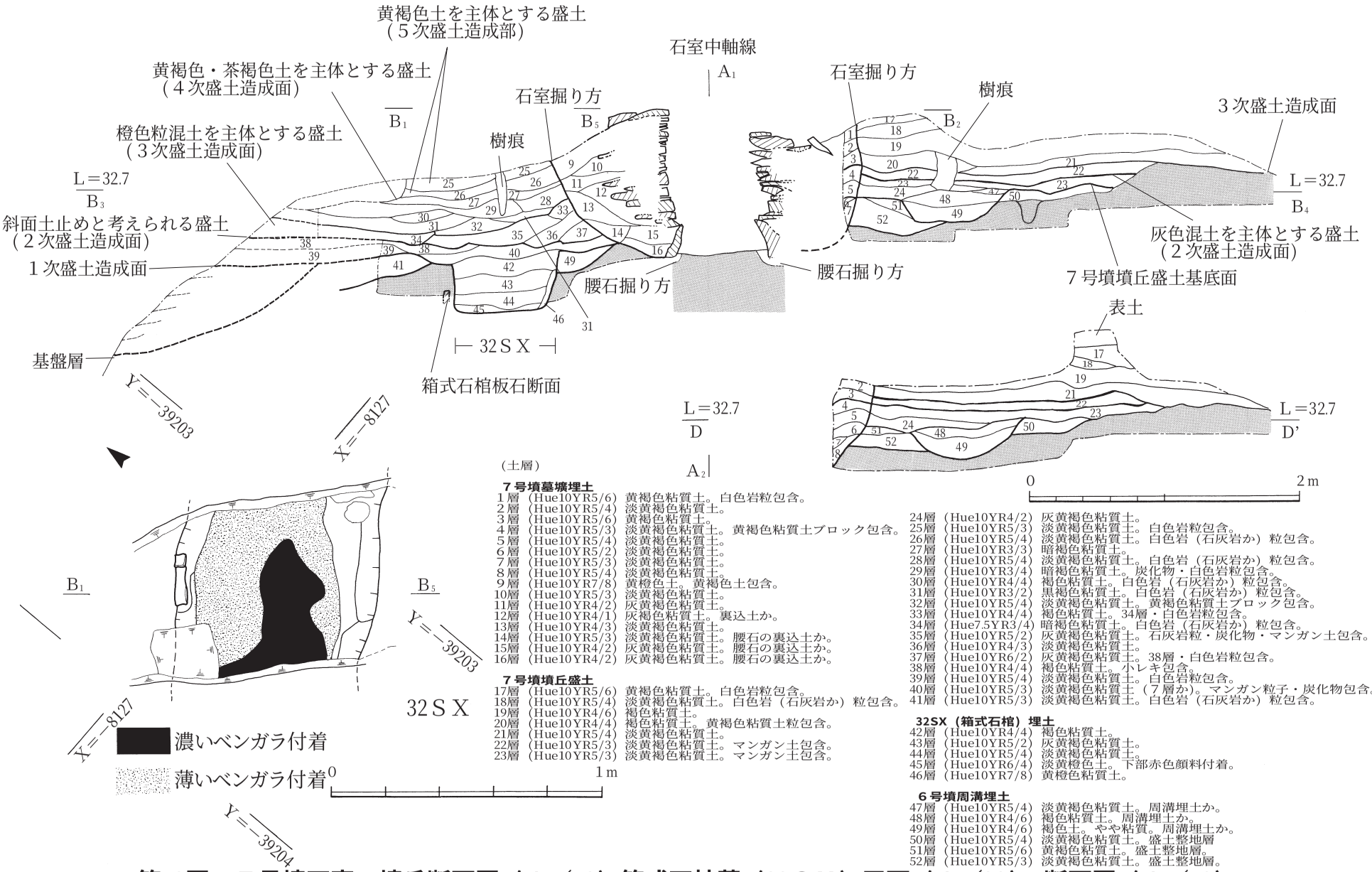


第17図　６号墳排水溝（04ＳＫ）平面・断面図（１／40）



（土層）
1層（Hue 5 YR4/6）赤褐色粘質土。炭化物・土器粒子包含。
2層（Hue 5 YR5/4）淡赤褐色粘質土。炭化物粒子包含。
3層（Hue7.5YR3/4）暗褐色粘質土。土器粒子包含。
4層（Heu10YR6/6）明黄褐色粘質土。マンガン粒子包含。地山。
5層（Hue 5 YR3/4）暗赤褐色粘質土。炭化物粒子包含。
6層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。マンガン粒子包含。
7層（Hue7.5YR4/6）褐色粘質土。土器粒子包含。
8層（Hue7.5YR3/4）暗褐色粘質土。鉄分粒子包含。
9層（Hue7.5YR4/3）褐色粘質土。炭化物粒子・砂レキ包含。
10層（Hue10YR4/6）褐色粘質土。
11層（Hue7.5YR5/6）明褐色粘質土。砂粒包含。
12層（Hue7.5YR5/6）明褐色粘質土。
13層（Hue7.5YR6/6）橙色粘質土。
14層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。
15層（Hue7.5YR6/4）淡橙色粘質土。淡褐色土ブロック・土器粒子包含。
16層（Hue10YR7/6）明黄褐色粘質土。マンガン粒子包含。
17層（Hue7.5YR5/6）明褐色粘質土。赤色粘土ブロック・レキ・マンガン粒子包含。
18層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。褐色粘質土ブロック包含。
19層（Hue7.5YR6/4）淡橙色粘質土。
20層
21層）22層と同一か。
22層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。
23層（Hue7.5YR5/8）明褐色粘質土。赤色粒子・砂レキ包含。
24層（Hue7.5YR5/6）明褐色粘質土。小レキ包含。
25層（Hue7.5YR6/4）淡橙色粘質土。小レキ包含。
26層（Hue 5 YR5/4）淡赤褐色粘質土。雲母包含。
27層（Hue 5 YR5/6）明赤褐色粘質土。小レキ・雲母包含。
28層（Hue7.5YR7/6）橙色粘質土。白色粒子包含。
29層（Hue7.5YR5/8）暗褐色粘質土。
30層（Hue7.5YR5/6）明褐色粘質土。
31層（Hue7.5YR4/6）淡橙色粘質土。
32層　地山崩落土の可能性あり

第18図　７号墳平面・見通し土層断面図（１／80）



（土層）

７号墳墓壙埋土

1層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。白色岩粒包含。
2層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
3層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。
4層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロック包含。
5層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
6層（Hue10YR5/2）淡黄褐色粘質土。
7層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
8層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
9層（Hue10YR7/8）黄橙色土。黄褐色土包含。
10層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
11層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。
12層（Hue10YR4/1）灰褐色粘質土。裏込土か。
13層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
14層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。腰石の裏込土か。
15層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。腰石の裏込土か。
16層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。腰石の裏込土か。

７号墳墳丘盛土

17層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。白色岩粒包含。
18層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。
19層（Hue10YR4/6）褐色粘質土。
20層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。黄褐色粘質土粒包含。
21層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
22層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。マンガン土包含。
23層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。マンガン土包含。
24層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。
25層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。白色岩粒包含。
26層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。
27層（Hue10YR3/3）暗褐色粘質土。
28層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。
29層（Hue10YR3/4）暗褐色粘質土。炭化物・白色岩粒包含。
30層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。
31層（Hue10YR3/2）黒褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。
32層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。黄褐色粘質土ブロック包含。
33層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。34層・白色岩粒包含。
34層（Hue7.5YR3/4）暗褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。
35層（Hue10YR5/2）灰黄褐色粘質土。石灰岩粒・炭化物・マンガン土包含。
36層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
37層（Hue10YR6/2）灰黄褐色粘質土。38層・白色岩粒包含。
38層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。小レキ包含。
39層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。白色岩粒包含。
40層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土（７層か）。マンガン粒子・炭化物包含。
41層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。白色岩（石灰岩か）粒包含。

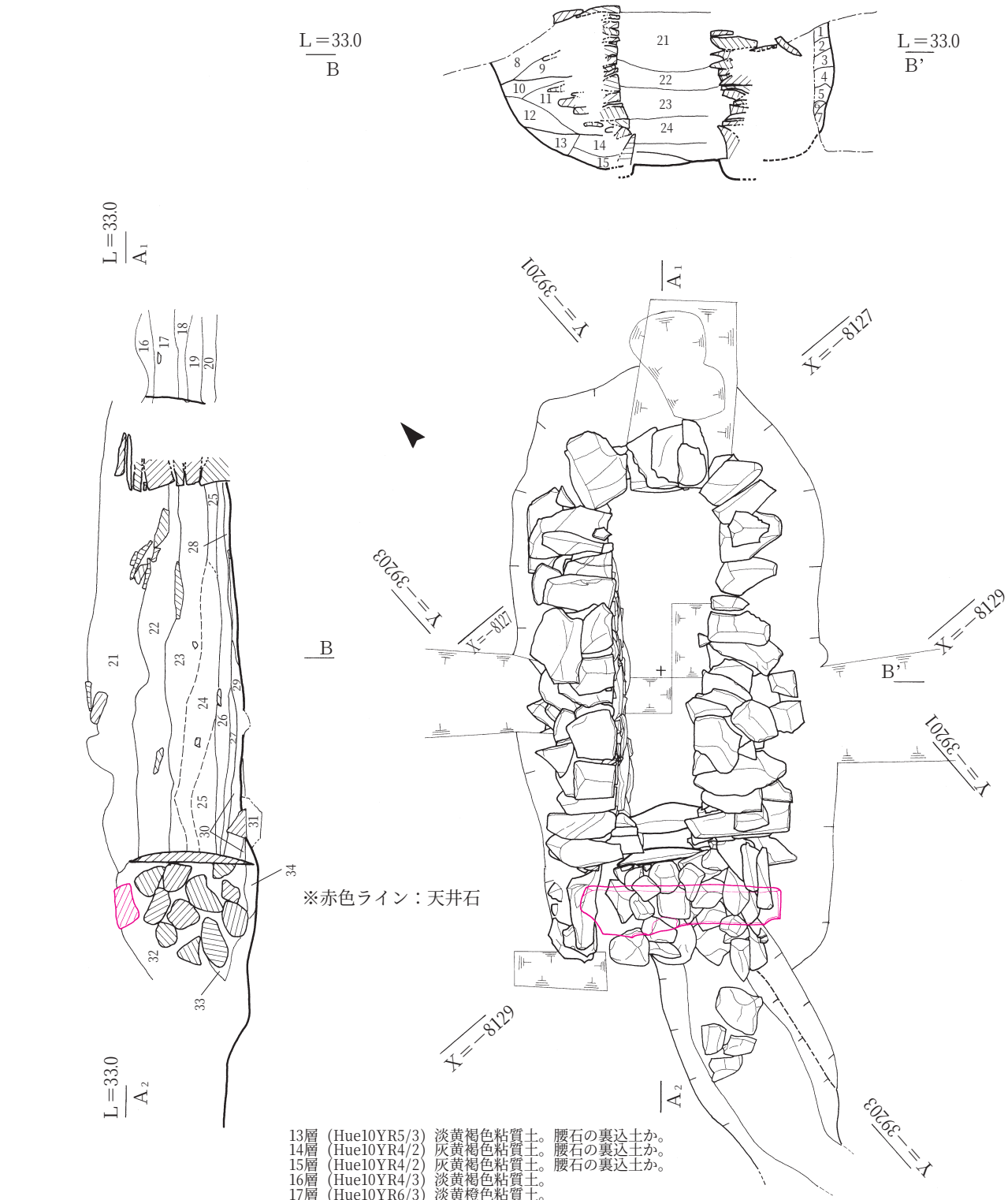
32SX（箱式石棺）埋土

42層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。
43層（Hue10YR5/2）灰黄褐色粘質土。
44層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
45層（Hue10YR6/4）淡黄橙色土。下部赤色顔料付着。
46層（Hue10YR7/8）黄橙色粘質土。

６号墳周溝埋土

47層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。周溝埋土か。
48層（Hue10YR4/6）褐色粘質土。周溝埋土か。
49層（Hue10YR4/6）褐色土。やや粘質。周溝埋土か。
50層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。盛土整地層
51層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。盛土整地層。
52層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。盛土整地層。

第19図　７号墳石室・墳丘断面図（１／40）箱式石棺墓（32ＳＸ）平面（１／20）・断面図（１／40）



（土層）

７号墳墓壙埋土

1層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。
2層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
3層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。
4層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
5層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。
6層（Hue10YR5/2）淡黄褐色粘質土。
7層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
8層（Hue10YR7/8）黄橙色土。
9層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。
10層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。
11層（Hue10YR4/1）褐灰色粘質土。
12層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
13層（Hue10YR5/3）淡黄褐色粘質土。腰石の裏込土か。
14層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。腰石の裏込土か。
15層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。腰石の裏込土か。
16層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
17層（Hue10YR6/3）淡黄橙色粘質土。
18層（Hue10YR4/4）褐色粘質土。
19層（Hue10YR5/6）黄褐色粘質土。
20層　地山。

７号墳石室内埋土

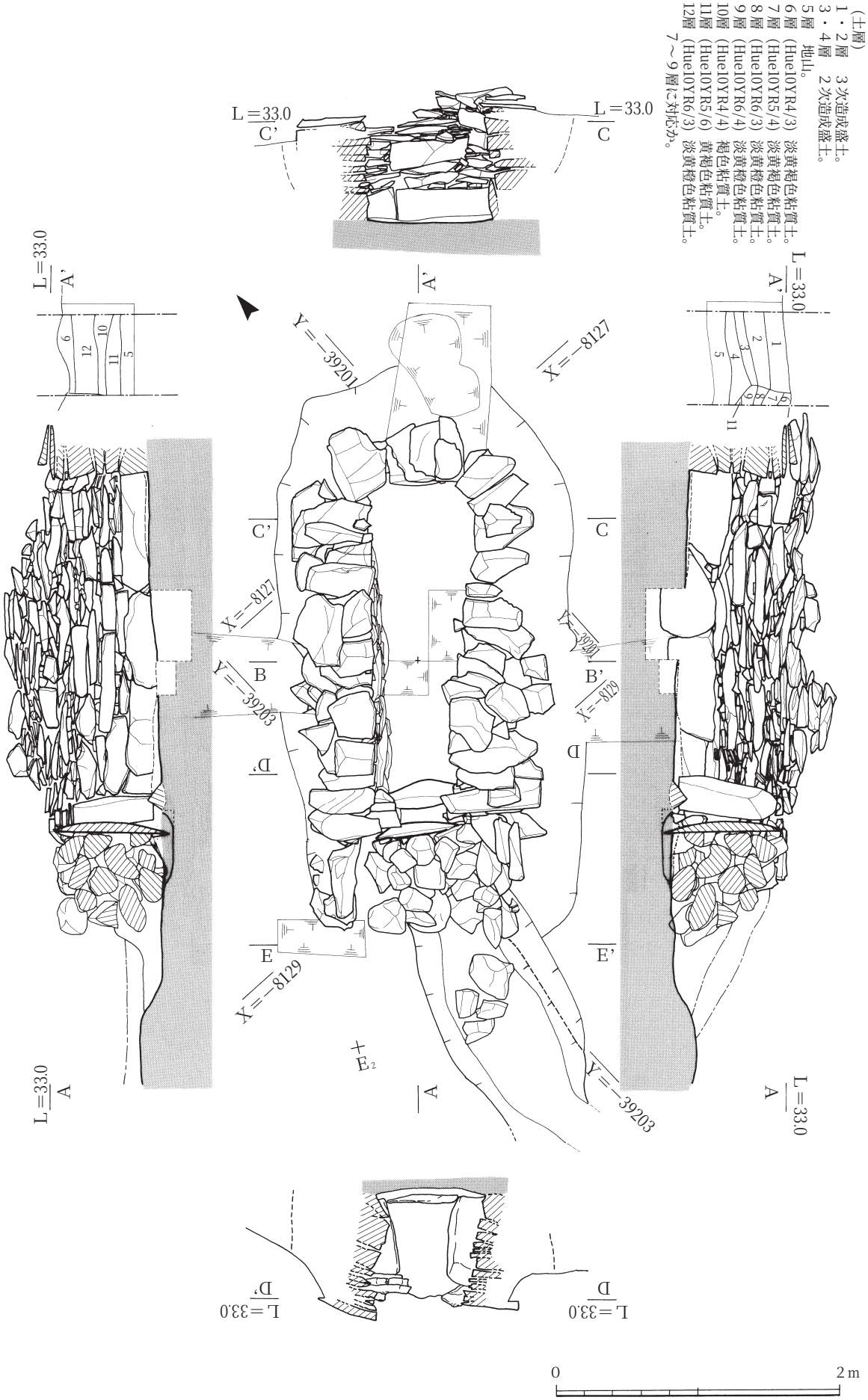
21層（Hue7.5YR4/3）褐色土。耕作による腐植土の混土層。
22層（Hue7.5YR4/6）褐色土。耕作による腐植土の混土層。
23層（Hue7.5YR3/4）暗褐色土。耕作による腐植土の混土層。
24層（Hue7.5YR3/2）黒褐色土。褐色土包含。腐植土の混土層。
25層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。23層・炭化物粒子包含。
26層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。炭化物粒子・鉄器・茶褐色・黒褐色土包含。
27層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。炭化物粒子・茶褐色・黒褐色土包含。
28層（Hue５YR3/4）暗赤褐色粘質土。鉄刀・他鉄器包含。
29層（Hue５YR3/3）暗赤褐色粘質土。茶・黒褐色・灰色土包含。初葬時埋土か。
30層　地山（床面整地層か）。
31層　地山。

前庭部埋土

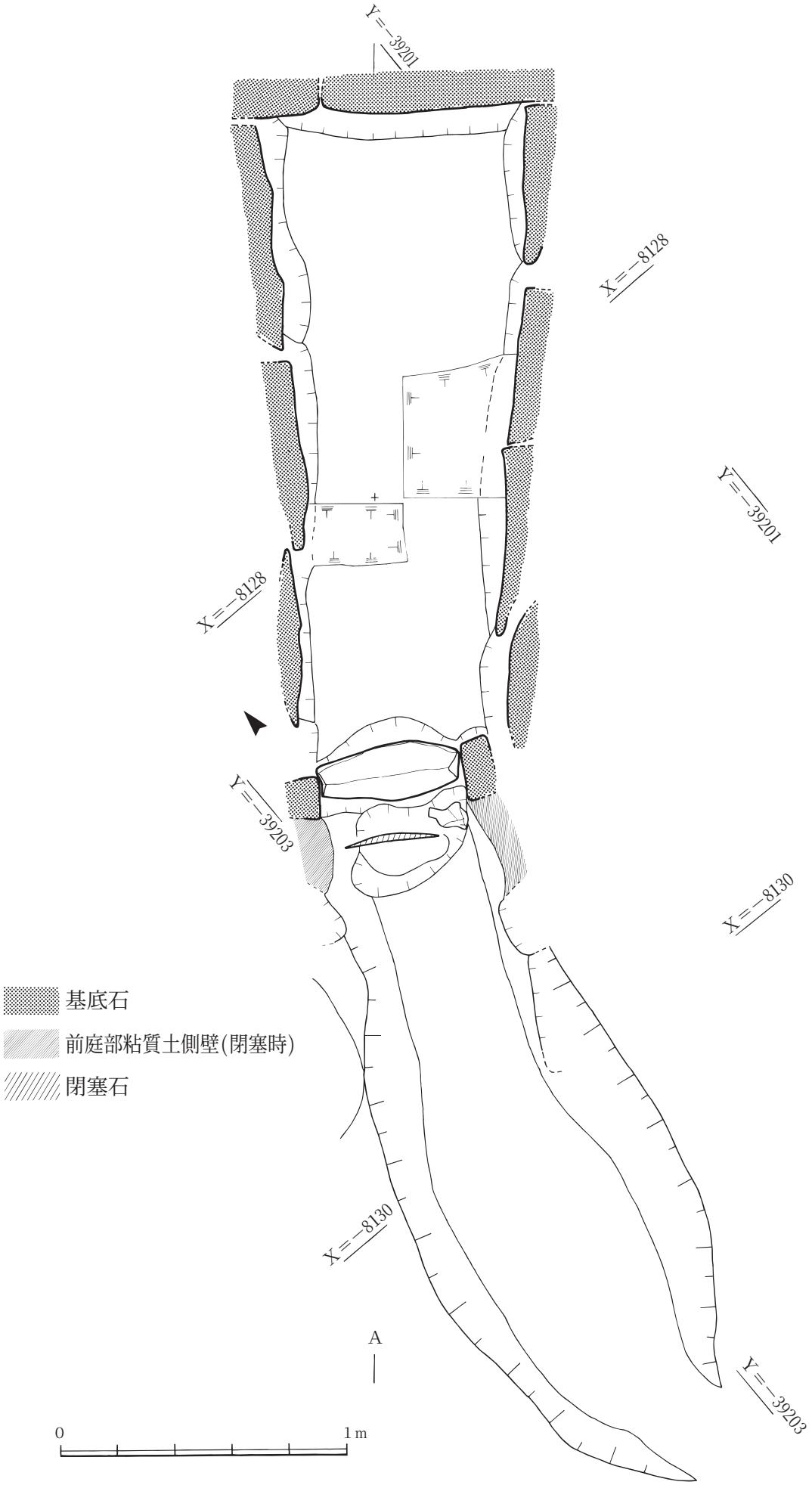
32層（Hue7.5YR3/1）黒褐色土。黒・褐色土包含。耕作による腐植土の混土層。
33層（Hue7.5YR4/4）褐色土。黒色土包含。耕作による腐植土の混土層。
34層（Hue7.5YR4/3）褐色粘質土。閉塞石掘り方。閉塞石固定のための埋土か。

0　2m

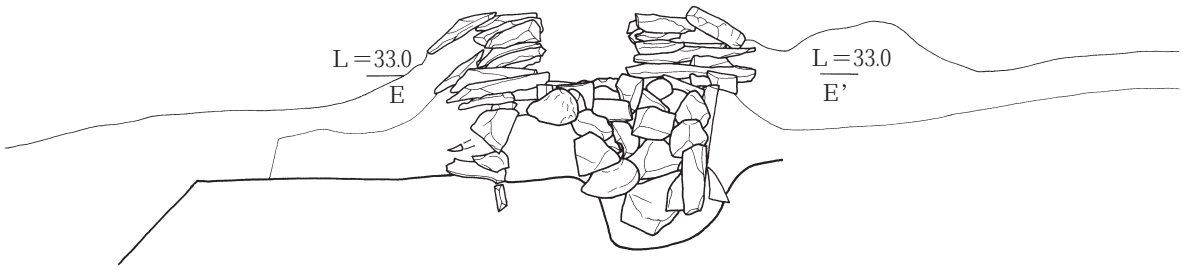
第20図　７号墳石室内埋土断面図（１／40）

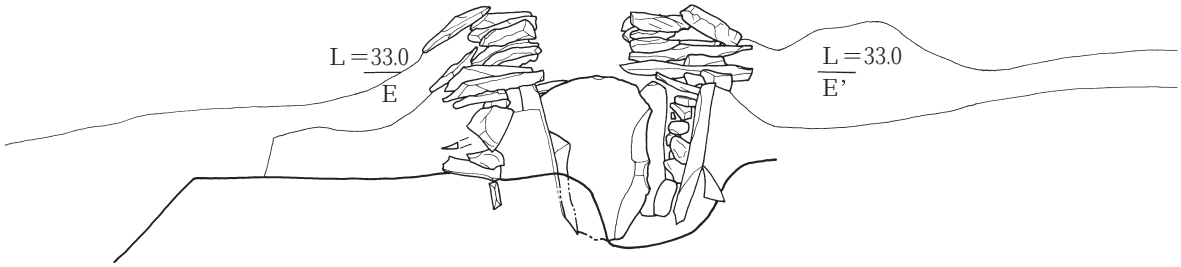


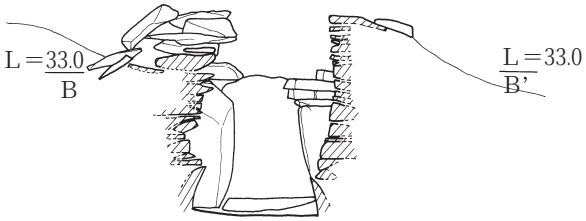
第21図　７号墳石室内平面・立面図（１／40）

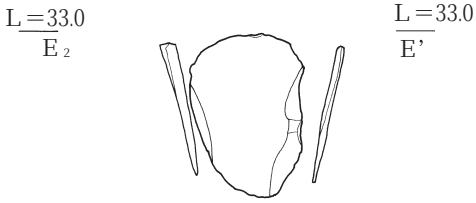


第22図　７号墳基底石等掘り方平面図（１／20)

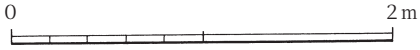




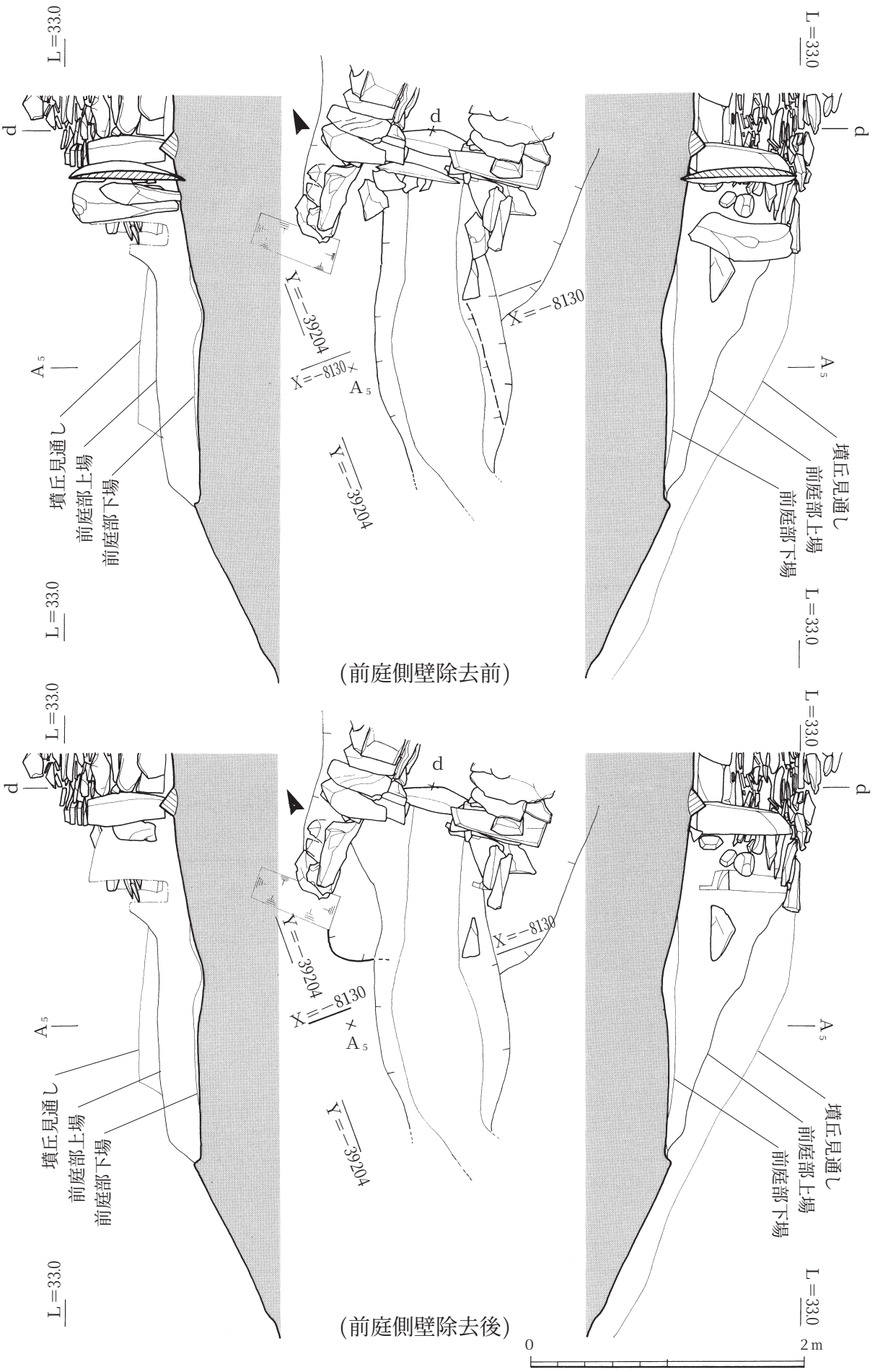




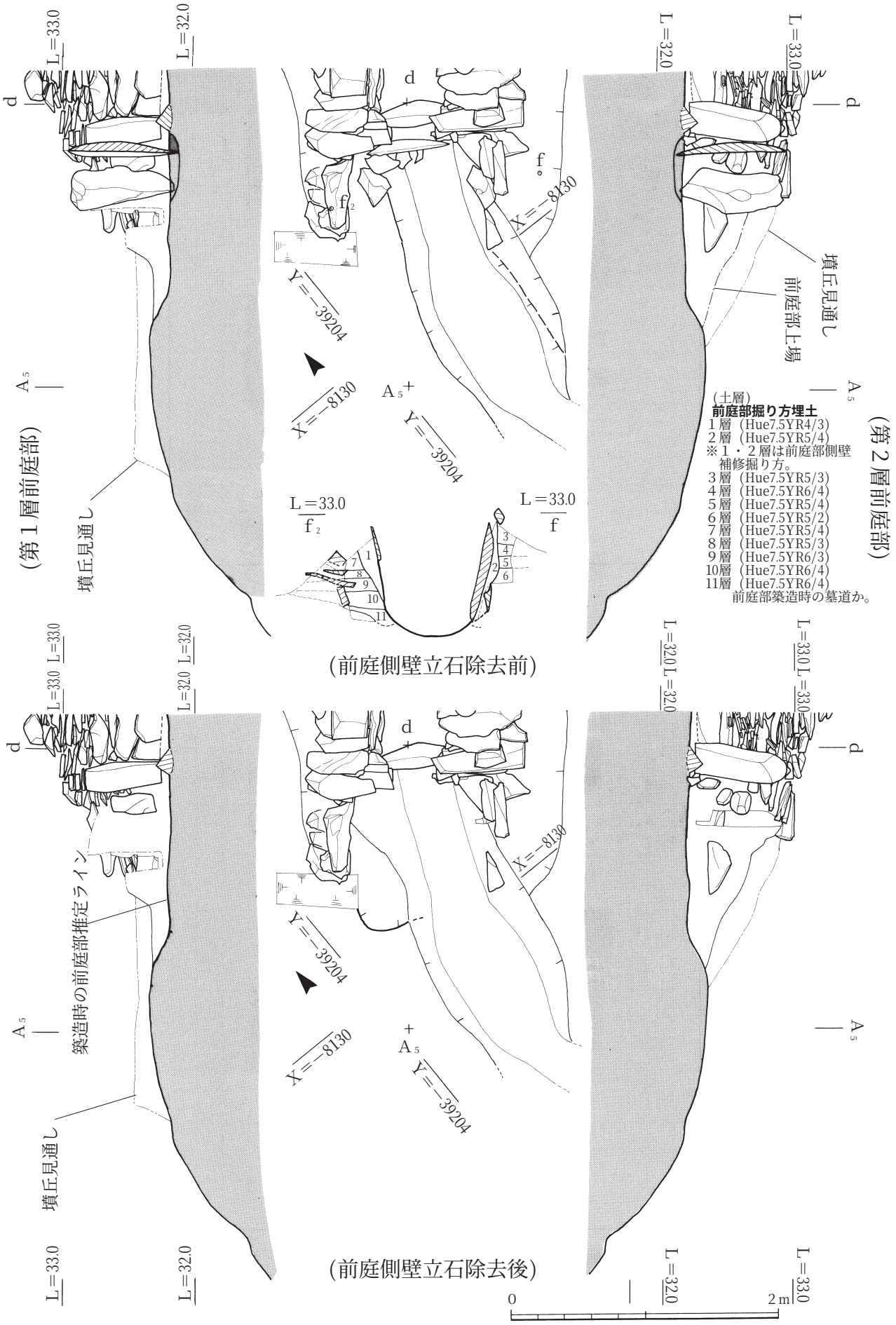
(断面ポイントは第21図中に記載)



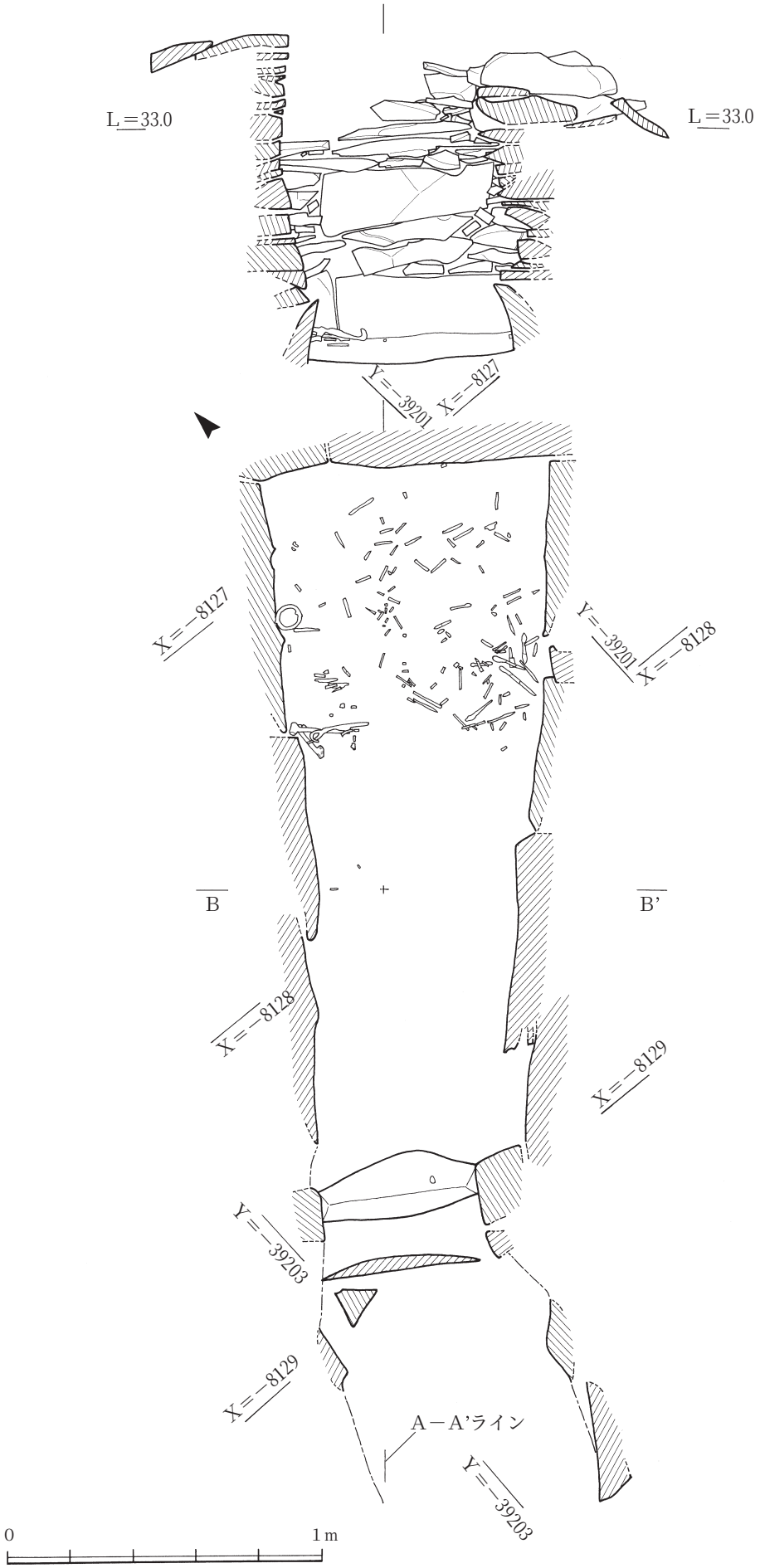
第23図　７号墳閉塞状況断面・立面図（１／40)



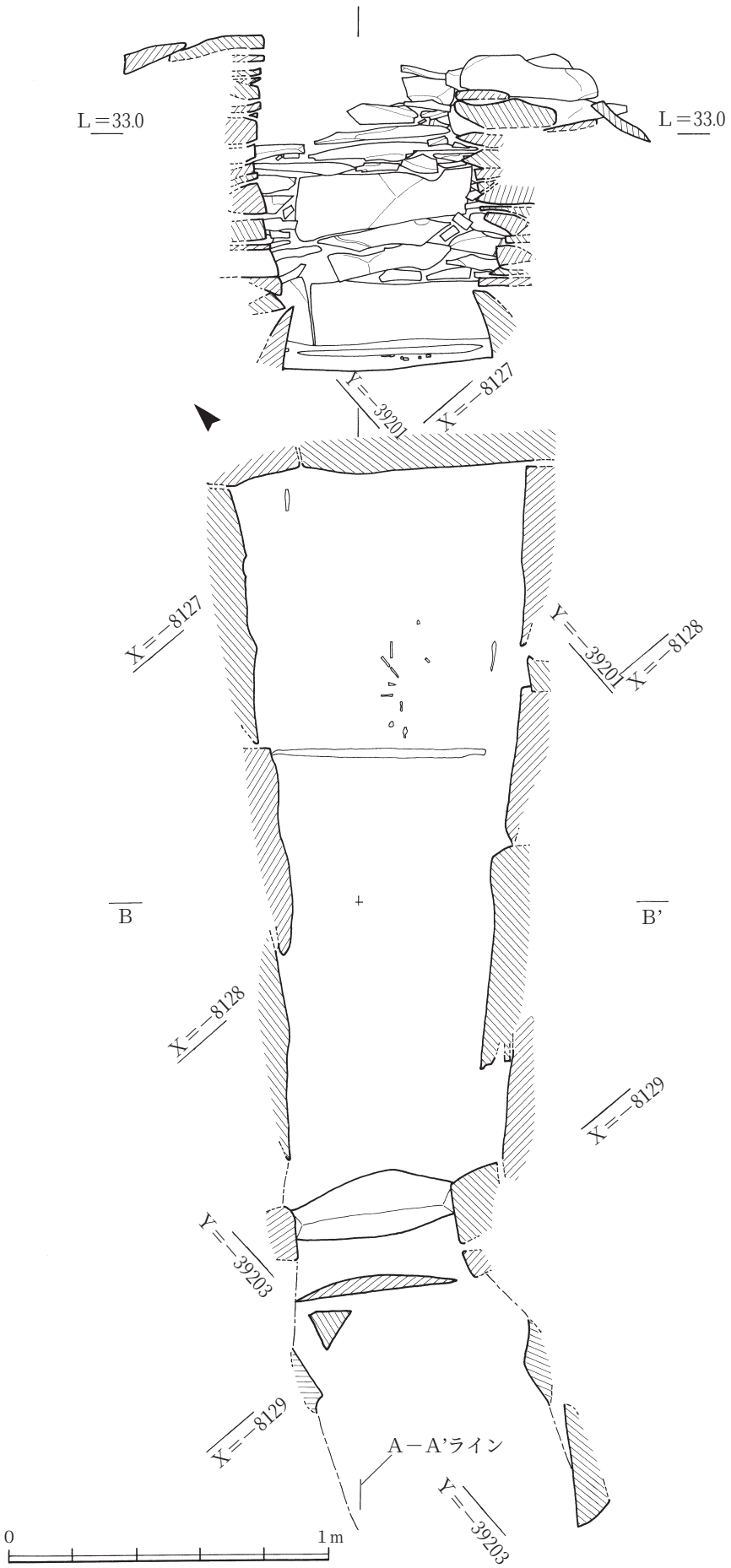
第24図　７号墳前庭部平面・立面図１（墓道軸線を基準）（１／40）



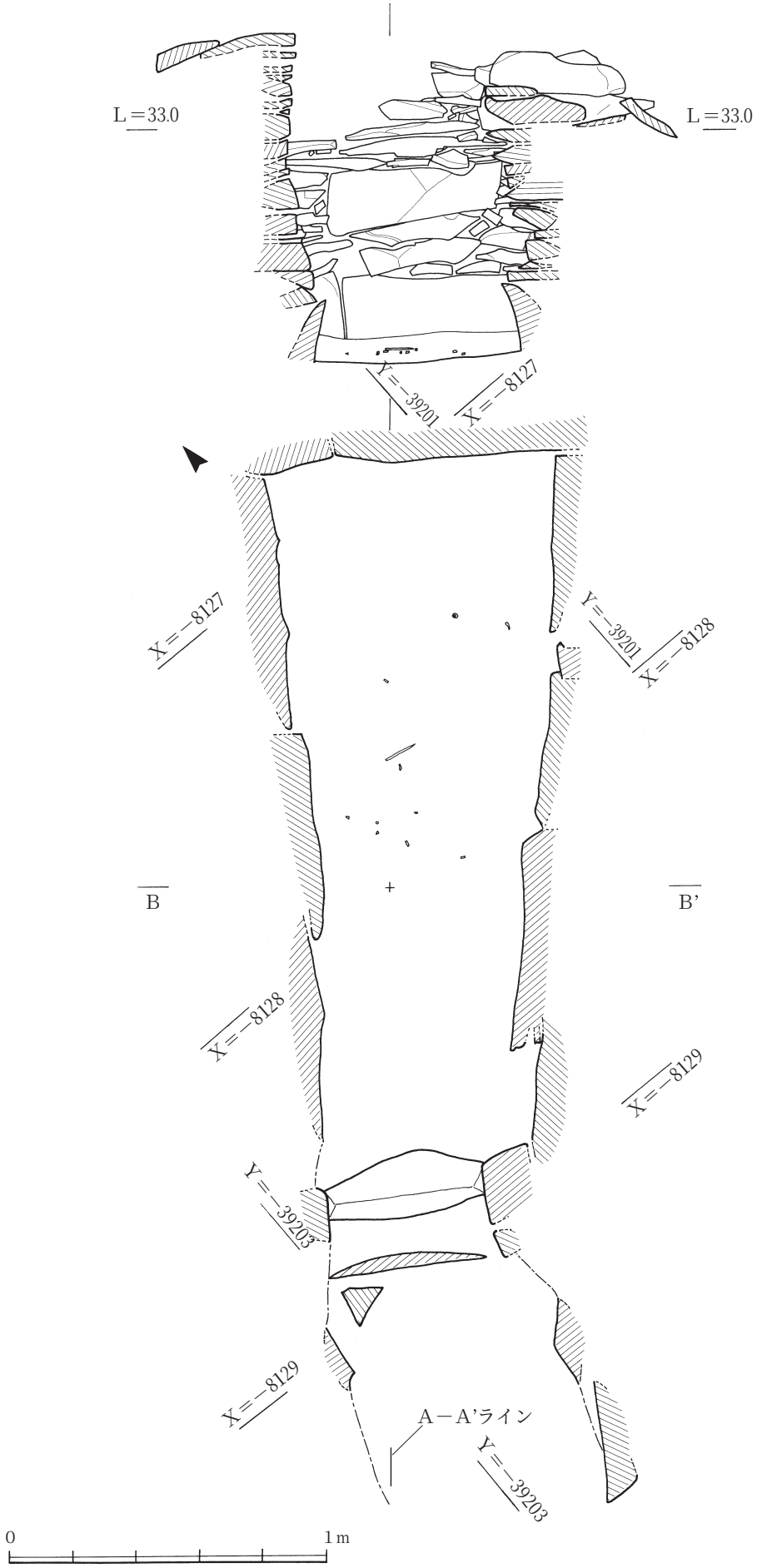
第25図　７号墳前庭部平面・立面図２（１／40)(石室軸線を基準)



第26図　７号墳石室内遺物出土状況平面・立面図（Ⅴ層）（１／20）

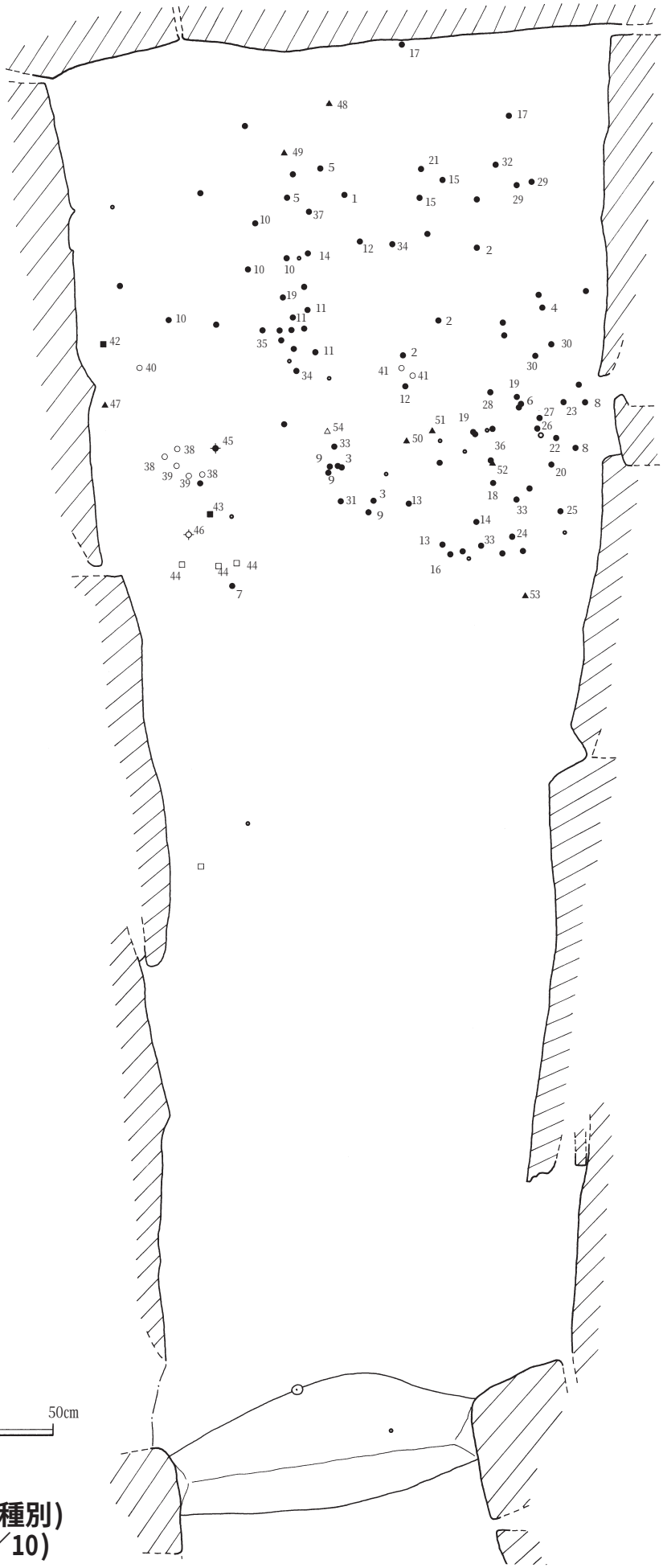


第27図　７号墳石室内遺物出土状況平面・立面図（Ⅵ－１層）（１／20）



第28図　７号墳石室内遺物出土状況平面・立面図（Ⅵ－２層）（１／20）

№	図版№	№	図版№
1	55-2	28	57-4
2	55-6	29	57-6
3	55-7	30	
4	55-8	31	
5	55-1	32	
6	55-4	33	56-9
7	55-3	34	57-10
8	55-9	35	57-13
9	55-10	36	57-14
10	55-12	37	57-12
11	55-11	38	54-6
12	56-1	39	54-7
13	56-2	40	54-5
14	56-4	41	54-4
15		42	53-6
16	56-6	43	53-4
17	56-7	44	53-1
18	56-5	45	58-1
19	56-10	46	58-2
20	56-8	47	58-9
21	56-11	48	58-8
22	56-13	49	58-12
23	56-12	50	58-14
24	56-14	51	58-6
25	57-1	52	58-7
26	57-2	53	58-11
27	57-3	54	58-3

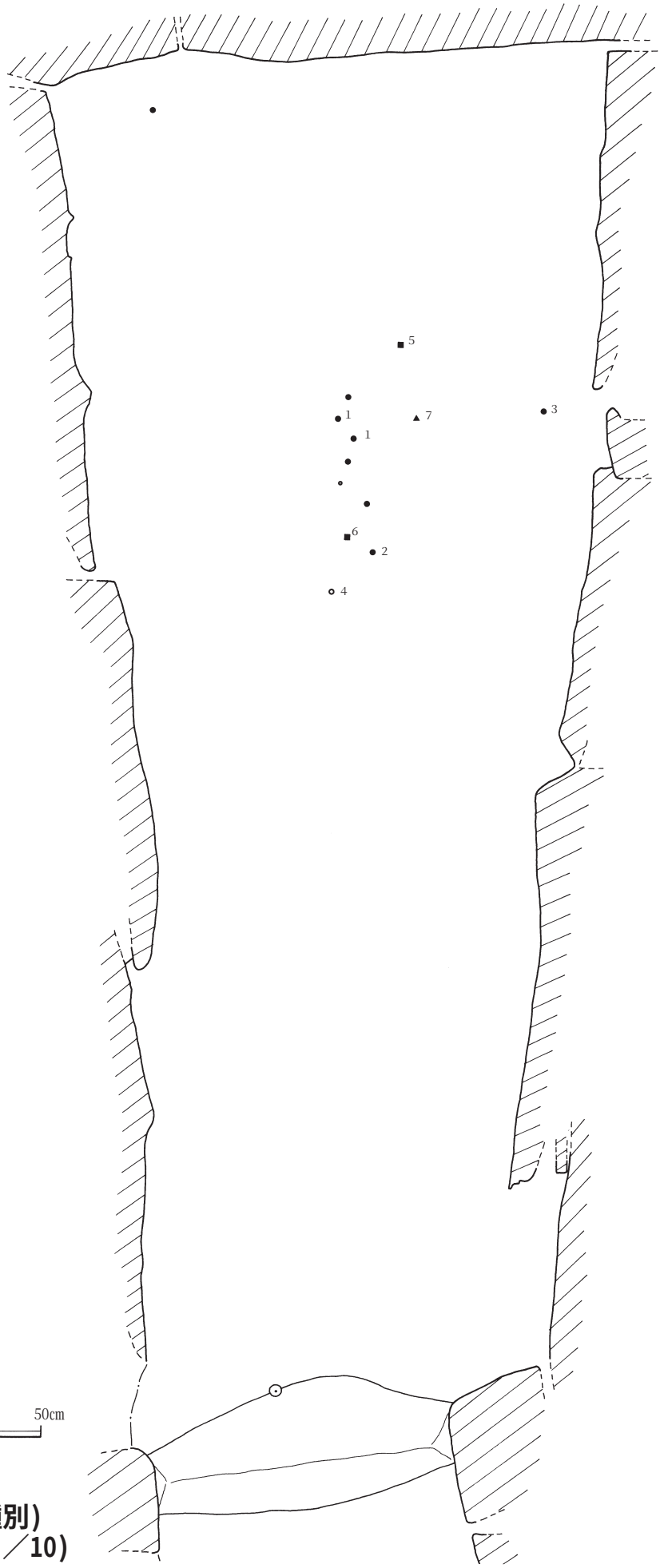


● 鏃
○ 刀子
∘ 刀
■ 雲珠・辻金具・飾金具
▫ 轡・鏡板
▫ その他、馬具・鉸具など
▲ 管玉
△ 丸玉
✦ 釧
✧ 耳環
∘ その他

0　　50cm

第29図　７号墳出土遺物（器種別）分布図（Ⅴ層）（１／10）

№	図版№
1	55-12
2	57-5
3	57-9
4	54-1
5	53-5
6	53-3
7	58-10

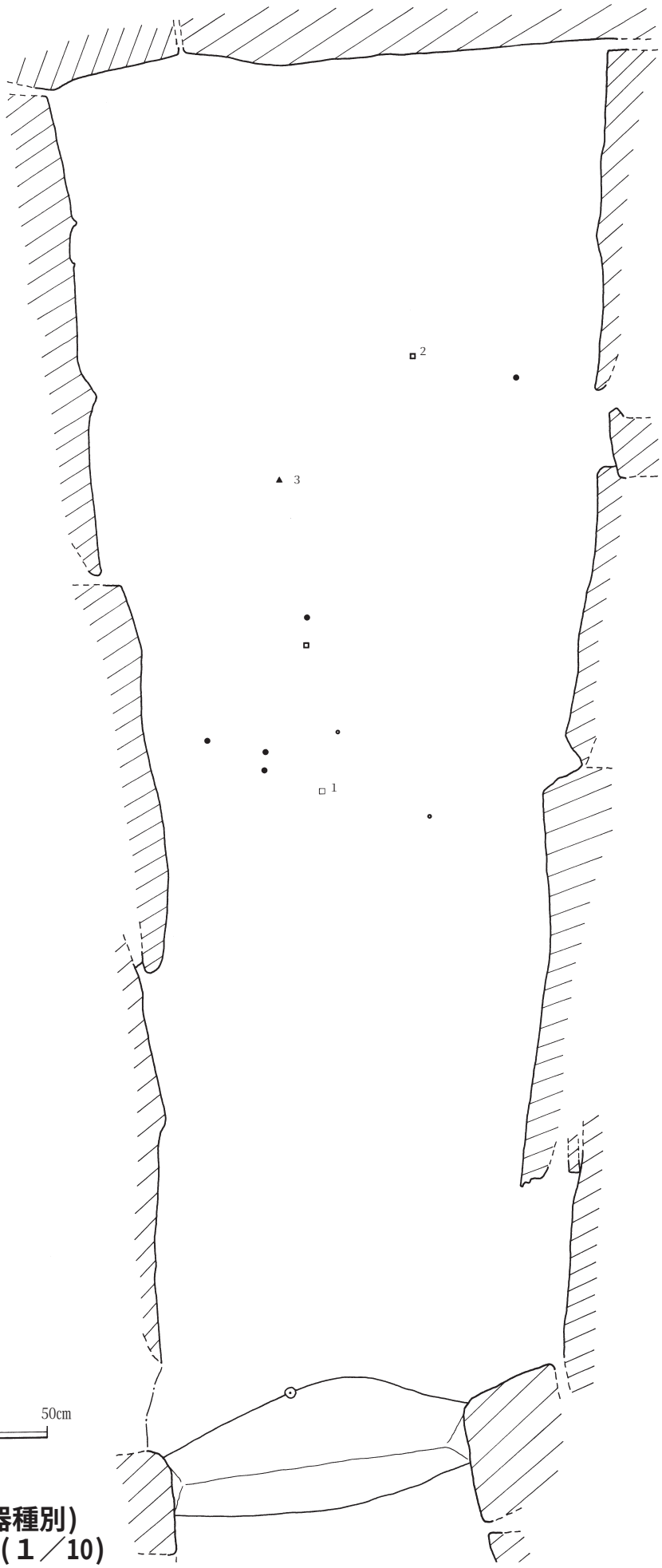


• 鏃
◦ 刀
▪ 雲珠・辻金具・飾金具
▴ 管玉
◦ その他

0　　50cm

第30図　７号墳出土遺物（器種別）分布図（Ⅵ－１層)(１／10)

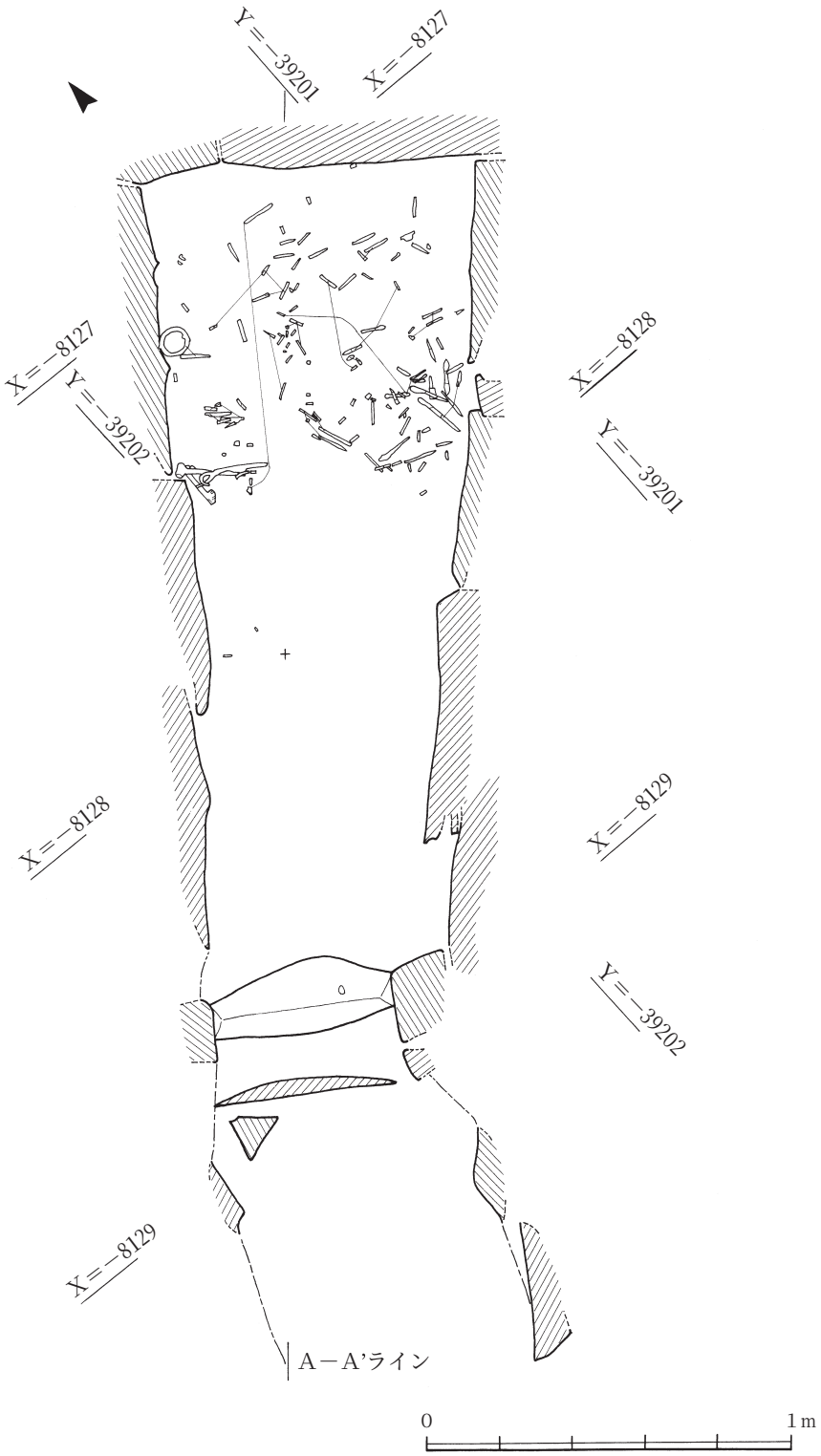
№	図版№
1	53-1
2	53-9
3	58-13



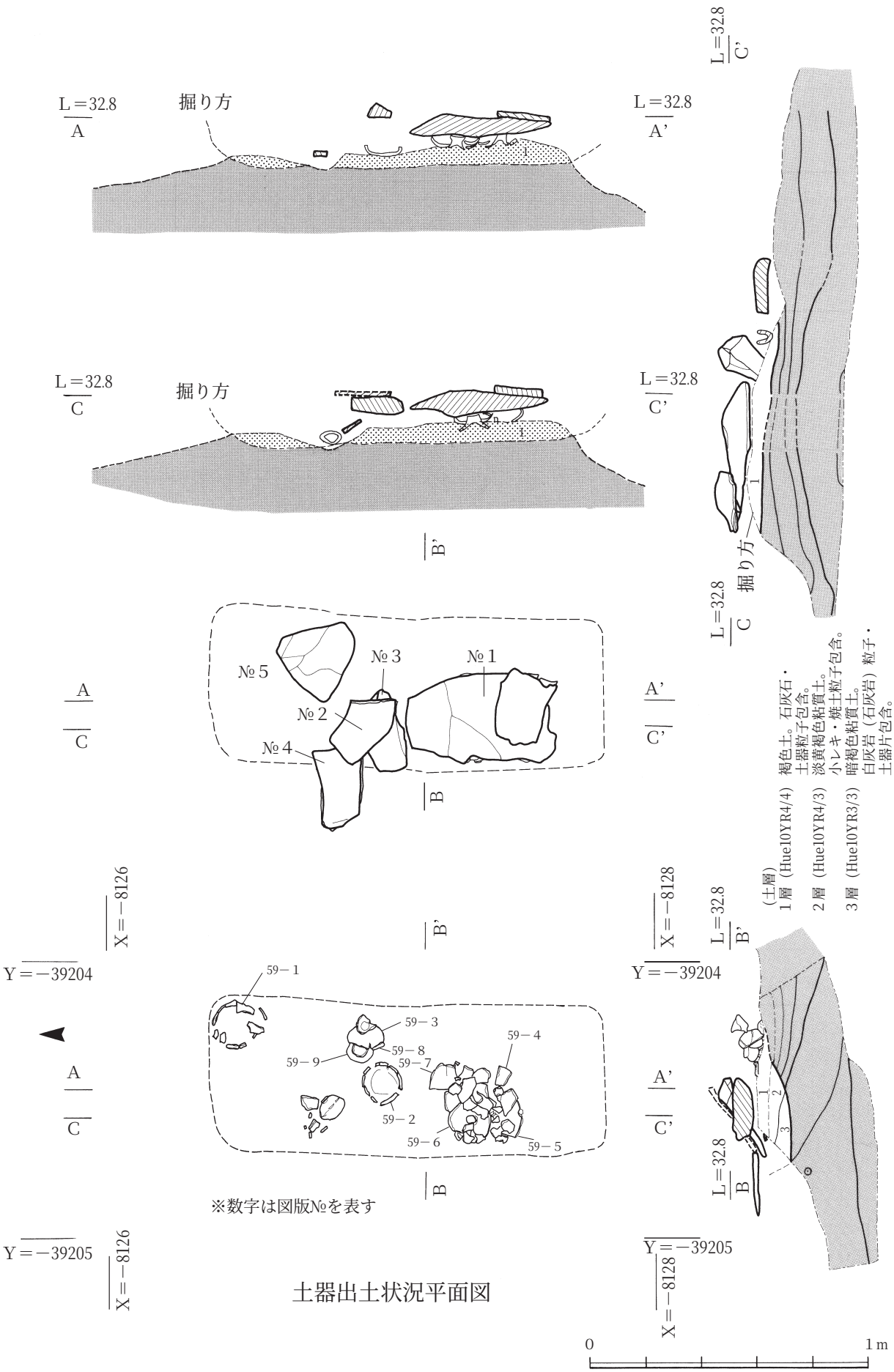
● 鏃
□ 轡・鏡板
◘ その他馬具（鉸具など）
▲ 管玉
◦ その他

0　　50cm

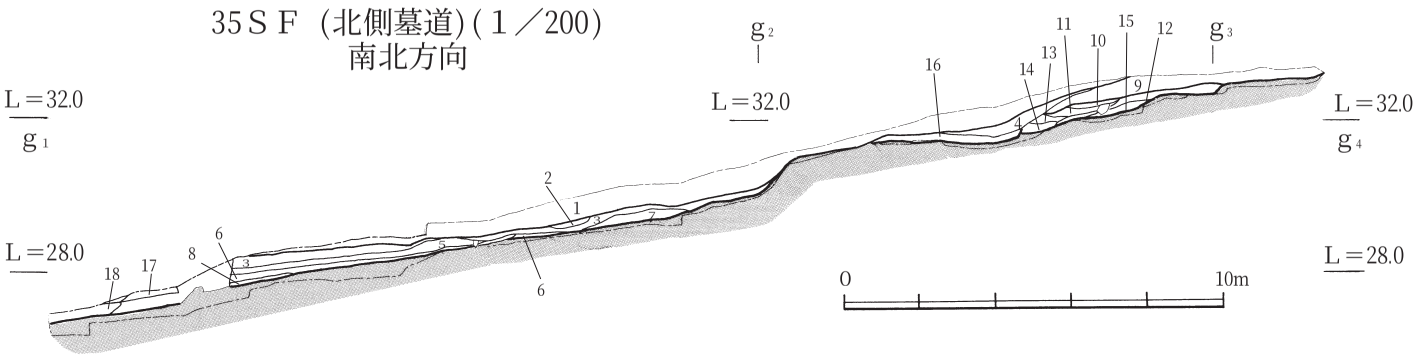
第31図　７号墳出土遺物（器種別）分布図（Ⅵ－２層）（１／10）



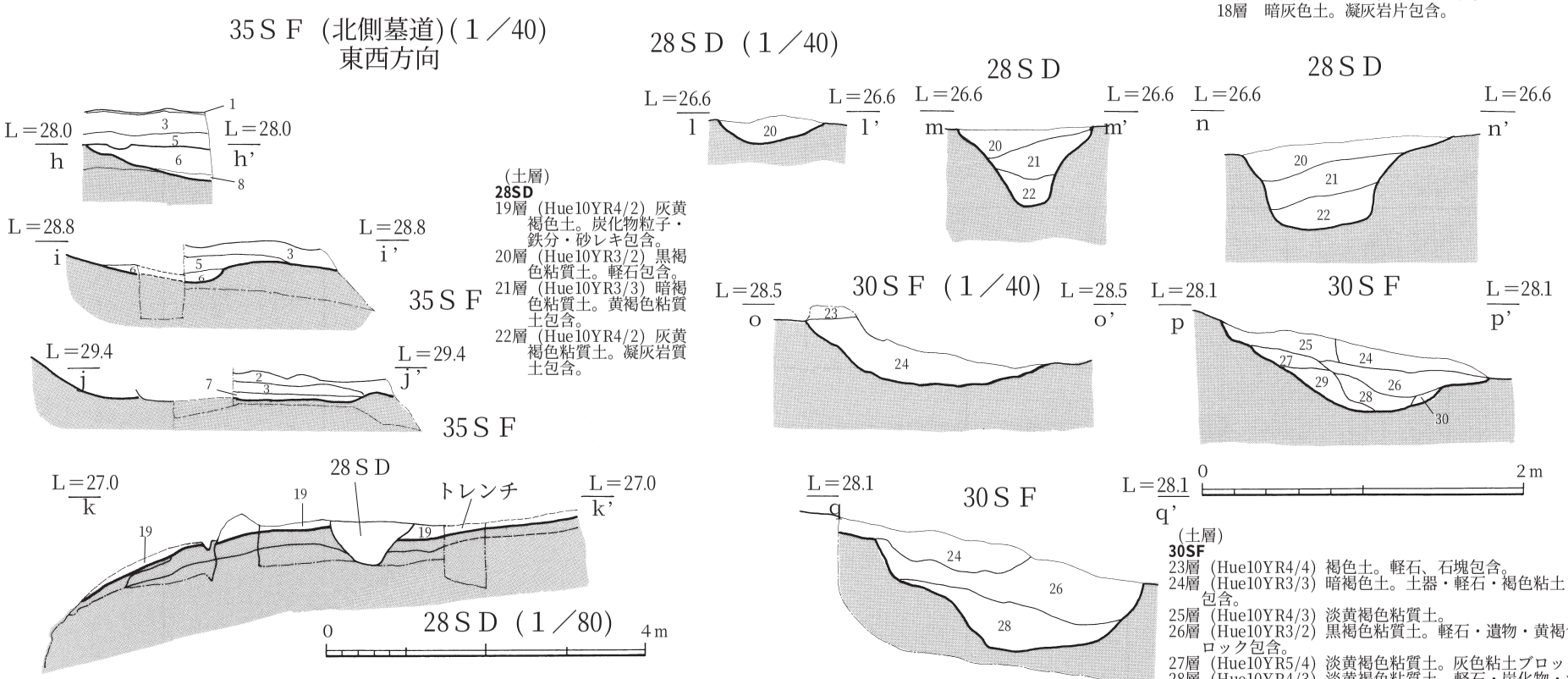
第32図　７号墳石室内遺物接合状況平面図（１／20）



第33図　31ＳＸ平面・立面図（１／20）



（土層）
35SF
１層　表土。
２層（Hue10YR4/4）褐色土。
３層（Hue10YR3/4）暗褐色土。(Ⅲ)
４層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。
５層（Hue10YR5/4）淡褐色粘質土。
６層（Hue10YR6/4）淡黄橙色粘質土。墓道埋土。
７層　墓道埋土。
８層（Hue7.5YR5/4）淡黄褐色粘質土。墓道埋土。
９層（Hue7.5YR5/4）淡褐色粘質土。
10層（Hue7.5YR4/4）褐色粘質土。６号墳周溝。
11層（Hue7.5YR4/3）褐色粘質土。６号墳周溝。
12層（Hue7.5YR4/6）褐色粘質土。６号墳周溝。
13層（Hue10YR3/3）暗褐色粘質土。６号墳周溝。
14層（Hue7.5YR3/2）黒褐色粘質土。６号墳周溝。
15層（Hue10YR6/4）淡黄橙粘質土。６号墳周溝。
16層
17層　暗黄褐色シルト。茶色土包含。
18層　暗灰色土。凝灰岩片包含。

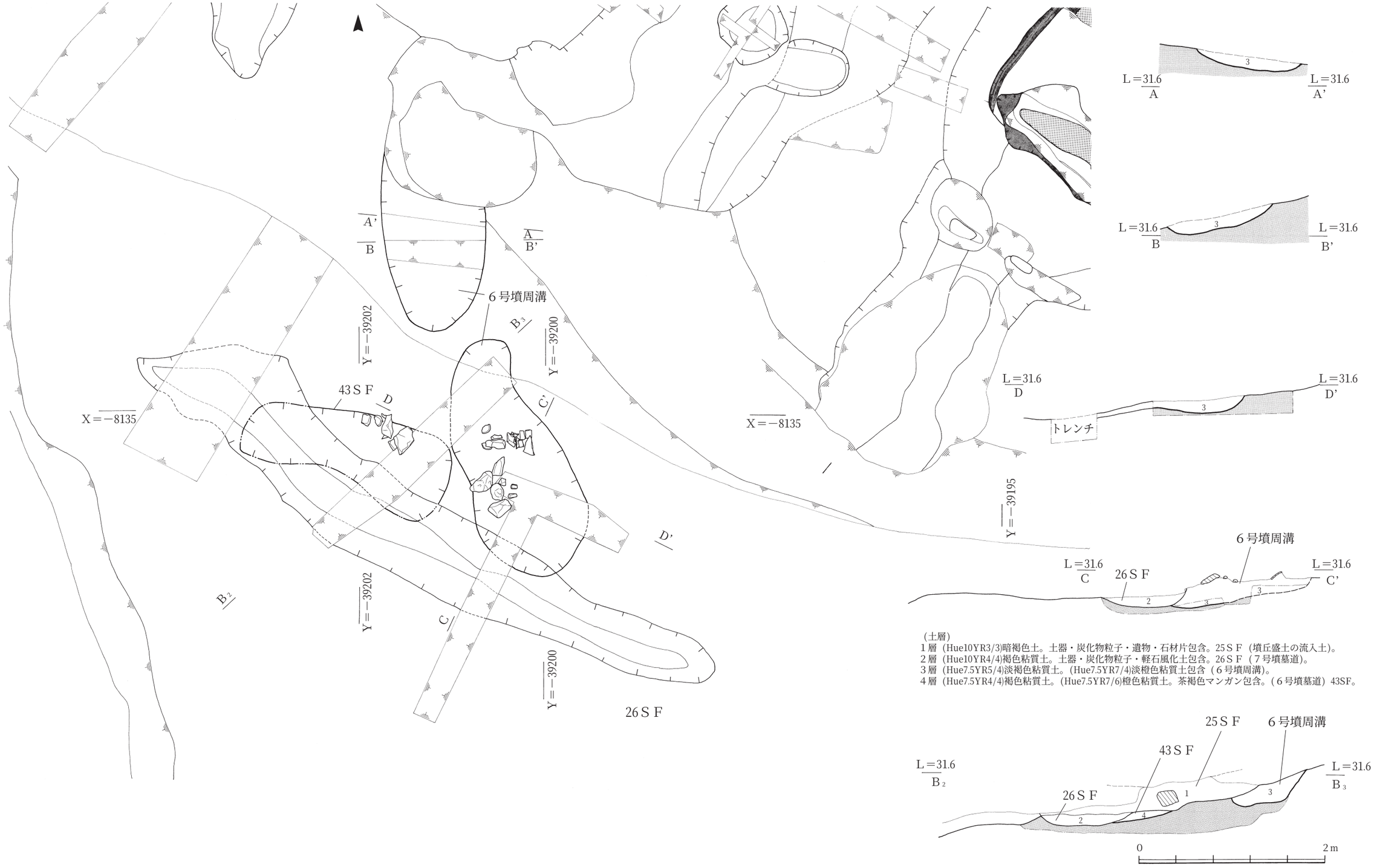


（土層）
28SD
19層（Hue10YR4/2）灰黄褐色土。炭化物粒子・鉄分・砂レキ包含。
20層（Hue10YR3/2）黒褐色粘質土。軽石包含。
21層（Hue10YR3/3）暗褐色粘質土。黄褐色粘質土包含。
22層（Hue10YR4/2）灰黄褐色粘質土。凝灰岩質土包含。

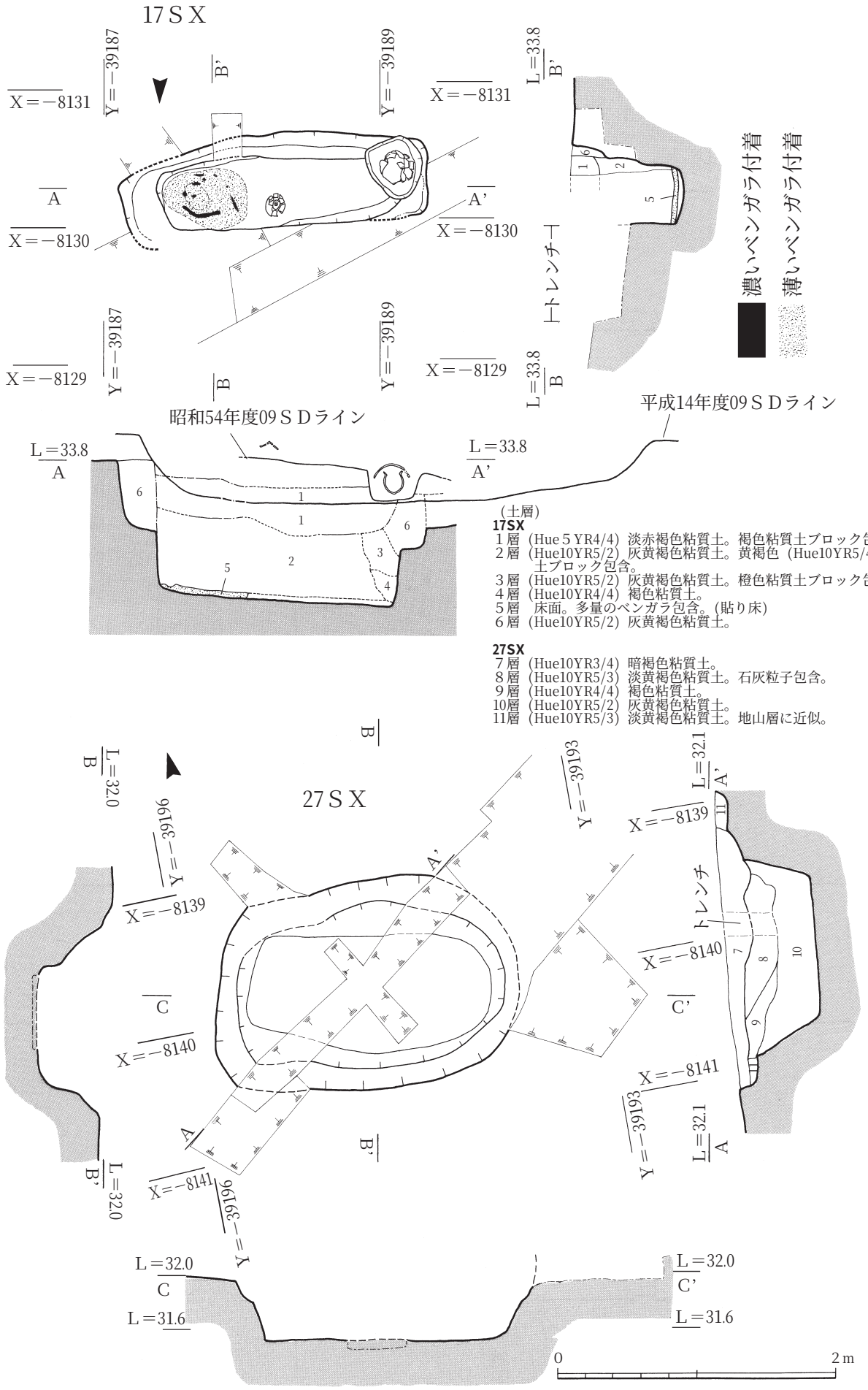
（土層）
30SF
23層（Hue10YR4/4）褐色土。軽石、石塊包含。
24層（Hue10YR3/3）暗褐色土。土器・軽石・褐色粘土ブロック包含。
25層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。
26層（Hue10YR3/2）黒褐色粘質土。軽石・遺物・黄褐色粘土ブロック包含。
27層（Hue10YR5/4）淡黄褐色粘質土。灰色粘土ブロック包含。
28層（Hue10YR4/3）淡黄褐色粘質土。軽石・炭化物・マンガン粒子・鉄製品包含。
29層（Hue10YR6/2）灰黄褐色粘質土。黄褐色粘土ブロック・凝灰岩質土包含。
30層（Hue10YR5/2）灰黄褐色粘質土。凝灰岩質土包含。

（断面ポイントは第７図中に記載）

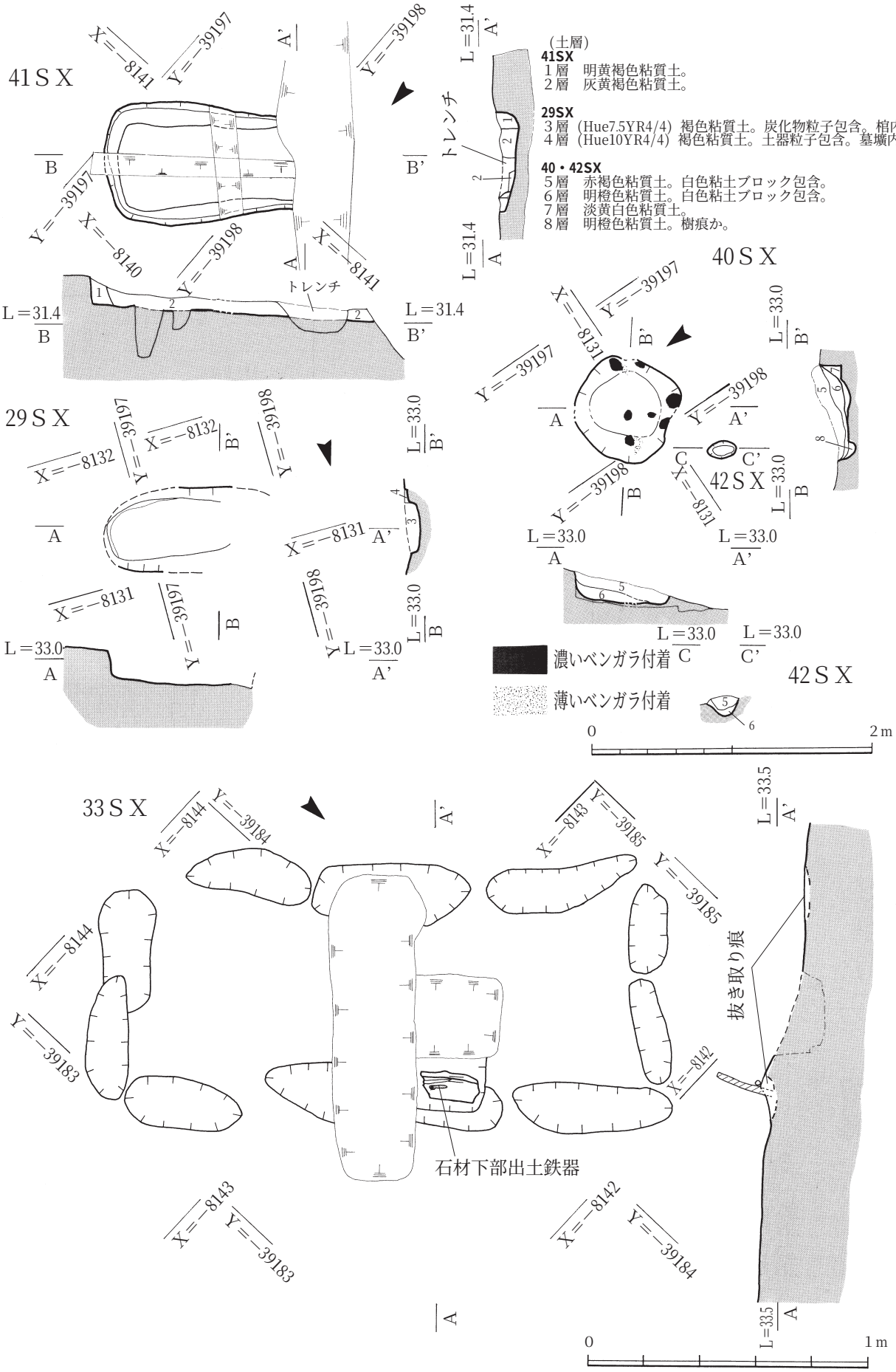
第34図　墓道（30・35ＳＦ）・28ＳＤ断面図



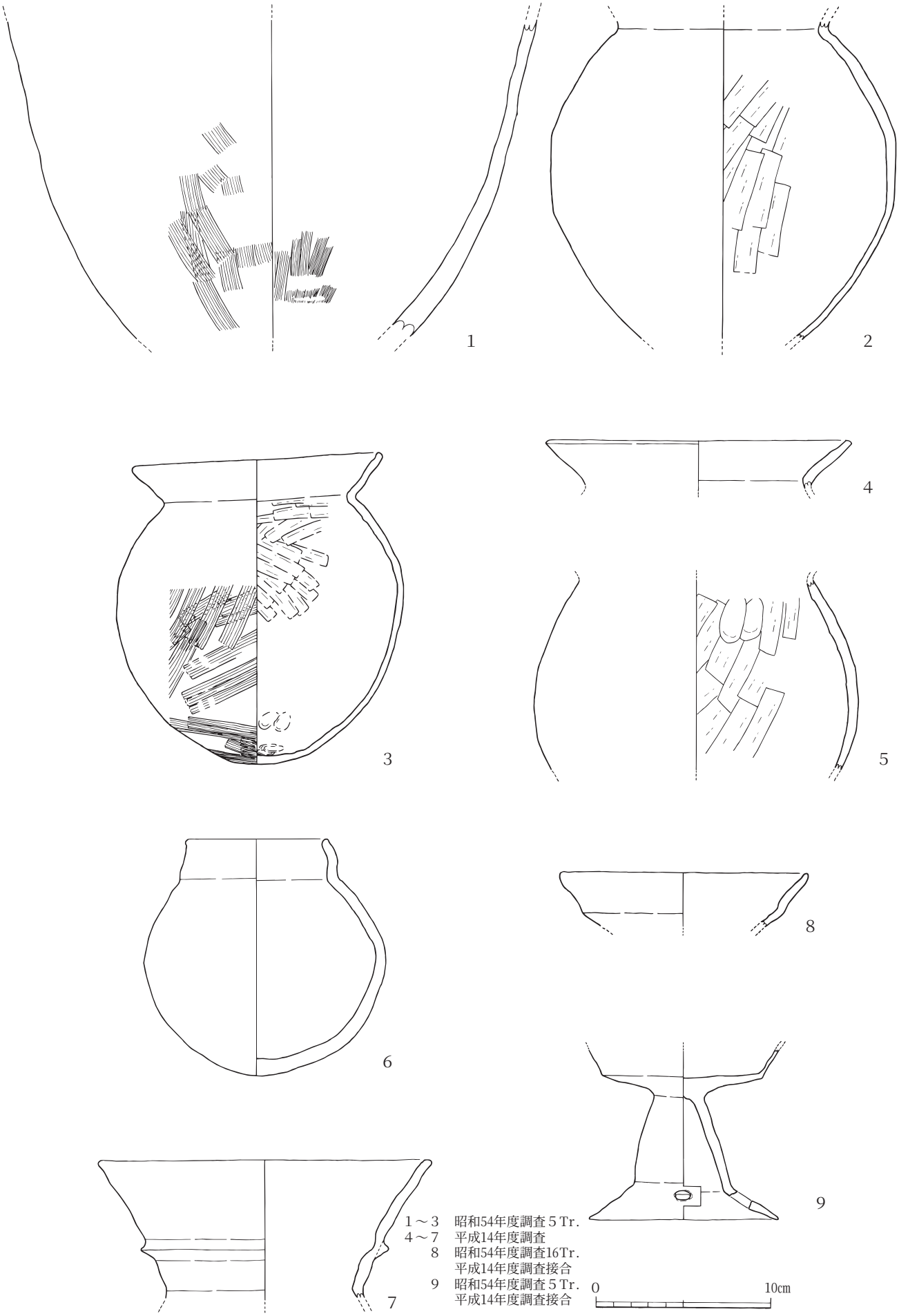
第35図　６号墳周溝・墓道（25・26・43ＳＦ）平面・断面図（１／40）



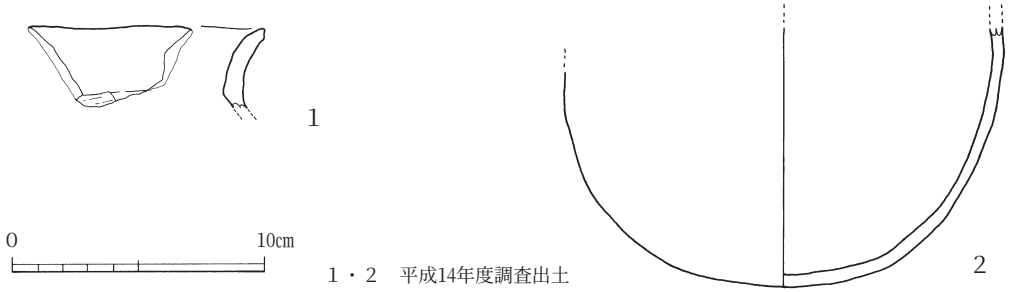
第36図　土壙墓（17・27ＳＸ）平面・断面図（１／40）



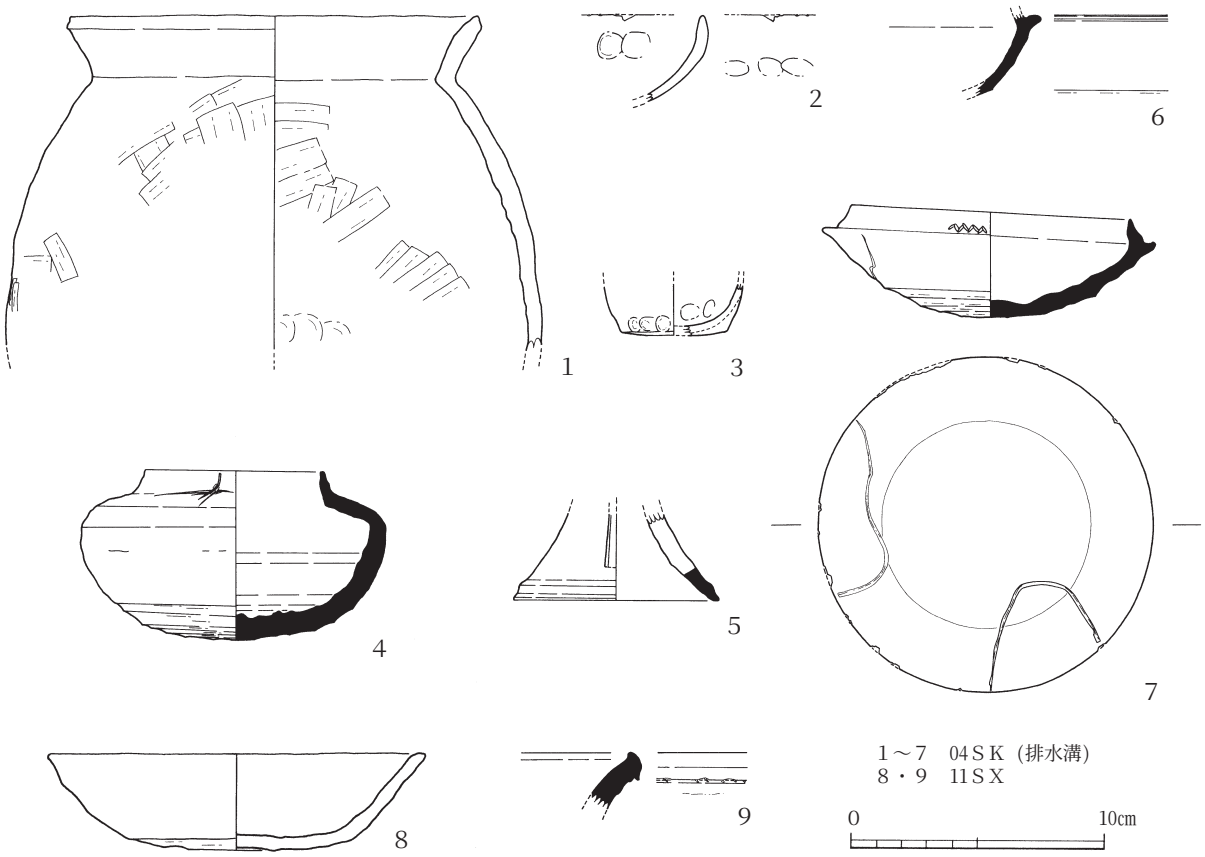
第37図　土壙墓（41・29ＳＸ）（１／40）石棺墓（33ＳＸ）（１／20）
土坑（40・42ＳＸ）（１／40）平面・断面図



第38図　２号墳周溝（09ＳＤ）出土土器実測図１（１／３）

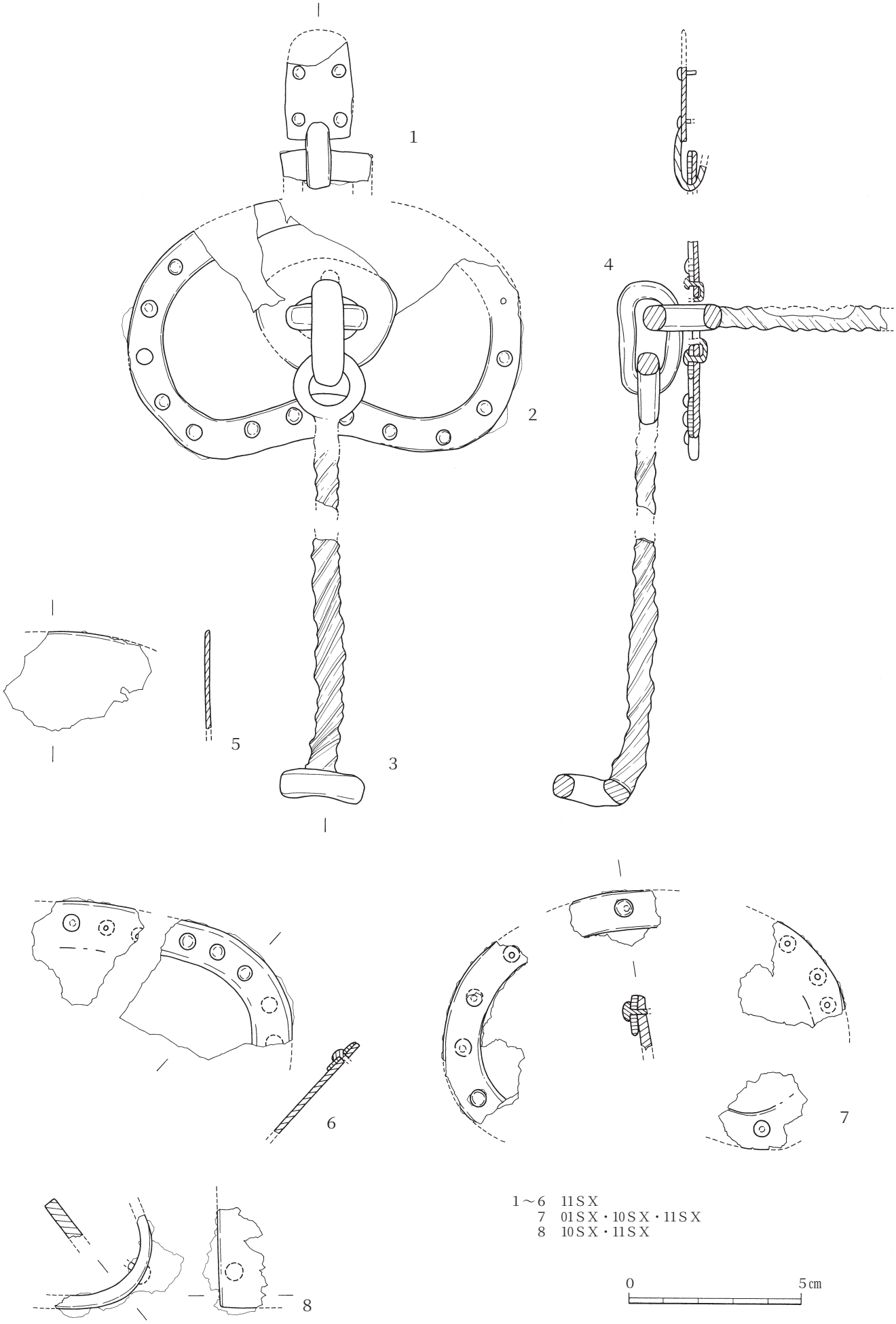


第39図　２号墳周溝（09ＳＤ）出土土器実測図２（１／３）

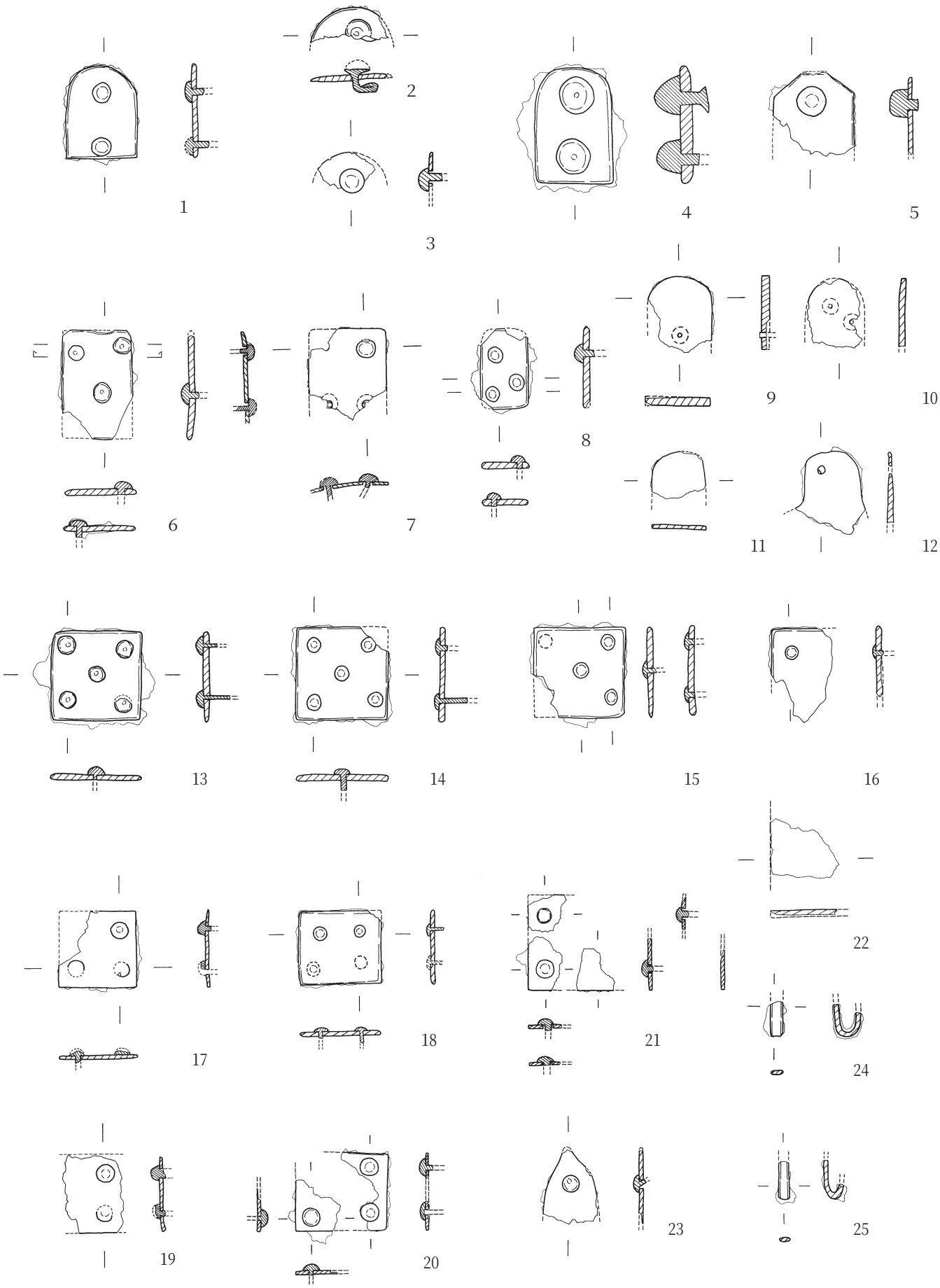


第40図　６号墳撹乱坑（11ＳＸ）・排水溝（04ＳＫ）出土土器実測図（１／３）

第41図　６号墳周溝(03ＳＤ）出土土器実測図（１／３）



第42図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（馬具類１）（２／３）



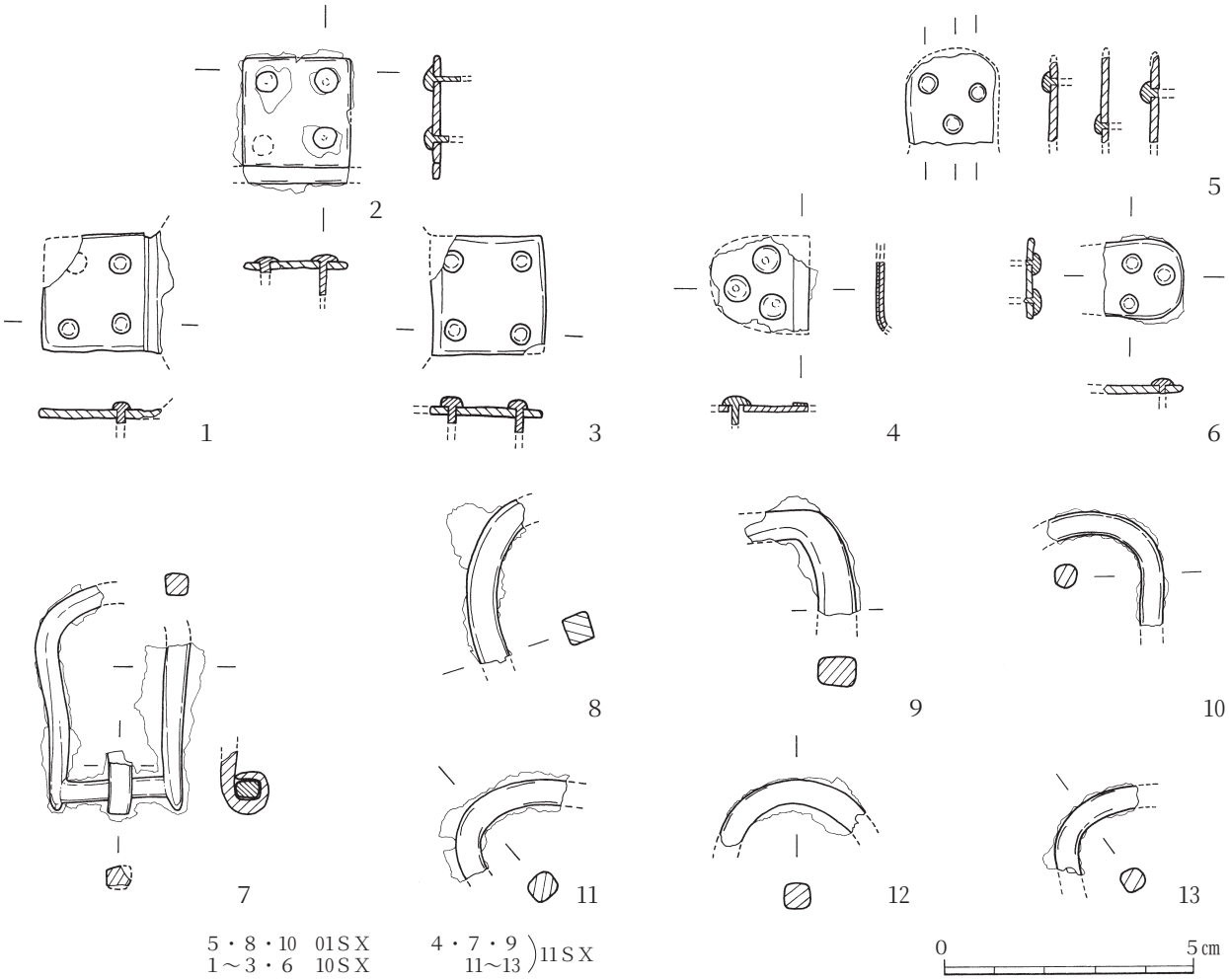
1・6～8・17　01ＳＸ
10　04ＳＫ
13・14・22・24　10ＳＸ

2・4・5・9・11・12・15・16・18・19・23・25　11ＳＸ

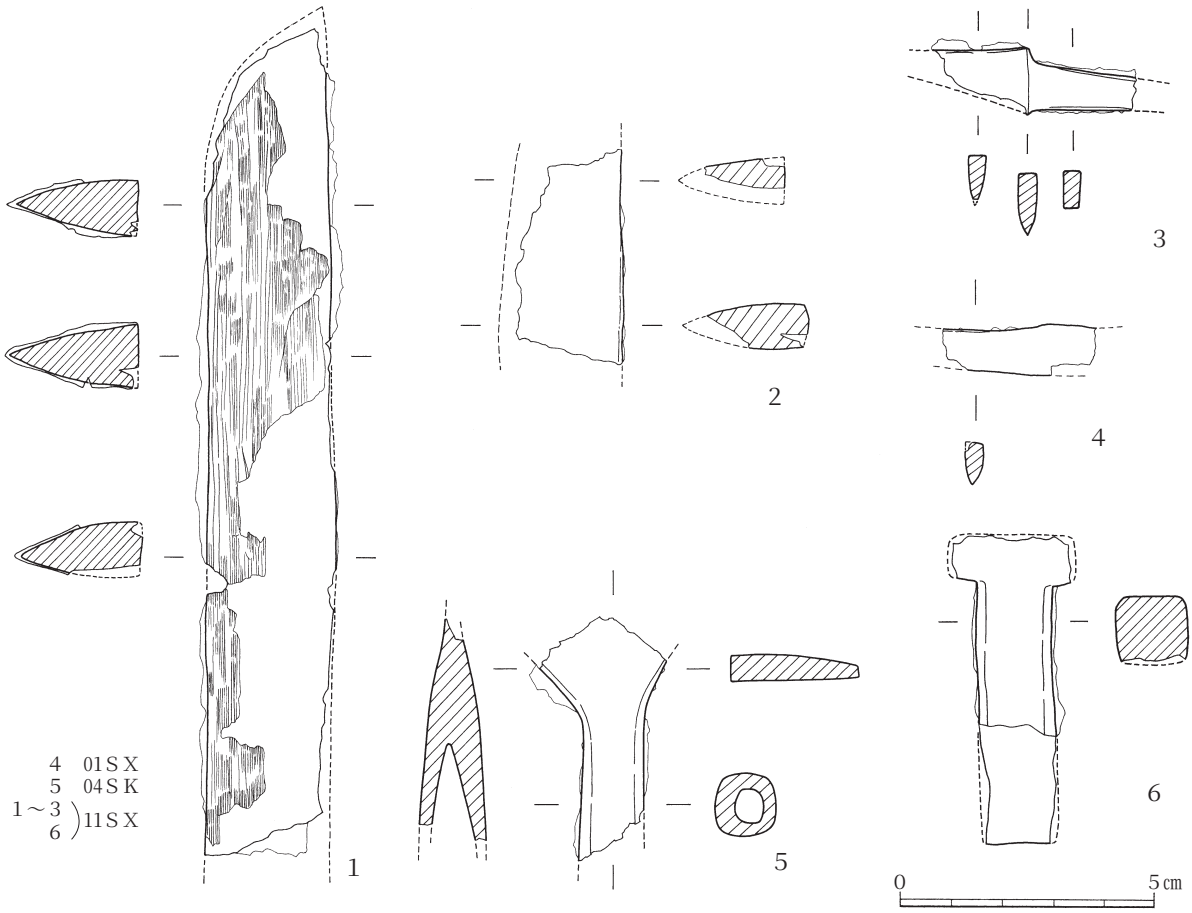
3・21　６号墳
20　10ＳＸ・11ＳＸ

0　5㎝

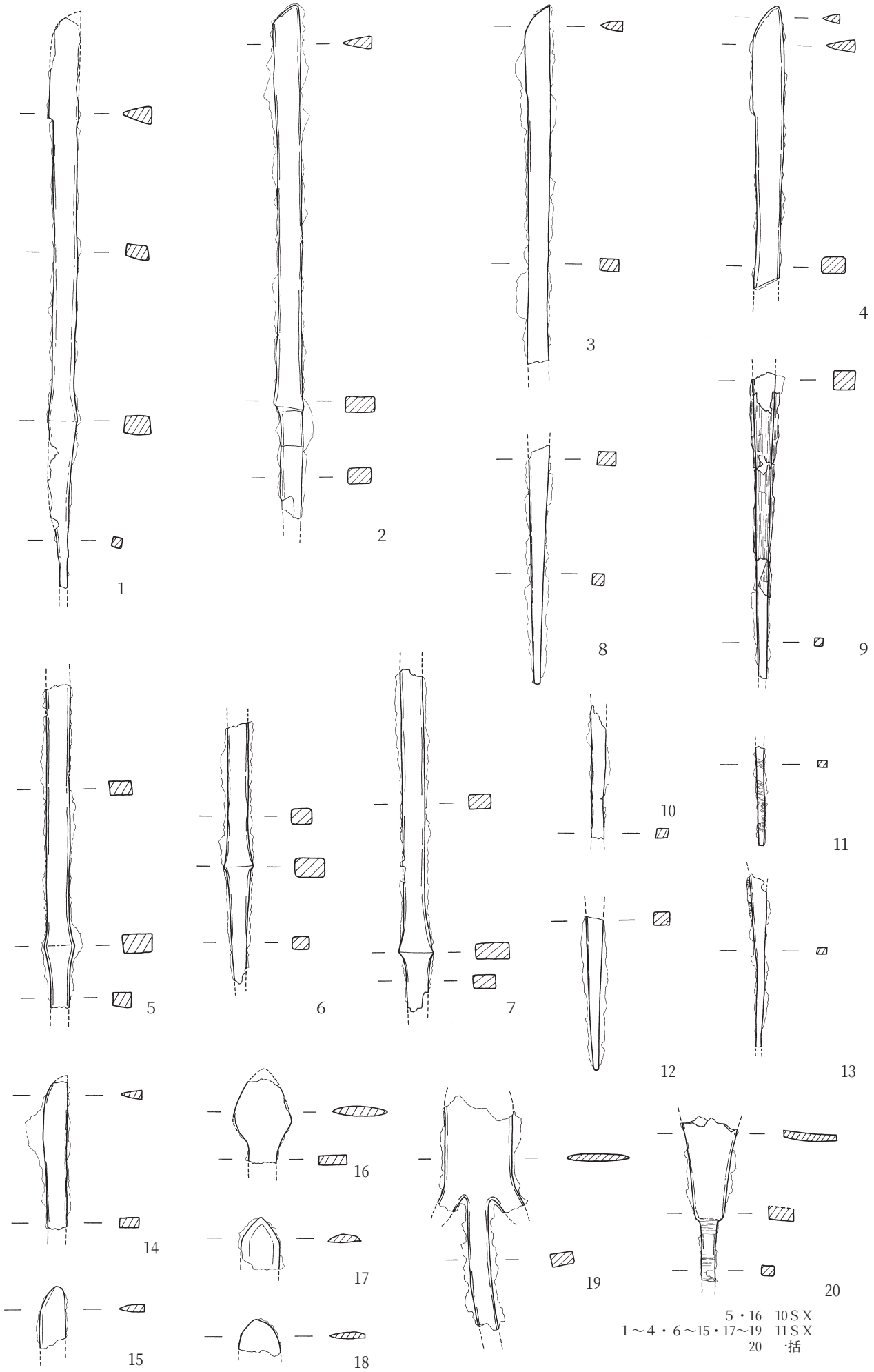
第43図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（馬具類２）（２／３）



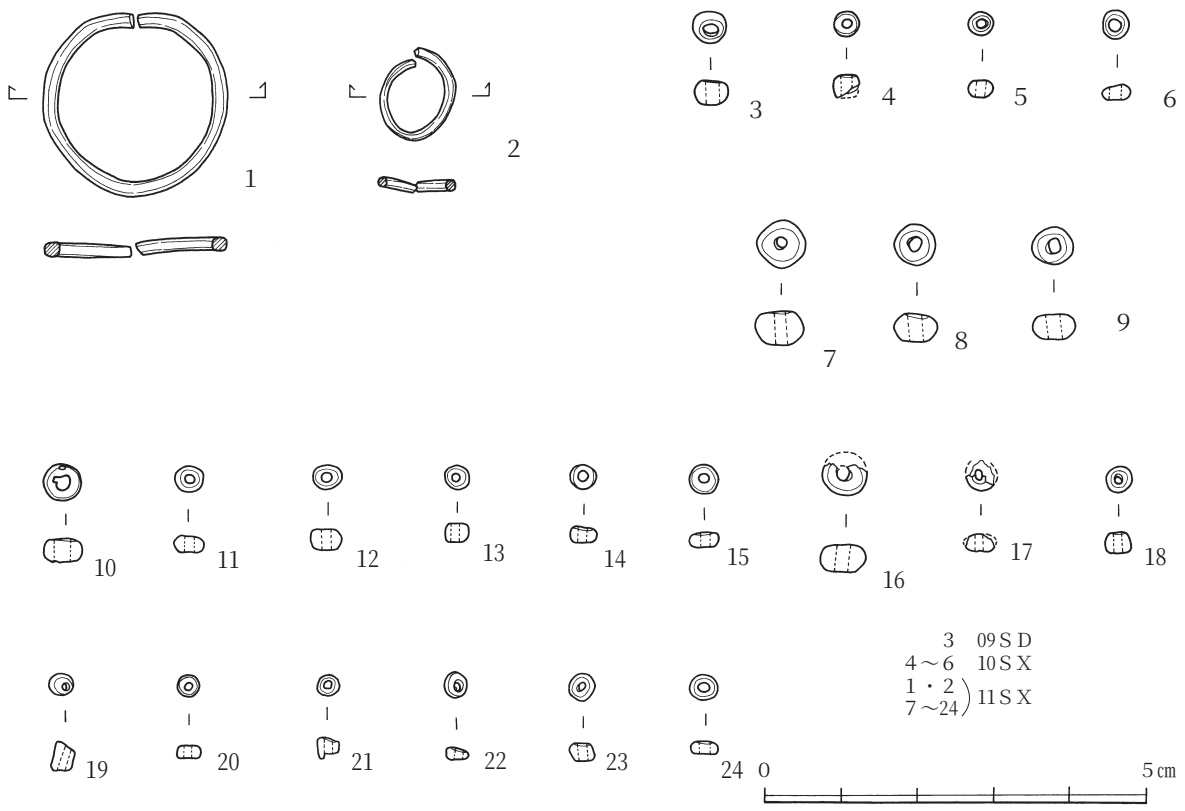
第44図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（馬具類３）（２／３）



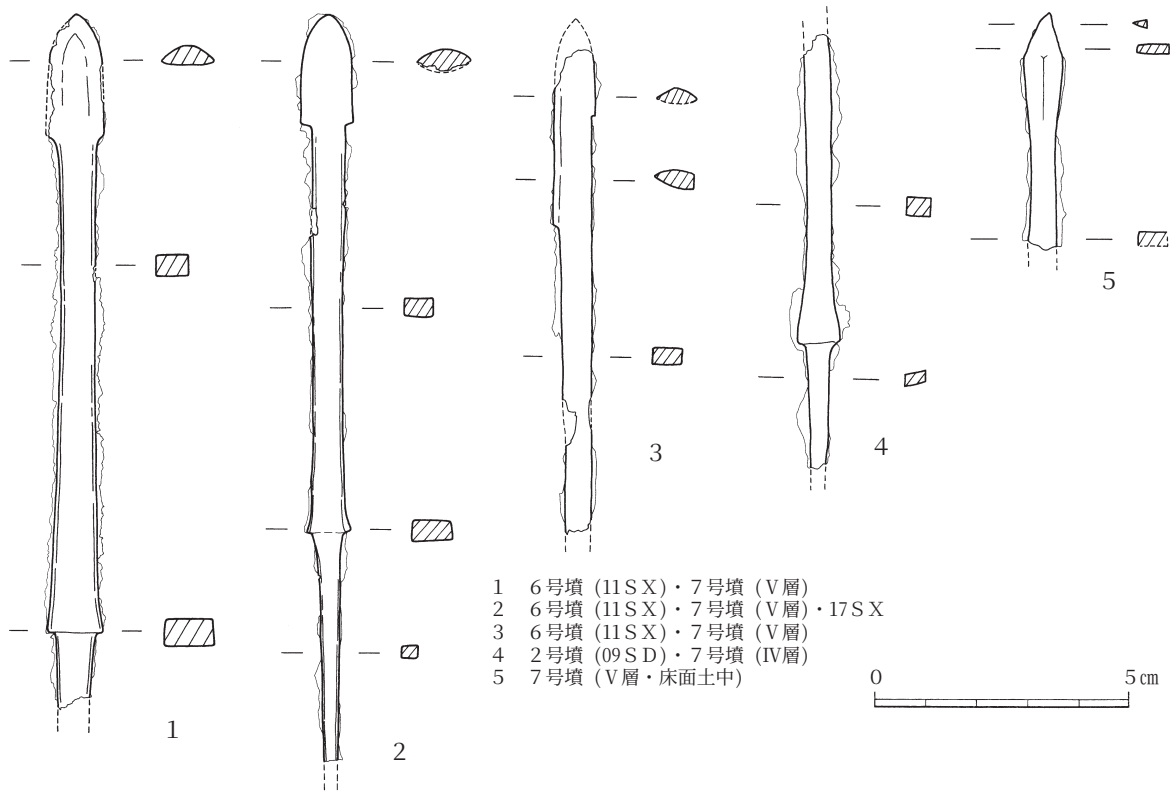
第45図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図（刀子・刀類 他）（２／３）



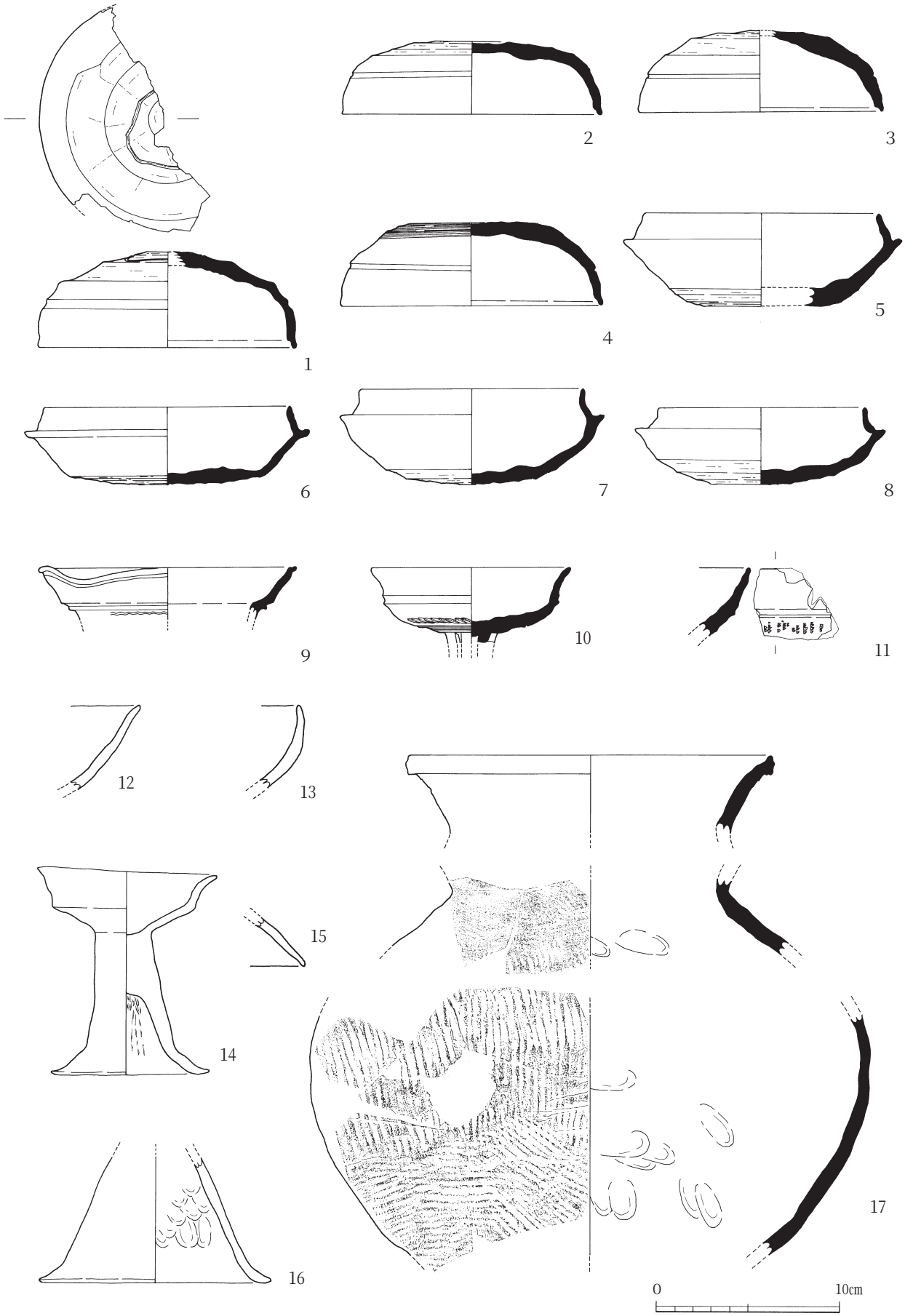
第46図　６号墳撹乱坑内出土鉄器実測図(鉄鏃)（２／３）



第47図　６号墳撹乱坑内出土耳環・玉類実測図（１／１）



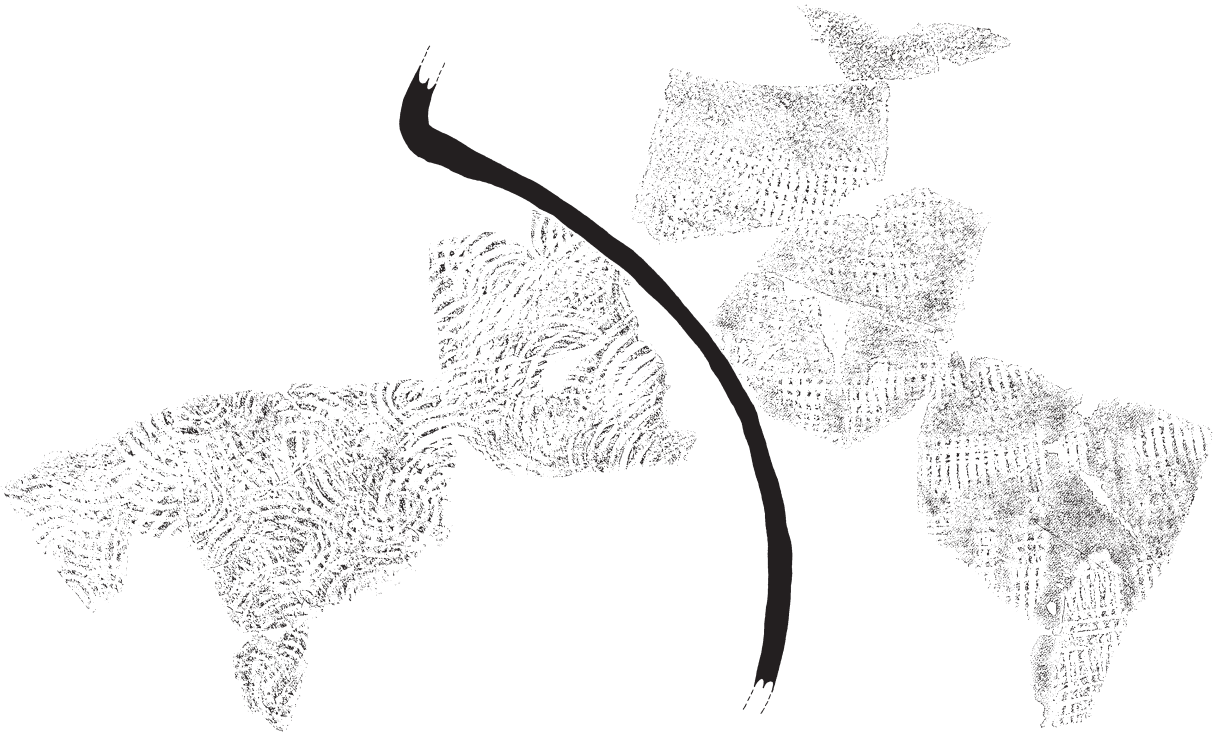
第48図　鉄鏃実測図（複数遺構接合分）（２／３）



1～11
14・16 ）南東側一括　12・15　一括　13　20Ｔｒ.

第49図　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器実測図１（１／３）

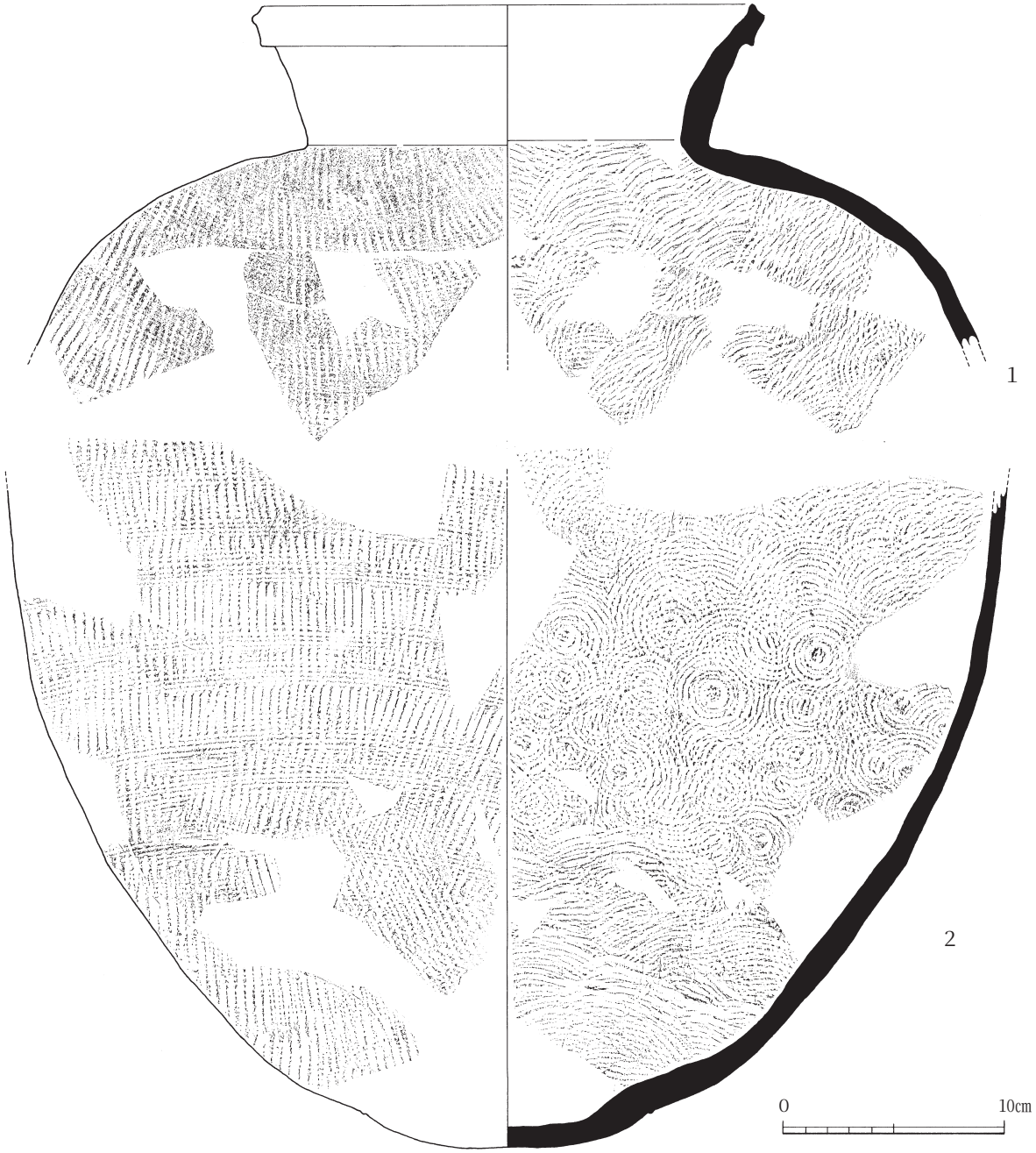
1



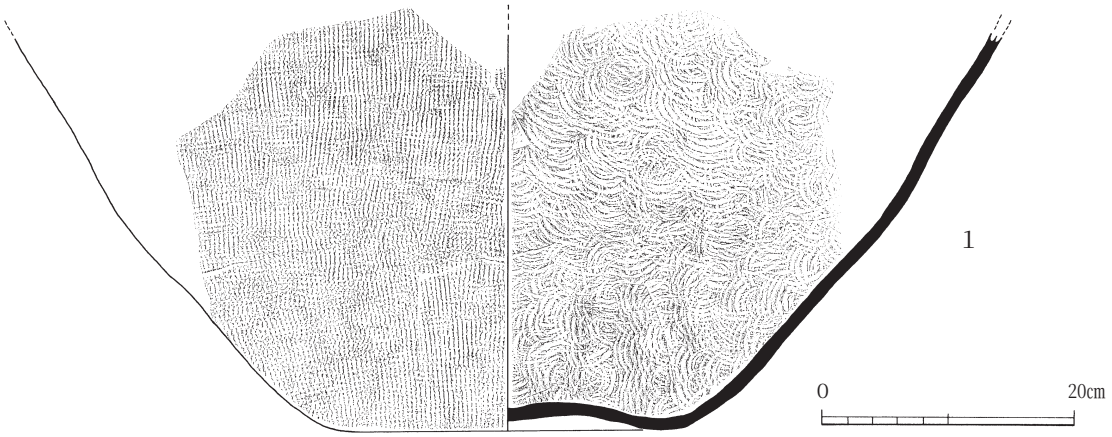
2

0　10cm

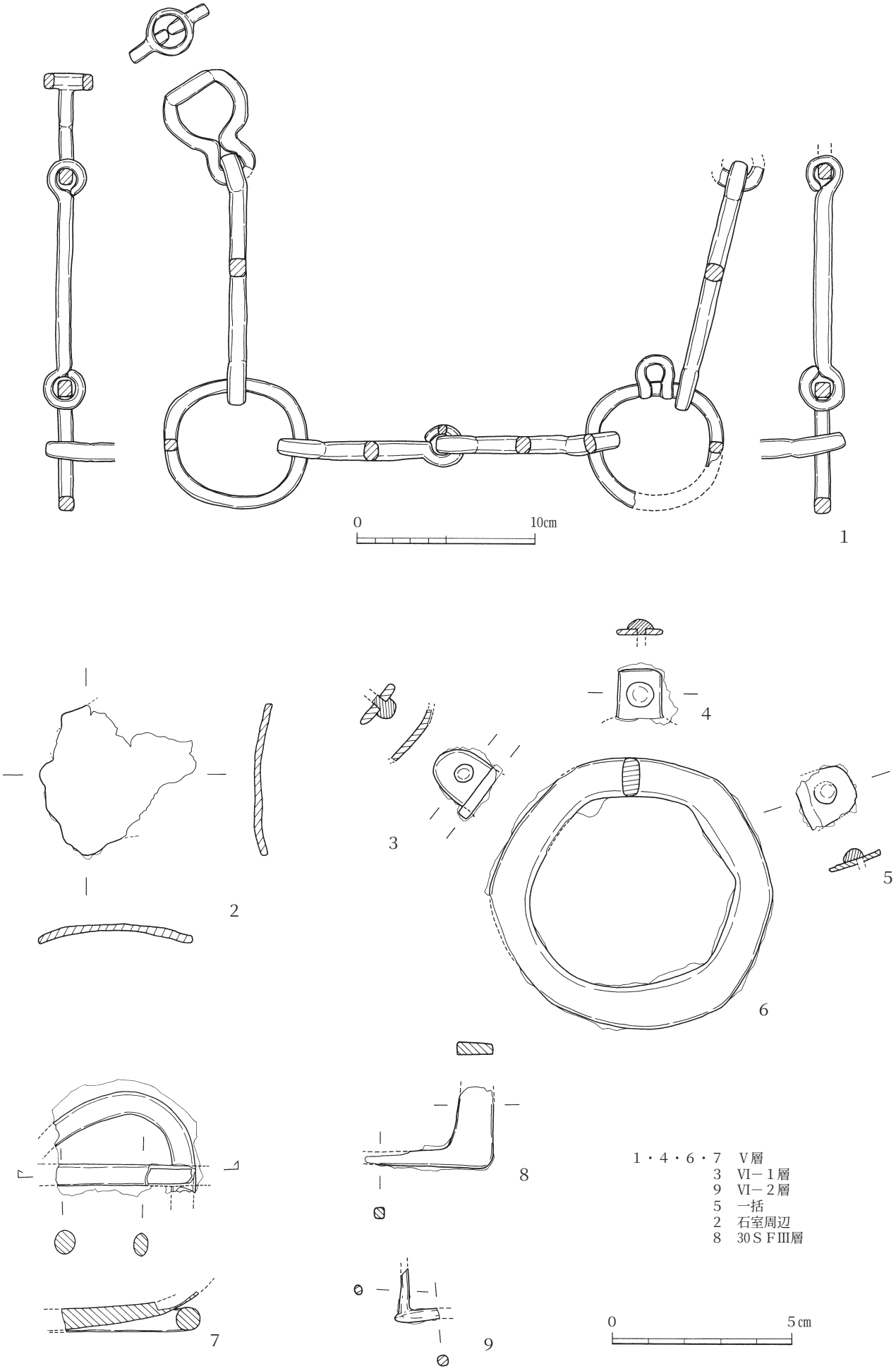
第50図　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器実測図２（１／３）



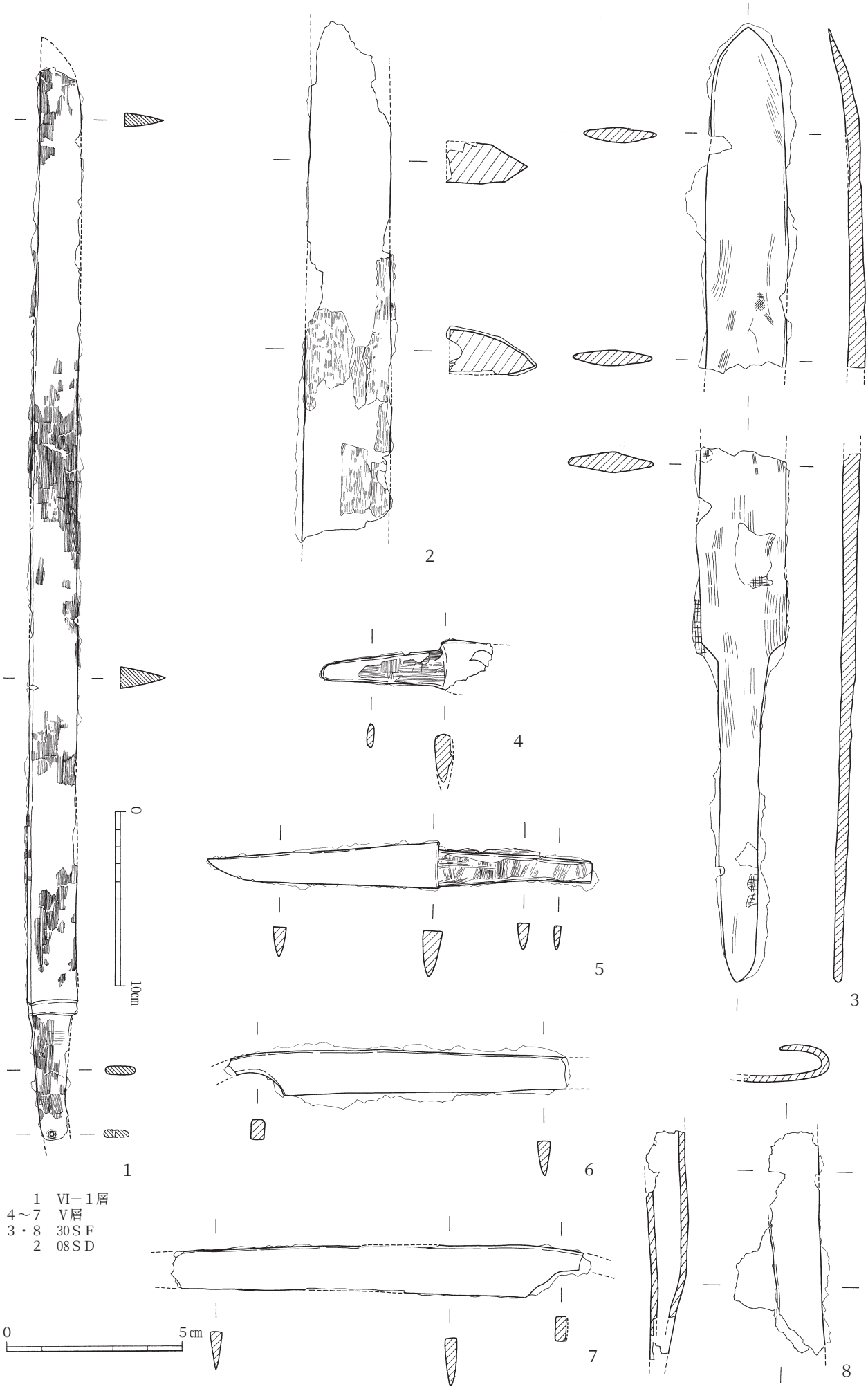
第51図　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器実測図３（１／３）



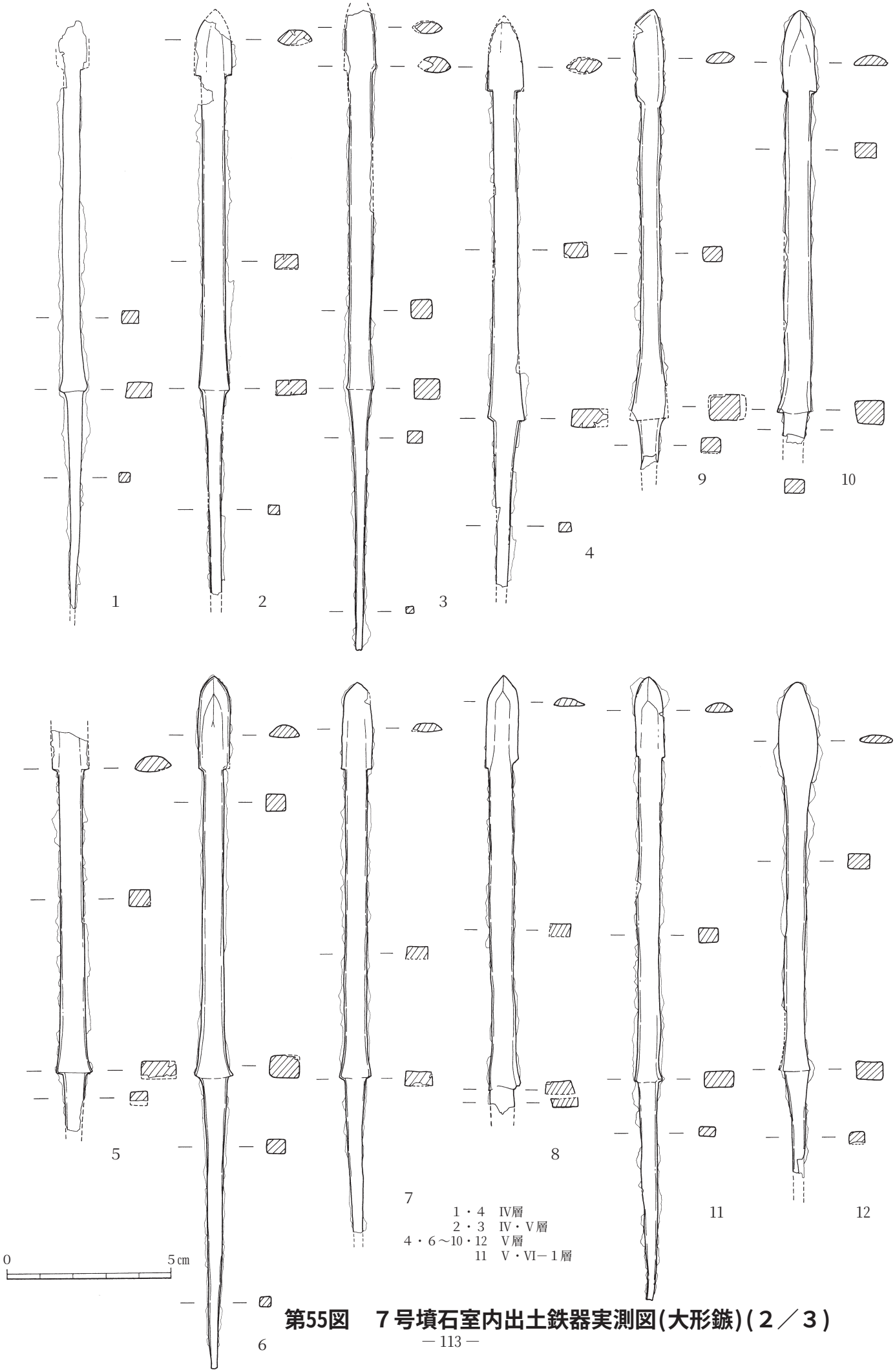
第52図　７号墳墳丘北西崖下出土土器実測図（１／６）



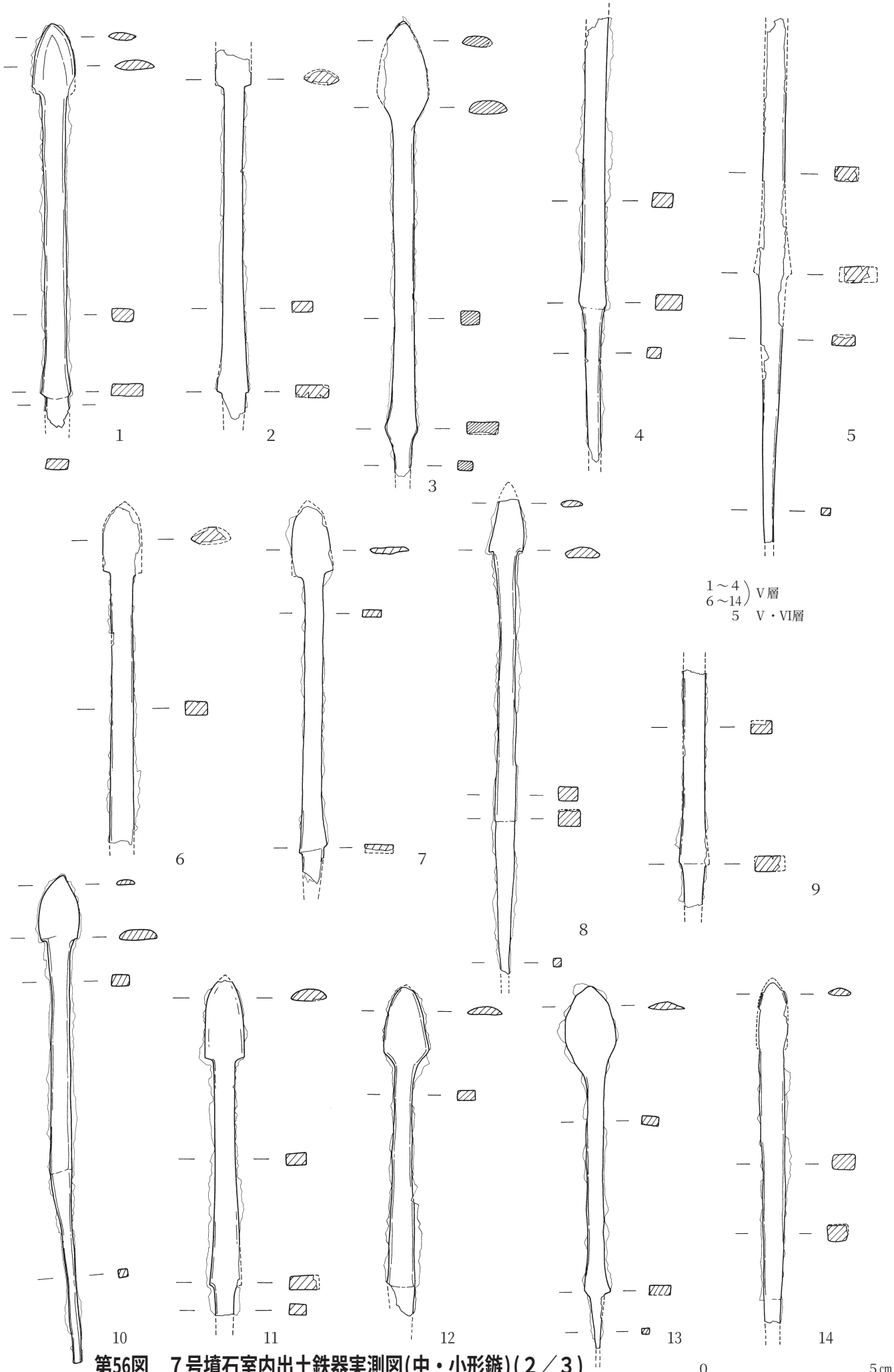
第53図　７号墳石室内及び関連遺構出土鉄器実測図(馬具類)(１／３・２／３)



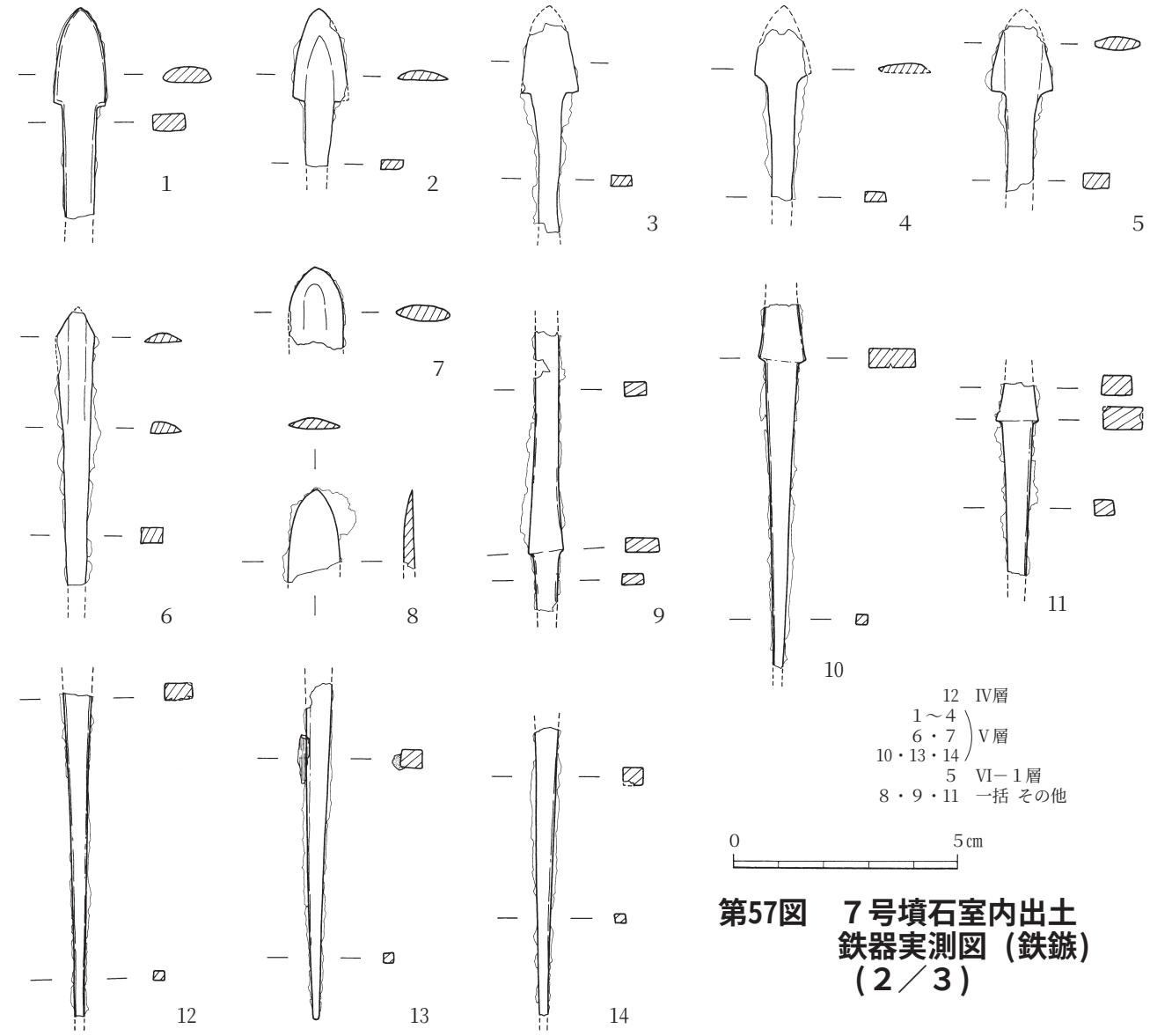
第54図　7号墳石室内及び関連遺構出土鉄器実測図(刀子･刀類 他)(2／3･1／3)



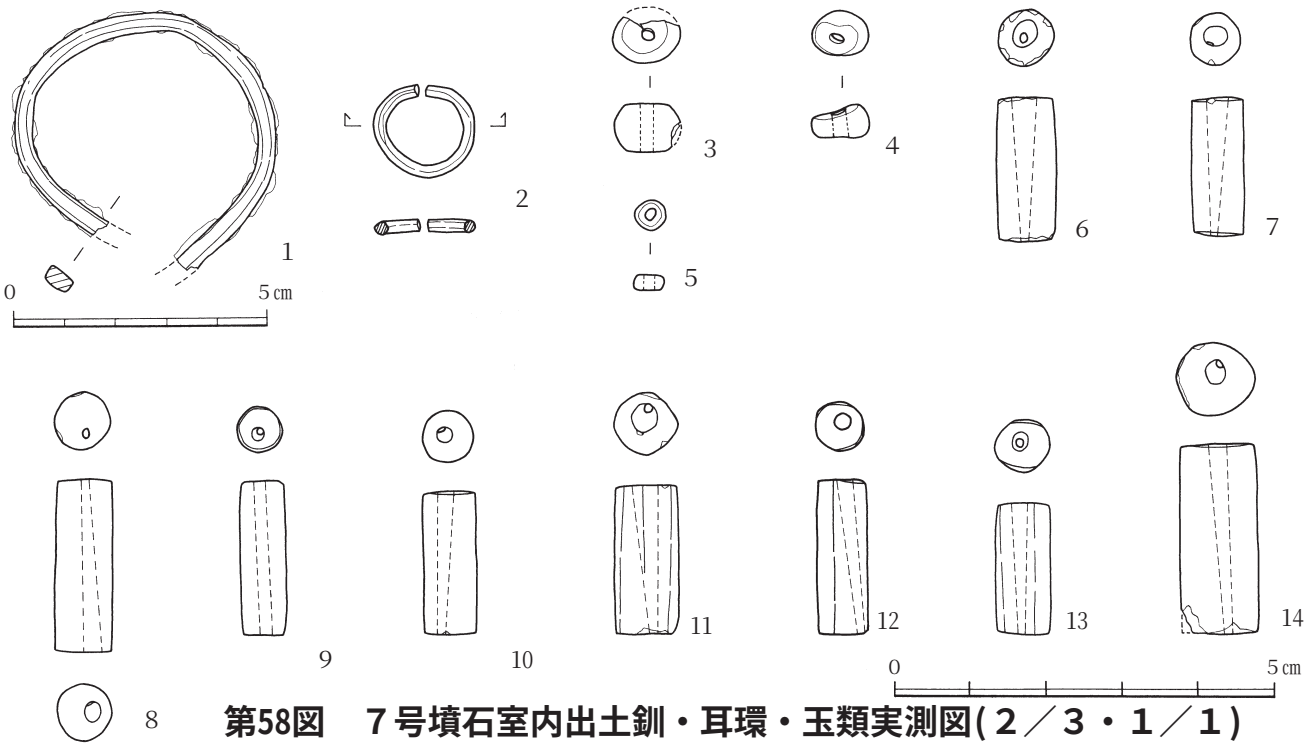
第55図　7号墳石室内出土鉄器実測図(大形鏃)(2／3)



第56図　7号墳石室内出土鉄器実測図(中・小形鏃)(2／3)

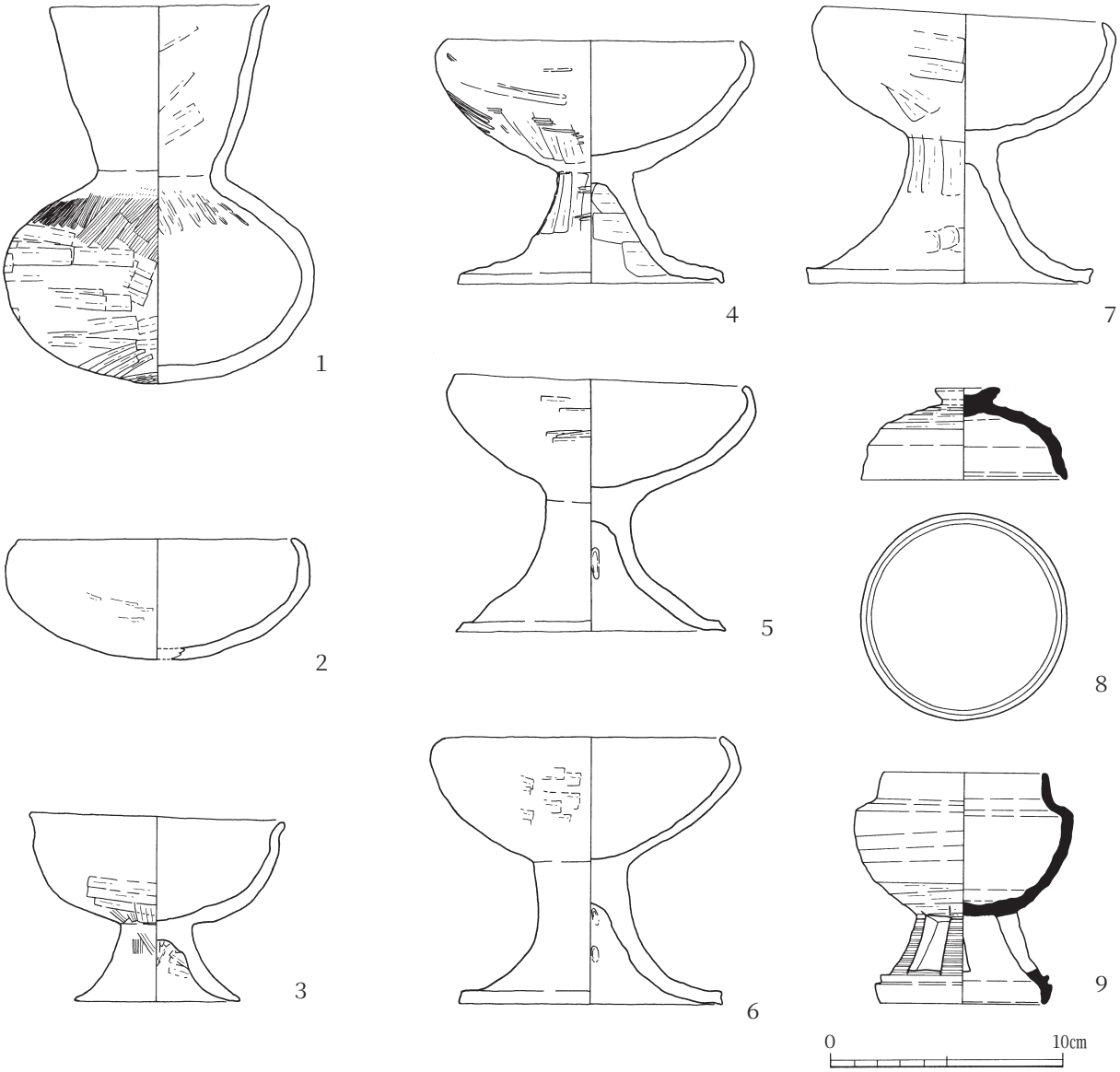


第57図　7号墳石室内出土鉄器実測図（鉄鏃）（2／3）

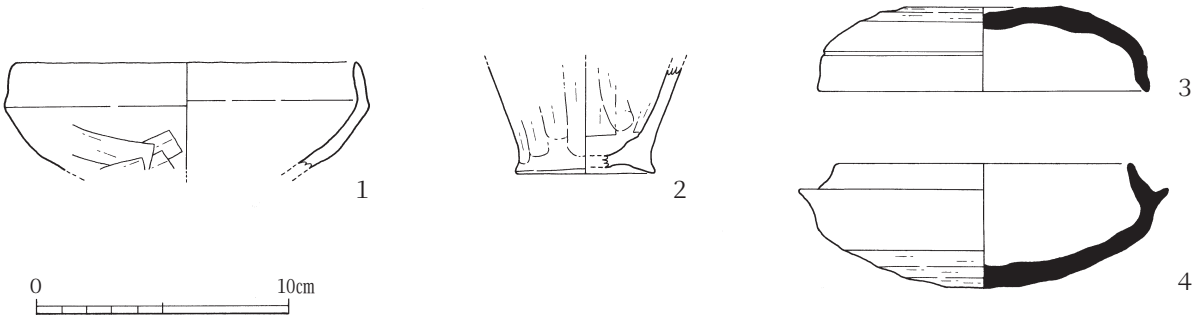


第58図　7号墳石室内出土釧・耳環・玉類実測図(2／3・1／1)

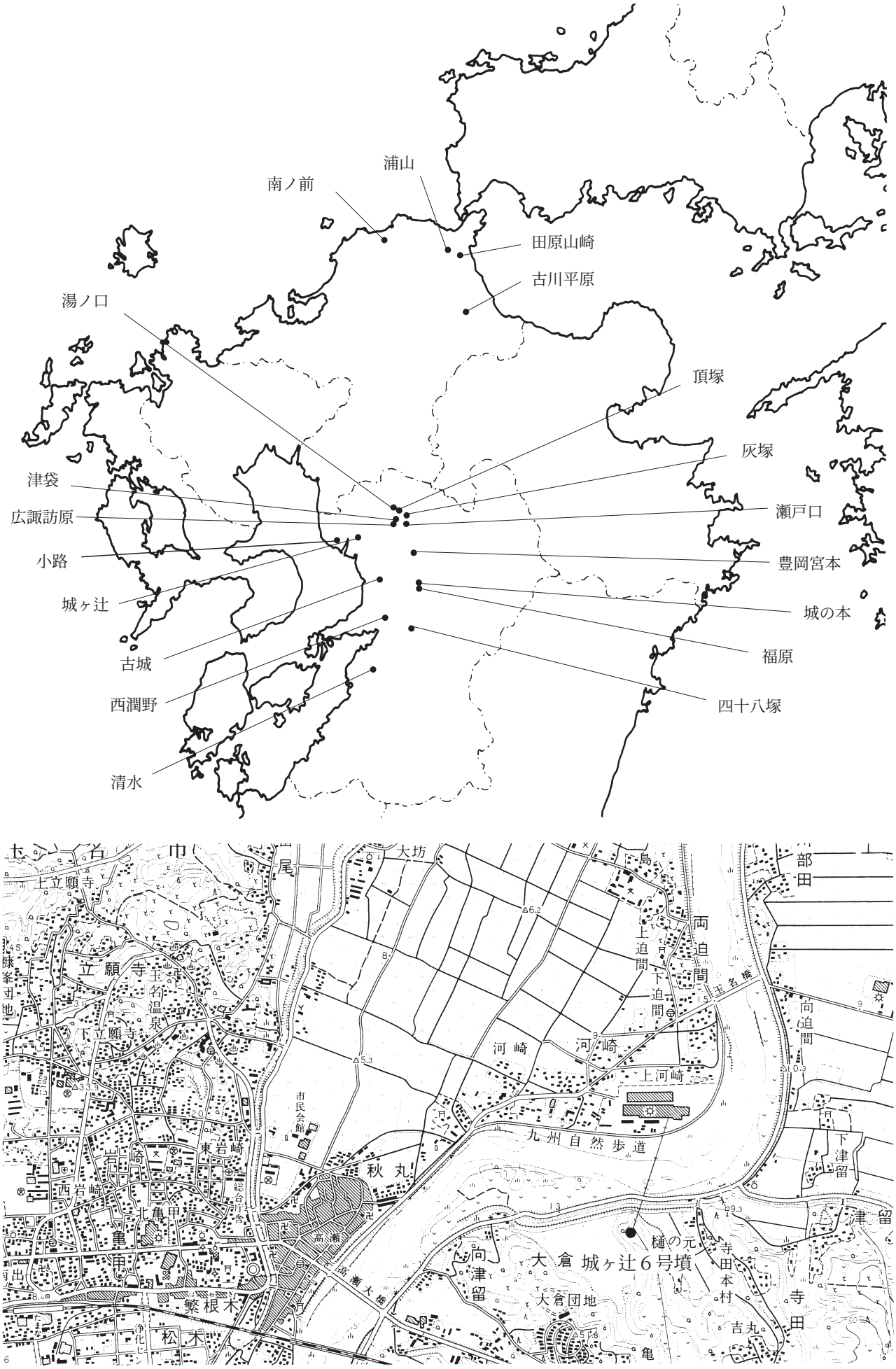
1～3・6～9・11・12・14　V層
10　VI－1層　13　VI－2層



第59図　７号墳墳丘上石材・土器集中地点(31ＳＸ) 出土土器実測図(１／３)



第60図　６・７号墳墓道（25・26ＳＦ）出土土器実測図（１／３）



第61図　遺跡の位置(１／25000)(Fig.１ Location of the Shirogatsuji tumulus, Tamana City, Kumamoto Prefecture)

表

表２　６号墳出土壁面材法量

石材№	長さ(cm)	厚さ(cm)
42	12.0	1.5
42	10.0	2.0
42	5.5	3.5
42	7.5	3.5
42	7.0	1.0
42	9.0	4.0
42	9.0	1.0
42	6.5	3.0
42	5.5	3.0
42	10.5	3.0
42	13.0	2.0
42	9.5	1.5
42	8.0	2.5
42	13.5	1.5
42	6.5	1.5
42	11.0	3.0
42	9.5	2.5
42	4.5	1.5
43	10.0	1.5
43	8.0	2.0
43	8.0	2.0
44	10.0	2.0
44	9.0	1.0
44	9.0	2.5
44	12.0	2.5
53	25.0	3.0
57	5.0	1.0
64	17.0	2.5
65	9.5	4.0
70	9.0	2.0
76	16.5	5.0
79	5.0	3.0
83	11.0	2.0
85	9.5	2.0
85	7.0	2.5
97	14.5	1.5
97	11.0	2.5
103	9.0	2.0
103	8.0	1.5
105	8.0	2.5
105	11.0	1.0
107	4.0	1.0
107	11.5	1.5
109	11.0	2.5
109	8.0	2.0
110	14.0	3.0

長さによる分類

大

石材№	長さ(cm)	厚さ(cm)
53	25.0	3.0
64	17.0	2.5
76	16.5	5.0
97	14.5	1.5
110	14.0	3.0

中

42	13.5	1.5
42	13.0	2.0
42	12.0	1.5
44	12.0	2.5
107	11.5	1.5
42	11.0	3.0
83	11.0	2.0
97	11.0	2.5
105	11.0	1.0
109	11.0	2.5
42	10.5	3.0
42	10.0	2.0
43	10.0	1.5
44	10.0	2.0
42	9.5	1.5
42	9.5	2.5
65	9.5	4.0
85	9.5	2.0
42	9.0	4.0
42	9.0	1.0
44	9.0	1.0
44	9.0	2.5
70	9.0	2.0
103	9.0	2.0
42	8.0	2.5
43	8.0	2.0
43	8.0	2.0
103	8.0	1.5
105	8.0	2.5
109	8.0	2.0
42	7.5	3.5
42	7.0	1.0
85	7.0	2.5

小

42	6.5	3.0
42	6.5	1.5
42	5.5	3.5
42	5.5	3.0
57	5.0	1.0
79	5.0	3.0
42	4.5	1.5
107	4.0	1.0

厚さによる分類

大

石材№	長さ(cm)	厚さ(cm)
76	16.5	5.0
65	9.5	4.0
42	9.0	4.0
42	7.5	3.5
42	5.5	3.5

中

53	25.0	3.0
110	14.0	3.0
42	11.0	3.0
42	10.5	3.0
42	6.5	3.0
42	5.5	3.0
79	5.0	3.0
64	17.0	2.5
44	12.0	2.5
97	11.0	2.5
109	11.0	2.5
42	9.5	2.5
44	9.0	2.5
42	8.0	2.5
105	8.0	2.5
85	7.0	2.5
42	13.0	2.0
83	11.0	2.0
42	10.0	2.0
44	10.0	2.0
85	9.5	2.0
70	9.0	2.0
103	9.0	2.0
43	8.0	2.0
43	8.0	2.0
109	8.0	2.0
97	14.5	1.5
42	13.5	1.5
42	12.0	1.5
107	11.5	1.5
43	10.0	1.5
42	9.5	1.5
103	8.0	1.5
42	6.5	1.5
42	4.5	1.5

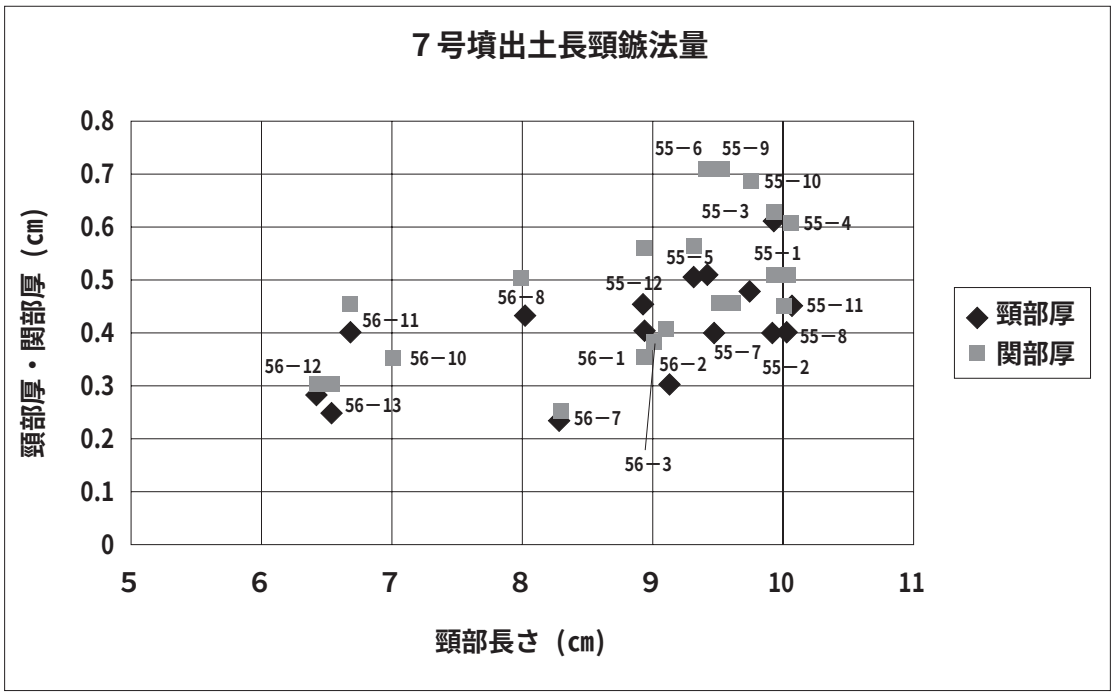
小

105	11.0	1.0
42	9.0	1.0
44	9.0	1.0
42	7.0	1.0
57	5.0	1.0
107	4.0	1.0

表３　７号墳出土長頸鏃法量

図版番号	刃部最大厚(cm)	頸部(cm)	刃部(cm)	茎部(cm)	頸部厚(cm)	関部厚(cm)
55-1		9.9	1.5	(6.7)	0.4	0.5
55-2	0.5	9.6	(1.7)	(6.3)	0.45	0.45
55-3	0.55	9.9	(1.7)	8.05	0.6	0.62
55-4	0.45	10.05	2.15	(5.2)	0.45	0.6
55-5	0.5	9.3	(1.2)	(1.8)	0.5	(0.55)
55-6	0.4	9.4	2.9	9.05	0.5	0.7
55-7	0.325	9.45	2.85	(4.6)	0.4	0.45
55-8	0.3	10.0	2.8	(0.6)	0.4	0.45
55-9	0.3	9.5	2.9	(1.8)	0.45	0.7
55-10	0.3	9.7	2.6	(1.0)	0.47	0.68
55-11	0.4	10.0	2.4	6.75	0.45	0.5
55-12	(0.25)	8.9	3.0	(3.2)	0.45	0.55
56-1	0.3	8.9	2.1	(1.1)	0.4	0.35
56-2		9.1	(1.1)	(0.8)	0.3	0.4
56-3	0.45	9.0	(3.175)	(1.45)	0.4	0.38
56-4		(8.5)		(4.75)	0.45	0.45
56-5		(7.6)		(8.0)	0.43	0.5
56-6		(8.1)	(1.95)		0.4	
56-7	0.2	8.25	(2.05)	(0.95)	0.23	(0.25)
56-8	0.3	8.0	(1.5)	(4.6)	0.43	(0.5)

図版番号	刃部最大厚(cm)	頸部(cm)	刃部(cm)	茎部(cm)	頸部厚(cm)	関部厚(cm)
56-9		(5.75)		(1.3)	0.4	0.45
56-10	0.35	7.0	2.0	5.6	0.35	0.35
56-11	0.45	6.65	(2.35)	(1.0)	0.4	0.45
56-12	0.325	6.4	2.4	(1.0)	0.28	0.3
56-13	0.2	6.5	2.55	(1.7)	0.25	0.3
56-14	0.35	(8.2)	2.0		0.48	
57-1	0.375	(2.6)	2.2		0.4	
57-2	0.2	(1.4)	2.2			
57-3		(3.1)	(1.55)		0.25	
57-4	(0.2)	(2.55)	(1.3)		0.25	
57-5	0.3	(2.3)	(1.45)		0.3	
57-6	0.3	(3.55)	2.7			
57-7	0.35		(1.8)			
57-8	(0.25)		(2.1)			
57-9		(5.0)		(1.3)	0.3	0.3
57-10		(1.3)		(6.9)		
57-11		(0.8)		(3.5)	0.45	0.5
57-12				(7.3)		
57-13				(7.6)		
57-14				(6.5)		



※グラフ数値は図版番号を表す。(頸部厚と関部厚は上下で一対。)

表４-１　出土土器観察表

※（　）内の数値は復元径。

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	注記	器種	部位	口径(cm)	器高(cm)	最大胴径(cm)	底径(cm)	色調 外面	色調 内面	胎土	焼成	調整
第38図-１	図版34-141･142	43	09-SD	５トレ	甕	胴部(反転復元)		18.2以上			橙5YR 6/6	橙5YR 6/6	長石、石英、雲母、角閃石、赤色酸化粒	良	(外) タテ方向のハケ目のちナデ（内）タテ方向のハケ目のちナデ　※外面の一部に黒斑
38-2	33-135	13	09-SD	玉名城ヶ辻　5T	土師器　甕	頸部～胴部		18.2以上	19.6		橙7.5YR 6/8	橙7.5YR 6/8	石英、輝石、角閃石、赤色酸化粒	不良	(外）磨滅のため調整不明（内）横ナデ、タテのケズリのちナデ
38-3	33-134	11	09-SD	玉名城ヶ辻　5T-1224	土師器　甕	口縁～底部(完形品)一部欠損	14.0	17.5	16.5		橙7.5YR 6/8	明赤褐5YR 5/6	長石、雲母、角閃石	やや良	(外) 横ナデ、ハケ目のちていねいなナデ、下～上方向のハケ目、多方向のハケ目、一部赤色顔料残存 (内) 横ナデ、ヨコのケズリのちナデ、ナナメのケズリのちナデ、指頭圧痕残存　※ベンガラが詰いっていた
38-4	33-136	44	09-SD	S-09 No.9、11、ST-01南西（東）側一括	土師器　壺	口縁部(反転復元)	17.4	2.8以上			橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/6	長石、石英、輝石、赤色酸化粒	不良	(外）横ナデ（内）横ナデ　※実測No45と同一個体
38-5	33-138･139	45	09-SD	S-09 No.19	土師器　壺	頸部～胴部(反転復元)		11.0以上	18.4		橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/6	長石、石英、輝石、赤色酸化粒	不良	(外）磨滅のため調整不明（内）ヘラケズリのち一部指ナデ ※実測No44と同一個体
38-6	33-137	41	09-SD	S-9、No.2、No.8、10、16	土師器　壺	口縁～底部(50%残存)	7.3	13.5	13.5		橙7.5YR 6/8	橙7.5YR 6/8	長石、石英、雲母、角閃石、赤色酸化粒	不良	(外）磨滅のため調整不明（内）磨滅のため調整不明 ※外面一部に黒斑
38-7	34-145	36	09-SD	S-09 No.13、15	土師器　壺(二重口縁壺)	口縁～頸部(反転復元)	18.7	8.0以上			橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/8	長石、石英、雲母、角閃石、赤色酸化粒	やや良	(外）横ナデ、突帯、強いナデ（内）横ナデ
38-8	34-143	35	09-SD	S-09、No.6、No.7、16	土師器高坏	口縁部（反転復元）	14.0	3.1以上			明赤褐5YR 5/8	明赤褐5YR 5/8	長石、石英、雲母、輝石、赤色酸化粒	不良	(外）磨滅のため調整不明（内）磨滅のため調整不明
38-9	34-144	42	09-SD	S-09、No.1、No.14、５トレ	土師器高坏	坏体部～脚底部(完形品)		9.0以上		10.8	橙7.5YR 6/8	橙7.5YR 6/8	長石	不良	坏部（外）ナデ（内）ナデ　脚部（外）ナデ、透かし４箇所（内）しぼりのちナデ、透かし４箇所
39-1	34-146左	31	S・54トレンチ	S-04　No.12	土師器　壺	口縁～頸部(破片)	8.0	3.2以上			にぶい橙7.5YR 7/4	にぶい橙7.5YR 7/4	長石、石英、金雲母、輝石、赤色酸化粒	良	(外）横ナデ（内）横ナデ、横方向のヘラケズリ
39-2	33-140	9	S・54トレンチ		土師器　甕	底部		11.3以上			明褐7.5YR 5/6	明褐7.5YR 5/6	長石、石英、角閃石、輝石、赤色酸化粒	不良	(外）磨滅のため調整不明（内）磨滅のため調整不明
40-1	34-151	30	S・54トレンチ	S-04、No.2、No.4、8	土師器　甕	口縁～胴部	16.0	13.2以上			橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/6	長石、雲母	良好	(外）横ナデ、板状工具によるナデ（内）横ナデ、ヘラケズリ、指頭圧痕残存
40-2		53	04-SK	S-4 No.3	土師器坏・高坏	口縁～胴部（破片）		3.4以上			橙5YR 6/6	橙5YR 6/6	長石、石英、角閃石、雲母、赤色酸化粒	良好	(外）ナデ、指頭圧痕（内）ナデ、指頭圧痕
40-3		52	04-SK	S-4一括	土師器手づくね	底部～胴部(反転復元)		2.0以上	5.4以上	(4.2)	にぶい黄橙10YR 7/4	にぶい黄橙10YR 7/4	長石、石英、角閃石、金雲母、赤色酸化粒	良好	(外）ナデ、指頭圧痕（内）ナデ、指頭圧痕
40-4	34-148	15	04-SK	S-04 No.13	須恵器　壺	口縁～底部(完形品)	7.0	6.7	12.0	1.6	灰白N 7/	灰白N 7/	白色岩片を含む（長石）	やや良	(外）回転横ナデ、回転ナデ、回転ヘラケズリ、未調整、粘土紐積み上げ痕残存　（内）回転横ナデ、回転ナデ
40-5		54	04-SK	S-4一括	須恵器高坏	脚部(反転復元)		3.4以上		(8.1)	青灰10BG6/1	緑灰7.5GY6/1	長石、石英、角閃石	良	(外）回転横ナデ、　ていねいなナデ※一カ所方形透かし（内）回転横ナデ
40-6		55	04-SK	S-4 No.6	須恵器坏身	受部～胴部(破片)		3.15以上			青灰5PB6/1	青灰5PB6/1	長石、石英	良好	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ　（内）回転ナデ
40-7	34-149	14	04-SK	S-04 No.10	須恵器　坏	たち上がり～底部（完形品）	11.0	4.4			灰N 6/	灰N 6/	白色岩片を多く含む（長石）	やや良	(外) 横ナデ、回転ヘラケズリ、回転ナデ、未調整、口縁近くの一部に山形状のキザミ模様（３山）(内) 横ナデ、回転ナデ、指によるナデ、粘土紐積み上げ痕残存
40-8	34-150	34	11-SX	S-11 No.2、3、4、6、7、8、9一括	土師器　坏	口縁～底部(完形品)	14.8	3.8			橙7.5YR 7/6	橙7.5YR 7/6	長石、石英、雲母、角閃石、赤色酸化粒	不良	(外）横ナデ、ヘラケズリのちナデ、未調整　※外面体～底部にかけて黒斑　（内）横ナデ、回転ナデ
40-9		56	11-SX	S-11一括	須恵器	口縁部（破片）	(30以内)	2.2以上			青灰10BG6/1	青灰10BG5/1	長石、石英、軽石粒	良	(外）回転横ナデ、工具痕（内）回転ナデ
41-1	34-147	12	03-SD	S-03一括	土師器　壺(二重口縁壺)	頸部(反転復元)		5.0以上			橙7.5YR 7/6	にぶい黄橙10YR 7/4	長石、石英、雲母、角閃石、赤色酸化粒	やや良	(外）横ナデ、工具による模様（内）横ナデ、指頭圧痕残存 ※粘土紐積み上げ痕残存
41-2	34-146右	32	03-SD	S-03一括	土師器　壺	口縁部（破片）	(10.6)	3.0以上			橙7.5YR 7/6	橙7.5YR 7/6	長石、石英、金雲母、角閃石、赤色酸化粒	良	(外）横ナデ（内）横ナデ、横方向のヘラケズリ
49-1	35-152	23	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器坏蓋	口縁端部～天井部(反転復元)	13.8	5.2以上			青灰5PB 5/1	灰白N 7/	白色岩片（長石）、黒色粒石	やや良	(外）横ナデ、回転ナデ、回転ヘラケズリ、凹線（内）回転ナデ
49-2	35-153	24	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器坏蓋	口縁端部～天井部	14.0	3.9			灰黄2.5Y 4/1、6/2	灰N　6/	長石	良好	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ、凹線（内）回転横ナデ
49-3	35-156	21	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器坏蓋	口縁端部～天井部(反転復元)	13.2	4.4以上			オリーブ黒5Y 3/	灰7.5Y 6/1	長石、黒色粒	良	(外）回転ナデ、回転ヘラケズリ、凹線（内）回転ナデ
49-4	35-157	20	ST-01	ST-01南西（東）側一括、７号墳南西（東）下表土一括	須恵器坏蓋	口縁端部～天井部(一部反転復元)	14.2	4.5			オリーブ黒5Y 3/ 灰５Y 6/1	灰5Y 5/1	長石、黒色粒	良好	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ、凹線、カキ目（内）回転横ナデ、ナデ
49-5	35-154	28	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　坏	たち上がり～底部(一部反転復元)	12.6	5.0			黒5Y 2/1	灰N 5/	長石、石英、黒色粒	良好	(外）回転ヘラケズリ、回転横ナデ（内）回転横ナデ
49-6	35-155	26	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　坏	たち上がり～底部(反転復元)	13.2	4.2		10.6	オリーブ灰2.5GY 6/1	オリーブ灰2.5GY 6/1	長石、黒色粒石	やや良	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ、未調整（内）回転横ナデ、指によるナデ　※粘土紐積み上げ痕残存
49-7	35-158	27	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　坏	たち上がり～底部(反転復元)	12.0	5.2			灰5Y 6/1	灰5Y 6/1	長石、輝石	良	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ、未調整（内）回転横ナデ、ナデ
49-8	35-159	29	ST-01	ST-01南西（東）	須恵器　坏	たち上がり～底部(一部反転復元)	11.2	4.2			黒5Y 2/1、灰N 4/ 灰オリーブ5Y 5/2	灰N 4/	長石、黒色粒	良好	(外）回転ヘラケズリ、回転横ナデ、未調整（内）回転横ナデ
49-9	36-163右	22	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　瓶	口縁部（反転復元）	14.0	2.8以上			暗青灰5B 4/1	暗青灰5B 4/1	白色岩片（長石）	良	(外）横ナデ、波状文、沈線、突帯　（内）横ナデ
49-10	36-162	16	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　高坏	口縁～脚部(反転復元)	10.7	4.1以上			灰N 5/	灰N 4/	白色岩片を含む（長石）	良好	(外) 回転横ナデ、回転ナデ、カキ目（６本）、沈線、凹線、ナナメのキザミ (内) 回転横ナデ、回転ナデ、指によるナデ、粘土紐積み上げ痕残存　※外・内面とも灰をかぶっている
49-11	36-163左	25	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　高坏	口縁部（破片）	(9.0)	3.7以上			灰10Y 5/1	灰7.5Y 5/1	長石、黒色粒石	良好	(外）回転ナデ、突帯、櫛歯刺突文（内）回転ナデ
49-12	36-165	38	ST-01	ST-01 周辺一括	土師器　高坏	口縁部（破片）	(12.0)	4.5以上			橙5YR 7/6	橙5YR 6/8	雲母、赤色酸化粒	不良	(外）磨滅のため調整不明（内）磨滅のため調整不明　※反転復元不可能のため口径は推定　※内・外面とも赤色顔料付着
49-13	36-165	40	H･4、20トレ	トレンチNo.20、表土中	土師器　高坏	口縁部（破片）	(13.8)	4.5以上			橙7.5YR 7/6	橙7.5YR 7/6	長石、石英、雲母、赤色酸化粒	良	(外）横ナデ、ナデ（内）磨滅のため調整不明 ※反転復元不可能のため口径は推定
49-14	36-164	17	ST-01	ST-01南西（東）斜面No.1	土師器　高坏	口縁～脚部(完形品)一部欠損	9.7	11.2			橙5YR 6/8	橙7.5YR 6/8	長石、輝石	やや良	(外）磨滅のため調整不明（内）磨滅のため調整不明、しぼり痕
49-15	36-165	39	ST-01	ST-01南西（東）斜面一括	土師器　高坏	脚部（破片）		2.7以上		(13.0)	橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/6	雲母、赤色酸化粒	やや良	(外）磨滅のため調整不明（内）磨滅のため調整不明 ※反転復元不可能のため底径は推定
49-16	36-165	37	ST-01	ST-01南西（東）側一括	土師器　高坏	脚部(反転復元)		6.85以上		12.0	橙7.5YR 7/6	橙7.5YR 7/6	長石、赤色酸化粒	やや良	(外）板ナデ、横ナデ（内）横ナデ、指によるナデ、指頭圧痕残存
49-17	35-160･161左	46	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　甕	口縁～胴部(反転復元)	(19.6)	21.0以上	30.4		灰7.5Y 5/1	灰7.5Y 5/1	長石	良好	(外）横ナデ、平行叩目文（内）横ナデ、指によるナデ ※口縁・頸部・胴部接点なし、同一土器と思われる
50-1	35-160･161右	49	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　甕	胴部（破片）		18.3以上			灰5Y 5/1	灰5Y 6/1	長石、黒色粒	良好	(外）格子叩目文、カキ目（内）同心円文
50-2	36-166	50	ST-01	ST-01南西（東）側一括	須恵器　甕	頸部～胴部(破片)		25.8以上			にぶい黄橙10YR 7/2 灰白10YR 7/1	褐灰10YR 6/1	長石、黒色粒	良好	(外）平行叩目文（内）同心円文　※自然釉付着
51-1	37-167･168	47	ST-01	ST-01南西(東)側一括 S10･W20南西(東)斜面一括	須恵器　甕	口縁～胴部(反転復元)	22.0	15.5以上			明黄褐10YR 6/6 黄灰2.5Y 6/1	暗灰黄2.5YR 5/2 明黄褐10YR 6/6	長石、黒色粒	良好	(外）回転横ナデ、かき目、平行叩目文（内）回転横ナデ、同心円文 ※口縁部の外、内面の一部に自然釉付着
51-2	38-169･170	48	ST-01	ST-01南西（東）側一括、北側斜面S-25　No.1、S-09	須恵器　甕	胴～底部(反転復元)		29.6以上			灰5Y4/1、灰白5Y7/2 オリーブ黒5Y 3/1	灰黄2.5YR 6/2 黄灰2.5Y 6/1	長石、黒色粒	良好	(外）平行叩目文（内）同心円文　※全体に焼きぶくれが数カ所見られる
52-1	39-171･172	51	包含層	1-S区　北西ガケ下一括	須恵器　甕	底部～胴部(反転復元)		31.4以上		28.4	灰5Y 4/1	黄灰2.5Y 5/1	長石、黒色粒	良好	(外）格子叩目文（内）同心円文
59-1	40-181	6	31-SX	ST-01 No.1	土師器　直口壺(長頸壺)	口縁～底部(完形品)	9.3	16.3	13.3		明赤褐5YR 5/6	明赤褐5YR 5/6	長石、石英、雲母、黒色砂粒、赤色酸化粒	良好	(外）横ナデ、ヨコのケズリのちナデ、ヨコのケズリのちタテのハケ目（内）横ナデ、ナナメのケズリのちナデ、ナデ、ヨコのケズリのちナデ、ていねいなナデ、しぼり痕
59-2	40-178	5	31-SX	S-31 No.5	土師器　坏	体部～底部(完形品)一部欠損	11.8	5.15	13.0		明赤褐2.5YR 5/8	明赤褐2.5YR 5/8	長石、石英、角閃石、赤色酸化粒	良好	(外）ヨコのケズリのちナデ、横ナデ（内）器面磨滅のため調整不明、横ナデ
59-3	40-177	10	31-SX	S-31 No.2	土師器　高坏	口縁～脚部(完形品)一部欠損	11	8.1		6.8	橙5YR 6/8	橙5YR 6/8	長石、雲母、角閃石、赤色酸化粒	良	坏部 (外) ヨコのケズリのちナデ、タテのケズリのちタテのハケ目、横ナデ (内) ヨコのナデ、横ナデ 脚部 (外) タテのケズリのちハケ目のちナデ、横ナデ (内) ヨコのナデ、横ナデ
59-4	40-173	1	31-SX	S-31 No.8	土師器　高坏	坏部～脚部（完形品）一部欠損	12.5	10.6		11.4	橙2.5YR 6/6	にぶい橙7.5YR 7/4	長石、角閃石、赤色酸化粒	良好	坏部 (外) タテのヘラケズリのちヨコのヘラミガキ、横ナデ (内) 不明瞭 脚部 (外) タテのケズリのちヨコのミガキ (外～内) ナナメの指ナデ (内) ヨコのケズリ
59-5	40-175	4	31-SX	S-31 No.9	土師器　高坏	坏部～脚部（完形品）一部欠損	12.4	11.1		11.5	橙7.5YR 6/8 2.5YR 7/8	橙7.5YR6/8 2.5YR 7/8	長石、輝石、角閃石、赤色酸化粒	良好	坏部 (外) 横ナデ、ヨコとナナメのケズリのちナデ (内) 横ナデ、ていねいなナデ 脚部 (外) タテのケズリのちナデ、ていねいなナデ (内) ヨコのケズリのちナデ、指頭圧痕残存
59-6	40-176	3	31-SX	S-31 No.6	土師器　高坏	坏部～脚部（完形品）一部欠損	11.8	11.4		11.3	橙5YR 6/8	橙5YR 6/8	長石、石英、雲母、角閃石、赤色酸化粒	良好	坏部 (外) 横ナデ、ヨコのケズリのちナデ (内) 横ナデ、ていねいなナデ ※口縁外・脚内に一部黒斑付着 脚部 (外) タテのケズリのちナデ、横ナデ　(内) ていねいなナデ、横ナデ、指頭圧痕残存
59-7	40-174	2	31-SX	S-31 No.7	土師器　高坏	坏部～脚部（完形品）一部欠損	12.0	11.9		11.9	橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/6	長石、石英、雲母、赤色酸化粒	良好	坏部 (外) ナナメとタテのヘラナデ (内) ヨコのナデ　脚部 (外) タテのケズリのちナデ、ヨコのケズリのちナデ (内) 横ナデ、タテのケズリのちナデ、積み上げ痕残存
59-8	40-179	8	31-SX	S-31 No.3	須恵器脚付短頸壺　蓋	口縁～天井部(完形品)	8.7	3.9			灰N 6/	灰白N 7/	長石、黒雲母、角閃石、赤色酸化粒	良好	(外）回転ナデ、回転ヘラケズリ、回転横ナデ (内) 回転ヘラナデ、回転横ナデ ※内面全面に赤彩付着　※外面全面に灰をかぶっている（灰による模様残存）
59-9	40-180	7	31-SX	S-31 No.4	須恵器有蓋脚付短頸壺	口縁～脚部(完形品)	6.9	9.9	9.4	7.0	灰N 6/	灰N 6/	長石、黒色砂粒	良好	坏部(外)回転ナデ、回転ヘラケズリ(内)回転ナデ、脚部(外)回転ナデ、カキ目、横ナデ(内)回転ナデ　※口縁の一部に赤彩残存、蓋の内面の赤彩が付着か　※スカシ3箇所　※自然釉付着
60-1	41-183	33	25-SF	S-25一括 ST-01南西側一括	土師器　坏	口縁～体部(反転復元)	12.8	4.5以上			橙7.5YR 6/6	橙7.5YR 6/6	長石、石英、赤色酸化粒	良	(外）ヘラ削り後ていねいなナデ、横ナデ　※赤色顔料が内外に付着（内）ヘラ削り後ていねいなナデ、横ナデ
60-2		57	25-SF	S-25一括	土師器　甕	胴部～底部(反転復元)		4.15以上		(5.7)	にぶい黄橙7.5YR 7/4	にぶい黄橙7.5YR 7/6	長石、赤色酸化粒	良好	(外）タテナデ（内）上方向工具ナデのち手ナデ
60-3	41-182	19	25-SF	S-25 No.2	須恵器坏蓋	口縁端部～天井部(反転復元)	13.0	3.3			灰N 4/、5Y 5/1	灰N 4/	長石、石英	良好	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ、凹線（内）回転横ナデ、回転ナデ
60-4	41-184	18	25-SF	S-25 No.3、No.5、No.6	須恵器　坏	たち上がり～底部(反転復元)	11.5	4.9			灰5Y 5/1	灰白5Y 7/1	長石、石英、黒色粒	不良	(外）回転横ナデ、回転ヘラケズリ ※受部～体部にかけて色の変化が見られる(重ね焼き？)(内)回転横ナデ、回転ナデ

表４－２－１　６号墳出土鉄器観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
第42図-1・3	図版42-187	66	S-11	６号墳撹乱坑	轡			2.4以上	3.4以上	28.7	立聞部に吊り手式の鉤金具
42-2	42-187	67	S-11	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	7.5以上	11.5	74.1	縁辺部鋲13、中央部鋲２残存
42-4	42-187	65（29）	S-11	６号墳撹乱坑	引手			6.0以上	2.0以上	26.6	銜（連結部）残存
42-5	44-192・193	136	S-11	６号墳撹乱坑	杏葉片			2.9以上	4.3	4.7	厚さ1.05㎜の板状鉄片
42-6	44-192・193	26	S-11	６号墳撹乱坑	杏葉			5.0以上	3.7以上	17.5	縁部1.2cm幅、鋲1.0cm間隔３残存
42-6	44-192・193	135	S-11	６号墳撹乱坑	杏葉			2.95以上	3.3以上	6.6	鋲２残存、実測No.26と同一個体の可能性あり
42-7	44-192・193	131	S-11	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	2.5以上	2.0以上	3.7	鋲１、Ｕ字状
42-7	44-192・193	131	S-11	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	3.0以上	3.0以上	4.1	鋲痕跡３残存
42-7	44-192・193	131	S-10	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	1.5以上	2.5以上	3.8	鋲１残存
42-7	44-192・193	131	S-01	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	5.3以上	2.5以上	6.6	鋲４残存、実測No.131（上記３点）は同一個体の可能性あり
42-8	44-192・193	139	S-11	６号墳撹乱坑	鐙			2.9以上	1.4以上	6.7	鋲１残存、壺鐙か
43-1	43-188	55	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.7	2.0	4.0	革帯金具、Ｕ字形、鋲２残存
43-2	43-188	137	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.05以上	2.2以上	0.9	鋲１残存
43-3	43-188	143	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具	縁部	1.15以上	1.6以上	0.8	鋲１残存
43-4	43-188	43	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		3.6	3.1	10.1	革帯金具、Ｕ字形、鋲２残存、鉄地金銅張り、金箔はほとんど剥落
43-5	43-188	111	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.3以上	2.35	3.9	革帯金具、頭部の両隅は斜めにカットされる、鋲１残存、鋲に緑青付着
43-6	43-188	54	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		3.1	2.0	6.2	革帯金具、長方形、鋲３残存
43-7	43-188	93	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.65以上	2.3	2.8	革帯金具、鋲１残存
43-8	43-189	52	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.2	1.4	2.7	革帯金具、頭部の両隅は斜めにカットしてある、鋲３残存、金箔銅張り
43-9	43-189	154	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.15以上	1.8	2.0	革帯金具、鋲１残存、Ｕ字状
43-10	43-189	140	S-04	６号墳羨道埋没後土坑	金具	飾金具		2.0以上	1.5以上	1.4	鋲２残存
43-11	43-189	130	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.35以上	1.6	0.8	辻金具の可能性あり
43-12	43-189	41	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.45以上	2.0	1.4	革帯金具、Ｕ字状、穿孔残存
43-13	43-190	46	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.85	3.45	4.6	革帯金具、方形、鋲５残存
43-14	43-190	48	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.65	2.6	4.4	革帯金具、方形（一部欠損）、鋲５残存
43-15	43-190	17	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.6	2.6	4.4	革帯金具、一部欠損、方形、鋲３残存
43-16	43-190	39	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.7以上	1.7以上	2.6	革帯金具、鋲１残存
43-17	43-191	101	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.2	2.25	2.2	革帯金具、方形（一部欠損）、鋲３残存
43-18	43-191	18	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.1	2.3	2.8	革帯金具、一部欠損、方形、鋲２残存
43-19	43-191	113	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.2以上	1.75以上	1.7	革帯金具、鋲２残存
43-20	43-191	98	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.3以上	1.45以上		人骨周辺、鋲１残存
43-20	43-191	100	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.5以上	1.35以上	0.9	革帯金具、方形、鋲２残存
43-21	43-190	122	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.55以上	1.0以上	0.7	鋲１残存
43-21	43-190	123	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.05以上	1.1以上	0.4	鋲１残存
43-21	43-190	124	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.05以上	1.2以上	0.3	
43-22	43-190	134	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.6以上	1.95以上	1.2	
43-23	43-189	138	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.1以上	1.5以上	1.1	鋲１残存、雲珠脚部の可能性あり
43-24	43-191	50	S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	1.0以上	0.35	0.4	
43-25	43-191	44	S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	1.2以上	0.55	0.3	
44-1	44-194	58	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.6以上	2.4	2.9	革帯金具（辻金具の可能性あり）、方形(一部欠損)、鋲３残存
44-2	44-194	47	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.5	2.25	3.3	革帯金具（辻金具の可能性あり）、 方形、鋲３残存、責金具残存
44-3	44-194	59	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.3以上	2.3	3.4	革帯金具方形（辻金具の可能性あり）、鋲４残存
44-4	44-194	40	S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		2.0以上	1.9以上	1.9	鋲３残存、雲珠脚部の可能性あり
44-5	44-194	53	S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.7以上	1.6	2.2	革帯金具（雲珠脚部か辻金具の可能性あり）、Ｖ字形、鋲３残存
44-6	44-194	49	S-10	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.6以上	1.7	1.9	革帯金具（雲珠脚部か辻金具の可能性あり）、Ｕ字形、鋲３残存
44-7	44-195	31	S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			4.6以上	3.15以上	5.43	
44-8	44-195	51	S-01	６号墳撹乱坑	鉸具			3.45以上		4.4	
44-9	44-195	32	S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			2.4以上	2.1以上	3.4	
44-10	44-195	149（60）	S-10	６号墳撹乱坑	鉸具			2.25以上	2.25以上	2.3	
44-11	44-195	152	S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			1.9以上	2.3以上	2.9	
44-12	44-195	151	S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			1.3以上	2.9以上	3.4	環状部分
44-13	44-195	150	S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			1.8以上	1.7以上	1.5	革Ｕ字状、径４㎜
45-1	45-196	42	S-11	６号墳撹乱坑	刀		刃部の一部	16.4以上	2.8	114.4	木質が多く残る
45-2	45-196	120	S-11	６号墳撹乱坑	刀		刃部の一部	4.3以上	2.05以上	18.0	厚み0.95cm
45-3	45-196	106	S-11	６号墳撹乱坑	刀子		基部～刃部	4.1以上	1.3	5.8	関部残存、研ぎ減り顕著
45-4	45-196	103	S-01	６号墳撹乱坑	刀子		刃部	3.1以上	1.0	3.5	
45-5	45-196	148	S-04	６号墳羨道埋没後土坑	刺突具か？	鍛造品	刃部～袋部	4.8以上	2.5以上	14.1	鑿の可能性あり
45-6	45-196	61	S-11	６号墳撹乱坑	釘		頭部～身部	6.0以上	2.3以上	31.8	
46-1	45-197	64	S-10・11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	片刃尖根式	刃部～茎部	16.45以上	1.0	15.9	
46-2	45-197	14	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	14.8以上	1.1	18.4	片刃、一部木片を残す
46-3	45-197	77	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	片刃尖根式	刃部～頸部	10.4以上	0.65	12.7	
46-4	45-197	13	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部	8.2以上	1.1	10.3	片刃
46-5	45-198	110	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	9.33以上	0.83	12.1	
46-6	45-198	94	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	7.55以上	0.85	9.7	
46-7	45-198	99	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	9.85以上	0.95	12.4	
46-8	45-198	87	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部	6.9以上	0.55以上	4.4	茎部先端残存
46-9	45-198	85	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部	8.8以上	0.6以上	5.4	全体に木質残存
46-10	45-198	108	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部	3.9以上	0.35以上	2.2	
46-11	45-198	109	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部	2.85以上	0.25以上	0.5	木質残存
46-12	45-198	88	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部	4.45以上	0.5以上	3.1	茎部先端残存
46-13	45-198	107	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部	5.0以上	0.3以上	2.0	木質残存、別個体の茎部の一部（1.1cm）銹着
46-14	45-199	112	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸片刃鏃	刃部～茎部上部	4.3以上	0.6	4.2	
46-15	45-199	116	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	片刃鏃	刃部	1.8以上	0.7	1.0	
46-16	45-199	121	S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		刃部～頸部上部	2.42以上	1.65	2.8	長頸鏃、刃部先端欠損
46-17	45-199	115	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		刃部	1.50以上	1.1	1.4	
46-18	45-199	114	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	片刃鏃	刃部	1.15以上	1.05以上	0.6	
46-19	45-199	12	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	柳葉平根式	鏃身部～茎部上部	6.7以上	2.6以上	9.3	逆刺あり
46-20	45-199	63	S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		鏃身部～茎部上部	4.8以上	1.7以上	4.7	圭頭斧箭

表４－２－２　６号墳出土鉄器観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
			S-11	６号墳撹乱坑	刀子			1.8以上	1.1	2.6	刃部先端欠損、鉸具の一部の可能性あり
			S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			2.0以上		0.6	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉸具か轡			3.0以上	3.0	2.6	革帯金具、U字状、径５㎜、錆膨れ顕著
			S-11	６号墳撹乱坑	杏葉片		縁部	2.5以上		1.7	鋲痕跡1確認、縁部幅1cm
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		頸部	7.0以上		26.0	屈曲している
			S-11	６号墳撹乱坑	杏葉片			4.0以上	4.0以上	6.3	縁部に鋲1残存
			S-11	６号墳撹乱坑	杏葉片の一部か			4.0以上	2.7以上	4.7	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部下部	3.4以上		1.1	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.9以上		0.8	全体に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部	4.8以上		6.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部	5.0以上			
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部上部	3.2以上		3.3	樹皮及び木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部上部	2.1以上		2.7	一部に樹皮残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部下部	3.2以上		1.0	木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	3.4以上		5.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	5.1以上		9.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	3.2以上		3.1	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部下部	3.4以上		1.1	木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部上部	3.2以上		2.4	樹皮残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部上部	1.8以上		1.8	樹皮残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	2.3以上		3.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	2.9以上		2.7	茎部には木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	3.6以上		5.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	4.0以上		5.6	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	2.4以上		3.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.9以上		0.6	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	2.1以上		2.5	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.8以上		19.0	木質残存、ほぼ基部
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部下部	1.4以上		19.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	3.0以上		2.9	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.8以上		0.8	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.4以上		1.5	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	刃部の一部	1.9以上		1.0	刃部先端欠損
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.3以上		2.0	全体に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.0以上		1.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	2.9以上		3.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.0以上		2.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	刃部下部～頸部上部	1.9以上		2.1	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.8以上		2.1	全体に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	2.5以上		3.9	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	1.5以上		1.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.7以上		0.8	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	1.7以上		1.8	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					1.5	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.9以上		1.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	2.2以上		1.6	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.8以上		0.4	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.3以上		0.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	4.7以上		1.8	木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					2.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					12.7	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					1.4	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	飾金具				4.8	革帯金具、鋲痕跡１残存
			S-11	６号墳撹乱坑	轡		引手もしくは銜	3.5以上		12.3	環状部分の幅は2.6cm
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					1.9	
			S-11	６号墳撹乱坑			刃部先端	1.5以上	1.6以上	1.2	
			S-11	６号墳撹乱坑			刃部の一部	3.5以上	2.4以上	14.8	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					0.8	
			S-11	６号墳撹乱坑			刃部の一部	2.9以上	1.4	2.9	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					3.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					2.5	
			S-11	６号墳撹乱坑			刃部の一部	1.7以上	1.9以上	1.8	
			S-11	６号墳撹乱坑			刃部先端	1.9以上	2.5以上	1.7	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		頸部～茎部上部	5.4以上		6.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					1.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	3.1以上		3.0	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	4.8以上		3.9	
			S-11	６号墳撹乱坑	杏葉		縁部	1.1以上		0.9	鋲１残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			1.2以上	1.7以上	1.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			0.8以上	1.4以上	0.8	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉸具			1.0以上		0.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	1.3以上		0.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	1.0以上		0.4	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	1.0以上		0.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.2以上		0.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.1以上		0.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	金具	責金具		0.8以上		0.2	
			S-11	６号墳撹乱坑	不明		鋲			0.2	直径0.6cm
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		頸部の一部	1.8以上		1.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.8以上		1.0	部分的に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.8以上		0.3	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.4以上		0.7	

表４－２－３　６号墳出土鉄器観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.3以上		0.5	全体に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.2以上		0.4	
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.0以上		0.3	全体に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	0.9以上		0.2	全体に木質残存
			S-11	６号墳撹乱坑	不明					3.5	
			S-11	６号墳撹乱坑			刃部	3.3以上		2.7	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		0.9以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	0.6以上		0.3	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		頸部の一部	1.7以上		2.2	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.5以上		0.3	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.1以上		0.2	
			S-10	６号墳撹乱坑	不明		鋲			0.4	直径0.7cm
			S-10	６号墳撹乱坑	不明					8.6	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	1.5以上		1.0	
			S-10	６号墳撹乱坑	刀子		刃部の一部	3.0以上		6.6	厚み0.6cm
			S-10	６号墳撹乱坑	金具			1.3以上		0.2	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.2以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	不明					2.0	
			S-10	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	1.6以上		1.0	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉸具			1.0以上	3.2以上	3.7	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	1.2以上		0.2	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	0.9以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	0.7以上		0.1以下	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具	端部	0.7以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.5以上		0.3	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.1以上		0.3	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.1以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.0以上		0.2	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		1.0以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		0.9以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		0.8以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		0.7以上		0.1以下	
			S-10	６号墳撹乱坑	金具	責金具		0.7以上		0.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	不明					5.8	
			S-10	６号墳撹乱坑	不明					4.1	
			S-10	６号墳撹乱坑	轡		鏡板	3.2以上		2.6	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		茎部の一部	3.2以上		2.3	わずかに樹皮残存
			S-10	６号墳撹乱坑	不明					1.2	
			S-10	６号墳撹乱坑	不明					0.9	
			S-10	６号墳撹乱坑	鉄鏃		頸部の一部	2.3以上	1.4以上	4.7	２本が銹着
			S-01	６号墳撹乱坑	不明					4.4	
			S-01	６号墳撹乱坑	金具	飾金具		1.9以上	2.5	3.7	革帯金具、鋲２残存
			S-01	６号墳撹乱坑	鉸具			2.0以上		1.0	
			S-01	６号墳撹乱坑	鉸具			1.7以上		0.6	
			S-04	６号墳羨道埋没後土坑	不明	鍛造品		0.5	0.6		III層出土
			S-04	６号墳羨道埋没後土坑	不明	鍛造品					III層出土
			S-04	６号墳羨道埋没後土坑	不明	鍛造品					III層出土
			S-04	６号墳羨道埋没後土坑	不明	鍛造品					III層出土

表４－３－１　７号墳出土鉄器観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
第53図-1	図版46-200-201	56	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	轡	素環式鏡板	引手、銜、鏡板			386.6	引手（長さ14.3cm）引手壷（径6.4cm）
53-2	47-203	142	ST-01	周辺		不明			4.3以上	4.25以上	12.2	
53-3	47-202	20	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ-1層	金具	辻金具		1.7以上	1.7	2.5	責金具痕跡残存、Ｕ字形、鋲１残存
53-4	47-202	19	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	金具	辻金具		1.8以上	1.3	2.3	Ｕ字形、鋲１残存
53-5	47-202	132	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ-1層	金具	辻金具		1.75以上	1.7	1.6	Ｕ字形、鋲１残存、責金具の痕跡残存
53-6	47-202	62	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	雲珠	環状雲珠		7.7以上	7.6	35.7	環幅0.9～1.2cm
53-7	47-203	23	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉸具			4.2以上	3.35以上	24.8	南西側出土
53-8	47-203	30	S-30	７号墳墓道	Ⅲ層	鉸具			3.6以上	2.25以上	4.1	
53-9	47-203	21	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ-2層	鉸具			1.2以上	1.5以上	0.6	
54-1	48-205	57	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ-1層	鉄刀	直刀	刃部～茎部	61.3以上	3.15	565.8	刃部先端及び茎部の一部欠損、目釘穴残存、一部木質残存
54-2	48-206	126	ST-01・S-08	南西斜面・周溝		鉄刀	直刀	刃部の一部	14.9以上	2.35	86.7	一部に木質残存
54-3	48-206	45	S-30	７号墳墓道		剣		刃部～茎部	25.2以上	2.5	74.3	中間部欠損
54-4	47-204	16	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄刀子		刃部の一部～柄部	4.9以上	1.4以上	4.2	柄部に木質残存、刃部欠損
54-5	47-204	15	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄刀子		刃部～柄部	11.2	1.3	14.2	完形、柄部に木質残存、刃部幅1.3cm
54-6	47-204	38	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄刀子		刃部～茎部	9.9以上	1.6	17.4	刃部、茎部とも先端欠損
54-7	47-204	37	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄刀子		刃部～茎部	12.05以上	1.5	20.1	刃部先端及び茎部一部欠損、関部一部欠損
54-8	48-206	125	S-30	７号墳墓道		鉄斧	袋状鉄斧		6.4以上	2.5以上	13.7	刃部欠損
55-1	49-207	84	ST-01	７号墳石室内	Ⅳ・Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部下部～茎部	18.1以上	0.8	16.1	
55-2	49-207	79	ST-01	７号墳石室内	Ⅳ・Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	17.6以上	1.1	19.2	刃部先端、茎部一部欠損
55-3	49-207	10	ST-01	７号墳石室内	Ⅳ・Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	19.65以上	1.1	17.0	刃部先端欠損
55-4	49-207	73	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	17.4以上	1.2	18.8	
55-5	49-207	74	ST-01	７号墳石室内	Ⅳ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部下部～茎部上部	12.3以上	1.1	15.0	
55-6	49-207	4	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	21.35	1.2	22.5	完形
55-7	49-207	75	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	16.9以上	0.95	20.9	茎部一部欠損
55-8	49-207	71	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	13.4以上	1.0	21.7	茎部一部欠損
55-9	49-208	8	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	14.2以上	1.2	17.6	茎部一部欠損
55-10	49-208	3	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	13.3以上	1.2	20.2	
55-11	49-208	11	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層・Ⅵ-1層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	19.15	1.0	18.1	完形
55-12	49-208	2	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	15.3以上	1.5	18.0	ほぼ完形（茎部一部欠損）
56-1	49-209	5	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	12.1以上	1.4	13.7	茎部一部欠損
56-2	49-209	81	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部下部～茎部上部	11.0以上	1.05	9.9	刃部、茎部一部欠損
56-3	49-209	72	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	13.65以上	1.3以上	12.6	
56-4	50-212	70	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	13.25以上	0.8以上	10.7	
56-5	50-212	83	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層・Ⅵ層	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	15.6以上	0.7	9.6	
56-6	49-209	69	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部	10.05以上	1.1以上	10.0	
56-7	49-209	78	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	11.25以上	1.15	9.1	
56-8	49-209	7	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	14.1以上	1.2	14.4	ほぼ完形（刃部先端及び茎部一部欠損）
56-9	50-212	118	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	7.05以上	0.8以上	5.9	
56-10	49-210	6	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	14.55	1.4	9.2	完形
56-11	49-210	68	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	10.0以上	1.25	10.8	

表４－３－２　７号墳出土鉄器観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
56-12	49-210	9	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	9.8以上	1.4	8.2	茎部欠損
56-13	49-210	76	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	10.75以上	1.5	7.8	ほぼ完形、刃部幅1.6cmでやや広い
56-14	49-210	33	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部	10.2以上	0.9	10.3	茎部一部欠損
57-1	50-211	34	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	4.8以上	1.2	4.8	
57-2	50-211	80	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	3.6以上	1.15	2.2	
57-3	50-211	92	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	4.65以上	1.1	2.3	刃部先端欠損
57-4	50-211	96	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	3.85以上	1.1以上	4.0	刃部先端欠損
57-5	50-211	95	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ-1層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	3.75以上	1.35	4.5	
57-6	50-211	82	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	6.25以上	0.85	4.7	
57-7	50-211	97	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部の一部(先端)	1.8以上	1.25以上	1.7	
57-8	50-211	145	ST-01	７号墳石室内	客土	鉄鏃		刃部の一部(先端)	2.1以上	1.2以上	1.3	
57-9	50-212	117(35)	ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	頸部上部～茎部上部	6.3以上	0.8以上	3.9	
57-10	50-212	90	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部	8.2以上	1.05以上	6.2	頸部及び茎部一部欠損
57-11	50-212	119	ST-01	南西斜面下段		鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	4.3以上	0.9以上	4.3	南西斜面下段
57-12	50-212	104	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ-1層	鉄鏃	長頸鏃	茎部	7.3以上	0.5以上	2.9	
57-13	50-212	102	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	茎部	7.6以上	0.55以上	3.6	
57-14	50-212	105	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	茎部	6.5以上	0.5以上	3.0	
58-1	52-216	36	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄釧			13.2以上	5.2	9.7	
		22	ST-01	７号墳石室内		鉸具			1.8以上	1.8以上	1.5	全体に欠損
			ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部下部	3.7以上		4.1	
			ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	7.0以上		11.4	
			ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉸具			2.1以上	2.0	2.1	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部下部	3.0以上		1.3	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.7以上		1.9	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	7.4以上		8.5	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.8以上		1.5	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.3以上		2.3	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.3	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.3	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.7以上		1.2	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	2.5以上		2.7	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部一部	2.4以上		0.8	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	3.2以上		3.0	
			ST-01	７号墳石室内		不明					1.0	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部	5.8以上		2.2	37と同一個体か
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1	
			ST-01	７号墳石室内		不明					1.5	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	頸部下部～茎部上部	2.3以上		2.9	
			ST-01	７号墳石室内		不明					1.5	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.5	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.6	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部上部	2.6以上		1.6	

表４－３－３　７号墳出土鉄器観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部一部	3.4以上		1.3	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	10.9以上		14.2	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	頸部一部	4.5以上		6.0	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1	２点あったが１点は133と接合
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.9	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.4以上		0.8	ほぼ端部
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.4	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1以下	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.2	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.3	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.5	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.3以上		1.1	ほぼ端部
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.1以下	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	4.6以上		3.4	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.9以上		1.3	
			ST-01	７号墳石室内		鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	2.7以上		1.0	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.2	
			ST-01	７号墳石室内		轡	鏡板一部			2.0以上	1.5	
			ST-01	７号墳石室内	III層下位	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	2.2以上		1.5	
			ST-01	７号墳石室内	III層下位	鉄鏃	長頸鏃	頸部の一部	1.7以上		2.1	
			ST-01	７号墳石室内	III層下位	鉄鏃	長頸鏃	刃部の一部	1.3以上		1.0	
			ST-01	７号墳石室内	IV層	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.1以上		1.8	
			ST-01	７号墳石室内	IV層	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	3.1以上		0.8	
			ST-01	７号墳石室内	IV層	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.9以上		0.5	
			ST-01	７号墳石室内	IV層	鉄鏃	長頸鏃	茎部の一部	1.3以上		0.3	
			ST-01	７号墳石室内	Ⅰ層	不明					1.4	
			ST-01	７号墳石室内	Ⅱ層	不明					0.7	
			ST-01	７号墳石室内	Ⅰ～III層	不明					1.0	
			ST-01	７号墳石室内	III層下位	不明					2.0	
			ST-01	７号墳石室内	IV層	不明					6.4	
			ST-01	７号墳石室内	IV層	不明					0.8	
			ST-01	７号墳石室内	石室内埋土	不明					2.3	
			ST-01	７号墳石室内	墓壙埋土	不明					0.5	
			ST-01	７号墳石室内		不明					0.7	
			ST-01	７号墳石室	トレンチ内V層	不明					0.6	
			ST-01	７号墳石室	周辺	不明					1.1	

表４－３－４　７号墳出土鉄器観察表（墓道・複数遺構接合分）

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	器種	形式	部位	全長(cm)	全幅(cm)	重量(g)	備考
			S-30	７号墳墓道		不明					2.0	
			S-30	７号墳墓道		不明					0.9	
			S-30	７号墳墓道		鉄鏃		刃部下部～頸部上部	2.1以上		2.3	
			S-30	７号墳墓道		刀		鞘の一部	2.2以上		2.4	
			S-08	７号墳周溝		刀		刃部の一部	3.0以上		12.2	一部に木質残存
			S-08	７号墳周溝		不明					1.4	
48-1	50-213	153	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部上部	13.85以上	1.15以上	19.1	６号墳（11SX）・７号墳（Ⅴ層）接合
48-2	50-213	1	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～茎部	14.8以上	1.2	10.4	茎部一部欠損。６号墳（11SX）・７号墳（Ⅴ層）接合
48-3	50-213	91	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部下部～頸部上部	9.6以上	0.8	9.2	片刃だが、刃部先端のみ両刃。６号墳(11SX)・７号墳（Ⅴ層）接合
48-4	50-213	86	ST-01	７号墳石室内	Ⅳ層	鉄鏃	長頸鏃	頸部～茎部上部	8.6以上	0.85	7.8	09SD・７号墳（Ⅳ層）接合
48-5	50-213	89	ST-01	７号墳石室内	Ⅴ層	鉄鏃	長頸鏃	刃部～頸部上部	4.65以上	0.85	4.7	片刃鏃。７号墳（Ⅴ層）・床面土中接合

表４－４　その他遺構出土鉄器観察表

枝番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	取り上げ番号	種類	器種	部位	全長(cm)	幅(cm)	重量(g)	特記事項
7		09SD	２号墳周溝			鍛造品	鉄鏃	頸部下部～茎部上部	2.9以上			
8		09SD	２号墳周溝			鍛造品	鉄鏃	茎部上部	1.6以上			木質残存、わずかに樹皮残存
9		09SD	２号墳周溝			鍛造品	刀子か		1.8以上			
10		09SD	２号墳周溝			鍛造品	不明					
11		17SX	木蓋土壙墓			鍛造品	鉄鏃	刃部～頸部上部	3.9以上			刃部先端欠損
12		Tr.19		一括		鍛造品	釘		6.8			完形　取り上げ日021106
13		IW		表採		鍛造品	鍬先・鋤先		2.5以上			Ｕ字形　取り上げ日021202
14		IW		表採		鍛造品	不明					021202
15		Tr.35				鍛造品	釘	完形	9.1以上			時期不明、鎹
16		Tr.35				鍛造品	釘か鉄鏃？	身部の一部	4.9以上			時期不明、断面方形
17		Tr.35				鍛造品	釘か？	身部の一部	4.3以上			時期不明、断面円形
18		Tr.35				鍛造品	釘か鉄鏃？	身部の一部	4.0以上			時期不明、断面方形
19		Tr.35				鍛造品	釘か？	身部の一部	2.8以上			時期不明、断面円形
20		Tr.35				鍛造品	刀装具	足金具	4.3	2.7		時期不明、完形、鋲１、鋲痕跡１
21		Tr.35				鍛造品	不明					
22			谷部	耕作土	一括1/4	鍛造品	短甲(三角板)の一部		7.2以上	5.1		030207
23			谷部	耕作土	一括2/4	鍛造品	短甲の一部？		7.2以上	2.5		030207
24			谷部	耕作土	一括3/4	鍛造品	釘		7.1以上			先端部欠損　030207
25			谷部	耕作土	一括4/4	鍛造品	不明					030207
A	144		谷部土坑	耕作土			刀子	完形	12.8	1.7	12.6	
110	146	Tr.23	a	一括			くさび？	ほぼ完形	2.4	1.65	3.6	
110	147	Tr.23	a	一括			くさび？	ほぼ完形	2.6	1.9	7.2	
117	129	Tr.34		Ⅲ層下位			杏葉？		6.9以上	3.9以上	24.6	
	128	Tr.10		一括	113		鉄釘	頭部～身部	7.12以上	0.85	7.7	
	127	Tr.23	谷部	耕作土	一括		杏葉？		7.3以上	2.8	11.9	
		Tr.22	谷部	耕作土	一括				6.6以上	4.2以上	20.0	

表４－５　出土耳環・玉類観察表

図版番号	写真図版番号	実測番号	遺構番号	遺構種類	出土層位	材質	器種	形状	色調	径(mm)	厚み(mm)	孔径(mm)	全長(mm)	依存度	重量(g)	備考
第47図-1	図版51-215	24	S-11	６号墳攪乱坑		銀製	耳環	円	銀	24.5	2.0			完形	2.20	下半部は波打つ形状、表面黒化（銹）がやや進む
47-2	51-215	23	S-11	６号墳攪乱坑		金製	耳環	楕円	金	12.0	1.4			完形	0.65	垂飾付耳飾の一部とも考えられる
47-3	51-214	1	S-09	６号墳攪乱坑	埋土	ガラス	小玉	楕円	青	4.4	3.1	2.0		完形	0.08	気泡あり。孔径が楕円形を呈し、孔まわりを若干みがいている。全体は多角形のような形状
47-4	51-214	2	S-10	６号墳攪乱坑	埋土	ガラス	小玉	丸	紺	3.7	3.0	1.5		2/3	0.05	下部1/3欠損。大きな気泡あり。平坦面あり、孔まわりに円形状の細かい傷。表面に孔に平行する筋が多数ある。質が良くない
47-5	51-214	3	S-10	６号墳攪乱坑	埋土	ガラス	小玉	丸	濃緑	3.2	2.1	1.3		完形	0.03	やや孔径に差がある（上下）。気泡列あり。小口面をみがき、全体は丁寧なつくり。透明度が高い
47-6	51-214	4	S-10	６号墳攪乱坑	埋土	ガラス	小玉	丸	薄茶	3.7	2.0	1.7		完形	0.01	孔径が大きめ。気泡多数。丸みがあり、平たい形状。透明度が高い
47-7	51-214	5	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	6.5	4.6	1.5		完形	0.28	平坦面があり、丁寧にみがく。表面に孔に平行する筋と細かい皺状の凹凸が見られる
47-8	51-214	6	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	5.6	3.5	2.0		完形	0.15	表面に筋状の凹凸多数、特に小口面の凹凸がはげしい。小口面平坦
47-9	51-214	7	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	5.4	3.4	1.8		完形	0.11	表面に筋状の凹凸多数。小口面の凹凸激しく、風化によって空洞化している箇所あり
47-10	51-214	8	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	5.3	3.4	2.4		完形	0.09	非常に質が悪い。表面の一部欠損。表面に溝状の凹凸多数。小口面の風化が激しい。空洞化した部分あり
47-11	51-214	9	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	3.9	2.3	1.3		完形	0.04	質が良い。小口面をみがいているが、丁寧ではない。孔まわりに細かい円形状の傷
47-12	51-214	10	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	やや楕円	紺	3.9	2.7	1.2		完形	0.04	やや楕円形。気泡が長くのびている。表面に皺状の凹凸。平坦面中心に凹凸が激しく、孔まわりに円形状の細かい傷がある
47-13	51-214	11	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	3.1	2.6	1.0		完形	0.05	平坦面やや顕著、円形状の傷多数。表面に細かい凹凸。質が悪い
47-14	51-214	12	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	3.6	2.0	1.2		完形	0.02	表面に溝状の凹凸。平坦面の凹凸激しく、傷がある
47-15	51-215	13	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	3.9	2.0	1.2		完形	0.05	平坦面両方顕著で丁寧にみがいている。円形状の細かい傷あり。気泡列あり。表面に皺状の凹凸
47-16	51-215	14	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	5.9	3.6	1.7		1/2	0.11	やや透明感あり。表面に溝状の凸凹があり、特に小口面の凹凸激しい。平坦面は片面のみ顕著
47-17	51-215	15	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	紺	3.6以上	2.1	1.5		1/2以下	0.01	気泡があり透明度が高く、質が良い。全体に丸みがある
47-18	51-215	16	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	濃緑	3.5	2.6	1.0		完形	0.05	やや斜めの形状だが、丸みがあり丁寧なつくり。気泡多数。透明度が高い。孔まわりを若干みがく
47-19	51-215	17	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	水色	2.8	3.7	1.0		完形	0.05	形が縦長。斜めに傾き、中央部で歪んでいる。平坦面をみがいている。不透明。表面に皺状の細かい凹凸
47-20	51-215	18	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	青	3.1	1.6	1.0		完形	0.02	平坦面両方顕著、みがいている。透明度が低い。表面に若干凹凸あり
47-21	51-215	19	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	水色	2.6	2.6	1.1		完形	0.02	径が大きく、いびつな形状。平坦面あり、孔まわりをみがいている。透明度が低い
47-22	51-215	20	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	楕円	薄水色	3.5	1.7	1.2		完形	0.03	一部孔内側に気泡あり。不透明。平坦面顕著で丁寧にみがいている。片方に傾いている
47-23	51-215	21	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	楕円	黄緑	3.7	2.5	1.5		完形	0.05	平坦面を若干みがいており、孔まわりに傷あり。斜めの形状。不透明。表面がやや凹凸
47-24	51-215	22	S-11	６号墳攪乱坑		ガラス	小玉	丸	薄茶	3.8	1.4	1.6		完形	0.02	全体に丸みがあるが、平たい。気泡あり。径に対し孔径が大きい。透明度が高い
58-2	52-217	28	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	銀製	耳環	円	銀	13.2	1.7			完形	0.83	表面黒化（銹）がやや進む
58-3	52-217	25	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	ガラス	小玉	楕円	紺	8.8	6.7	1.5		2/3	0.46	平坦面両面顕著、丁寧にみがいている。表面に凹凸あり
58-4	52-217	26	７号墳	７号墳石室内	Ｖ層	ガラス	小玉	楕円	紺	7.4	4.4	2.0		完形	0.25	両面とも平坦面顕著で、丁寧にみがいている。円形状の傷あり。一部欠けている
58-5		27	７号墳	７号墳石室内	Ｖ層	ガラス	小玉	円	水色	4.1	2.0	1.5		完形	0.06	平坦面両面顕著。くすんだ色調。表面に細かい凹凸、細かい傷あり。孔が楕円形を呈する
58-6	52-218	29	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	碧玉製	管玉	細長	深緑	7.7		長3.3短1.0	19.0	完形	2.02	丁寧な研磨。端面上下の稜線付近に欠損あり（使用時の欠損の可能性あり）。片面穿孔。微量のベンガラ付着。やや丸みあり
58-7	52-218	30	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	碧玉製	管玉	細長	薄緑	7.0		長3.2短1.0	18.4	完形	1.47	全面研磨。片面穿孔。石質が良くない。端面の縁やや欠け。ところどころに微量のベンガラ付着
58-8	52-218	31	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	碧玉製	管玉	細長	深緑	7.5		長3.0短1.0	22.7	完形	2.44	片面穿孔。側面は丁寧な研磨痕。端面には２方向からの擦痕があり、きれいな平坦になっている。形が良い
58-9	52-218	32	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	緑色凝灰岩	管玉	細長	薄緑	6.1		1.6(片面欠損)	20.7	ほぼ完形	1.01	全体に磨滅し、細形を呈する。片方端面欠損
58-10	52-218	33	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ－１層	碧玉製	管玉	細長	深緑	6.9		長2.2短1.0	19.0	完形	1.68	側面は丁寧な研磨、面取りを施す。端面は上下面とも擦痕が残る。片面穿孔。非常につくりが良い
58-11	52-218	34	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	碧玉製	管玉	細長	緑	8.2		長3.8短1.2	20.3	完形	2.33	全面研磨。片面穿孔。側面に稜線、擦痕が残る。全体に丸みがある。穿孔時に生じたと思われる欠損あり
58-12	52-218	35	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	碧玉製	管玉	細長	緑	6.9		長2.4短1.1	20.7	完形	1.71	下面端部一部欠損、片面穿孔、石質があまり良くない。端面に丸みが残る。細形の形状
58-13	52-218	36	ST-01	７号墳石室内	Ⅵ－２層	碧玉製	管玉	細長	緑	7.2		長2.4短1.0	17.4	完形	1.61	全面研磨。片面穿孔。側面・端面の一部に擦痕が残る。ところどころに傷あり
58-14	52-218	37	ST-01	７号墳石室内	Ｖ層	碧玉製	管玉	細長	深緑	10.1		長3.0短1.0	25.0	ほぼ完形	4.64	端面に1/2欠損あり。片面穿孔。側面は全面丁寧な研磨、端面には擦痕が残る。欠けの部分・擦痕の隙間に微量のベンガラ付着
	52-219		ST-01	７号墳石室内		貝殻			白				1.5		0.28	
	52-219		ST-01	７号墳石室内		貝殻			白				0.8		0.14	
	52-219		S-31	祭祀遺構	周辺	石英			透明		2.5		4.2		0.07	
	52-219		ST-01	７号墳石室内	南西トレンチ	石英			白		2.3		4.2		0.03	
	52-219		ST-01	７号墳石室内	南西トレンチ	石英			白		2.1		3.8		0.02	
	52-219		ST-01	７号墳石室内	南西斜面	石英			透明		2.3		4.1		0.06	
	52-219		ST-01	７号墳石室内	南西斜面	石英			透明		2.1		4.6		0.03	

表５－１－１　６号墳石材観察表

分類	写真図版№	ケース№	石材№		部位	部位旧称	小口面の長さ(長辺)(cm)	小口面からの奥行き(cm)	小口面の厚み(cm)	石の種類(個別)		分量	備考	想定部位
石室構築石材		41	6	1	６号墳石室	ST-02	21	21	7	割	B1		面を作っているか？ 扁平。１面平坦。	
		42	6	21	６号墳石室	ST-02	24	15	15	割	B1		面を作っているか？ 割れている。	
			6	99	６号墳撹乱	S-11	44	39	4	割	B1		S-11　№4。	
		43	6	101	６号墳		23	40	10	割	B1		石室構築石材？	
		45	6	46	６号墳石室	ST-02	10	8	2	割	B1		赤色顔料あり。 石室内の石材か？	
			6	90		S-4	19	15	2	割	B1		S-4　№1。赤色顔料あり。	
			6	91	６号墳石室　周辺	ST-02	17	6	3	割	B1		3個一括。	
			6	100		S-11	33	40	8	割	B1		S-11　№1。赤色顔料あり。	
		46	6	19	６号墳石室	ST-02	20	13	18	丸	B1		塊石。	
			6	48		S-4	28	36	12	割	B1		面を作っている。羨道部で出土。	
			6	49		S-4	26	34	4	割	B1		S-4　№3。面を作っている。	
		48	6	2	６号墳石室	ST-02	25	15	11	平	C1		面を作っているので、石室内の石材か？	
			6	6	６号墳石室	ST-02	19	19	6	平	C1		面を作っているのか？	
			6	17	６号墳石室	ST-02	15	13	8	割	C1		面を作っている。	
			6	22	６号墳石室	ST-02	16	15	11	平	C1		面を作っているので、石室内の石材か？	
		51	6	3	６号墳石室	ST-02	23	18	14	丸	D		塊石。	
			6	4	６号墳石室	ST-02	24	18	11	丸	D		一面、面を作っている。	
			6	5	６号墳石室	ST-02	21	13	10	割	D		面を作っている。	
			6	7	６号墳石室	ST-02	19	14	13	割	D		面を作っているようなので、石室内石材か？	
		52	6	1	６号墳石室	ST-02	21	25	13	平	D		面を作っているか？	
			6	11	６号墳		20	11	13	丸	D			
		53	6	9	６号墳石室	ST-02	23	13	9	丸	D		塊石。	
			6	10	６号墳石室	ST-02	26	13	14	丸	D		塊石。	
			6	12	６号墳石室	ST-02	19	20	11	平	D		面を作っているか？	
			6	13	６号墳石室	ST-02	19	16	13	丸	D		塊石。	
			6	14	６号墳石室	ST-02	26	8	7	平	D		面を作っているようだが､割れていると思われる。	
			6	15	６号墳石室	ST-02	22	13	12	丸	D		塊石。	
		54	6	16	６号墳石室	ST-02	22	17	11	丸	D		塊石。	
			6	20		S-4	36	19	24	丸	D		6号墳との境で出土。	
		55	6	24		S-4	24	29	11	割	D		S-4　№5。	
			6	61	６号墳		32	15	12	割	D		塊石。	
			6	92	６号墳		21	18	13	平	D		面を作っている。	
		56	6	25		S-4	24	20	12	割	E		S-4 №7。厚さ12cm。扁平だが石障には厚すぎる。	
			6	74	６号墳撹乱坑	S-11				?	E		底面の一辺が５cm、高さ３cmの三角錐状。	
			6	93	６号墳		14	9	6	割	E		破損した石材か？	
			6	118	６号墳石室	ST-02	6	3	2	丸？	E			
壁面材（ベンガラ付着）		80	6	37		S-10	17	8	3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	石室構築石材
			6	42	６号墳石室 周辺	ST-02周辺	6～11	3～8	1～7	割	A2	ビニール3袋	赤色顔料あり。	石室内石材
			6	43	６号墳撹乱坑	S-11	6～12	4～7	1～2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石室内石材か？	
			6	44	６号墳撹乱坑	S-11	8～15	6～9	2～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石室内石材か？	
		81	6	53	６号墳石室周辺･表土中	ST-02	25	11	4	割	C1	単体	面を作っている部分に赤色顔料あり。	
			6	57	６号墳石室	ST-02	7～14	3～9	1～3	割	A2	ビニール2袋	赤色顔料あり。	
			6	59	６号墳石室	ST-02	6～12	4～8	1～2	割	A2	ビニール1袋		
			6	64	６号墳石室 周辺	ST-02周辺	6～24	5～12	2～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	69		S-1	7～16	4～12	1～3	割	A2	ビニール1袋	丸を含む。	石棺材
			6	70	６号墳撹乱坑	S-11	6～18	3～8	2～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	79	６号墳撹乱坑	S-11	12	5	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。欠片らしい３片の石材と一括。	
			6	81	６号墳石室 南西斜面	ST-02	9～17	5～11	3～4	割	A2	ビニール1袋	石障の可能性あり	
			6	84	６号墳撹乱坑	S-11	45	12	8	割	B2	単体	S-11　№1。赤色顔料あり。 三角柱状の石材。	
		82	6	85		S-10	12	7	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	97	６号墳石室 表土中	ST-02	5～13	4～10	1～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	103	６号墳撹乱坑	S-11	9～16	4～7	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	104		S-1	5～10	2～8	2～5	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。塊石	
			6	105		S-10	6～9	3～9	2～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石障の可能性あり	
			6	106	６号墳石室	ST-02	7～17	3～7	1～4	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	107	６号墳撹乱坑	S-11	3～12	3～8	1～2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
石障系（ベンガラ付着）		83	6	40		S-10	5～10	3～7	2～4	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	41	６号墳石室	ST-02	6～15	4～11	1～4	割	A2	ビニール1袋		石室内石材
			6	42	６号墳石室 周辺	ST-02周辺	6～11	3～8	1～7	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。接合可か？	石室内石材
			6	43	６号墳撹乱坑	S-11	6～12	4～7	1～2	割	A2	ビニール2袋	赤色顔料あり。石室内石材か？ 接合可か？	
			6	44	６号墳撹乱坑	S-11	8～15	6～9	2～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石室内石材か？ 接合可か？	
		84	6	59	６号墳石室	ST-02	6～12	4～8	1～2	割	A2	ビニール1袋		
			6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	6～17	4～8	1～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	66		ST-02	4～14	2～7	1～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	68		S-10	5～12	4～5	1～2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	70	６号墳撹乱坑	S-11	6～18	3～8	2～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	75	６号墳撹乱坑	S-11	28	10	6	割	A1	単体	扁平。均一。破損している可能性あり。	
			6	79	６号墳撹乱坑	S-11	12	5	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。欠片らしい３片の石材と一括。	
		85	6	80	６号墳撹乱坑	S-11	9～22	6～10	3～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	81	６号墳石室 南西斜面	ST-02	9～17	5～11	3～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	85		S-10	12	7	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	88	６号墳撹乱坑	S-11	13･17	11･5	3･4	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。２個でS-11　№2。	
			6	89	６号墳石室 周辺･表土中	ST-02	16	15	2	割	A2	ビニール1袋		
			6	96	６号墳撹乱坑	S-11	14	19	5	割	A1	単体	赤色顔料あり。	
			6	97	６号墳石室 表土中	ST-02	5～13	4～10	1～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	105		S-10	6～9	3～9	2～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	106	６号墳石室	ST-02	7～17	3～7	1～4	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	107	６号墳撹乱坑	S-11	3～12	3～8	1～2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	108	６号墳石室 周辺	ST-02周辺	8･11	4･7	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	110	６号墳撹乱坑	S-11	11～14	5～8	2～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	113	※出土地不明		10	8	1	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。６号墳石材として、未整理の段階の仕分けに従う。	
塊石(ベンガラ付着)		86	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02周辺	6～11	3～8	1～7	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	石室内石材
			6	43	６号墳撹乱坑	S-11	6～12	4～7	1～2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石室内石材か？	
			6	60	６号墳		22	14	15	丸	C1	単体	赤色顔料あり。	
			6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	6～17	4～8	1～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	67	６号墳石室 南西斜面	ST-02	8～10	6～9	2～9	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	71	６号墳撹乱坑	S-11	29	17	4	割	B1	単体	赤色顔料あり。石室構築石材か？	
			6	73	６号墳撹乱坑	S-11	20	8	6	割	B1	単体	赤色顔料あり。	
			6	80	６号墳撹乱坑	S-11	9～22	6～10	3～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	82		S-10	12	10	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	104		S-1	5～10	2～8	2～5	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	105		S-10	6～9	3～9	2～3	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	
			6	108	６号墳石室 周辺	ST-02周辺	8･11	4･7	2	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。	

表５－１－２　６号墳石材観察表

分類	写真図版№	ケース№	石材№		部位	部位旧称	小口面の長さ(長辺)(cm)	小口面からの奥行き(cm)	小口面の厚み(cm)	石の種類(個別)		分量	備考	想定部位
石障系(ベンガラ無し)		87	6	8	６号墳石室	ST-02	30	26	3	割	A1	単体	石障の石材か？ 扁平。	
			6	31	６号墳石室	ST-02	20	8	4	割	A2	単体		石室内石材
			6	32	６号墳石室	ST-02	13	7	3	割	A2	単体		石室内石材
			6	33	６号墳石室	ST-02	17	12	4	割	C	単体		石室内石材
			6	35		S-10	24	8	2	割	A2	単体		石室構築石材
			6	36		S-10	21	8	2	割	A2	単体		石室構築石材
			6	39		S-10	5～10	3～6	1～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	42	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～11	3～8	1～7	割	A2	ビニール1袋		石室内石材
			6	44	６号墳攪乱坑	S-11	8～15	6～9	2～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	50		S-4	13	8	4	割	A2	単体	S-4　No.4。石室内で使用されるような割石。	
			6	51	６号墳石室周辺・表土中	ST-02	21	16	5	割	C1	単体	石室構築の石材か？	
			6	52	６号墳石室周辺・表土中	ST-02	12	11	4	割	A2	ビニール1袋		
			6	59	６号墳石室	ST-02	6～12	4～8	1～2	割	A2	ビニール1袋		
		88	6	64	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～24	5～12	2～3	割	A2	1コンテナ		
			6	77	６号墳攪乱	S-11	25	10	6	割	C1	単体	破損している。	
			6	81	６号墳石室南西斜面	ST-02	9～17	5～11	3～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	82		S-10	12	10	2	割	A2	ビニール1袋		
			6	83		S-10	10～15	6～11	2～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	85		S-10	12	7	2	割	A2	ビニール1袋		
			6	86	６号墳攪乱坑	S-11	12～18	9	2～3	割	A2	単体		
			6	87	６号墳攪乱坑	S-11	6～11	3～6	1～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	97	６号墳石室表土中	ST-02	5～13	4～10	1～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	103	６号墳攪乱坑	S-11	9～16	4～7	2	割	A2	ビニール1袋		
			6	105		S-10	6～9	3～9	2～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	106	６号墳石室	ST-02	7～17	3～7	1～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	114	６号墳攪乱坑	S-11	7～19	4～8	1～3	割	A2	ビニール1袋	接合可能と思われる破片を一括。	
			6	117	６号墳石室南西斜面	ST-02	7～13	4～7	2	割	A2	ビニール1袋	接合可能と思われる破片を一括。	
壁面材（ベンガラ無し）		89	6	40		S-10	5～10	3～7	2～4	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石障の可能性あり。	
			6	54	６号墳石室周辺・表土中	ST-02	6～25	5～9	2	割	A2	ビニール3袋	石室内石材か？	
			6	55	６号墳石室	ST-02	21	10	4	割	A2	単体	1面、面を作っている。	
			6	56	６号墳石室	ST-02	18	9	3	割	A2	単体		
		90	6	58	６号墳石室	ST-02	6～16	5～8	2～3	割	A2	1コンテナ		
		91	6	59	６号墳石室	ST-02	6～12	4～8	1～2	割	A2	1コンテナ		
		92	6	63	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～16	5～9	2～4	割	A2	1コンテナ		
		93	6	64	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～24	5～12	2～3	割	A2	1コンテナ		
		94	6	70	６号墳攪乱坑	S-11	6～18	3～8	2～4	割	A2	1コンテナ		
		95	6	80	６号墳攪乱坑	S-11	9～22	6～10	3～4	割	A2	1コンテナ		
		96	6	81	６号墳石室南西斜面	ST-02	9～17	5～11	3～4	割	A2	1コンテナ	丸を含む。黒曜石1つを含む。	
		97	6	83		S-10	10～15	6～11	2～3	割	A2	ビニール2袋		
			6	86	６号墳攪乱坑	S-11	12～18	9	2～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	116	６号墳攪乱坑	S-11	6～13	5～9	1～2	割	A2	ビニール1袋	接合可能と思われる破片を一括。	
塊石（ベンガラ無し）		98	6	26	６号墳石室	ST-02	41	25	4	割	B2	単体	面を作っているわけではなく、割れた可能性がある。	
		99	6	64	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～24	5～12	2～3	割	A2	単体		
			6	69		S-1	7～16	4～12	1～3	割	A2	ビニール1袋	丸を含む。	石棺材
			6	70	６号墳攪乱坑	S-11	6～18	3～8	2～4	割	A2	単体		
			6	72	６号墳攪乱	S-11	18	13	9	平	C1	単体	面を作っている。	
			6	81	６号墳石室南西斜面	ST-02	9～17	5～11	3～4	割	A2	単体		
			6	112	６号墳石室南西斜面	ST-02	9	8	9	割	C1	単体	赤色顔料あり。	
		100	6	102		S-4	7～16	10～23	3～14	平	CD	単体	赤色顔料ありか？　６個一括。Ｄの石は直径20cmの半球状。	
石棺系		101	6	27	６号墳石室	ST-02	21	15	5	割	A2	単体	厚みやや不均一。	石室内石材
			6	28	６号墳石室	ST-02	26	9	6	割	A2	単体		石室内石材
			6	29	６号墳石室	ST-02	19	11	3	割	A2	単体		石室内石材
			6	34		S-10	24	26	10	割	B1	単体	赤色顔料あり。石室内石材か？　６号墳攪乱坑より出土。	
		102	6	62	６号墳攪乱坑	S-11	28	28	7	割	A1	単体	扁平。均一。	
		103	6	69		S-1	7～16	4～12	1～3	割	A2	単体		石棺材
		104	6	78	６号墳攪乱坑	S-11	17	9	5	割	A2	単体		
			6	89	６号墳石室周辺・表土中	ST-02	16	15	2	割	A2	単体		
			6	98	６号墳攪乱坑	S-11	30	24	5	割	A1	単体	S-11　№3。A2の可能性も（先端とか）。	
その他（不明）		105	6	18	６号墳石室	ST-02	24	11	7	割	A2	ビニール1袋	石室内の石材か？	
			6	30	６号墳石室	ST-02	16	11	4	割	A2	ビニール1袋		石室内石材
			6	38		S-10	18	6	2	割	C1	単体		石室構築石材
			6	39		S-10	5～10	3～6	1～3	割	A2	ビニール3袋		
			6	40		S-10	5～10	3～7	2～4	割	A2	ビニール1袋	赤色顔料あり。石障の可能性あり。	
			6	41	６号墳石室	ST-02	6～15	4～11	1～4	割	A2	ビニール1袋	石障の可能性あり。	石室内石材
			6	42	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～11	3～8	1～7	割	A2	ビニール3袋		石室内石材
			6	44	６号墳攪乱坑	S-11	8～15	6～9	2～3	割	A2	ビニール1袋		
		106	6	54	６号墳石室周辺・表土中	ST-02	6～25	5～9	2	割	A2	ビニール3袋		
			6	57	６号墳石室	ST-02	7～14	3～9	1～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	58	６号墳石室	ST-02	6～16	5～8	2～3	割	A2	ビニール3袋		
		107	6	59	６号墳石室	ST-02	6～12	4～8	1～2	割	A2	ビニール3袋		
			6	63	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～16	5～9	2～4	割	A2	ビニール2袋	丸を幾つか含む。	
			6	64	６号墳石室周辺	ST-02周辺	6～24	5～12	2～3	割	A2	ビニール1袋	丸を幾つか含む。	
		108	6	70	６号墳攪乱坑	S-11	6～18	3～8	2～4	割	A2	ビニール1袋		
			6	80	６号墳攪乱坑	S-11	9～22	6～10	3～4	割	A2	ビニール2袋		
			6	81	６号墳石室南西斜面	ST-02	9～17	5～11	3～4	割	A2	ビニール2袋	丸を含む。	
		109	6	83		S-10	10～15	6～11	2～3	割	A2	ビニール2袋		
			6	94	６号墳		4～9	3～9	1～5	割	A2	ビニール1袋	破損した一部か？	
			6	95	６号墳		4～11	2～7	1～6	割	A2	ビニール1袋	石室構築石材か？	
			6	97	６号墳石室表土中	ST-02	5～13	4～10	1～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	103	６号墳攪乱坑	S-11	9～16	4～7	2	割	A2	ビニール1袋		
			6	105		S-10	6～9	3～9	2～3	割	A2	ビニール1袋		
			6	106	６号墳石室	ST-02	7～17	3～7	1～4	割	A2	ビニール1袋		

表５－１－３　６号墳石材観察表

分類	写真図版№	ケース№	石材№		部位	部位旧称	小口面の長さ(長辺)(cm)	小口面からの奥行き(cm)	小口面の厚み(cm)	石の種類(個別)		分量	備考	想定部位
(石障系ベンガラ両面)同一個体か	写真図版53－221・222	111接合	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	６以上	17以上	0.8以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。6-113と結合。	
			6	113	※出土地不明					割	A2	１片	赤色顔料あり。６号墳石材として、未整理の段階の仕分けに従う。6-65と接合。	
		111	6	43	６号墳攪乱坑	S-11	2.5～10以上	６～７以上	0.3～２	割	A2	３片	小口面・平面両面ともに赤色顔料あり。石室内石材か？	
		111	6	44	６号墳攪乱坑	S-11	４～９以上	６～11以上	0.5～2.5以上	割	A2	３片	小口面・平面両面ともに赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？	
		111	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	７以上	8.5以上	0.5～２以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。	
		111	6	66		ST-02		14以上	1.5～4.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		111	6	109	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	5.5以上	6.5以上	0.3～１以上	割	A2	１片	小口面・平面両面ともに赤色顔料あり。	
(石障系ベンガラ片面)同一個体か	写真図版54－223	112	6	43	６号墳攪乱坑	S-11	13以上	７以上	3以上	割	A2	１片	小口面・平面両面ともに赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？	
		112	6	44	６号墳攪乱坑	S-11		12～16以上	1.5～３以上	割	A2	２片	赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？上下不明。	
		112	6	44	６号墳攪乱坑	S-11		14.5以上	２～３以上	割	A2	１片	平面両面に赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？上下不明。	
		112	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02		９以上	3.5～４以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		112	6	80	６号墳攪乱坑	S-11		8.5以上	1.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		112	6	81	６号墳石室 南西斜面	ST-02		12以上	1.5～４以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		112	6	109	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺		10以上	2.5～3.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		112	6	110	６号墳攪乱坑	S-11		13以上	２以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		112	6	110	６号墳攪乱坑	S-11	16以上	８以上	１～２	割	A2	１片	小口面・平面ともに赤色顔料あり。	
(石障系ベンガラ片面)同一個体か	写真図版54－224	111接合	6	43	６号墳攪乱坑	S-11	8.5以上	６以上	１～２	割	A2	１片	平面・小口面ともに赤色顔料あり。石室内石材か？6-82と接合。	
			6	82		S-10				割	A2	１片	平面・小口面ともに赤色顔料あり。6-43と接合。	
		111接合	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	12以上	13以上	1.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。6-66・113と接合。	
			6	66		ST-02				割	A2	１片	赤色顔料あり。6-65・113と接合。	
			6	113	※出土地不明					割	A2	１片	平面・小口面ともに赤色顔料あり。６号墳石材として、未整理の段階の仕分けに従う。6-65・66と接合。	
		111接合	6	107	６号墳攪乱坑	S-11		８以上	1.5以上	割	A2	２片	赤色顔料あり。２片接合。	
		111接合	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺		9.5以上	1.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。6-43と接合。	石室内石材
			6	43	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？6-42と接合。	
		111	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺		17以上	１～1.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	石室内石材
		111	6	43	６号墳攪乱坑	S-11		５～16以上	１～2.5以上	割	A2	４片	赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？上下不明。	
		111	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	8.4	９以上	2	割	A2	１片	平面・小口面ともに赤色顔料あり。	
		111	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02		6.5～10以上	1.5以上	割	A2	２片	赤色顔料あり。上下不明。	
		111	6	68		S-10		５以上	１以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
石障系(ベンガラ片面)同一個体か	写真図版55－225	110接合	6	43	６号墳攪乱坑	S-11		15.5以上	２以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？6-44・80・107と接合。上下不明。	
			6	44	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？6-43・80・107と接合。上下不明。	
			6	80	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。6-43・44・107と接合。上下不明。	
			6	107	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。6-43・44・80と接合。上下不明。	
		110接合	6	59	６号墳石室	ST-02		10.5以上	２以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。6-110と接合。上下不明。	
			6	110	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。6-59と接合。上下不明。	
		110接合	6	43	６号墳攪乱坑	S-11		4.5以上	3.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？6-107と接合。上下不明。	
			6	107	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。6-43と接合。上下不明。	
		110	6	44	６号墳攪乱坑	S-11		10以上	0.5～1.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？上下不明。	
		110	6	45	６号墳石室 周辺	ST-02	16.5以上	17以上	0.5～３	割	A2	１片	赤色顔料あり。２面に赤色顔料。	
		110	6	68		S-10		16	２以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
		110	6	107	６号墳攪乱坑	S-11		７以上	0.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。上下不明。	
石障系(ベンガラ片面)同一個体か	写真図版55－226	112	6	23	６号墳攪乱坑	S-11	28以上	25以上	2.5～７以上	割	A1	単体	小口面・平面片面に赤色顔料あり。	石障か
石障系(ベンガラ片面)同一個体か	写真図版55－227	110接合	6	43	６号墳攪乱坑	S-11	22.5以上	８以上	1.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？6-44・67と接合。	
			6	44	６号墳攪乱坑	S-11				割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？6-43・67と接合。	
			6	67	６号墳石室 南西斜面	ST-02				割	A2	１片	赤色顔料あり。6-43・44と接合。	
		110	6	43	６号墳攪乱坑	S-11	９以上	６以上	1.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材か？接合可か？	
石障系(ベンガラ片面)同一個体か		110接合	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	９以上	７以上	0.3～２以上	割	A2	２片	赤色顔料あり。２片接合。	石室内石材
		110	6	109	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	6.5以上	12以上	0.3～1.5以上	割	A2	１片	赤色顔料あり。	
(壁面材ベンガラ付着)同一個体か	写真図版56－228	113	6	76	６号墳攪乱坑	S-11	17	22	5	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（大形壁面材)。	
	写真図版56－229	113	6	109	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	12	10.5以上	2.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（中形壁面材)。	
		113	6	110	６号墳攪乱坑	S-11	14以上	8.5以上	１～３	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（中形壁面材）石障系の可能性有。	
	写真図版56－230	113	6	65	６号墳石室 周辺	ST-02	9	16以上	2.5～４	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（中形壁面材)。	
		113	6	107	６号墳攪乱坑	S-11	15	９以上	１～２	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（中形壁面材)。	
	写真図版57－231	113	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	６～８	５～８	0.5～2.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。小形壁面材。	石室内石材
		113	6	85		S-10	9.5	11.5	１～２	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（中形壁面材)。	
	写真図版57－232	113	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	６～８	５～８	0.5～2.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。小形壁面材。	石室内石材
		113	6	44	６号墳攪乱坑	S-11	10	4.5以上	1.5～２	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（小形壁面材)。	
		113	6	42	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	12.5以上	10.5以上	１～1.5	割	A2	１片	赤色顔料あり。中形壁面材。	石室内石材
	写真図版57－233	113	6	43	６号墳攪乱坑	S-11	8	8	１～２	割	A2	１片	赤色顔料あり。石室内石材（小形壁面材)。	
		113	6	109	６号墳石室 周辺	ST-02 周辺	7.5～９以上	８～9.5以上	1.5～３	割	A2	２片	赤色顔料あり。石室内石材（小形壁面材)。	
113(石槍系ベンガラ無し)		113	6	115	６号墳攪乱坑	S-1	12・15	９・11	１・２	割	A2	２片	接合可能と思われる破片を一括。	
		114	6	47		S-4	67	46	16	割	B1	単体	S-4　No.2。面を作っている。	

A：板状・厚さ均一　１＝石障系　２＝壁面材
B：長さ25㎝以上　１＝不均一な扁平石　２＝扁平部なし
C：長さ25㎝未満　１＝不均一な扁平石　２＝扁平部なし
D：塊状
E：その他

表５－２－１　７号墳石材観察表

ケース№	石材№		部位	出土地旧称	小口面の長さ(長辺)(cm)	小口面からの奥行き(cm)	小口面の厚み(cm)	石の種類	備考	想定部位
1	7	117	７号墳石室耕作土中	ST-01	８～13	４～８	２～３	割	石材片を一括。コンテナ一杯。	
2	7	118	７号墳石室	ST-01	６～17	４～９	3	割	石材片を一括。コンテナ一杯。	
3	7	119	７号墳北西斜面		７～12	７～10	１～３	割	石材片を一括。コンテナ半分。	
3	7	84	７号墳北西斜面		36	25	7	割		裏込め石
4	7	120	７号墳石室北西斜面下段	ST-01	９～13	５～13	２～３	割	石材片を一括。コンテナ一杯。	
5	7	121	７号墳石室	ST-01	９～12	６～10	２～５	割	石材片を一括。コンテナ半分。	
5	7	105	７号墳石室	ST-01	25	9	3	割	平坦面に顔料。割れ。	石棺材？
5	7	107	７号墳石室	ST-01	19	11	3	平	三角形。均一の厚み。	
6	7	122	７号墳石室南西斜面下段	ST-01	８～15	３～９	２～３	割	石材片を一括。コンテナ1/4。	
6	7	83	７号墳石室南西斜面下段	ST-01	33	24	8	平		石室側壁
6	7	110	７号墳石室南西斜面下段	ST-01	15	14	9	丸		
6	7	111	７号墳石室南西斜面下段	ST-01	19	13	4	平		
6	7	112	S20W10南斜面		17	13	4	平		
7	7	1	７号墳羨道部		24	17	14	丸	自然石。	閉塞石
7	7	2	７号墳羨道部		25	16	11	丸	自然石。	閉塞石
7	7	4	７号墳羨道部		23	22	15	丸	自然石。	閉塞石
7	7	5	７号墳羨道部		20	17	17	丸	自然石。	閉塞石
8	7	7	７号墳羨道部		33	25	18	丸	自然石。	閉塞石
8	7	8	７号墳羨道部		26	19	16	丸	加工石。２側面平坦。	閉塞石
9	7	9	７号墳羨道部		34	24	23	丸	自然石。	閉塞石
9	7	10	７号墳羨道部		24	17	17	丸	自然石。	閉塞石
10	7	12	７号墳羨道部		38	27	22	丸	自然石。	閉塞石
10	7	14	７号墳羨道部		25	22	22	丸	自然石。	閉塞石
11	7	13	７号墳羨道部		23	20	13	丸	自然石。	閉塞石
11	7	15	７号墳羨道部		19	15	14	丸	自然石。	閉塞石
11	7	16	７号墳羨道部		23	20	14	丸	自然石。	閉塞石
11	7	17	７号墳羨道部		25	21	17	丸	丸。	閉塞石
12	7	19	７号墳羨道部		24	20	13	丸	自然石。	閉塞石
12	7	20	７号墳羨道部		24	21	14	丸	自然石。２面平坦（加工なし）。	
12	7	21	７号墳羨道部		21	21	16	丸	自然石。	
13	7	26	７号墳羨道部		31	16	15	丸	丸みを持つ自然石。	閉塞石
13	7	31	７号墳羨道部		33	17	14	丸	自然石。	閉塞石
13	7	32	７号墳羨道部		40	26	14	丸	自然石。	閉塞石
14	7	25	７号墳羨道部		25	21	10	平	自然石（一部割れ）。	閉塞石
14	7	27	７号墳羨道部		21	21	10	平	一部割れ。	閉塞石
14	7	30	７号墳羨道部		48	22	13	平	自然石。	閉塞石
15	7	33	７号墳羨道部		27	16	9	平	自然石。	閉塞石
15	7	35	７号墳羨道部		24	17	12	平	加工石。２面加工か？	閉塞石
15	7	53	７号墳羨道部		21	14	9	割		裏込めか石室側壁
15	7	54	７号墳羨道部		18	9	8	割		閉塞石
16	7	80	７号墳羨道部		22	15	12	丸		閉塞石
16	7	81	７号墳羨道部		25	21	8	平		閉塞石
16	7	82	７号墳羨道部		20	16	14	丸		閉塞石
17	7	3	７号墳羨道部		23	17	17	丸	自然石。１面割れ。１面平坦。	閉塞石
17	7	6	７号墳羨道部		32	22	23	丸	自然石。	
18	7	11	７号墳羨道部		33	28	25	丸	自然石。	閉塞石
19	7	18	７号墳羨道部		37	27	19	丸		閉塞石
20	7	22	７号墳羨道部		45	30	26	丸	一側面平坦。	裏込めか閉塞石
21	7	23	７号墳羨道部		30	29	26	丸	自然面３面。	閉塞石
22	7	24	７号墳羨道部		43	28	21	平	自然石。袖石に使われた可能性	閉塞石
23	7	34	７号墳羨道部		48	32	15	平	丸みを持つ。３側面平坦。石室壁面。	石室側壁
23	7	113	７号墳羨道部		19	17	5	割		閉塞石（側壁）
24	7	36	７号墳		27	16	5	割		裏込め石
24	7	38	７号墳		19	16	15	丸		裏込め石
24	7	46	７号墳石室	ST-01	38	22	4	割	扁平、面がない。	裏込め石
24	7	49	７号墳石室	ST-01	16	15	2	割		裏込め石（隙間埋め石）
24	7	70	７号墳石室	ST-01	21	17	10	丸		裏込め石
24	7	74	７号墳石室	ST-01	16	13	11	丸		裏込め石

表５－２－２　７号墳石材観察表

ケース№	石材№		部位	出土地旧称	小口面の長さ(長辺)(cm)	小口面からの奥行き(cm)	小口面の厚み(cm)	石の種類	備考	想定部位
25	7	94	７号墳石室	ST-01	26	18	12	丸		裏込め石
25	7	95	７号墳石室	ST-01	21	16	3	割		裏込め石
25	7	97	７号墳石室	ST-01	20	10	9	丸		裏込め石
25	7	99	７号墳石室	ST-01	23	10	4	割		裏込め石（側壁）
25	7	100	７号墳石室	ST-01	14	14	3	割	均一平坦。	裏込め石（側壁）
25	7	101	７号墳石室	ST-01	14	13	2	割		裏込め石
25	7	102	７号墳石室	ST-01	17	11	6	割	自然割石。	裏込め石
25	7	103	７号墳石室	ST-01	17	12	3	割		裏込め石
25	7	104	７号墳石室	ST-01	14	11	4	割	比較的均一な厚み。	裏込め石
25	7	106	７号墳石室	ST-01	18	10	5	割		裏込め石
26	7	40	７号墳		15	15	7	割	割れ石（剥片）。他と接合可か？	閉塞石？裏込め石
26	7	41	７号墳		28	19	15	丸	自然石（一部割れ）。	閉塞石
26	7	42	７号墳		21	17	16	丸	自然石（1側面割れ）。	閉塞石
27	7	37	７号墳		20	15	7	平	切ったような面を持つ。	石室側壁
27	7	39	７号墳		23	21	6	割		石室側壁
27	7	44	７号墳石室	ST-01	41	31	9	割	斜め平坦面。	石室側壁
27	7	48	７号墳石室	ST-01	29	21	5	割	自然石。	石室側壁
28	7	50	７号墳石室	ST-01	35	29	9	割	斜め1面加工。顔料ありか？	石室側壁
28	7	71	７号墳石室	ST-01	24	21	5	割		石室側壁
28	7	73	７号墳石室	ST-01	23	17	4	割		石室側壁
28	7	75	７号墳石室	ST-01	19	13	3	割		石室側壁
28	7	77	７号墳石室	ST-01	21	10	4	割		石室側壁
29	7	45	７号墳	S-31	54	33	10	割	1面平坦面。	S-32蓋石
29	7	93	７号墳石室	ST-01	38	19	7	平		石室側壁
29	7	96	７号墳石室	ST-01	24	15	4	割	1面平坦面。赤色顔料ありか（20%）。	石室側壁
29	7	98	７号墳石室	ST-01	18	17	5	割		石室側壁
30	7	47	７号墳石室	ST-01	22	20	6	割		石室側壁か 裏込め石
30	7	72	７号墳石室	ST-01	24	21	6	割		石室側壁か 裏込め石
30	7	76	７号墳石室	ST-01	17	10	2	割		裏込め石か 側壁
30	7	78	７号墳石室	ST-01	18	12	2	割		石室側壁か 裏込め石
30	7	79	７号墳石室	ST-01	25	10	4	割		石室側壁か 裏込め石
31	7	55	７号墳石室 耕作土中	ST-01	15	11	3	平		裏込め石
31	7	57	７号墳石室 耕作土中	ST-01	21	12	4	割		裏込め石
31	7	58	７号墳石室 耕作土中	ST-01	18	13	6	割		裏込め石
31	7	59	７号墳石室 耕作土中	ST-01	16	10	5	割		裏込め石
31	7	62	７号墳石室 耕作土中	ST-01	45	19	9	割		石室側壁（裏込め石）
31	7	63	７号墳石室 耕作土中	ST-01	21	18	2	割		裏込め石
31	7	64	７号墳石室 耕作土中	ST-01	18	14	7	割	2面平坦（自然）。	裏込め石
31	7	65	７号墳石室 耕作土中	ST-01	22	13	6	割		裏込め石
31	7	66	７号墳石室 耕作土中	ST-01	25	23	3	割		裏込め石
31	7	67	７号墳石室 耕作土中	ST-01	32	20	4	割		裏込め石
31	7	68	７号墳石室 耕作土中	ST-01	16	14	4	割		裏込め石
31	7	69	７号墳石室 耕作土中	ST-01	15	14	2	割		裏込め石
32	7	56	７号墳石室 耕作土中	ST-01	25	22	6	割		石室側壁
32	7	60	７号墳石室 耕作土中	ST-01	17	15	2	割		石室側壁
32	7	61	７号墳石室 耕作土中	ST-01	25	18	4	割		石室側壁（裏込め石）
33	7	86	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	25	15	10	丸		石室側壁
33	7	91	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	16	13	2	割	扁平、均一。	石室側壁か裏込め石
33	7	108	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	17	16	3	平	一部欠損、平坦面顔料あり。	石棺材？
33	7	109	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	19	13	4	平	一部欠損、平坦面顔料あり。	石棺材？
34	7	85	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	30	30	4	平		裏込め石（側壁）
34	7	87	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	20	17	3	割		裏込め石
34	7	89	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	21	12	5	割	一部割れ。	裏込め石（側壁）
34	7	90	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	18	14	3	割	扁平。	裏込め石
34	7	92	７号墳石室 北西斜面下段	ST-01	18	14	3	割		裏込め石（側壁）
35	7	43	７号墳	S-31	54	33	10	割	1面平坦面。	S-32蓋石
36	7	28	７号墳	S-31	37	22	9	平		祭祀遺構の蓋石
36	7	29	７号墳	S-31	29	26	7	平		蓋石
36	7	52	７号墳	S-31	26	23	3	割		裏込めか石室側壁
36	7	88	７号墳	S-31	24	13	4	割		S-32蓋石
71	7	114	S20W15 西側三段面他		7～12	4～8	1～2	割	直径12cm、厚さ６cmの饅頭形の丸石を含む。 石材を一括。	
72	7	115	S20W20 ７号墳南斜面		5～17	3～7	1～4	割	赤色顔料ありを含む。ラベル欠落の石材を一括。	
73	7	116	７号墳		7～9	6～11	2	割	石材を一括。	
73	7	51	７号墳石室	ST-01	13	12	7	割		袖石

表６　出土人骨一覧（Table１．List of skeletons）

取り上げ番号	備考（骨種など）	性別	人骨番号
№１	大腿骨片	不明	
№２	大腿骨片、№４と接合	不明	FE-1
№３	骨片（四肢骨）	不明	
№４	骨片（四肢骨）№２と接合	不明	
№５	骨片（四肢骨）	不明	
№６	骨片（四肢骨）	不明	
№７	骨片（四肢骨）	不明	
№８	骨片（四肢骨）	不明	
№９	骨片（四肢骨）	不明	
№10	下顎右側第二大臼歯	不明	
№11	下顎左側第一大臼歯	不明	
№12	骨片（四肢骨）	不明	
№13	脛骨（左）、写真図版58	男性	TI-1
№14	骨片（四肢骨）	不明	
一括（1）	骨片（四肢骨）	不明	
一括（2）	骨片（四肢骨）	不明	

写　真　図　版

※遺物写真枠内の№は、遺物図面第○○図―○○と対応する。

1　城ヶ辻古墳群遠景

2　城ヶ辻古墳群全景

図版２　城ヶ辻古墳群調査区遠景

３　城ヶ辻古墳群調査区遠景（南東より）

４　城ヶ辻古墳群調査区遠景（対岸より）

５　城ヶ辻古墳群調査区遠景（南より）

６　城ヶ辻古墳群調査区全景

７　６号墳・７号墳（南より）

８　１号墳鉄塔下消滅部分

９　２号墳墳丘（北より）

10　３号墳墳丘（西より）

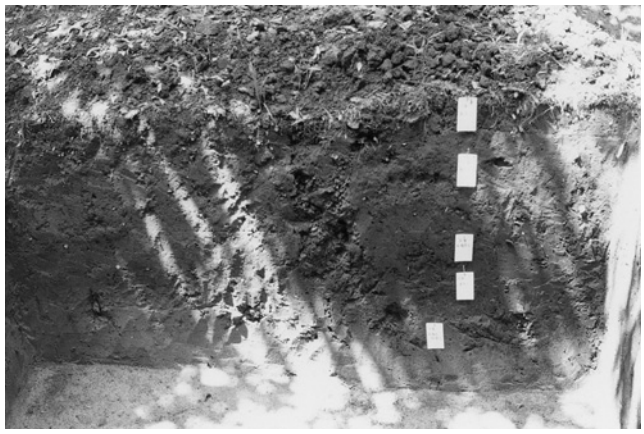
11　４号墳墳丘（北より）

12　５号墳墳丘（北より）

13　１号墳石棺復元状況（玉名高校）

14　１号墳石棺復元状況（玉名高校）

15　２号墳１Ｔｒ.西側を見る（墳頂より）



16　２号墳１Ｔｒ.東端西壁土層（東より）

17　２号墳１Ｔｒ.西端西壁土層（東より）

18　２号墳１Ｔｒ.中央東壁土層（西より）

19　２号墳１Ｔｒ.東端北壁土層（南より）

20　２号墳１－２Ｔｒ.(６号墳周溝部)西側を見る(東より)

21　２号墳１Ｔｒ.集石出土状況（東より）

22　２号墳１－２Ｔｒ.(６号墳周溝部)北壁土層(南より)

23　２号墳２Ｔｒ.西側を見る（東より）

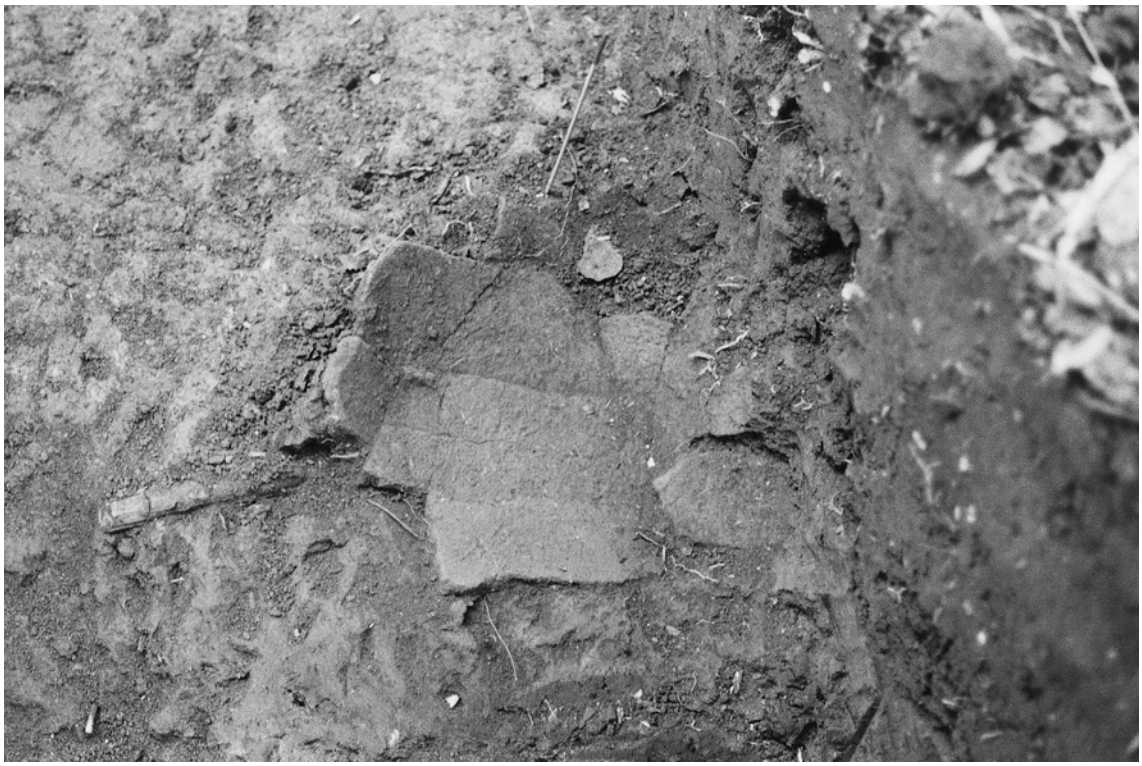
24　２号墳２Ｔｒ.南側を見る（墳頂より）

25　２号墳３Ｔｒ.北側を見る（南東より）

26　２号墳３Ｔｒ.中央凹部（北東より）

27　２号墳４Ｔｒ.南西側を見る（墳頂より）

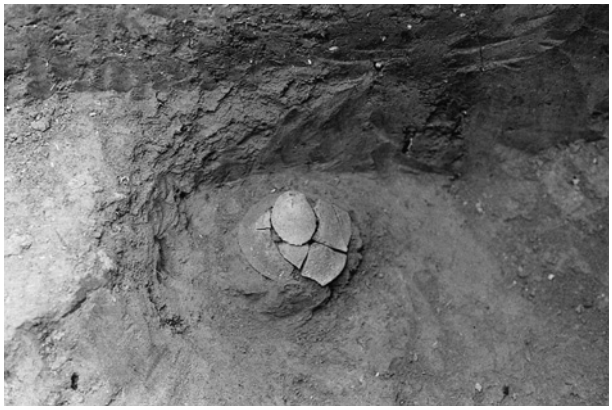
28　２号墳４Ｔｒ.甕出土状況（北西より）



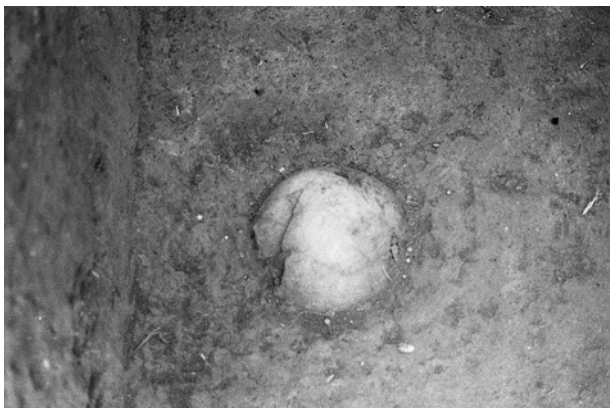
29　２号墳４Ｔｒ.甕出土状況（北西より）

30　２号墳５Ｔｒ.西側を見る（墳頂より）

31　２号墳５Ｔｒ.集石出土状況（北東より）

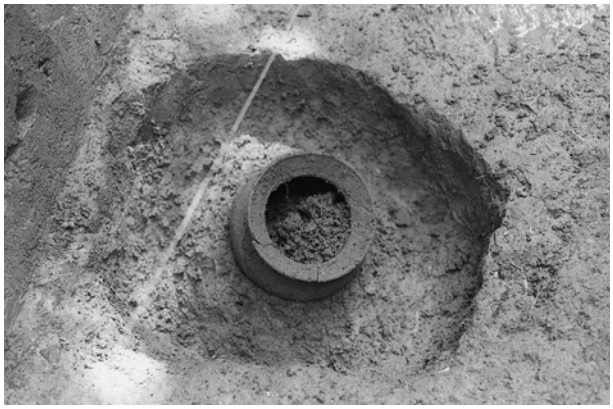


32　２号墳５Ｔｒ.高坏脚部出土状況（北より）

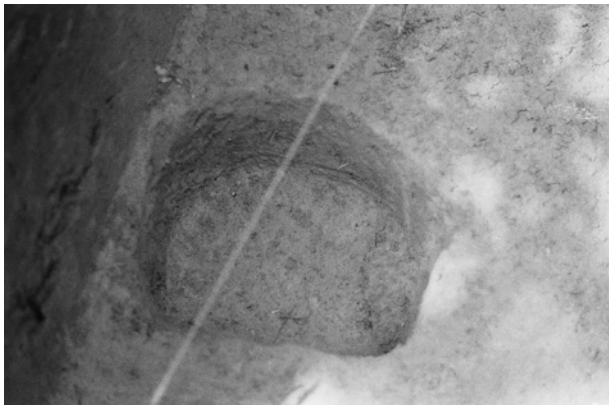


33　２号墳５Ｔｒ.甕出土状況

34　２号墳５Ｔｒ.石棺材出土状況（北東より）



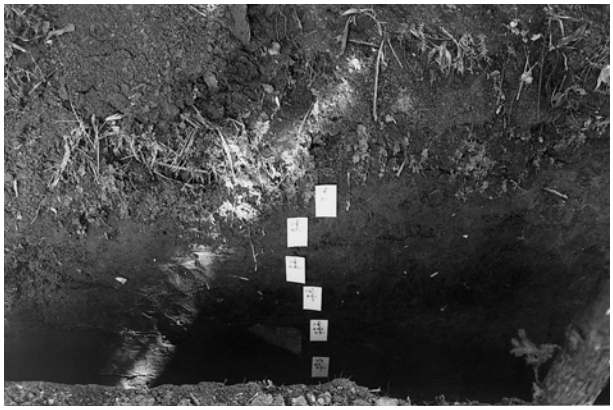
35　２号墳５Ｔｒ.ベンガラ入甕出土状況



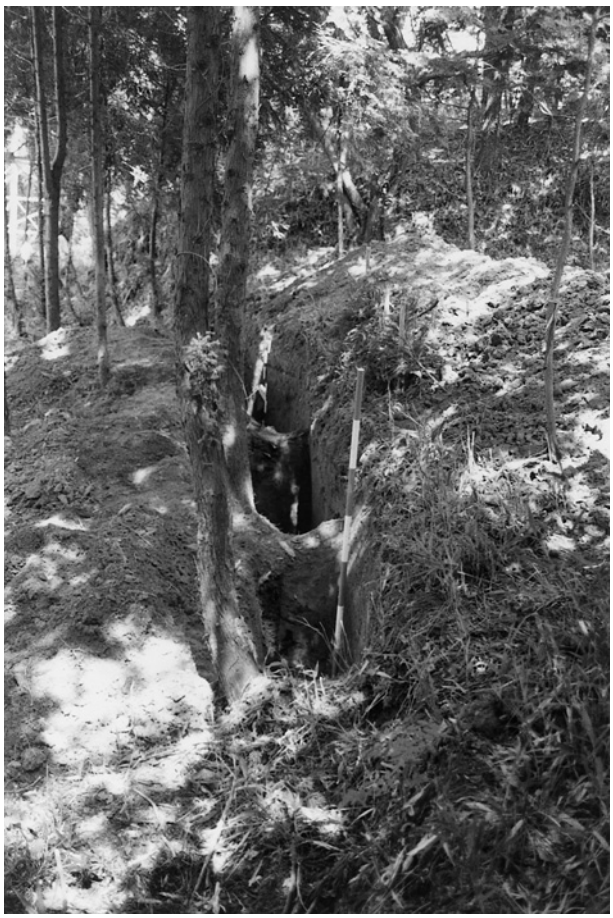
36　２号墳５Ｔｒ.ベンガラ入甕出土土坑完掘状況(北東より)

37　２号墳６－１Ｔｒ.西壁土層（北東より）

38　２号墳６－２Ｔｒ.北壁土層（南東より）



39　２号墳７Ｔｒ.南壁土層（北より）

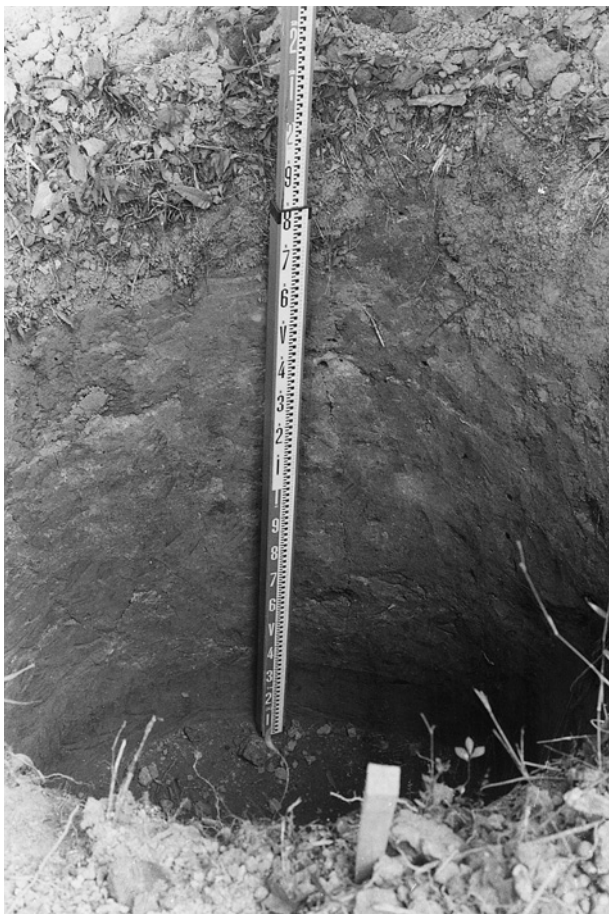


40　２号墳７Ｔｒ.東側を見る（墳端より）

41　２号墳９Ｔｒ.東側を見る（西より）

42　２号墳９Ｔｒ.東壁土層（北より）

43　２号墳10Ｔｒ.北壁土層（南より）



44　２号墳盗掘坑

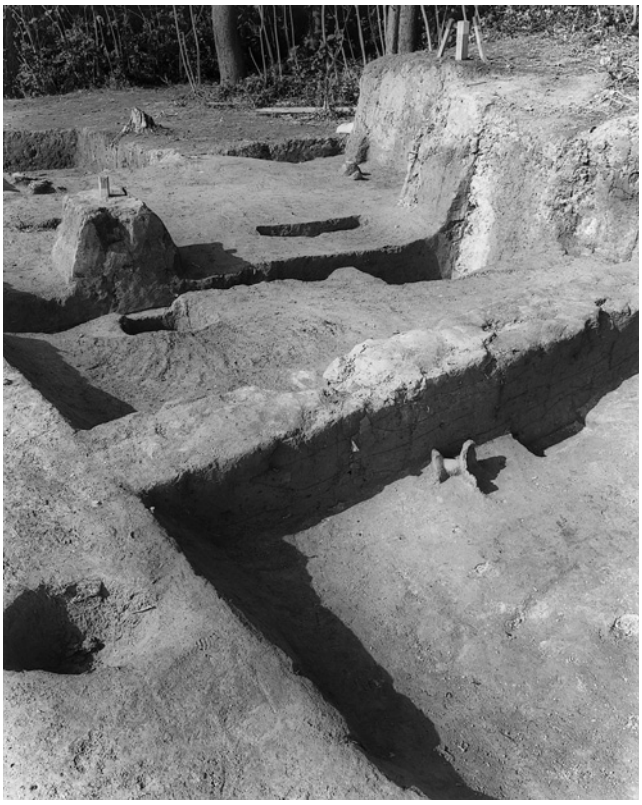
45　３号墳８Ｔｒ.北西壁土層（南東より）

46　３号墳８Ｔｒ.墳丘を見る（南西より）

47　３号墳８Ｔｒ.南西側を見る（墳頂より）

48　09ＳＤ検出状況（南より）

49　09ＳＤ土層断面（北西より）



50　09ＳＤ遺物出土状況（南より）

51　09ＳＤ完掘状況（北西より）

52　10ＳＸ・11ＳＸ検出状況（南より）

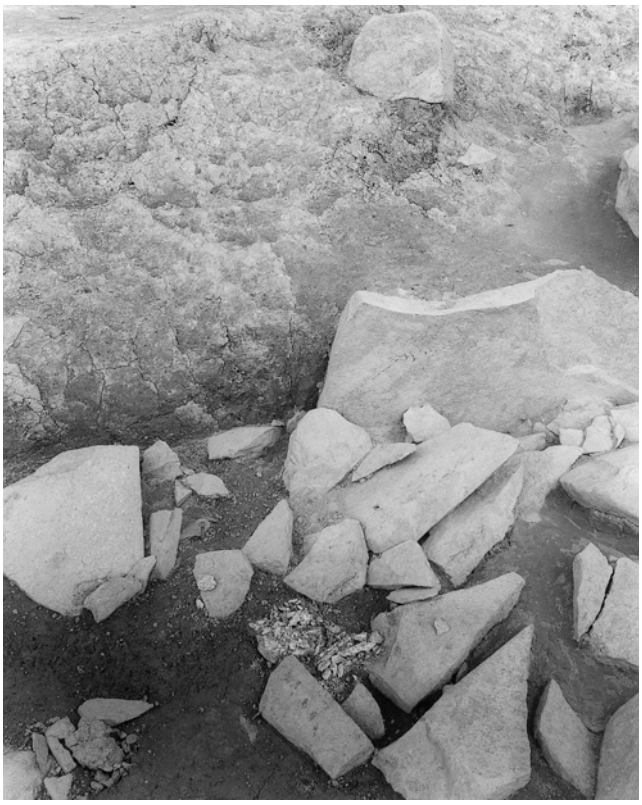
53　６号墳石材出土状況（南より）

54　６号墳石室全景（南西より）

55　６号墳石室全景（南西より）

56　６号墳石室奥壁（南西より）

57　６号墳左側壁（西より）



58　６号墳人骨出土状況（西より）

59　６号墳人骨出土状況（西より）

60　６号墳銀製耳環出土状況（西より）

61　６号墳金製耳環出土状況（南より）

62　６号墳石室奥壁掘り方検出状況（西より）

63　６号墳右側壁石障掘り方検出状況（南より）

64　６号墳石室石障前壁掘り方検出状況（北より）

65　６号墳羨門部袖石掘り方検出状況（北より）

66　６号墳石障掘り方検出状況（北より）

67　６号墳左側壁石障掘り方及び石棺掘り方検出状況(西より)

68　６号墳右側壁石棺(石室)掘り方検出状況（西より）

69　６号墳墳丘盛土土層断面（西より）

70　６号墳04ＳＫ遺物出土状況（南より）

71　６号墳04ＳＫ石材検出状況（南西より）

72　７号墳表土剥ぎ状況（東より）

73　７号墳石室検出状況（北東より）

74　７号墳天井石検出状況（南西より）

75　７号墳全景（北東より）

76　７号墳石室全景（南西より）

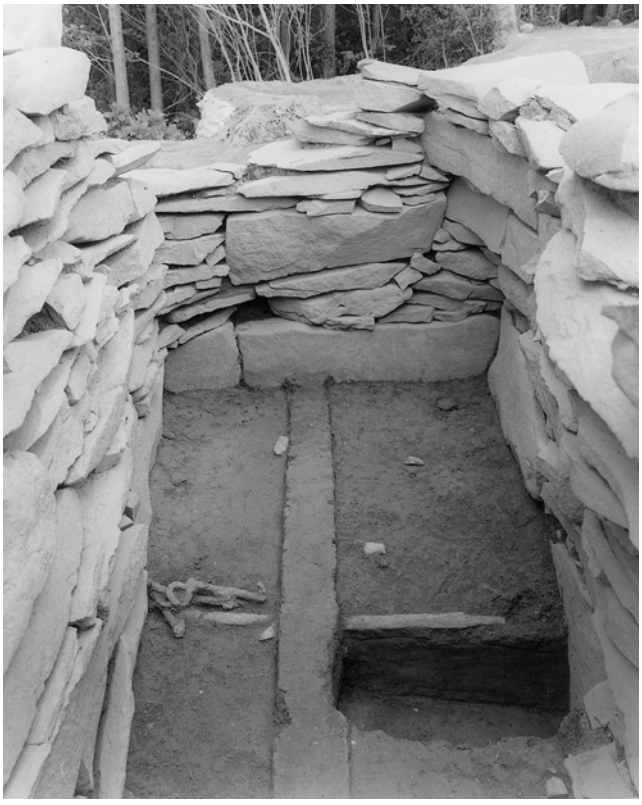
77　７号墳石室全景（南西より）

78　７号墳石室閉塞状況（南西より）

79　７号墳石室閉塞状況（北東より）

80　７号墳石室内遺物出土状況（南西より）

81　７号墳石室内遺物出土状況（南西より）



82　７号墳石室内遺物出土状況（南西より）

83　７号墳石室内遺物出土状況（北東より）

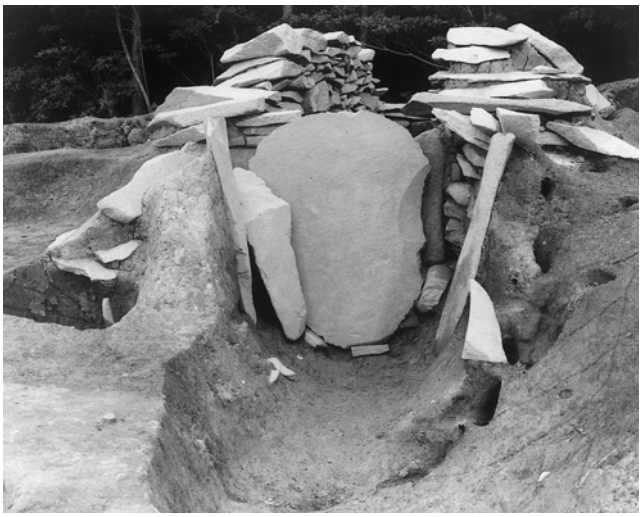
84　７号墳前庭部右側壁（南より）

85　７号墳閉塞石右側（南西より）

86　７号墳前庭部左側壁（西より）

87　７号墳前庭部（南西より）

88　７号墳前庭部半裁状況（南西より）



89　７号墳石室閉塞状況（南西より）

90　７号墳閉塞石除去状況（南西より）

91　７号墳左側壁（部分）（北西より）

92　７号墳左側壁（部分）（北西より）

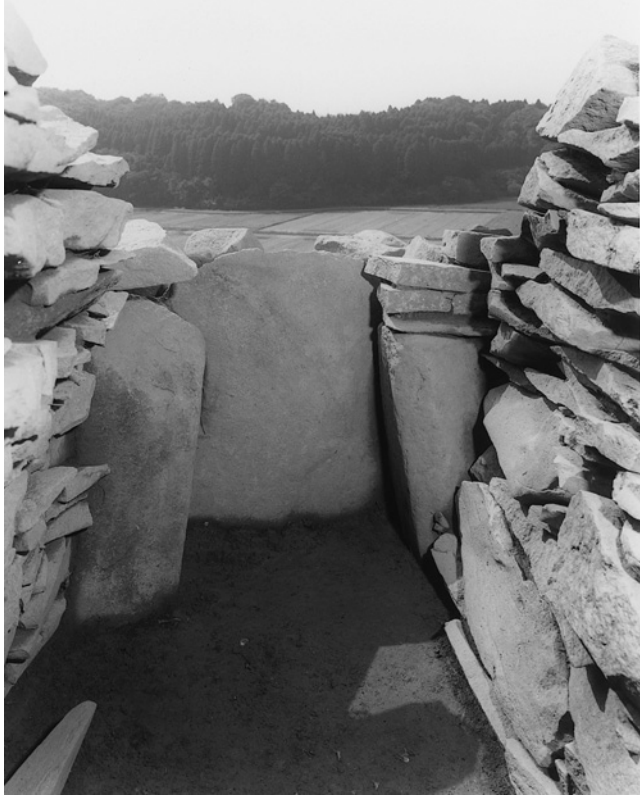
93　７号墳右側壁（南東より）

94　７号墳右側壁（南東より）

95　７号墳右側壁（東より）

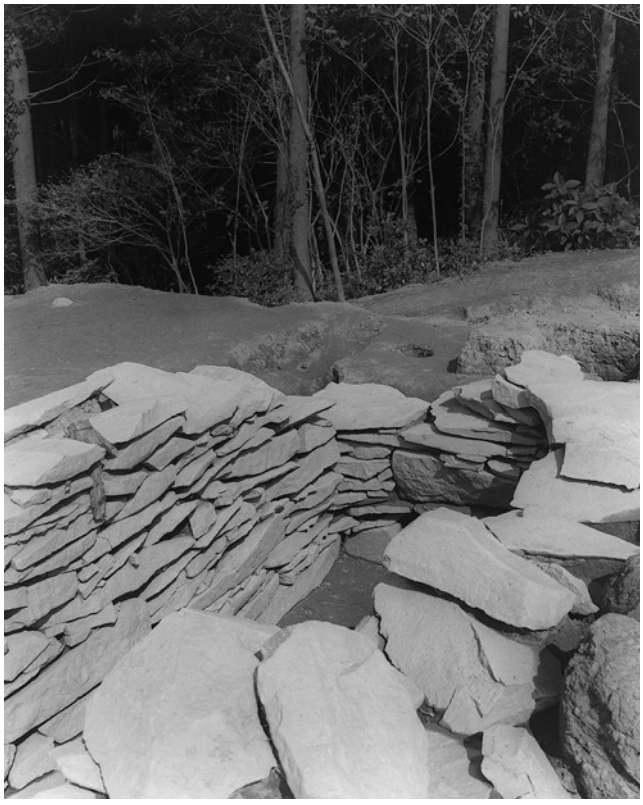
96　７号墳右側壁腰石掘り方確認トレンチ（東より）

97　７号墳墳丘西側トレンチ（32ＳＸ）（南より）



98　７号墳石室閉塞状況（玄室より望む）

99　７号墳前庭部左側トレンチ（東より）



100　７号墳奥壁右隅（南より）

101　７号墳墳丘南東側横断トレンチ（北西より）

102　７号墳墓壙掘り方検出状況（南西より）

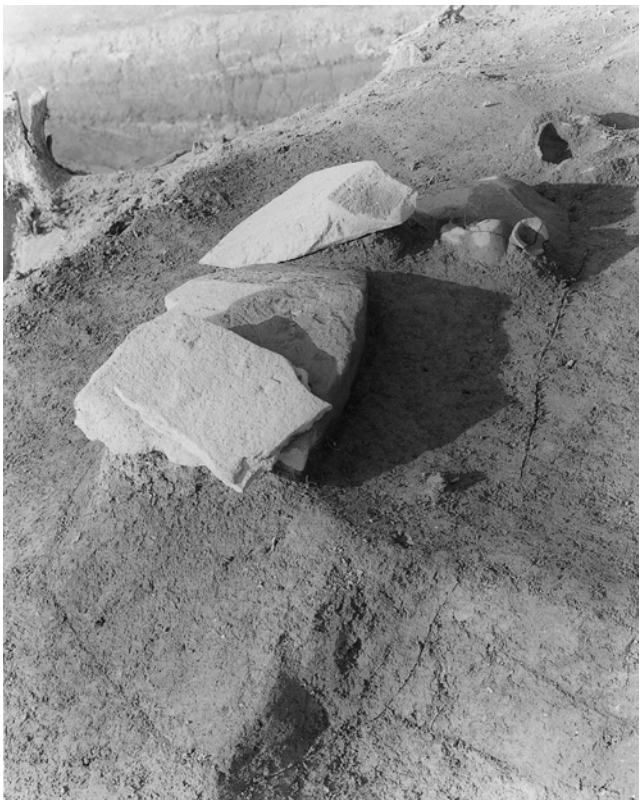
103　７号墳墓壙掘り方土層断面（南西より）

104　７号墳墳丘北西側横断トレンチ（北より）

105　７号墳墳丘北西側トレンチ（南西より）

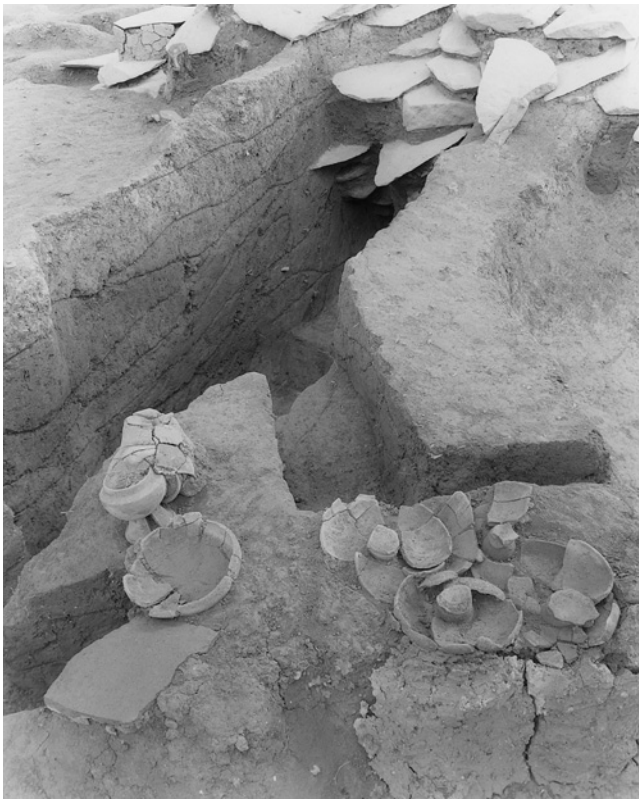
106　７号墳墳丘北東側縦断トレンチ（南東より）

107　７号墳墳丘北東側縦断トレンチ（北西より）



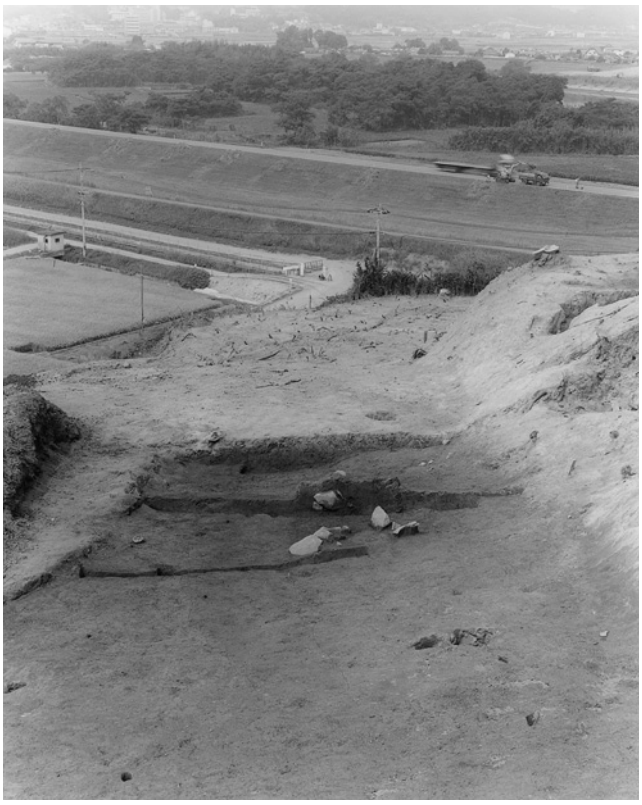
108　31ＳＸ検出状況（南東より）

109　31ＳＸ検出状況（西より）

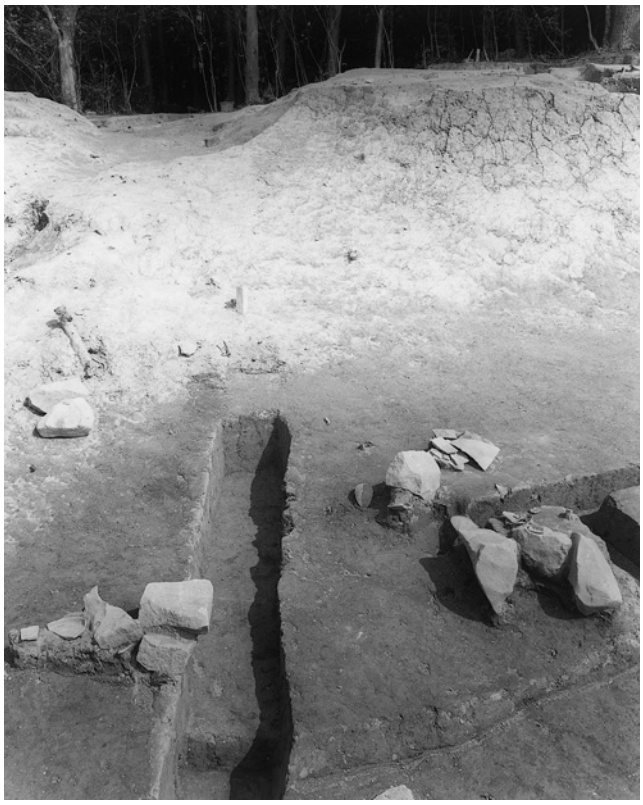


110　31ＳＸ遺物出土状況（西より）

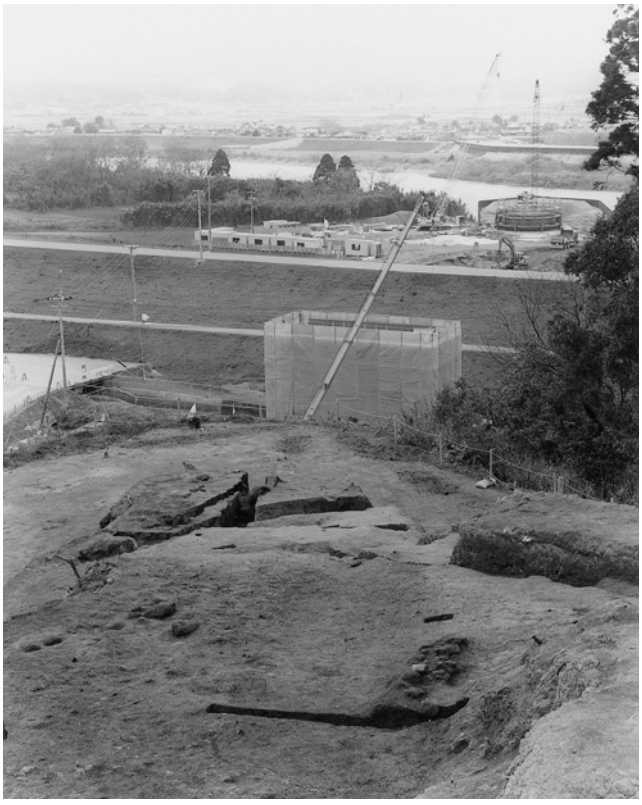
111　31ＳＸ高坏脚部出土状況（西より）



112　26ＳＦ検出状況（東より）



113　25ＳＦ遺物出土状況（南西より）



114　30ＳＦ検出状況（東より）

115　30ＳＦ土層断面（北西より）

116　28ＳＤ検出状況（南より）

117　28ＳＤ完掘状況（南東より）

118　09ＳＤ検出状況（南より）

119
35ＳＦ土層断面西端（南西より）

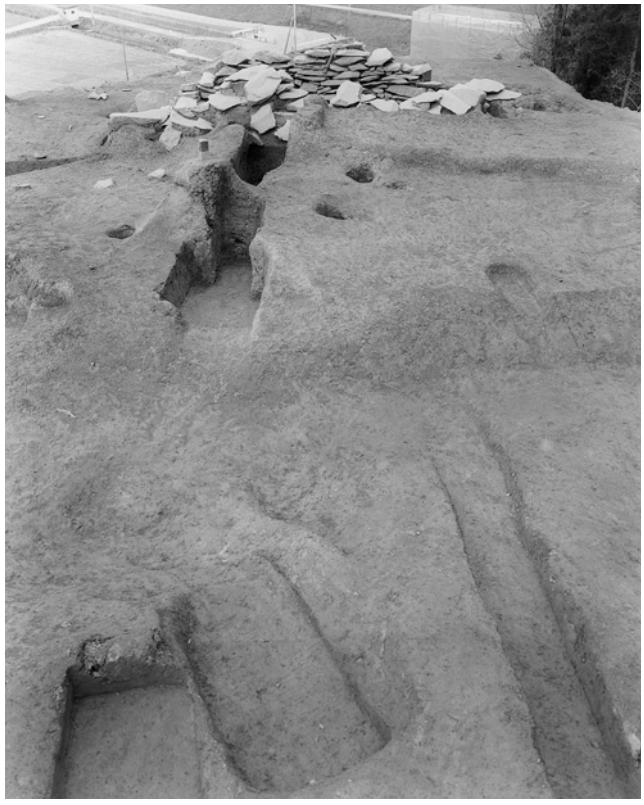
120
35ＳＦ土層断面（南西より）

121
35ＳＦ土層断面東端（南西より）

122　27ＳＸ土層断面（南東より）

123　27ＳＸ完掘状況（南東より）

124　29ＳＸ完掘状況（西より）



125　29ＳＸ完掘状況（東より）

126　17ＳＸ検出状況（北より）

127　17ＳＸ床面（ベンガラ）検出状況（西より）

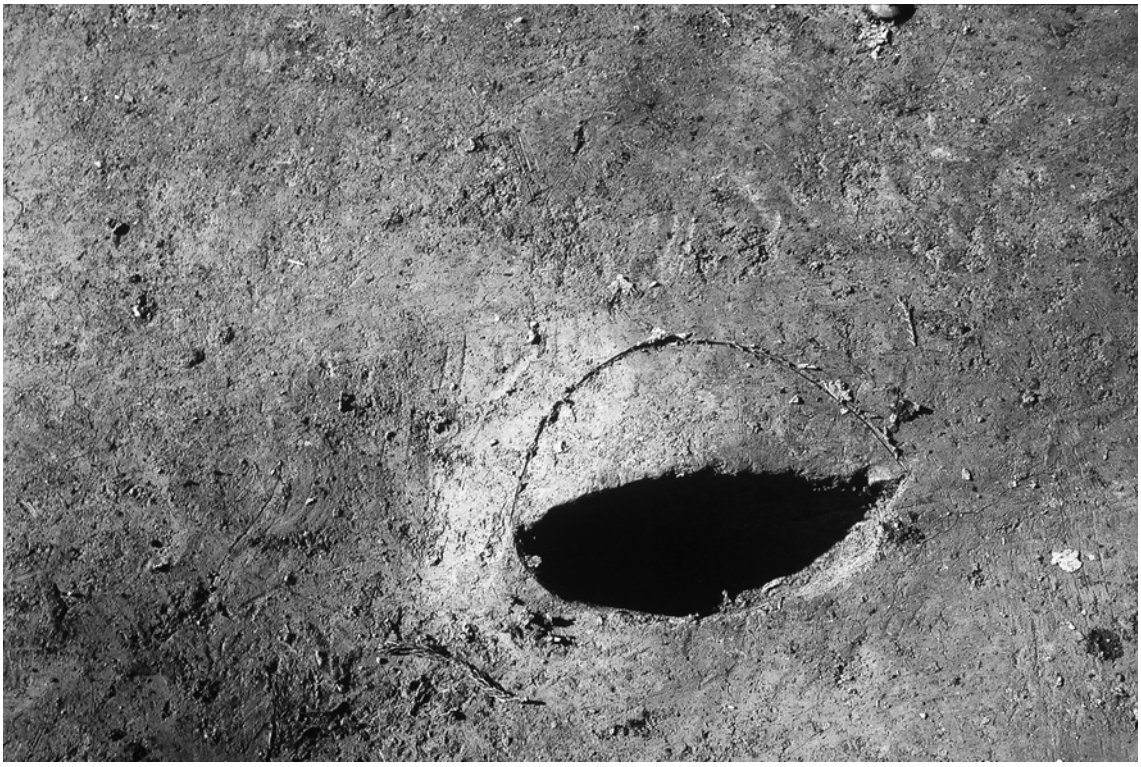
128　17ＳＸ完掘状況（西より）

129　32ＳＸ完掘状況（北西より）

130　33ＳＸ検出状況（南東より）

131　41ＳＸ完掘状況（北西より）

132　40ＳＸ土層断面（北より）



133　42ＳＸ半裁状況（北西より）

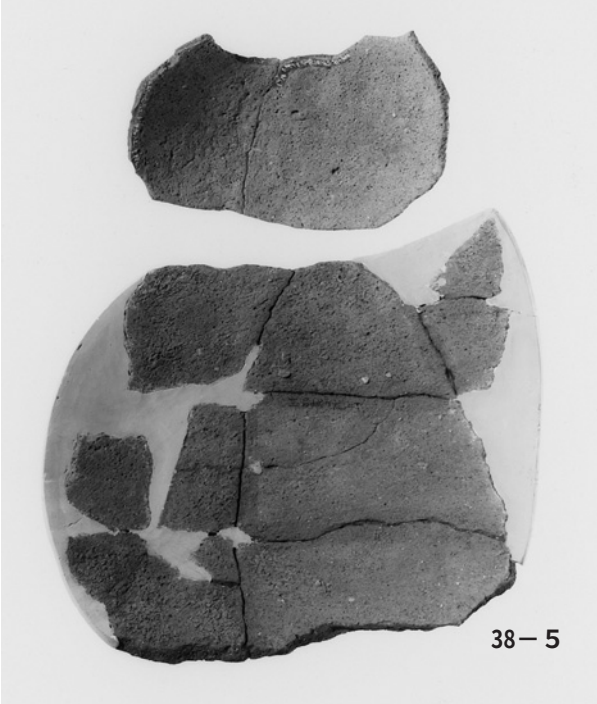
134　土師器甕

136　土師器壺

135　土師器甕

137　土師器壺

138　土師器壺（外面）

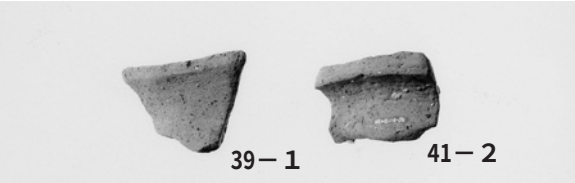


139　土師器壺（内面）

140　土師器甕

141　甕（外面）

142　甕（内面）



146　09ＳＤ・03ＳＤ出土土師器

149　04ＳＫ出土須恵器坏身

150　11ＳＸ出土土師器坏

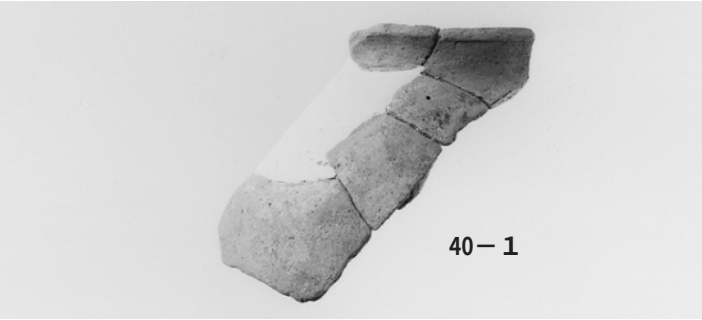
143　土師器高坏

144　土師器高坏

145　土師器壺

147　03ＳＤ出土土師器壺

148　04ＳＫ出土須恵器短頸壺



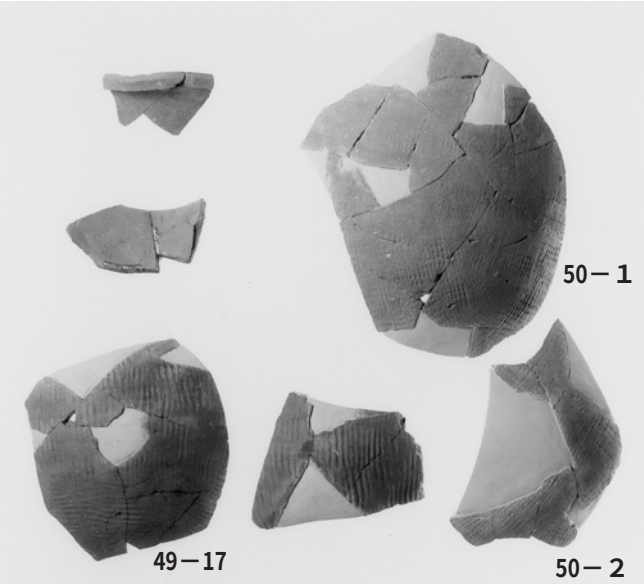
151　04ＳＫ出土土師器甕

152　須恵器坏蓋

153　須恵器坏蓋

156　須恵器坏蓋

157　須恵器坏蓋



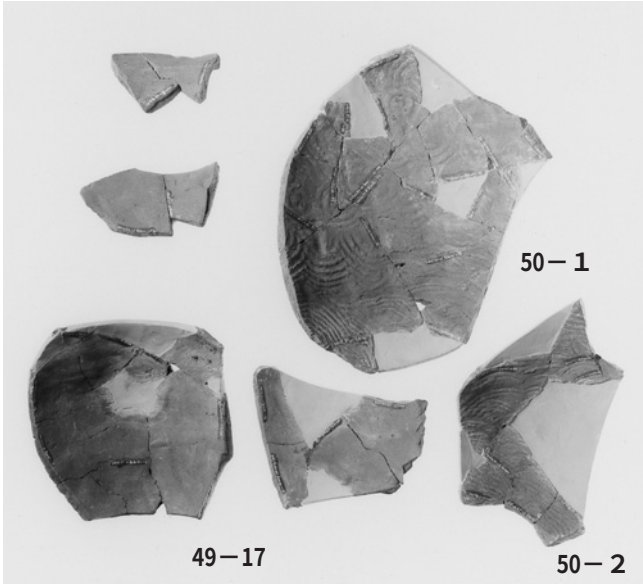
160　須恵器甕（外面）

154　須恵器坏身

155　須恵器坏身

158　須恵器坏身

159　須恵器坏身

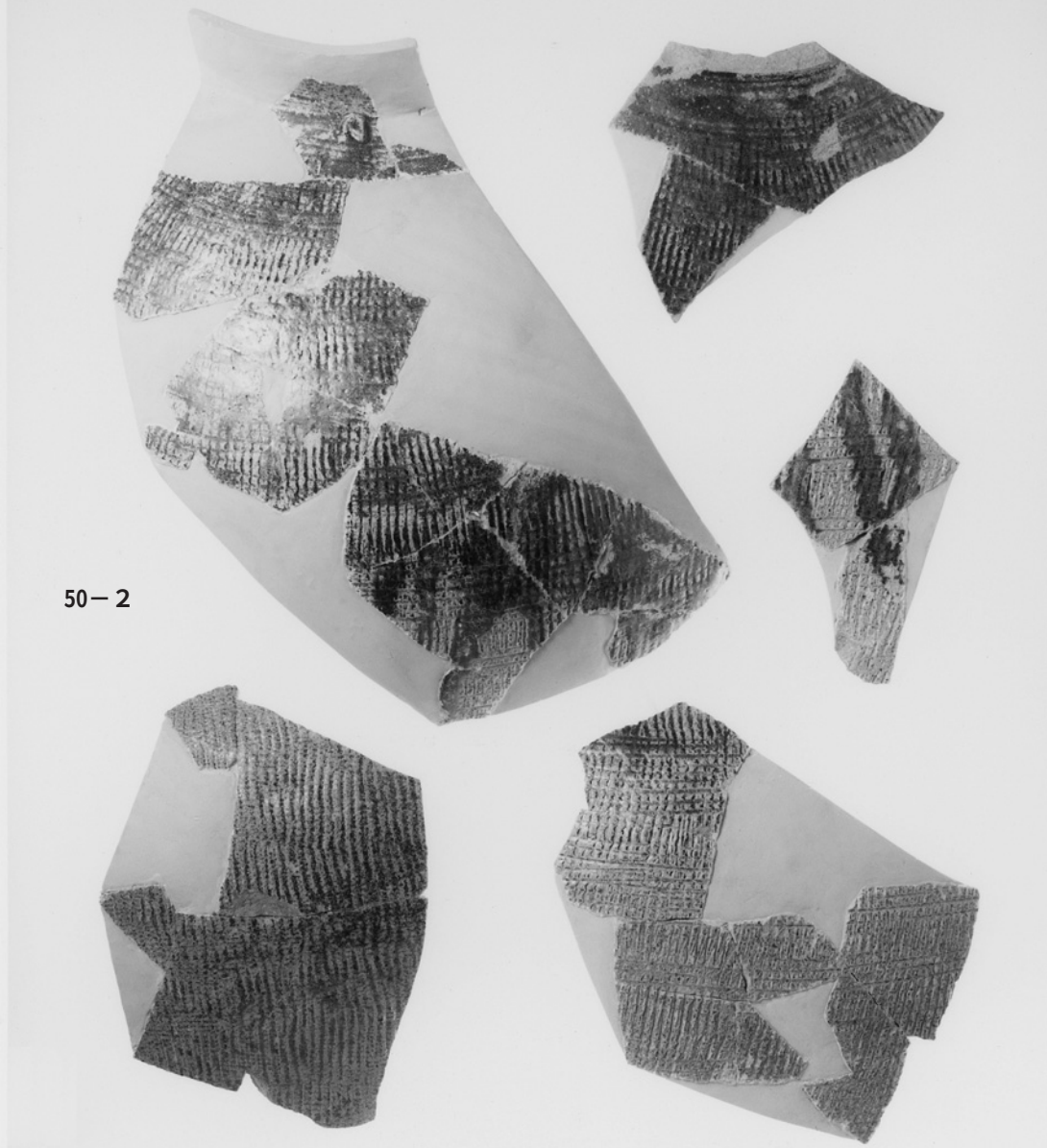


161　須恵器甕（内面）

図版36　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器

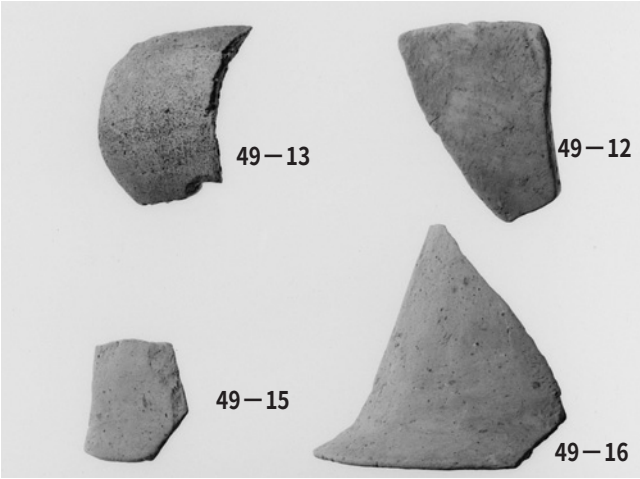
162　須恵器高坏

163　須恵器高坏・碗



166　須恵器甕

164　土師器高坏



165　土師器

167　須恵器甕（外面）

168　須恵器甕（内面）

169　須恵器甕（外面）

170　須恵器甕（内面）

171　須恵器甕（外面）

172　須恵器甕（内面）

173　土師器高坏

174　土師器高坏

177　土師器高坏

181　土師器壺

175　土師器高坏

176　土師器高坏

178　土師器坏

179　須恵器有蓋脚付短頸壺(蓋)

180　須恵器有蓋脚付短頸壺

182　25ＳＦ出土須恵器坏蓋

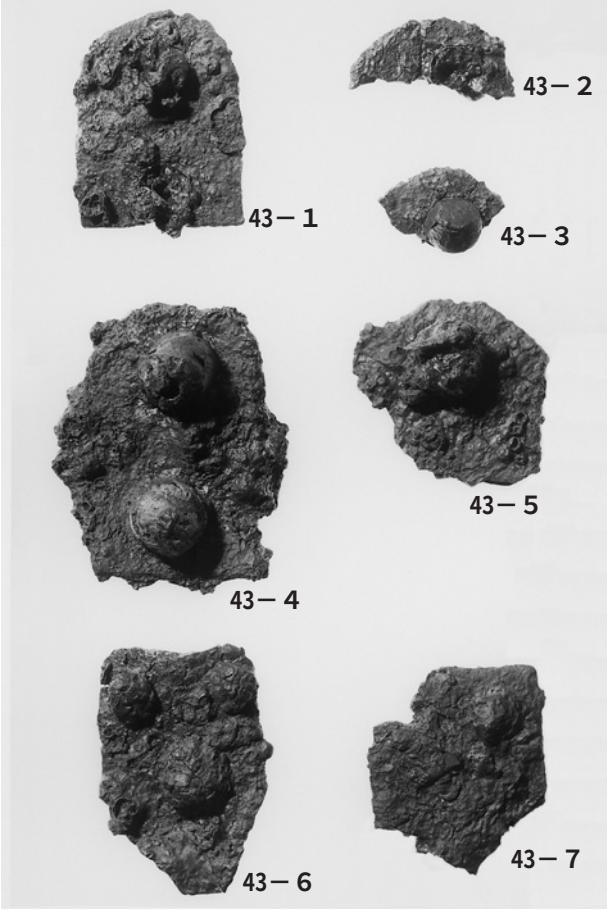
183　25ＳＦ出土土師器坏

184　25ＳＦ出土須恵器坏

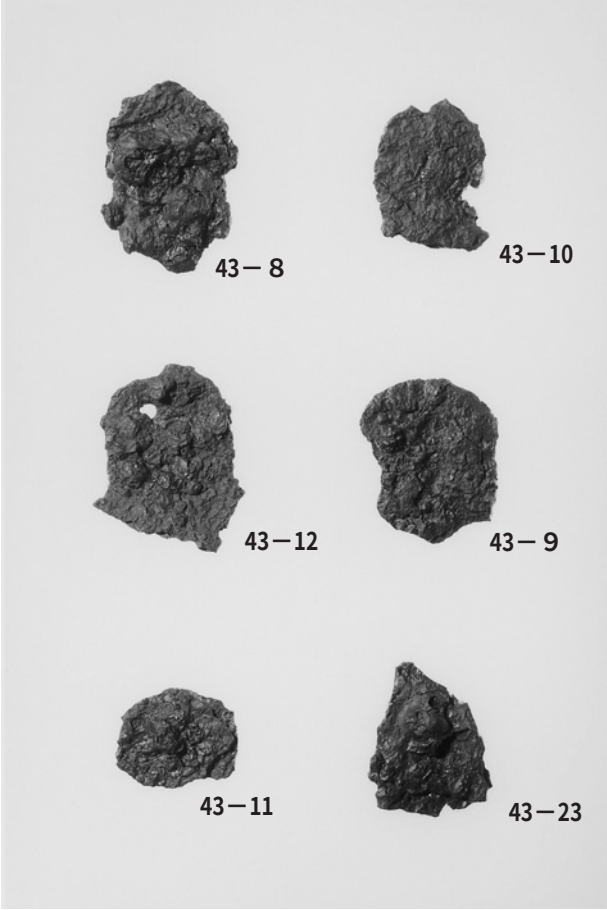
185　７号墳墳丘南東側（６号墳周溝・墓道）出土土器集合

186　７号墳墳丘上石材・土器集中地点（31ＳＸ）出土土器集合

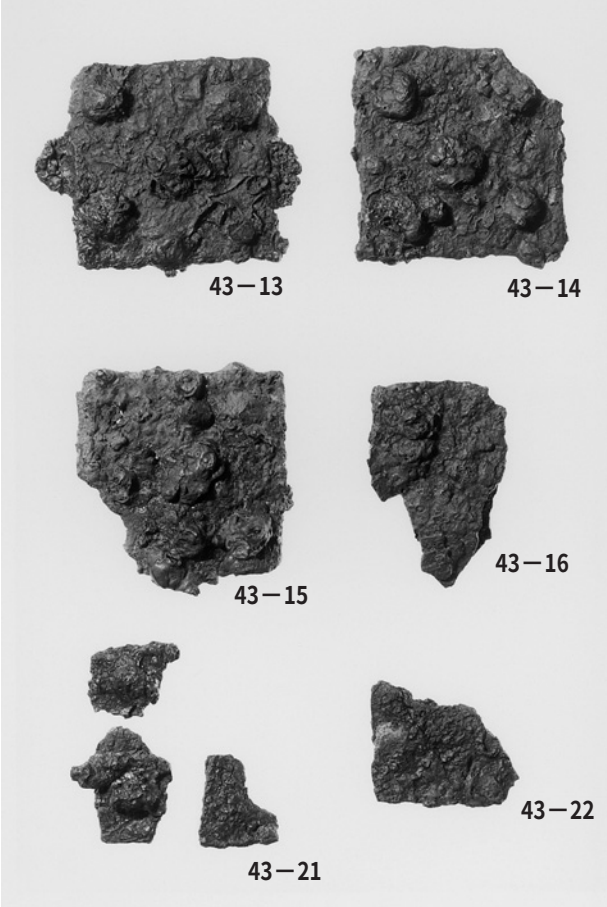
図版42　６号墳出土鉄器



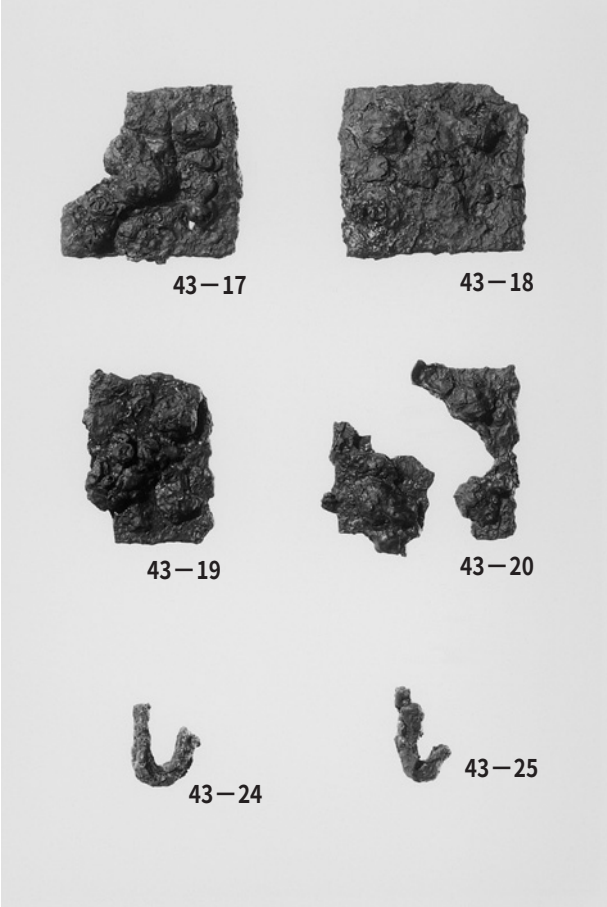
188　飾金具



189　飾金具

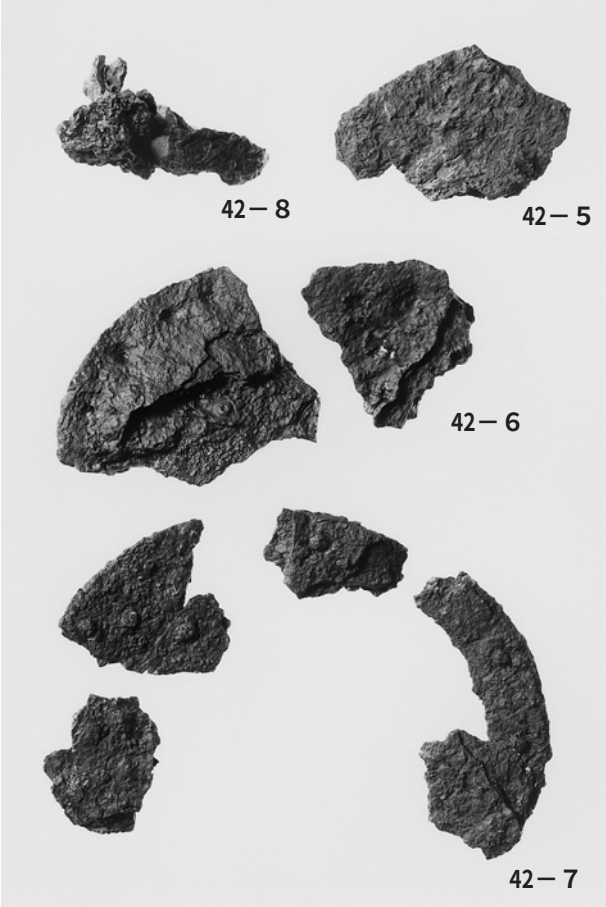


190　飾金具

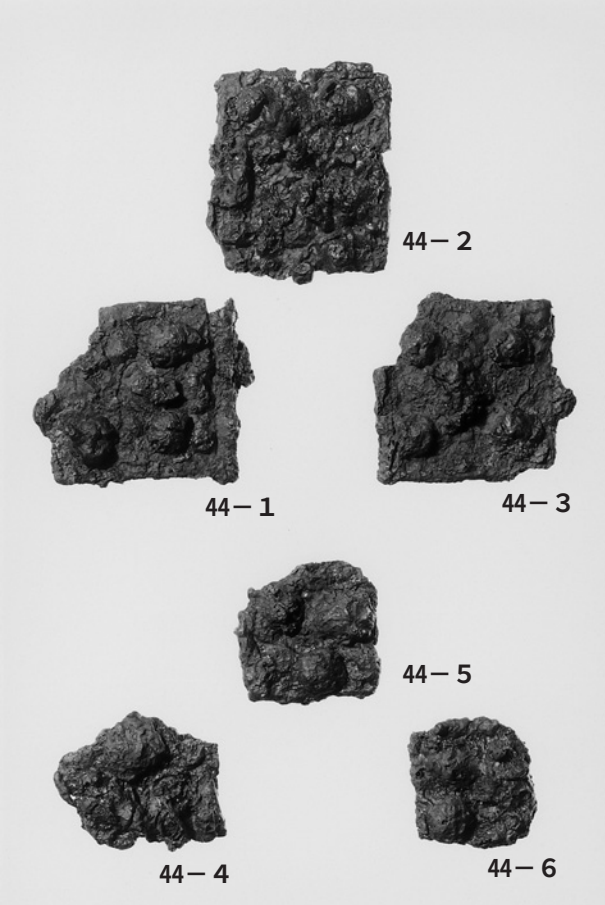


191　飾金具・責金具

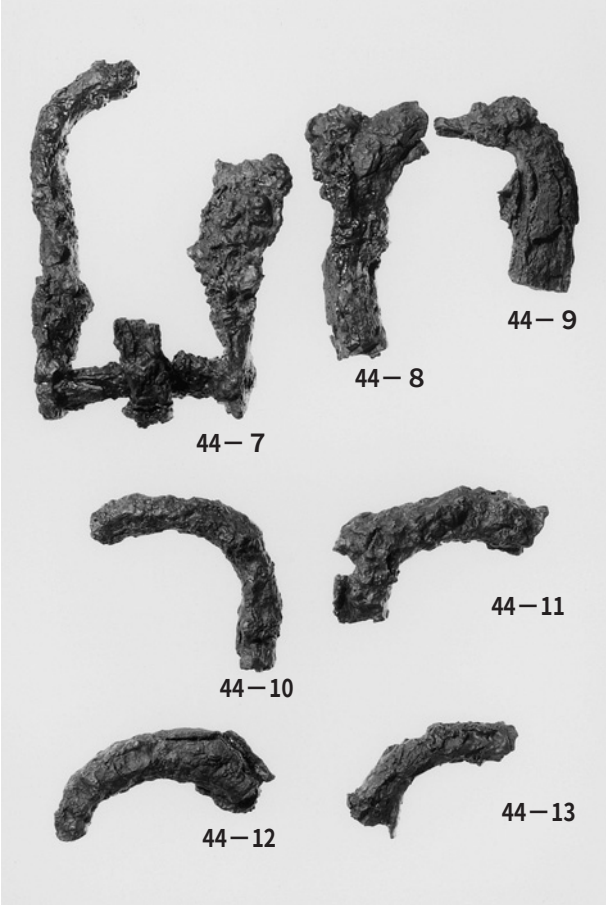
192　轡（表面）



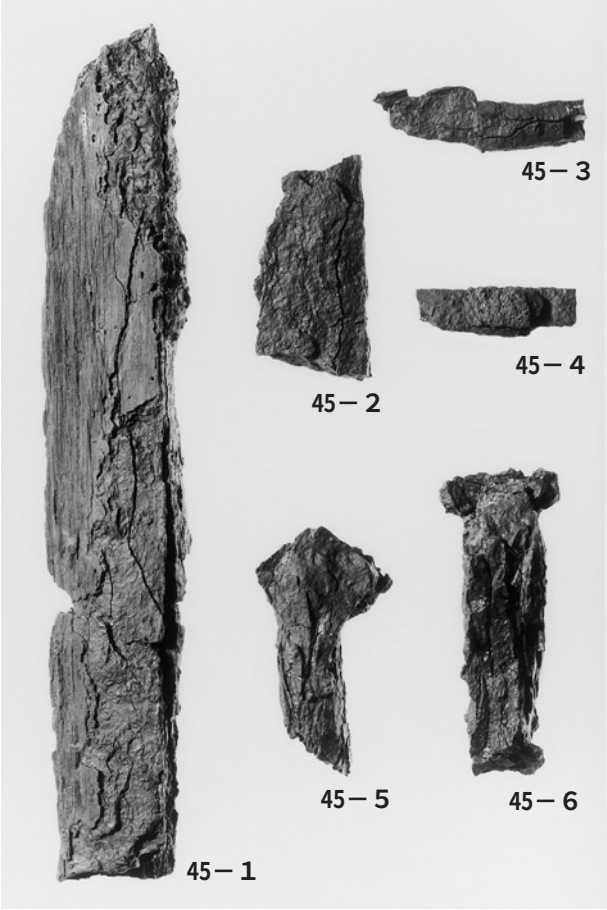
193　轡（裏面）



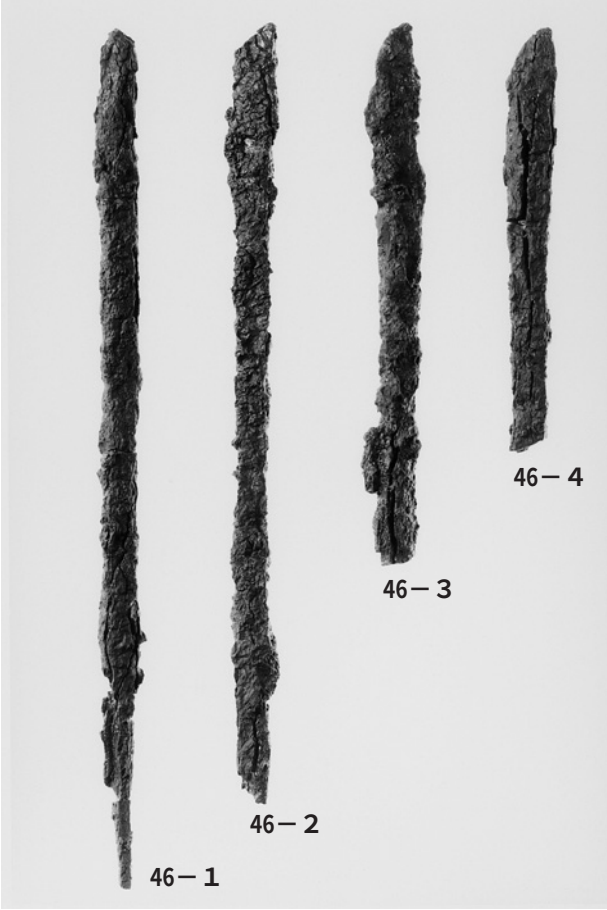
194　飾金具



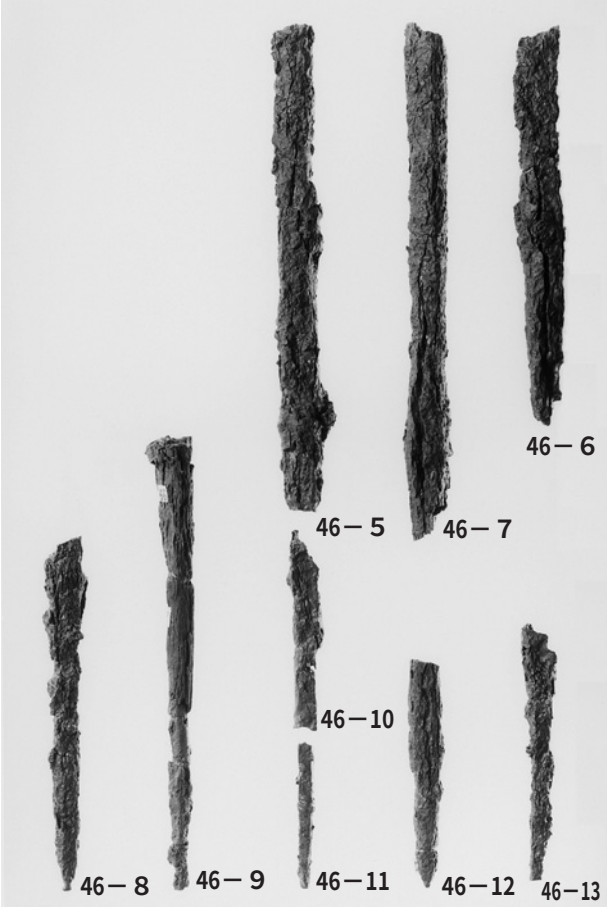
195　鉸具



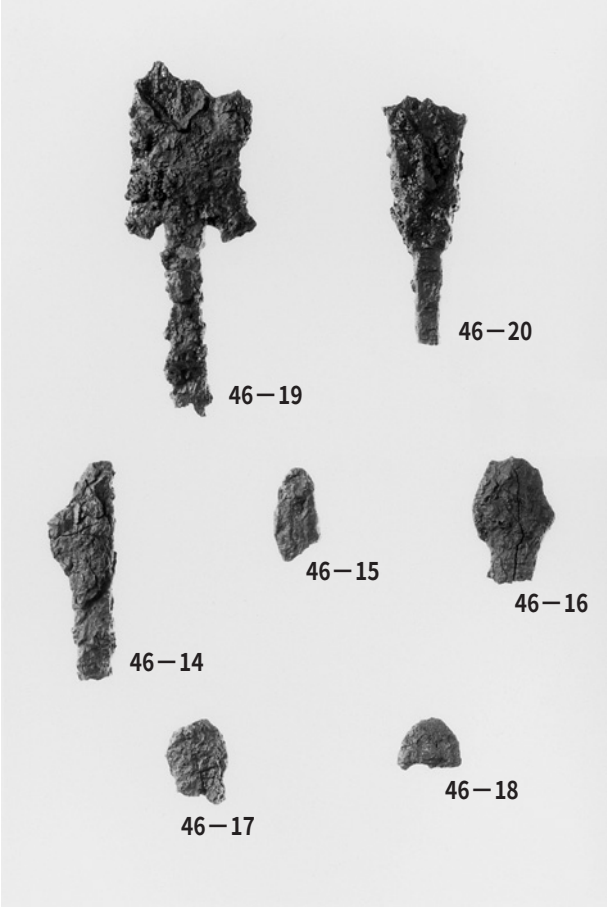
196　刀子・刀　他



197　鏃



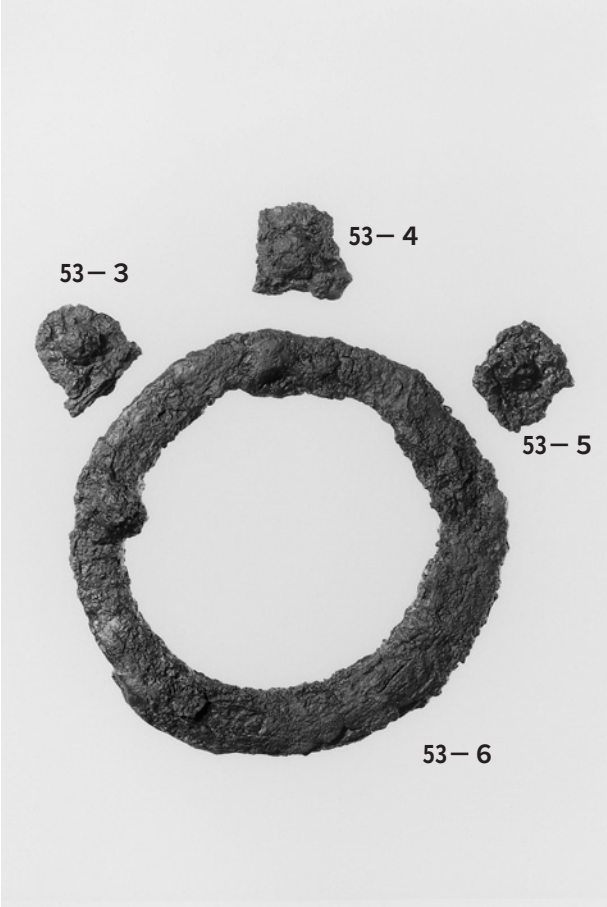
198　鏃



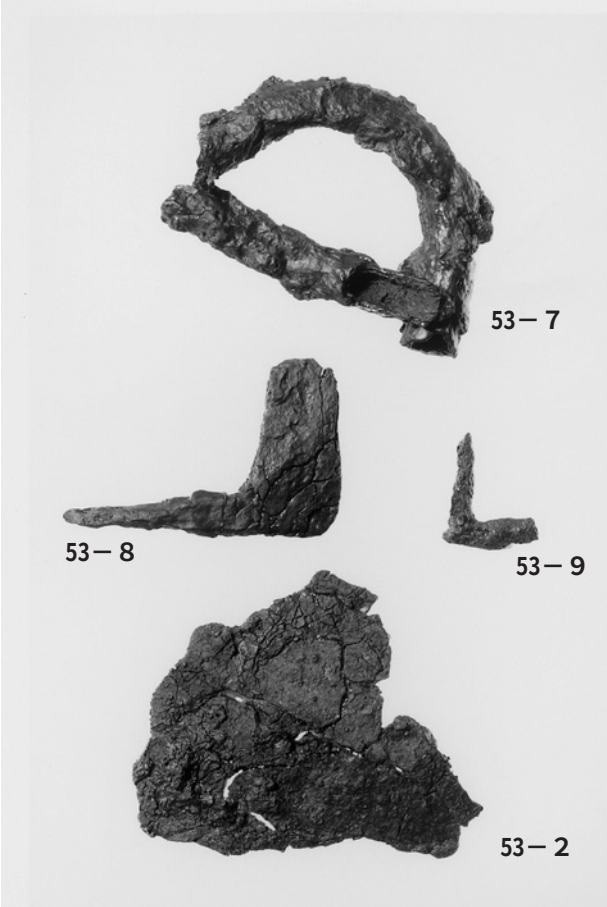
199　鏃

200　轡（表面）

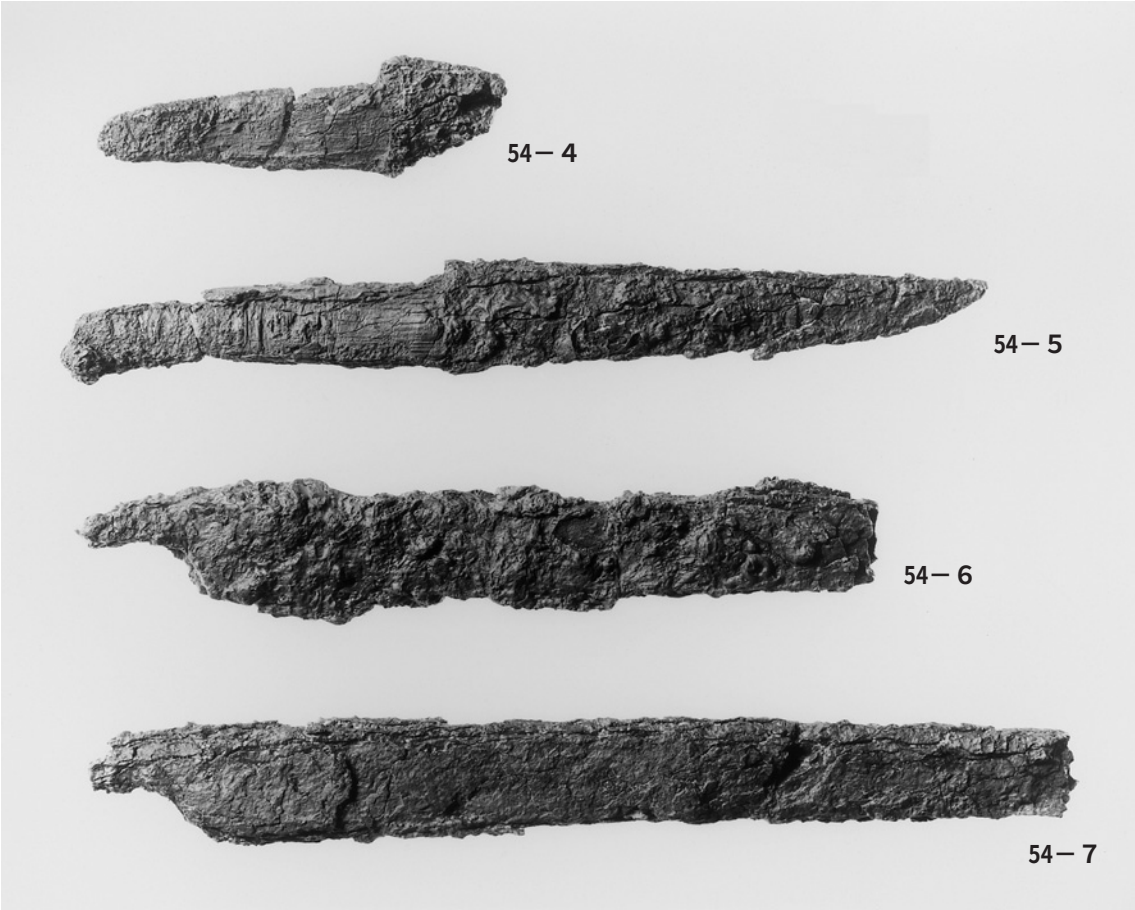
201　轡（裏面）



202　雲珠

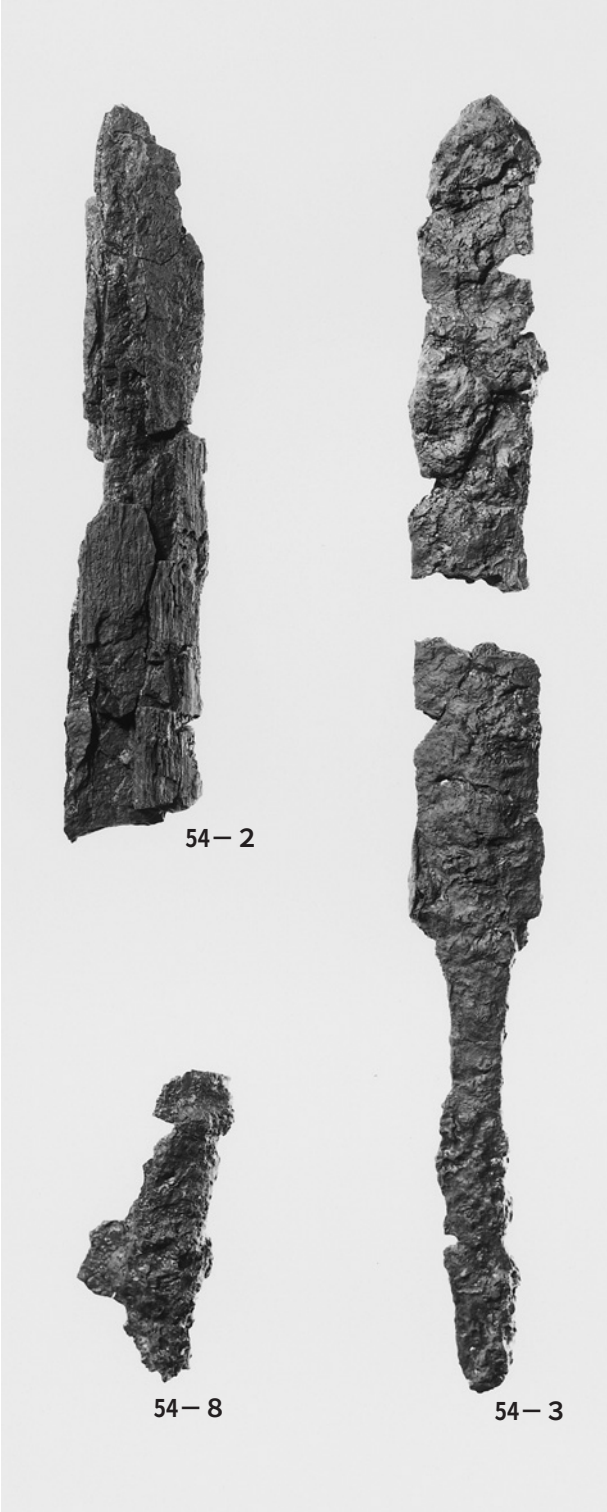


203　鉸具

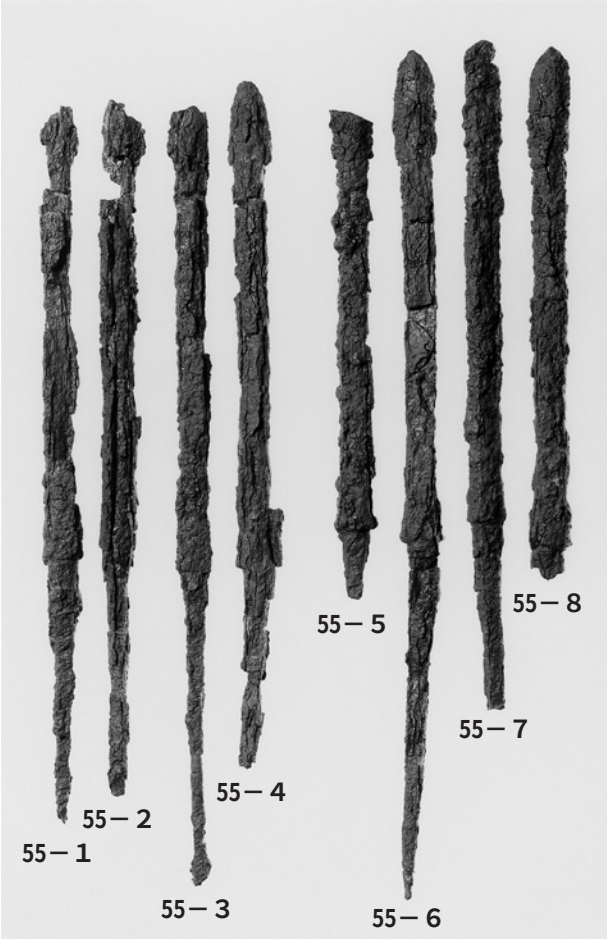


204　刀子

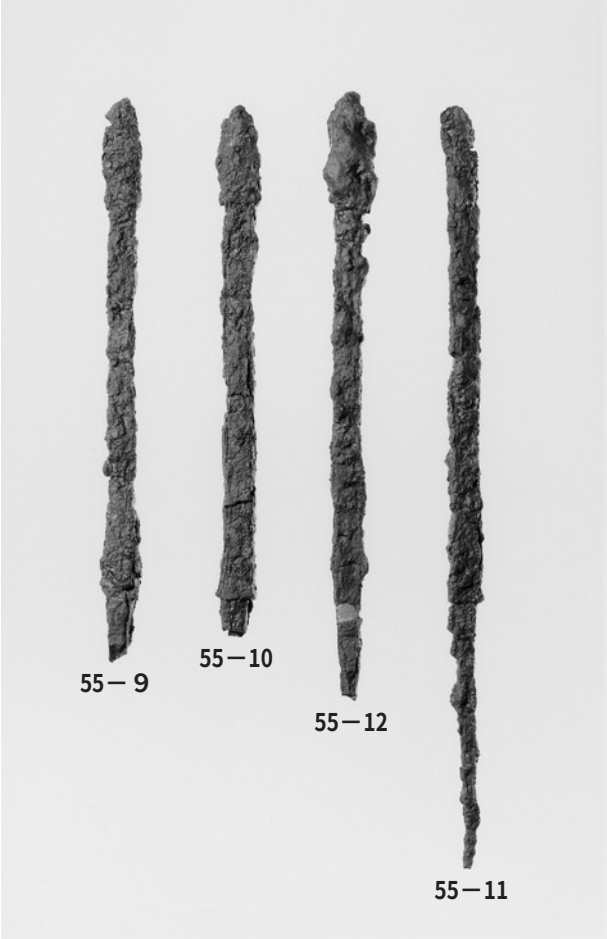
205　刀



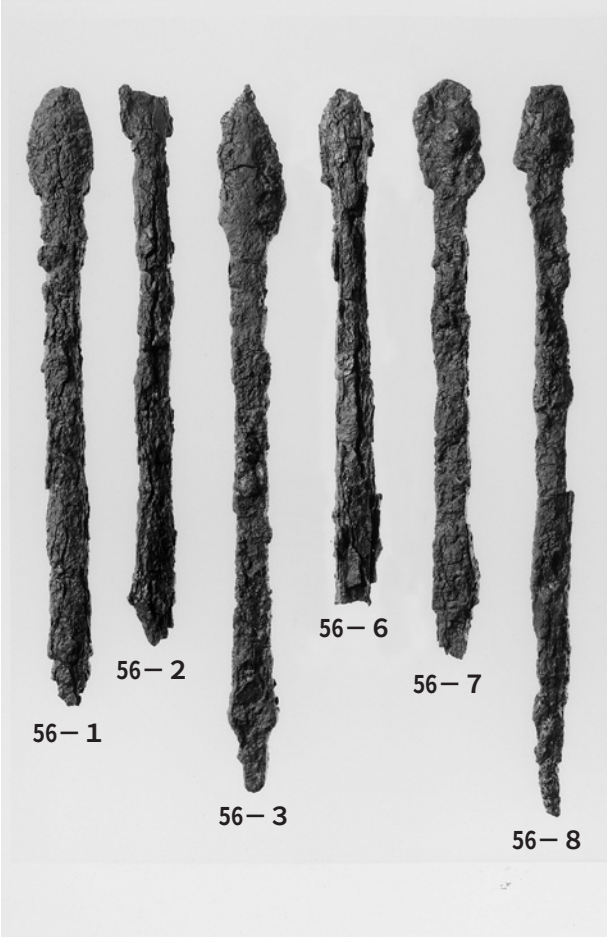
206　刀・剣



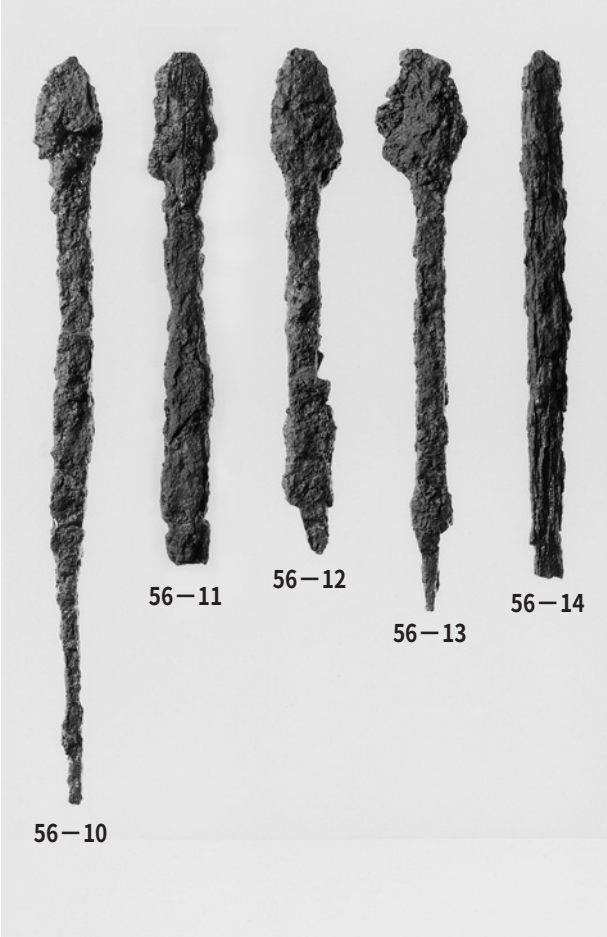
207　鏃（大形）



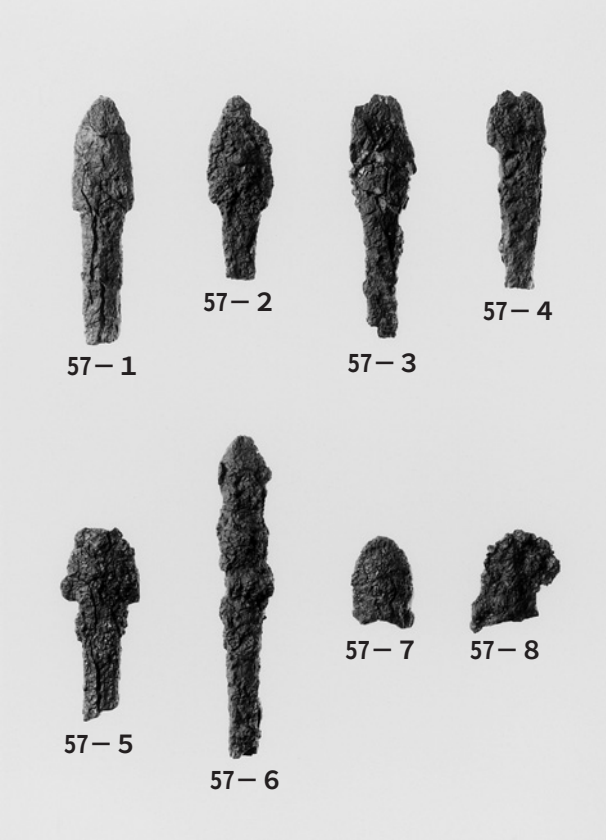
208　鏃（大形）



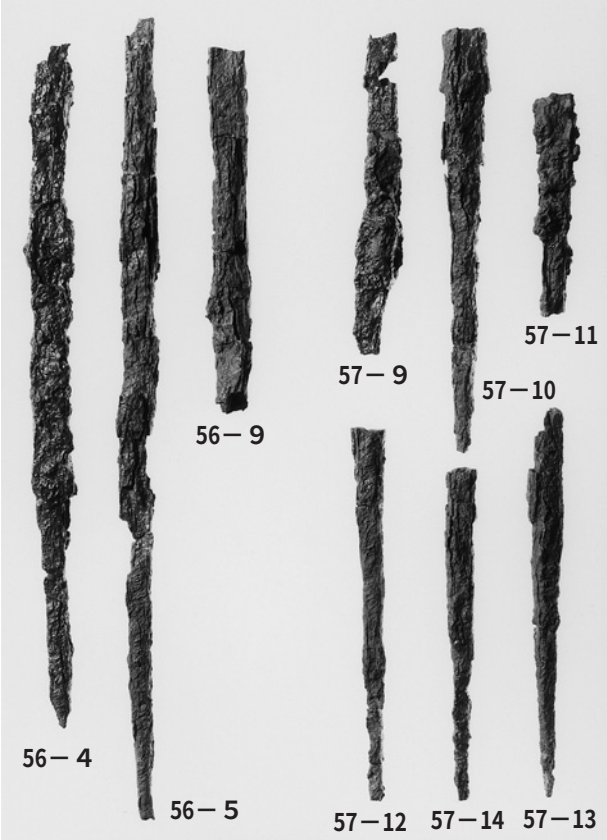
209　鏃（中形）



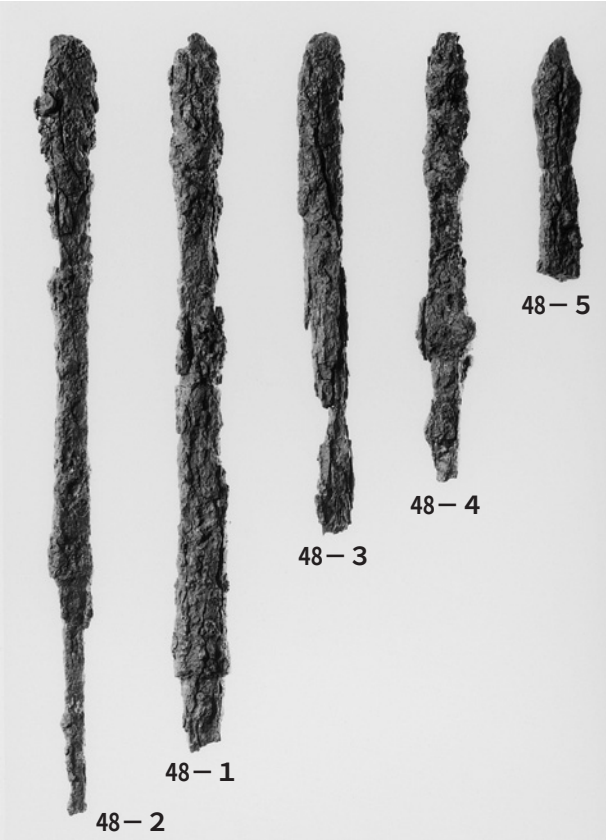
210　鏃（小形）



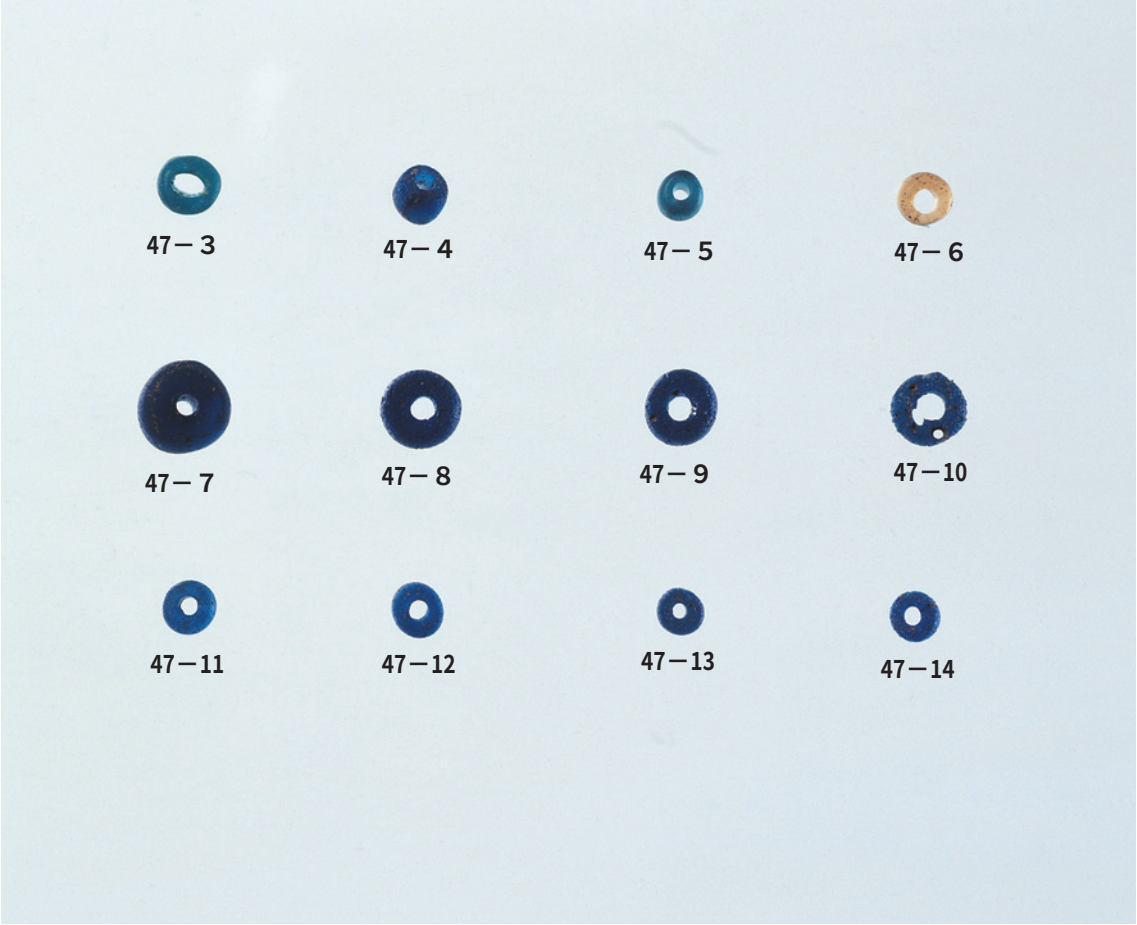
211　鏃



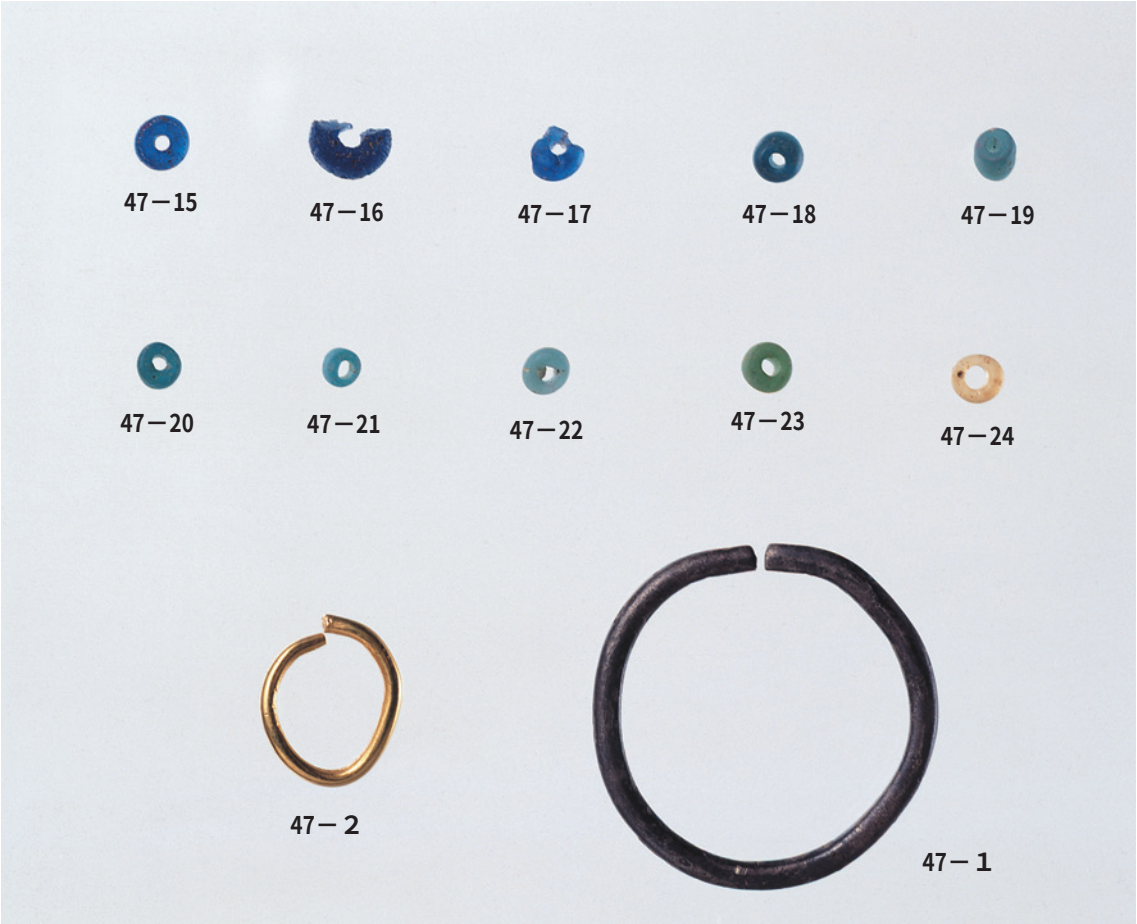
212　鏃



213　鏃（複数遺構接合分）

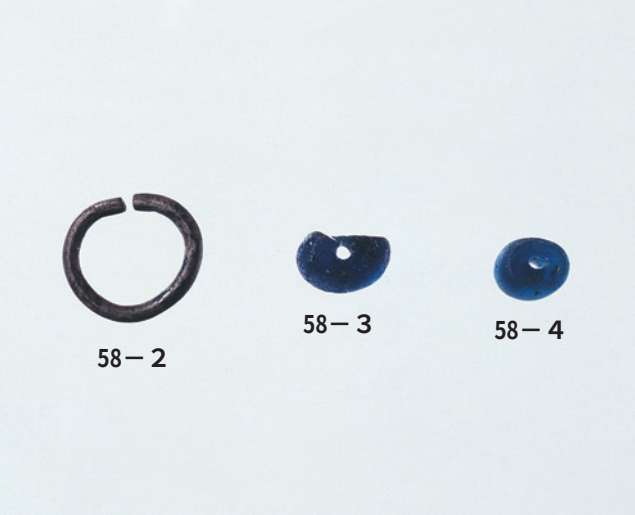


214　ガラス玉

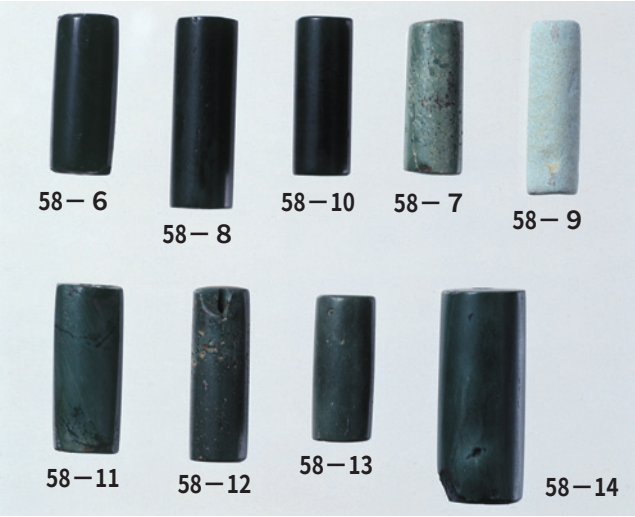


215　耳環・ガラス玉

216　鉄釧

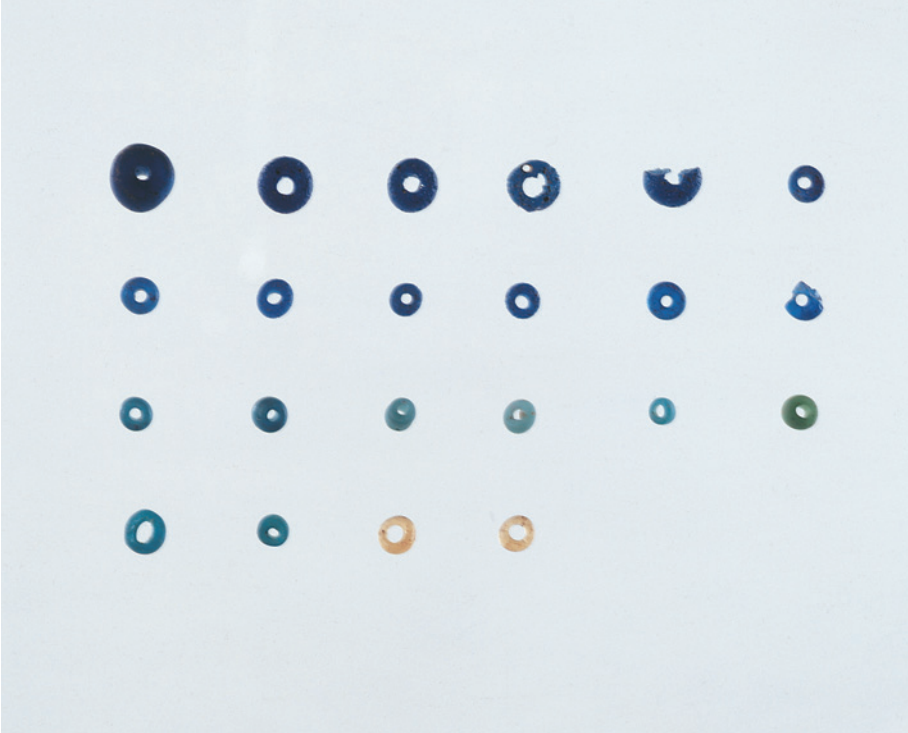


217　耳環・ガラス玉



218　管玉

219　貝・石英



220　６・７号墳出土ガラス玉集合

221　石障系石材（両面ベンガラ付着）表

222　石障系石材（両面ベンガラ付着）裏

223　石障系石材（片面ベンガラ付着）

224　石障系石材（片面ベンガラ付着）

225　石障系石材（片面ベンガラ付着）

226　石障系石材（片面ベンガラ付着）

227　石障系石材（片面ベンガラ付着）

図版56　６号墳出土壁面材（ベンガラ付着）

228　ベンガラ付着 壁面材（大形）

229　ベンガラ付着 壁面材（中形）

230　ベンガラ付着 壁面材（中形）

231　ベンガラ付着 壁面材（小形）

232　ベンガラ付着 壁面材（小形）

233　ベンガラ付着 壁面材（小形）

脛骨片（左）(The fragment of left tibia)
城ヶ辻６号墳人骨（男性）
(The Shirogatsuji tumulus)

あ　と　が　き

現地調査期間は２か年にわたり、古墳時代の墓域等の現地調査を実施し、多大な調査成果を得ることができました。

調査終了から数年を経てようやくその成果の一部を公表できることに感謝します。

この一冊の本ができるまではたくさんの人々の協力があって作成されています。事業者や地元各位はもちろん、現地調査で遺物包含層や遺構を掘削して頂いた作業員の皆様。現地から持ち帰った遺物の洗浄・注記・接合・復元をしないと、実測（図面）や写真として記録できません。

本報告の例言にお名前を挙げた方々に作業をお願いする前にさらにたくさんの方々に協力をお願いしています。

以下にお世話になった一部の方の御芳名を記して感謝の意を表します。

高木克巳、前田北征、山口義春、上田サワ子、松村健治、吉田ムツ子、岡本博子、小本慧恵子、三森敏子、水村つよし、高木智恵子、平川ミツヨ、東信子、木下洋一、鹿本勝子、松村鈴子、岡田秀子、飯塚千恵美、山本美樹、品川タカ子、吉本スエ子、坂本弘子、眞田量之、松本肇、高西正也、武田昭男、谷口洋介、中村友、藤嶽康孝、田尻明、原田英佳、竹志田美奈子、田畑良勝、岡本昭洋、立野和彦、竹志田太、古川るみ子、杉本美智子、植尾寅吉、宮本てつ子、中川正美、坂田康夫、中西和人、森川耕司、堀田祐子、中嶋公輝、坂口沙耶花、福島寛啓、荒木康利、中村勇、廣田親雄、村上和子、大西ミツ子、田口一美、山内恵美子、大森ツヤ子、前田征由、谷口敬一、矢加部千佳子、渕上久史、田上俊子、高津千尋、北嶋百合子、坂門みつよ、入江賢二、永松サヤカ、西村清美、古川佐和子、尾浦公治、久木田仁美、高尾恵美、武田伸枝、西嶋ヨシエ、福田ツヨ子ほか（順不同）

本報告の編集者も報告書作業に携わる時間が少なく、かなりの部分を嘱託・作業員さんに頼らざるを得ませんでした。

現地調査及び報告書作成に携わって頂いた人々に感謝すると共に、本報告及び遺物等が地域で活用されることを希望します。

また、当古墳群の発掘の進展にあたり、地元諸氏や事業者の協力および理解があり、本報告書の刊行に至りました。記して感謝します。

報　告　書　抄　録

ふりがな	しろがつじこふんぐん
書名	城ヶ辻古墳群
副書名	一般国道208号（玉名バイパス）改築事業に伴う埋蔵文化財調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第240集
編著者名	亀田　学
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8570　熊本県水前寺６丁目18番１号
発行年月日	西暦2007年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
城ヶ辻 古墳群	熊本県玉名市 寺田	43206	246	32度 61分	130度 34分 50秒	200207 ～ 2004331	約2,100㎡	道路改築

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城ヶ辻古墳群	古墳	古墳時代	竪穴系横口式石室 横穴式石室 古墳周溝、土坑墓、 箱式石棺墓	馬具、鉄剣、鉄刀、 鉄鏃、ガラス小玉、 管玉、金製耳環、 銀製耳環、土師器、 須恵器	

熊本県文化財調査報告　第240集

城ヶ辻古墳群

平成19年３月31日

編集
発行　熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本県水前寺６丁目18番１号

印刷　コロニー印刷
〒860-0051　熊本市二本木３丁目12-37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 240 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名： 城ヶ辻古墳群
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 8 日